

ツール・ド・ロマネスク

中世の光と空間II：フランス建築巡礼

Pilgrimage to Romanesque Architecture in France

Light and Space in the Middle Ages part II

作品：サント・マリー・マドレーヌ聖堂（ヴェズレー）、サン・フィリペール教会（トゥルニユ）、

ノートル・ダム・ラ・グランド僧会教会（ホワティエ）、サン・ヒエール教会（オネー）、

サン・サヴァン・エ・シブリアン修道院（サン・サヴァン・シュール・ガルトンブ）、他

文：櫻井義夫、羽生修二、長塚安司、田窪恭治、山田健

写真：堀内広治

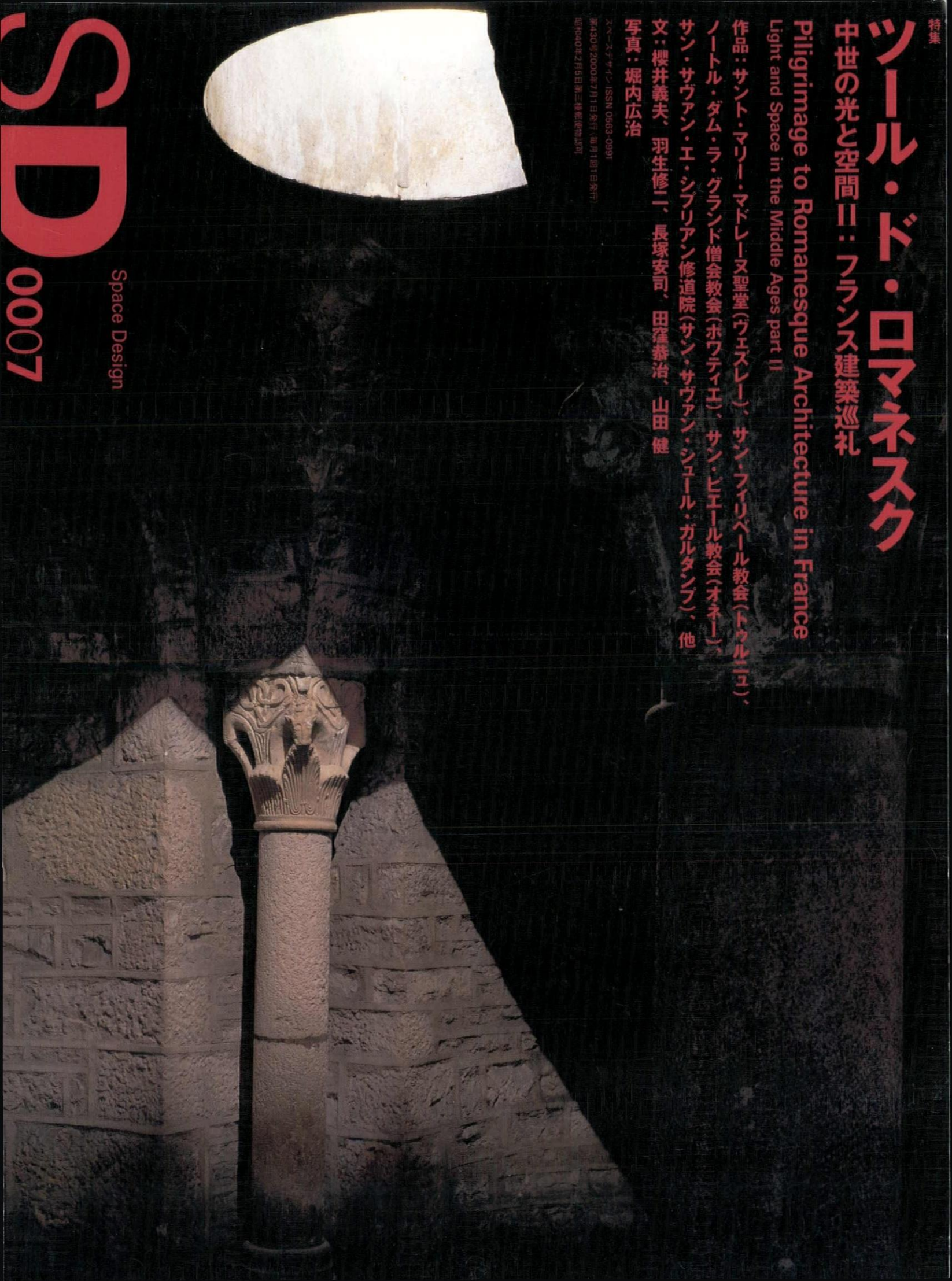
スベンスカイプ ISSN 0963-0991

第130号 2000年7月1日発行（毎月1回1日発行）

昭和40年2月5日第三種郵便物認可

SD
0007

Space Design



ビル空調機リニューアル 合理化委員会の評決です。



YAZAKIの吸収冷温水機スーパーアロエスは、コンパクトなユニット設置タイプです。場所を取らず、ロッカーのように整然と並べて設置できます。エレベーターや階段から容易に搬入でき、工期の大幅な短縮が可能。ビル空調機のリニューアルに最適です。

ユニット形冷温水機のパイオニア

ロッカー設置に最適な スーパーアロエス

矢崎総業株式会社

空調機器事業部：〒435-8575 静岡県浜松市子安町1370 TEL053(461)5112

仙台支社 022(284)9115 東京支社 03(3298)3140 名古屋支社 052(833)8415 北陸支社 0764(41)6516
大阪支社 06(6458)4825 中国支社 082(923)2115 四国支社 087(833)3336 九州支社 092(411)4835

20歳過ぎたら 健診を。 人間の話では ありません。



働きざかりのビルを診断、中から元気にする。関電工でリニューアル。
コンピューターや通信機器など、加速する技術の進歩に追われて息切れしているのは、私たち人間だけではありません。あなたが働いているそのビルも、電気配線など様々な設備の面で、中から疲れやすくなっています。だから、関電工でリニューアルを。ビルの内部を診断した上で、設計、施工してビル内環境をリフレッシュします。関電工はビルの設備に関するプロフェッショナル。新しいビルの電気設備から、今あるビルのメンテナンスまで、最高の技術力でお応えします。ビルをきちんと長生きさせるために、ビルのドクター関電工にお任せください。

ビルの誕生からリニューアルまで
総合設備の

関電工

本社 〒108-8533 東京都港区芝浦4丁目8番33号

もう一つのカジマを知ってください。

高層のビルを建てる。巨大なダムを造る。長い海底トンネルを掘る。確かにカジマの仕事ですが、しかしそれは、

ほんの一面にすぎません。私たちが四六時中生活する住まいの、

ここにも、あそこにも、意外なところにカジマの仕事が隠れています。

毎日が健康で、安心して、しかも快適に暮らせるために、

マンションや住宅用につくられた沢山の建材や工法たち。環境に配慮しつつ、

これからの高齢化する社会に向けて、カジマは何ができるのか。

そんな気持ちで、住空間に役立つ商品を開発しています。



健康に暮らせる住まいづくりへ。

住まいは健康を大きく左右します。湿気や結露、カビなどの発生は住まいを損なうだけでなく、そこに暮らす人々の健康にも影響を与えます。鹿島は、空気中の水分を吸ったり吐いたり、脱臭機能ももつ天然素材「ゼオライト」に注目。耐火性にも優れたこのゼオライト建材は、室内の湿度を一年中快適な状態に保ち、健康住宅を実現する夢の建材です。



ゼオライト建材



自然を身近に感じる快適環境づくりへ。

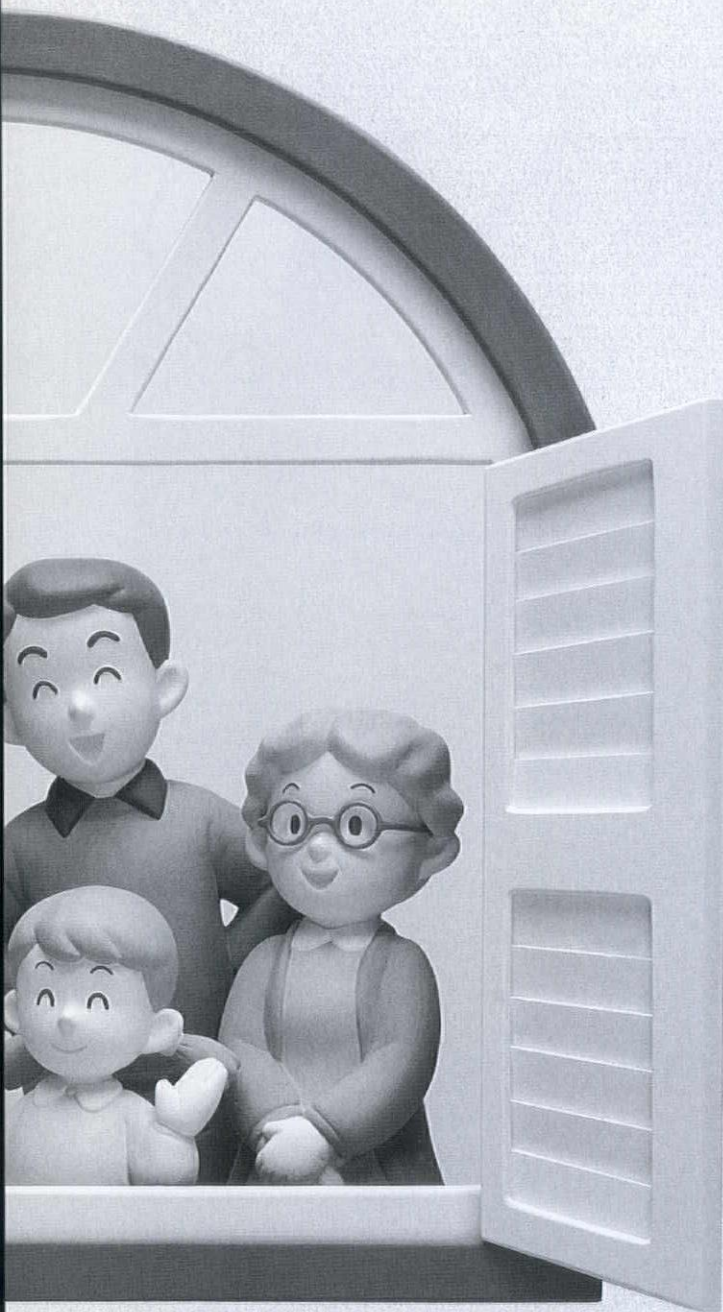
ガーデニングを楽しむ人がたいへんな勢いで増えています。庭やベランダで自然を楽しむのはとても素晴らしいこと。鹿島の「ケイソイル」「草花名人」は、バルコニーや屋上庭園にぴったりの、軽くて保水性の高い人工土壌です。重さの条件が厳しい屋上やベランダ、バルコニーでも、緑豊かな自然を育てることができ、生活に潤いを与えます。



エコヒーリングガーデン



ひとのふだんへ。



地震や火災に負けない安心空間づくりへ。

住まいを考えると、地震への対策が不可欠です。

壊れない住まいを目指すのであれば、構造を強くすれば解決します。しかし、家具の転倒などによる被害は防ぐことができません。鹿島の「戸建住宅免震システム」は、建物と基礎との間に設置するボールベアリングを活用。建物に伝わる地震エネルギーを1/5以下に減らし、安全で安心な住まいを実現します。



100年をつくる会社

鹿島

KAJIMA CORPORATION

本社：東京都港区元赤坂1-2-7 〒107-8388

ホームページ <http://www.kajima.co.jp/>

四季宴会

KARUIZAWA
MEETING
& PARTY



軽井沢
ホテル 鹿島ノ森
ホテルオークラチェーン

ご予約お問い合わせ:
ホテル鹿島ノ森予約係
☎ 03(3478)6220
現地 ☎ 0267(42)3535(代)
FAX: 0267(42)5335



ロビーラウンジ

ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロツパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。

ドアマンに迎えられホテルに一步脚を踏み込めば、

あなたの新しい物語がはじまります。

(客室&施設)

●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。
(シングル¥15,000〜 ツイン¥25,000〜) ●ジャグジー、ヒーティングルームなどを付帯した
2,000㎡の“ガーデンプール”。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。
●個性的なステンドグラス、パイプオルガンを配したチャペル(3F)。ガーデンプールの一角
に設けられたガーデンチャペル(5F屋外)。厳肅な神殿(八幡殿=やひろでん)(3F)。●最
大800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざまな8つの宴会場。●最新設備を完
備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプの
ヘルスクラブ“ジ・イースト”。●都内初のホテル直結型多目的ホール“イースト21ホール”。

(レストラン&バー)

●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……………【プラスリー ハーモニー(2F)】
●本格的広東料理……………【中国料理 桃園(2F)】
●アフリカンムードのメインバー……………【バー エレファント(2F)】
●旬の素材が織りなす食の芸術……………【日本料理 さざんか(21F)】
●四季折々の味覚……………【鉄板焼 木場(21F)】 ●心に残る夜景……………【カクテルラウンジ バノラマ(21F)】



チャペル



地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。
東陽町駅〜ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

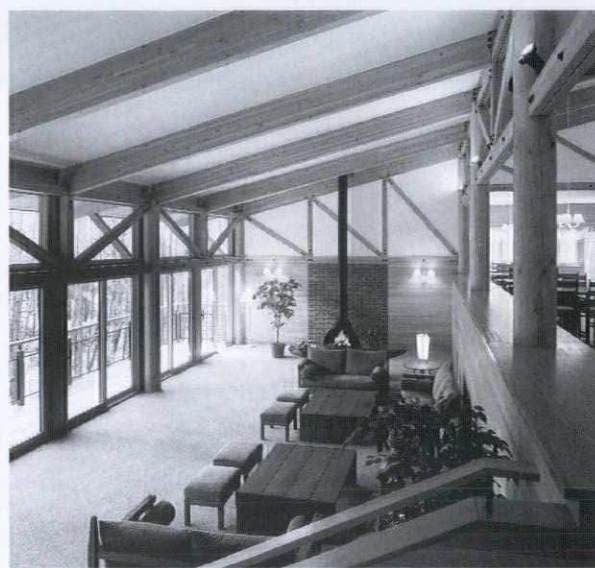
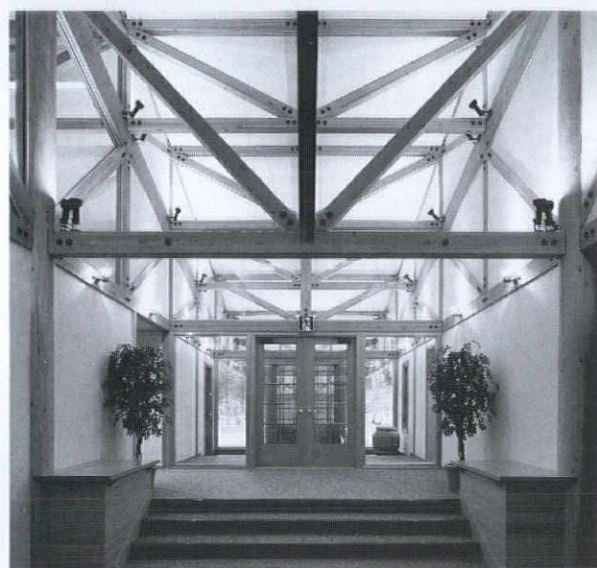
ホテル イースト21東京

〒135-0016 東京都江東区東陽6-3-3
TEL 03(5683)5683(代) FAX 03(5683)5775



大興物産の海外建材シリーズ

No.6 木製品(ツーバイフォー, 集成材)



大興夢科山荘

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。
〒107-8318 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL 03-5474-6054 FAX 03-5474-6386

建設資機材の総合商社 鹿島グループ 大興物産株式会社

本 社 〒107-8307 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本 社 ☎(03)5474-6060 FAX(03)5474-6076
東京支店 ☎(03)5474-6072 FAX(03)3423-1915
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179
大阪支店 ☎(06)6762-5661 FAX(06)6762-1074

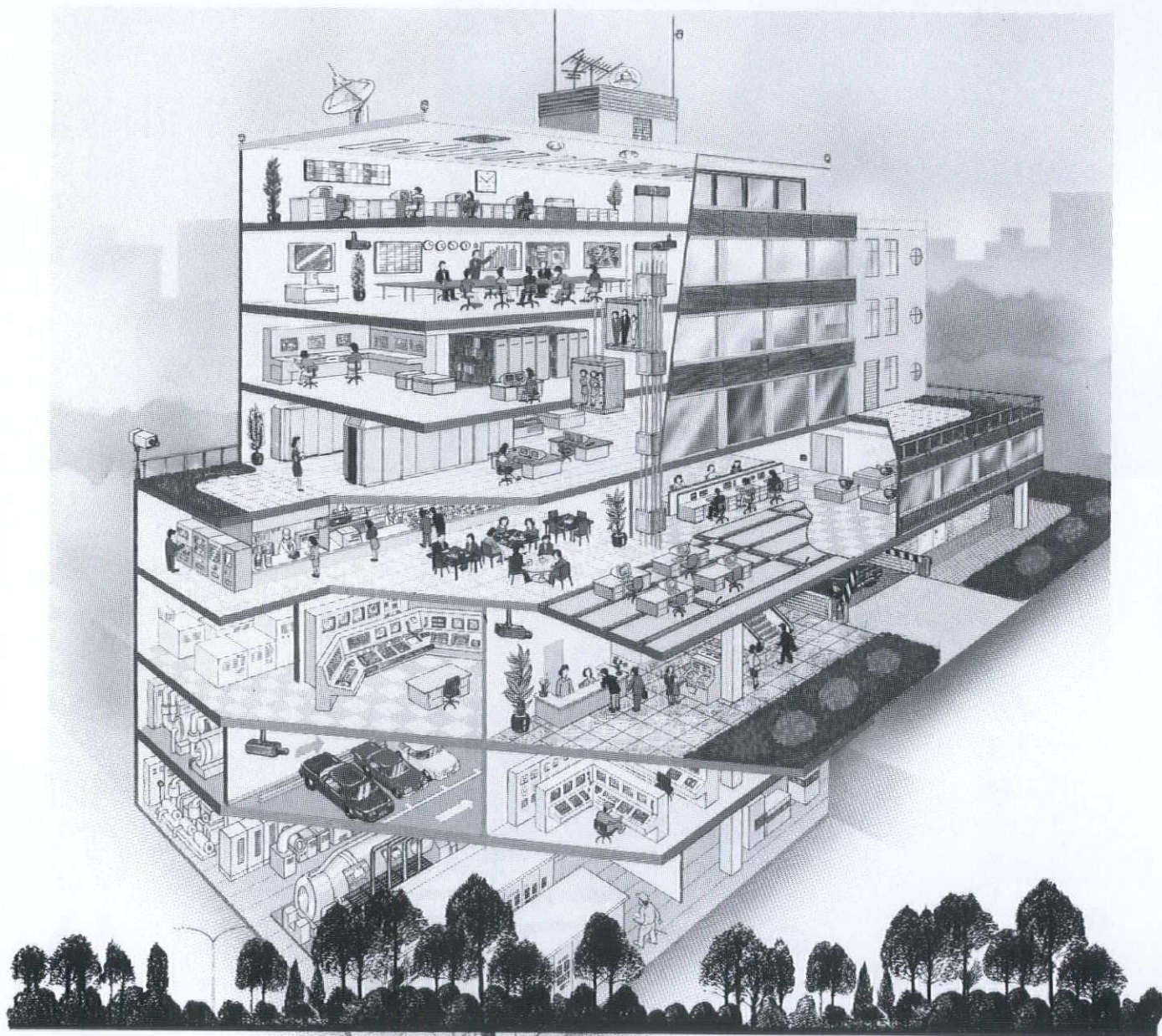
札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867
関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719
北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270

四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
シンガポール
オフィス ☎65-3440590 FAX65-3446714



快適さは…安全、確実が基本。

快適な環境づくりに、 豊かな経験。



●技術と伝統の…

内線工事 ■ 外線工事

東光電気工事株式会社

本社 〒101-8350 東京都千代田区西神田1-4-5 TEL.(03)3292-2111

支社所在地／札幌・仙台・大宮・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・広島・福岡

自然より自然に、
あなたを包みたい。



あなたの、いちばん心地良い場所はどこですか。

きっと、多くの方が、

大自然の中をイメージされることでしょう。

私たちは、そんな快適さをあらゆる建物の内に

創造していきたいと考えています。

人間は、あくまでも自然の一部。その事実を大切に、

新しい最適環境を創造していきたい。

もっとナチュラルに、

いつもあなたのそばに、ダイダンです。

Always With You.



最先端のハーモニー。

さまざまな先端技術が調和して、「快適」という名のハーモニーを奏でる。トーエネックのエンジニアリングは、まさにそんなイメージです。電気設備をはじめ、情報通信・冷暖房・空調・防災設備など…。システム設計から施工・保守まで、高度で総合的な技術力を活かし、全国主要都市を拠点に幅広いネットワークでみなさまにお応えしています。オフィスビルやマンション、ホテル、工場、さらにはコミュニティ施設。あらゆるスペースを、心地よい技術のハーモニーで包み込みたい。インテリジェント&ヒューマン。私たちは、トーエネックです。

いろんな技術を結んで、トータルに考える。
トーエネック エンジニアリング



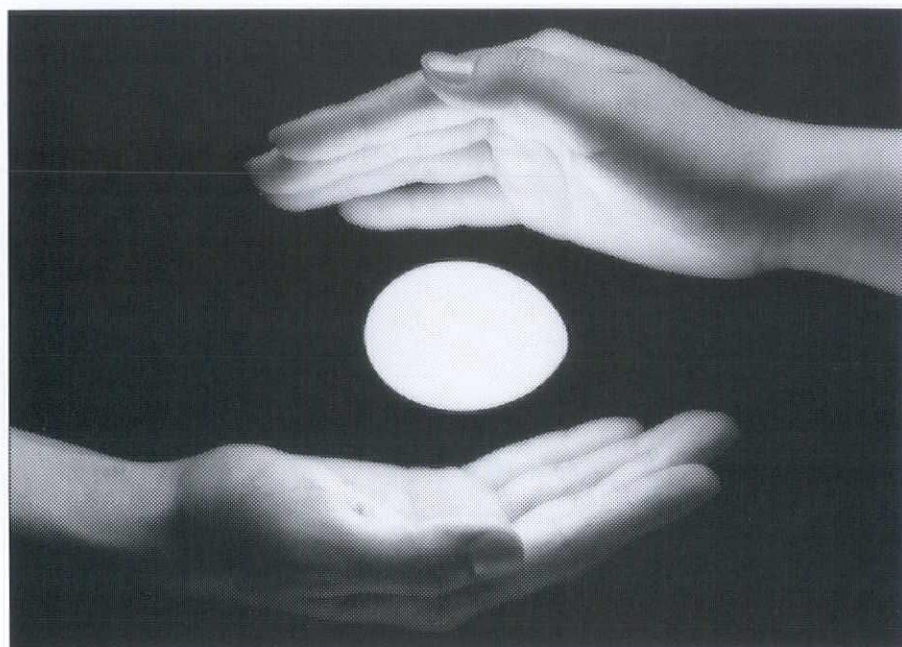
先端技術で、システムする。

TOENEC

株式会社 トーエネック

本店/名古屋市中区栄1-20-31 〒460-0008 ☎(052)221-1111
東京本店/東京都豊島区奥町1-3-11 〒170-0002 ☎(03)5395-7111
大阪本店/大阪府淀川区新北野3-8-2 〒532-0025 ☎(06)6305-2181
名古屋支店/名古屋市中区千代3-1-32 〒455-0011 ☎(052)659-1123

設備は手にとって選べません。 だから……



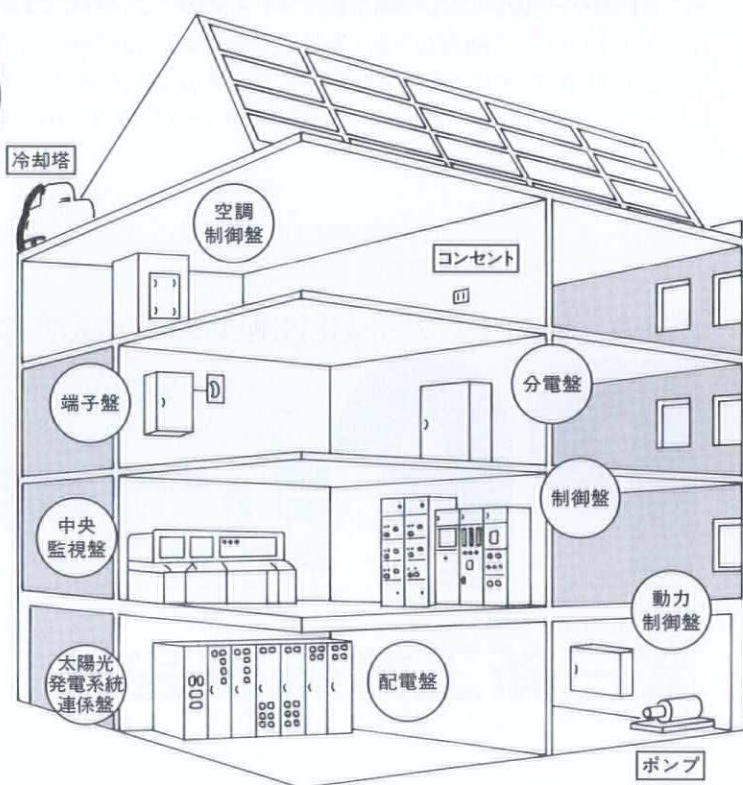
大切なのは、技術の信頼性。
豊富な実績と、
そのなかで培われた
確かなノウハウです。
私たち三建設備工業は、
求められる環境を
信頼の技術で創りだします。

望まれる環境を、信頼の技術で。

三建設備工業株式会社

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-35-8 TEL.03-3667-3431

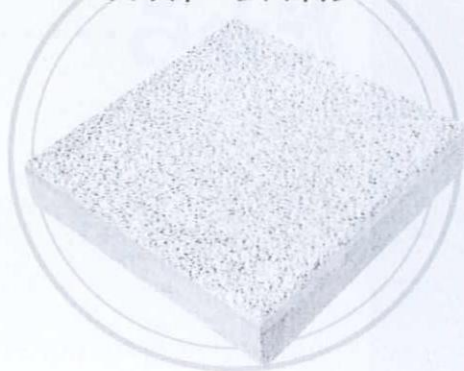
見えない電気を交通整理 それは 盤



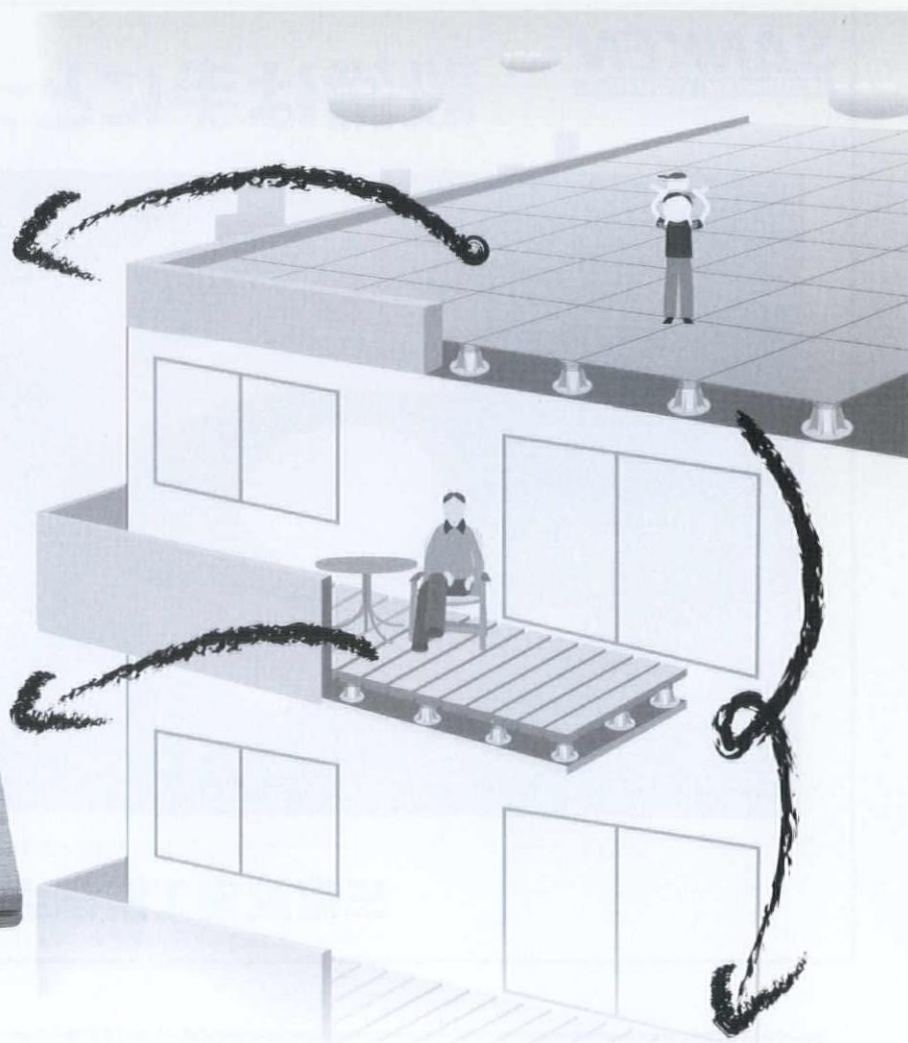
川崎電気株式会社

- 東京本社／東京都大田区南蒲田 2-16-2
テクノポートカマタ C-5階
- 本 社／山形県南陽市小岩沢 225

PFストーンパネル



PFウッドパネル(超硬質木材)



ユニークな発想で開発された「PFシステム」は、コンクリート製平板「PFパネル」を専用支持脚「PFスタンド」にて支持して二重床を設置し、防水層と二重床との間にフリースペースを確保する新しいタイプの防水層化粧保護システムです。

耐久性に優れたポリプロピレン樹脂製の「PFスタンド」は、独自のねじジャッキ作用により容易にレベル調整が可能であり、フラットな床面を確実に、素早く施工することができます。また、PFパネルの外に、疑石板の「PFストーンパネル」、洗出し板の「PFロックパネル」さらに木質板の「PFウッドパネル」も用意されているので、様々なデザインに対応できます。

【PFシステムの適用箇所】

- 陸屋根をはじめ、ガーデンルーフ隣接部、人工地盤、ルーフバルコニー（テラス、ベランダ）犬走り、室内二重床、外溝一般部等にご採用下さい。

容易な施工、軽量で丈夫、フラットな仕上がり新しいタイプの乾式浮き床工法……

PFシステム



PFスタンド B-4タイプ

《特徴》

- 保護コンクリートが不要
- 32~600mmの自在な高さ設定
- スピーディで正確な施工
- 高い排水性
- アクセスフリーな空間
- 容易なメンテナンス



総合防水材料メーカー

日新工業株式会社



営業本部 ■〒103-0005 東京都中央区日本橋久松町9-2
TEL.03(5644)7211(大代)

●ホームページ / <http://www.nisshinkogyo.co.jp/>

札幌・仙台・春日部・東京・千葉・横浜・名古屋・金沢・大阪・高松・広島・福岡

0008

特集

本

20世紀のブックデザイン

「紙束とインク」に過ぎないはずの「本」に魔力を吹き込んできた今世紀のブックデザインを一望。形態と構造の極限に挑んだ出版物の数々を紹介し、この不死身のメディアの可能性をみつめる。

監修：金澤一志 編集協力：山口信博

●北園克衛の本

詩人ではなく、マルチ・アーティストとしての北園克衛をデザイナーとして検討する初のこころみ。

●Visionaireという優雅な実験

ルイ・ヴィトンのバッグやリーバイスのジーンズジャケットを外装に使用するなどブランドともジョイントしつつ、パッケージングの限界を見据える驚異のメディア。

●漢聲雑誌

長いあいだ無視されていた中国の民間工芸を徹底的に取材した台湾の雑誌。精緻な図版を大量に詰めこんだ誌面は紙の博物館の様相を呈する。

●tomatoの本／Fuelの本

図版と文字の絶妙な組合せが印象に残る、人気のtomatoと近年注目され始めたFuelを紹介。

●フルクサス・アネックス＝サムシング・エルス・プレス

60年代の前衛芸術集団・フルクサスの渦中にあり、出版という〈イヴェント〉に身を投じたディック・ヒグنزの出版社＝サムシング・エルス・プレスの活動を追う。

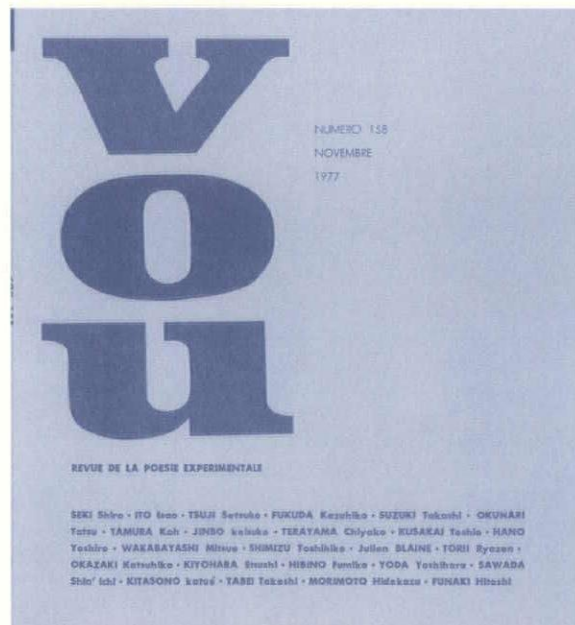
●ソル・ルウィットとジョゼフ・コーススの作品と造本

アーティスト・ブックは定義すら持たないまま、新しい世代のブックデザインに呑みこまれようとしている。しかしこの二人の本は別格で、定義や領域を踏みこえて「本」として光を放ち続ける。

など

■インタビュー：杉浦康平

左：北園克衛「vou」
右上：Fuel「wowwow」
右下：Visionaire No.32



0005

特集

ヒューマノイド・ インターフェイス

メディア化されたインターフェイス。それらは、センサー・情報処理能力・運動能力を新たに備えて人の身体と関わってくる。その時、インターフェイスと身体の仕事の分の取り方が変わったり、あいまいになったりする。今まで身体が行ってきたことをインターフェイスがまかなうようになる。あるいは身体の不十分を補完したり、身体を拡張させたりもする。このようなメディア化をともなったテクノロジーと身体の新たな関わり方を考察する。

- ヒューマノイド・プロダクト 文＝小田切博
- サイボーグ・インターフェイス 文＝竹村真一
- 知性化するインテリア 文＝小田切博、深山美都里
- 身代わりのメカトロニクス 文＝中田薫、竹村真一
- 対談＝川崎和男×竹村真一
- 拡張する身体、変化するテクノロジー
- デザイナーズ・インタビュー：インターフェイス・デザインの必然性 文＝岡正明、元永二郎
- 論文＝石井裕
- タンジブル・ビット：人とデジタル情報と建築空間のシームレスなインターフェイスを目指して
- 文＝松井龍哉、高羽泰雄、中嶋泉、清水直子、大草次郎
- 編集協力・文＝小田切博、深山美都里、竹村真一

定価＝2000円／本体1905円



0006

特集

クライン・ダイサム・ アーキテクト

アストリッド・クラインとマーク・ダイサムのふたりがパートナーシップを組んで日本で活動を展開する、クライン・ダイサム・アーキテクト。彼らのデザインセンスは建築だけにとどまらず、あらゆるアクティビティにそのユニークさが現れる。日本に暮らす外国人の素直な感想をベースにした彼らのホームページは、ヤフー・イエローページにランキングされ、驚異的なアクセス数を記録したこともあった。本特集では、こうした幅広い展開をみせるクライン・ダイサム・アーキテクトの、これまでのデザイン活動の全貌を紹介する。

- 作品＝Vroom!／ピカピカ PRETZEL 仮囲い／プリティッシュ・カウンスル・インフォメーションセンター／かんぱん shelter／ギャラリー住宅／ファッション・コマンダー／UK98 パビリオン／東京国際都市博覧会、他。
- KDa Web／KDaのすべて／KDa too...／What's DELUXE
- 文＝伊東豊雄、渡部千春、萩原修、西沢立衛、クライン・ダイサム・アーキテクト

豊かなアメニティ環境をめざして 新しい病院のインテリアデザイン

- 文・構成＝日建スペースデザイン／ヘルスケアデザインチーム

定価＝2000円／本体1905円



鹿島出版会

東京都港区赤坂6-5-13

電話：03-5561-2550

振替：00160-2-180883

Home Page Address：

http://www.kajima-publishing.co.jp/

index.htm

年間定期購読料

26,000円（特別定価号+消費税、送料込み）

SD

Space Design

SDバックナンバー常備店

東京

八重洲ブックセンター 03-8231-8203

三省堂本店（神田）03-3233-3314

書泉グランデ 03-3295-0011

紀伊国屋本店 03-3354-0131

大盛堂書店 03-3463-0511

大阪

旭屋書店本店 99-999-9999

柳々堂 06-443-0167

札幌／旭屋書店 011-241-3007

横浜／有隣堂本店 045-261-1231

京都／大龍堂書店 075-231-3036

9808 光のデザイン・ウォキャブラリー：

LPAの仕事 1990-1998

2500円

LPAのデザイン言語を40に厳選して紹介する本書は、光が生み出す空間を全般的に考察する本格的な照明バイブルである。文＝磯崎新、面出薫

9809 ディテールが創る風景：

細部に宿る美と技巧

2000円

建築作品のディテールを写真と図面で紹介する。宮崎浩／Plants Associates、渡辺明設計事務所、竹中工務店、谷口建築研究所、KAJIMA DESIGN、他。

9810 オフィス環境の近未来

2000円

最新のオフィス環境を、事例を中心に紹介する。作品＝電通インタラクティブ・ソリューション・センター、他。文＝仲隆介、他。[京町屋再生の手法——時を超えて生きる空間を求めて]

9811 「白」と「透明」の詩：

モダンデザインの秀作 135

3000円

白い陶磁器と透明ガラスで出来た日常生活の中の小モノたち135点を紹介する。カシミール・マレービッチ、ゲートルード・ヴェースガルト、柳宗理、他。

9812 SDレビュー 1998

2000円

第17回SDレビュー誌上発表

小特集4題：[シャルロット・ベリアン] [「ハブニング」展] [アアルトの空間構成] [メタルシート・ストラクチャーによる遠藤秀平の近作]

9901 環境共生の現在

2700円

プロジェクトを紹介しながら近年の動向を俯瞰し、次世代のヴィジョンを示唆する。

エムシャーパーク、東京ガス〈アースポート〉、世田谷区環境共生住宅、2005年国際博覧会構想案、他。

9902 ダッチ・モデル：

建築・都市・ランドスケープ

2000円

オランダの都市・社会のシステムを5つのキーワードによって探る。OMA、MVRDV、West8、クーン・ファン・フェルゼン、メカノ、ケース・クリスティアーンス、他。

9903 木の空間：

木素材による快適建築

2000円

次世代スタンダードを示唆する木の使われ方を紹介する。趙海光、インテンシオナリズ、河西立雄、葛西潔、みかんぐみ、H DESIGN、他。

9904 ガウディの愛弟子ジュジョールの夢縁

2000円

ジュジョールの遺した作品を、写真とオリジナル・ドローイングで紹介する。撮影＝鈴木久雄、文＝丹下敬明、他。[ドナルド・ジャッド：空間と認識のコンシステンシー]

9905 挑発するマテリアリティ：

素材の進化とデザインの可能性

2500円

国内外における素材と技術のデザイン事例を取り上げながら、そのデザインに隠された素材の応用の「手法」、「技術」を分析する。素材史年表、素材地図1999、他。

9906 挑小川晋一：

Transbody / Super traffic

2000円

小川晋一の13年間の仕事を、実作、計画案、展覧会への出品作品を通して紹介する。作品＝キュビストの家、ミニマリストの家、他。文＝鶴沢隆、岡河貢、小川晋一、他。



9907

学校建築：

個性を育む環境創出へ向けて

学校建築設計の手引きとして、今後の学校建築に求められる事項を解説し、事例を現地レポートを交え紹介する。文＝上野淳、他。座談会＝堀昭代＋佐藤学＋船越徹＋小嶋一浩＋上野淳。

2500円



9908

階段

Beyond Function

近年の国内の階段、21作品を、「起伏」、「移ろい」、「軽み」、「天空」といった4つのキーワードで緩やかに分節しながら、階段をめぐる詩集のような形で紹介する。文＝渡辺武信、下村純一。

2000円



9909

ヘルリン・トボグラフィ

今世紀最後の首都移転が展開されている、ハイポテンシャルな状況をドキュメントする。文＝内山佳代子、杉本俊多、山下昌彦、飯島洋一、花田和幸、他。

個性の彩る集住群：長野市今井ニュータウンの試み

2000円



9910

東京リノベーション

スペースの再生転用の事例を紹介するとともに、その手法やスペースの新しい可能性を探る。企画編集協力＝粕谷延中

写真＝村角創一

隅田川再生とリバーサイドスペース 写真＝加藤嘉六

2000円



9911

ジャパニーズ・プロダクツ'99

インディペンデントな活動を展開するデザイナーを中心に紹介し、日本におけるプロダクト・デザインの可能性を探る。企画協力＝文＝川上典子、青山玲、写真＝高山幸三

2300円



9912

SDレビュー 1999

第18回SDレビュー1999入選展の結果を審査員のコメントと共に誌上発表する。

エリック・ブリュックマンの建築 文＝ユハニ・パルスマー、田中雅美、他。

ハブニング展1999/2000

2000円



0001

横文彦 1993-1999

1999年から最新作までの作品を進行中のプロジェクトを含め、豊富な写真、スケッチ、図面で紹介する。

文＝横文彦、D. スチュワート、富永 謙

対談＝横文彦×門内輝行

4100円



0002

コミュニケーション・キッチン

建築家によるキッチンスペース、メーカーのキッチン機器を紹介しながら、国内で実現できるキッチンスペースの可能性を探る。

文＝黒田秀雄、下島資子、他。鼎談＝黒田秀雄×葛西潔×東利恵

2000円



0003

リカルド・ボフィール 1995-2000

クラシシズムとモダニズムの現代的融合の表現をめざして活動を展開するリカルド・ボフィールの近年の主要作品、プロジェクトを紹介する。

文＝リカルド・ボフィール、飯島洋一、櫻井義夫、志村直登。

2000円



0004

歴史的都市を読む

近代都市への反省を踏まえ、改めて今、歴史的都市に注目し、都市の形成、空間構造の魅力についてフィールドワークの成果をレポートする。

対談＝長尾重武×陣内秀信

監修＝陣内秀信。

2000円



0005

ヒューマノイド・インターフェイス

メディア化されたインターフェイスは、センサー・情報処理能力・運動能力を備えて身体と関わる。このようなメディア化をともなったテクノロジーと身体の新たな関わり方を考察する。

編集協力＝小田切博、他。

2000円



0006

クライン・ダイサム・アーキテクト

クライン・ダイサム・アーキテクトの、これまでのデザイン活動の全貌を紹介する。

文＝伊東豊雄、渡部千春、萩原修、西沢立衛、クライン・ダイサム・アーキテクト。

2000円



9903 Spaces of Wood:

The Elements of Comfortable Architecture

Introduces uses of wood construction materials that suggest next-generation standards.

Cho Umihiko, Intentionallies, Tatsuo Kawanishi, Kiyoshi Kasai, MIKAN, H. DESIGN ASSOCIATES, etc.

¥ 2,000



9904 Josep Maria Jujol i Gibert's Vision:

Introduces the legacy of Jujol's work through photographs and original drawings.

Donald Judd: Consistency of Space and Cognition

¥ 2,000



9905 Alluring Materiality:

Evolution of Materials and Their Potential for Design

Takes up some examples of material and technical design from Japan and overseas and analyzes the applied methods and techniques hidden in the design. Also includes "A Chronology of Materials" and "The Map of Materials 1999." ¥ 2,500



9906 Sinichi Ogawa: Transbody / Super traffic:

Introduces 13 years of Sinichi Ogawa's achievements through Cubist House and Minimalist House and other completed works, plans, and works submitted to exhibitions. Text: Takashi Uzawa, Mitsugu Okagawa, Sinichi Ogawa, and others.

¥ 2,000



9907 School Architecture:

Toward Environments That Foster Individuality

Offered as a guide for the architectural design of schools, this issue comments on topics to be addressed in school architecture from now on, combined with on-site reports of specific examples. Text: Jun Ueno et al.

¥ 2,500



9908 Stairs: Beyond Function

Introduces 21 recent Japanese stair designs in the manner of a poetic anthology, dividing the works loosely in four categories: "undulation", "transition", "lightness", and "open above". Text by Takenobu Watanabe and Junichi Shimomura.

¥ 2,000



9809 Berlin Topography

The century's last transfer of a capital city is taking place. This issue documents the high potential of this move. Text: Kayoko Uchiyama, Toshimasa Sugimoto, Masahiko Yamashita, Youichi Iijima, Kazuyuki Hanada, and others.

Distinctive Housing Complexes: The Imai New Town Experiment in Nagano ¥ 2,000



9910 Tokyo Renovation:

Introduces several cases of space renovation and reuse and explores the methods used and the new possibilities of space they offer. Editorial Cooperation: Hijun Kasuya. Photographs: Soichi Murazumi.

Reviving the Sumida and Riverside Space. Photograph: Karoku Kato ¥ 2,000



9911 Japanese Products 99:

Their Independent Situation

Introduces mainly designers engaged in independent activities, and explores the potential of product design in Japan. Editorial cooperation and text by Noriko Kawakami and Akira Aoyama. Photographs by Kozo Takayama ¥ 2,300



9912 SD Review 1999:

Introduces the results of the 18th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings, along with comments from the screening committee.

Erik Byggman's Architecture: Texts by Juhani Pallasmaa and others.

HAPPENING 1999/2000 ¥ 2,000



0001 Fumihiko Maki 1993-1999:

Introduces a generous selection of photographs, sketches, and drawings of Maki's most recent works from 1993. Texts by Maki, David B. Stewart and Yuzuru Tominaga. Discussion: Teruyuki Monnai and Fumihiko Maki.

¥ 4,100



0002 Kitchen for Communication:

Introduces kitchen spaces designed by architects and kitchen furniture by manufacturers and explores the potential of kitchen spaces in Japan. Texts by Hideo Kuroda, Motoko Shimojima, etc. Discussion: Hideo Kuroda, Kiyoshi Kasai, and Rie Azuma.

¥ 2,000



0003 Ricardo Bofill 1995-2000:

Introduces leading works and projects of Ricardo Bofill, whose recent activity aims at a contemporary union of classicism and modernism. Texts by Ricardo Bofill, Yohichi Iijima, Yoshio Sakurai, and Naoki Shimura.

¥ 2,000



0004 Reading the Historical City:

Introduces the results of fieldwork-based analysis of historic cities, reporting on how the cities emerged as well as how their spatial structure gives them special appeal, from a critical perspective on the modern city. Dialogue: Shigetake Nagao and Hidenobu Jinnai. Editorial supervision: Hidenobu Jinnai. ¥ 2,000



0005 The Humanoid Interface:

The media of the man-machine interface now utilize sensors, information processing capabilities, and motor capabilities. This issue considers the technologies of these media and their new relationship to the human body. Editorial cooperation: Hiroshi Odagiri and others. ¥ 2,000



0006 Klein Dytham architecture:

Presents an overall view of the design activities to date of Klein Dytham architecture. Texts by Toyo Ito, Chiharu Watabe, Shu Hagiwara, Ryue Nishizawa, and Klein Dytham Architecture.

¥ 2,000

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to Space Design and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2581

Or mail the card to:

Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107-8345, Japan
tel: 81-3-5561-2551

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

- ☐ Please enter my SUBSCRIPTION to
Space Design,
starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

- ☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of SD:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges (¥1,500 per order)
3. Postage (determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building, Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Selichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Selichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sassetuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiro Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoei Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrich Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

SDレビュー2000 第19回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展

SD Review 2000

Space Design

[SDレビュー2000入選展]

東京展

期間：2000年9月中旬から2週間を予定

会場：代官山ヒルサイドテラスF棟

ヒルサイドフォーラム

大阪展

期間：2000年10月上旬を予定

会場：大阪芸術大学芸術情報センター

展示ホール

[主催]

鹿島出版会SD編集部

[お問い合わせ]

SDレビュー2000についての御質問は、SDへハガキまたはFAXにてお問い合わせ下さい。
宛先は提出先覧を参照のこと。

募集要項

[募集対象]

実施を前提とした設計中ないしは施工中の建築、屋外空間、インテリア。国外に建つものも含める。但し、応募の時点で既に完成しているもの、雑誌などに発表済みのもの、実施の見込みが全く無いもの、コンペの応募作品（公開、指名、入選、落選を問わず）は対象外とする。応募作品数は原則として1人1点に限る（グループの場合もメンバーが同じであれば1点のみ）。

[応募資格]

特になし。

[提出物]

プレゼンテーション:

①設計意図を説明するために必要と思われる図面、写真等特に制約はなく、各自選択すること。表現方法は自由であるが、プレゼンテーションそれ自体の技術や密度は、審査にあたっての主要な評価対象とはされない。

②プロジェクト名、建築用途、施主名（事業主体名）、工事予定期間、主体構造、主要仕上げ材料、建築面積、延床面積。

③400字以内の設計主旨文（省略してもよい）。

以上をA3判用紙（420×297mm）4枚以内にまとめたもの。パネル化は不可（クリアファイル等に入っている場合は審査時に取り外します）。設計者氏名、設計組織名は一切記入しないこと。②、③は添付書類に含めず、①と共にA3判用紙に記述することに注意。

添付書類:

プロジェクト名、応募者（＝設計者）名・フリガナ、応募者の年齢、職業、勤務先名とその住所（以上、組織の場合はその担当者について明記）、応募者への連絡先、共同設計者名、設計者略歴（入選の際、展覧会パンフレットに掲載いたします）。以上の事項をA4判用紙に記載したもの。

[応募受付]

・開始：2000年6月22日（木）

・締切：2000年6月30日（金） 当日消印有効

[審査員]

榎文彦（建築家）

岡部憲明（建築家、神戸芸術工科大学教授）

芦原太郎（建築家）

小川晋一（建築家、近畿大学工学部助教授）

鹿島昭一（鹿島建設 取締役相談役）

[結果通知]

審査員により15点前後が選抜された後、入選者のみに7月下旬までに書類にて通知する。

[入選者の出展]

入選者は通知後、指定期間（約40日間）以内に、展覧会に出展するための図面、模型、その他のプレゼンテーションを製作し、後日指定の日時、場所に搬入する。この作品は、SD2000年12月号に誌上発表される。入選者には製作費用として、一律5万円が支給される。

[提出先]

〒107-8345 東京都港区赤坂6-5-13

鹿島出版会SD編集部 SDレビュー係

TEL: 03-5561-2555 FAX: 03-5561-2565

（地下千代田線赤坂駅より徒歩5分、鹿島建設赤坂別館4F）

0007

都市・建築・芸術の総合誌

スペースデザイン 第430号
2000年7月号

SD

Space Design

編集長：相川幸二
副編集長：高木伸哉
編集スタッフ：
松口 龍 川嶋 勝
石田貴子 伏見佳子
制作協力：久世 健
株式会社シンクス
発行人：井田隆章
発行所：鹿島出版会
107-8345
東京都港区赤坂6丁目5番13号電話：
03-5561-2551 営業
03-5561-2555 編集
FAX：
03-5561-2561 営業
03-5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番
URL：http://www.
kajima-publishing.co.jp

005

特集

ツール・ド・ロマネスク

中世の光と空間II：フランス建築巡礼

企画協力：櫻井義夫

写真：堀内広治

006

巡礼者のロマネスク教会
文：櫻井義夫

008

route de Vézelay
ヴェズレー ↔ ポーヴェズレー／サント・マリー・マドレーヌ聖堂
ディジョン／サン・ベニーニュ修道院
トゥルニュ／サン・フィリベール教会
ベルゼ・ラ・ヴィル／修道院礼拝堂
パレー・ル・モニアル／サクレ・クール聖堂
クリュニー／サン・ピエール・エ・ポール修道院
オートン／サン・ラザール大聖堂
ペリグー／サン・フロン大聖堂
ペリグー／サン・テチエンヌ・ド・ラ・シテ教会

046

route du Puy
ル・ピュイ ↔ ポール・ピュイ・アン・ヴレ／ノートル・ダム大聖堂
コンク／サント・フォア修道院
カオール／サン・テチエンヌ大聖堂
モワサック／サン・ピエール教会、他

022

ミレニアム(千年紀)と巡礼路教会堂
文：羽生修二

034

フランス・ロマネスク壁画展望
文：長塚安司

045

ノルマンディー・ロマネスクの村
文：田窪恭治

053

巡礼者のための美食案内
文：山田 健

072

後記+「ロマネスク」「フランス・ワイン」ブックガイド

073

エコロジー・エクスプレス

水戸岡鋭治の最新列車デザイン

取材・構成：磯 達雄

文：森山明子

082

玉座考：古代スツールにみる玉座の性格

文：服部等作

024

route de Tours
パリ ↔ トゥール ↔ ポーモントワール・シュール・ル・ロワール／
サン・ジル礼拝堂
ラヴァルダン／サン・ジュネ教会
サン・テニャン・シュール・シェール／
サン・テニャン僧会教会
タヴァン／サン・ニコラ教会
ボワティエ／ノートル・ダム・ラ・グランド僧会教会
シヴレー／サン・ニコラ教会
サン・サヴァン・シュール・ガルタンブ／
サン・サヴァン・エ・シブリアン修道院
オネー／サン・ピエール教会、他

058

route de Saint Gilles
アルル ↔ サン・ジル ↔ ハカアルル／サン・トロフィーム大司教教会
サン・ジル／サン・ジル修道院
サン・ギレーム・ル・デセル／
サン・ソヴール・エ・ギヨーム修道院、他

089

展覧会レポート：ミラノ・サローネ・インターナショナル 2000
荒 知機

093

展覧会レポート：ハイナー・シリグ展——エントロピーの森
秋山 伸

094

展覧会レポート：デペロの未来派芸術展
菊田樹子

095

展覧会レポート：ISSEY MIYAKE Making Things
川上典子

096

第7回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展
第4回レポート 松野 勉

097

書評
本江正茂

098

新刊紹介

099

お知らせ

印刷・製本：凸版印刷株式会社
174-0056 東京都板橋区志村1丁目11番1号
電話：03-3968-5111 案内取次店：トーハン・日販・大阪屋・太平洋・栗田出版販売・
誠光堂・鈴木書店・西村書店・中央社定価：2,000円 [本体1,905円]
年間直接購読料：26,000円
特別定価号+送料込み表紙：サン・ベニーニュ教会(ディジョン)
表紙写真：堀内広治
デザイン：山口デザイン事務所/山口信博+齊藤亜季子

0007

Monthly Journal of
Art and Architecture

No. 430
July 2000

SD

Space Design

Chief Editor: Koji Aikawa
Editor: Shinya Takagi
Associate Editors: Ryu Matsuguchi,
Masaru Kawashima, Takako Ishida, Yoshiko Fushimi
Production Cooperation: Takeshi Kuze, Digital Studio Thinks
Publisher: Takaaki Ida

005

Special Feature

Pilgrimage to Romanesque Architecture in France

Light and Space in the Middle Ages part II

Cooperation: Yoshio Sakurai

Photo: Kouji Horiuchi

006

Romanesque Churches for Pilgrims
Text: Yoshio Sakurai

008

Vézelay Pilgrimage Route

Vézelay /Basilique Sainte Marie Madeleine
Dijon /Abbaye Saint Benigne
Tournus /Eglise Saint Philibert
Berzé-la-Ville /Chapelle Priorale
Paray-le-Monial /Basilique du Sacré Cœur
Cluny /Ancienne Abbatale Saints Pierre et Paul
Autun /Cathédrale Saint Lazare
Périgueux /Cathédrale Saint Front
Périgueux /Eglise Saint Etienne de la Cité

024

Tours Pilgrimage Route

Montoire-sur-le-Loire /Chapelle Saint Gilles
Lavardin /Eglise Saint Genest
Saint Aignan sur Cher /Collégiale Saint Aignan
Tavant /Eglise Saint Nicolas
Poitiers /Ancienne Collégiale Notre-Dame la Grande
Civray /Eglise Saint Nicolas
Sainte Savin sur Gartempe /
Ancienne Abbatale Saint Savin et Cyprien
Aulnay /Eglise Saint Pierre, etc

046

Le Puy Pilgrimage Route

Le Puy en Velay /Cathédrale Notre-Dame
Cahors /Cathédrale Saint Etienne
Conques /Ancienne Abbatale Saint Foy
Moissac /Eglise Saint Pierre, etc

058

Saint Gilles Pilgrimage Route

Arles /Ancienne Primatiale Saint Trophime
Saint Gilles /
Ancienne Abbatale Saint Gilles du Gard
Saint Guilhem-le-Désert /
Ancienne Abbatale Saint Sauveur et Guillaume, etc

022

The Millennium and Churches along the Pilgrimage Route
Text: Shuji Hanyu

034

An Overview of French Romanesque Mural Paintings
Text: Yasushi Nagatsuka

045

Romanesque Villages of Normandy
Text: Kyoji Takubo

053

A Pilgrim's Gourmet Guide
Text: Takeshi Yamada

072

Postscript + Book Guide

073

Ecology Express: Eiji Mitooka's Latest Train Designs

Research and Composition: Tatsuo Iso
Text: Akiko Moriyama

082

A Study of Thrones: The Character of Thrones as Seen in Ancient Stools

Text: Tousaku Hattori

089

Exhibition Report: Salone Internazionale del Mobile 2000
Tomoiku Ara

093

Exhibition Report: Exhibition of Heiner Schilling
Shin Akiyama

094

Exhibition Report: The DEPERO Futurist School Art Exhibition
Mikiko Kikuta

095

Exhibition Report: ISSEY MIYAKE Making Things
Noriko Kawakami

096

La Biennale di 2000 Report 4
Ben Matsuno

097

Book Review
Masashige Motoe

098

Books information

099

Announcement

Published by
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.

6-5-13 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-8345, Japan

TEL: +81 3 5561 2551 [Management],
+81 3 5561 2555 [Editing]

FAX: +81 3 5561 2561 [Management],
+81 3 5561 2565 [Editing]

TELEX: 02422467 KAJIMA J

URL: <http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm>

Printed in Japan

This Copy: ¥2,000
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page 2

Cover: <Crypte Saint Benigne> Dijon
Photo: Kouji Horiuchi
Design: Nobuhiro Yamaguchi / Yamaguchi Design Office

特集

ツール・ド・ロマネスク

中世の光と空間II：フランス建築巡礼

Special Feature

Pilgrimage to Romanesque Architecture in France

Light and Space in the Middle Ages part II

解説文：櫻井義夫(S) + 羽生修二(H)

写真：堀内広治

text: Yoshio Sakurai + Shuji Hanyu

photo: Kouji Horiuchi

route de Tours

route de Vézelay

route du Puy

route de Saint Gilles

櫻井義夫

旅とは何かと問うたときに、答えは人それぞれさまざまであるに違いない。新しい体験・知識の獲得、自己の発見、気分転換、感動の探求。自分を移動させ、異なる環境・空間に身を置くことで一体何を獲得することができるのか。巡礼という名の旅が、じりじりするような熱い信仰を基本に、遙かな目的地に向けて挫折することなく大移動することが、中世の人々にどのような充足感をもたらしたのか。私たちにそこまでの駆り立てられるような信仰心が仮にないとしても、少なくともそこに具体的に何があったのかを辿ることはできる。しかもそれは、現在フランスで最も魅力ある歴史的文化財としてそこに存在しているのである。

巡礼はキリスト教がローマ帝国に313年に認可されて間もない4世紀中に、すでにボルドーからエルサレムへの巡礼を記述した文書が存在することから、その始まりは意外に早い。キリストにゆかりのエルサレム、ベツレヘムをはじめ、聖書に記述された数々の場所を巡ることが信仰の熱さを体感する手段として意識されていたのであるが、さらに12使徒ゆかりの土地も巡礼の対象となっていた。ローマはペテロ（サン・ピエトロ教会）およびパウロ（サン・パオロ・フオリ・レ・ムーラ教会）のゆかりの土地であり、当然巡礼の対象地となるのは早かった。

中世の人々は民族大移動にみるように、本来放浪することに抵抗は大きくなかったであろうし、彼らが生来もつ情熱の大きさ、熱しやすさは今日の人々とは異なるものがあつたであろう。ノルマン人やサラセン人の移動・侵略が終わり安定した11世紀以降は、大開墾時代へと向かうが、定住化が進んでもなお移動することに情熱を持ち続けていたことは、今回取り上げるサン・チャゴ・デ・コンボステラへの巡礼路の教会がここまで発達したことによって裏づけられる。実際、エルサレム

は11世紀以降たびたび十字軍を送らざるをえなかったことからわかるように、その道は異教徒によって閉ざされつつあったし、ローマへの道は、ローマの弱体化とイタリアでの紛争が絶えなかったことからその魅力は失われていた。

現実にはフランスからローマまでの距離とサン・チャゴ・デ・コンボステラへの距離はほとんど変わらず、ガリアの布教を進めたヤコブの聖遺物を持つと主張する目的地は、安定した中世にあって癒しを求める衆生にとって、その比較的安全な道程が限らない魅力を発揮していたに違いないのである。

サン・チャゴへの巡礼路は、エムリー・ピコーという名の司祭と考えられる人物が編纂した「聖ヤコブの書」のなかの第5書、「サン・チャゴへの巡礼案内」（または「コデックス・カリクステイス」）と通称される書物に記述されていることから、ほぼその全貌がわかれるとされている。そこには、「ヴェズレーを起点とする道（route de Vézlay）」、「トゥールを主要な起点とする道（route de Tours）」、「ル・ピュイを起点とする道（route du Puy）」、「サン・ジルを主要な起点とする道（route de Saint Gilles）」の4つのルートが解説されている。ここに綴られた教会名は、ほとんどが聖遺物を持つ教会であり、当時の異様なまでの聖遺物（主に聖人の遺骨やミイラ、骨灰などであるが、身につけていたと称される衣類の破片などまで）に対するこだわりが伝わってくる内容である。したがって正確にどの道をどう通るという記述ではなく、主な教会名を辿るとおおよその流れがわかるだけであり、特にブルゴーニュを通過する道は途中多くのヴァリエーションがあつたはずである。こうした巡礼は信仰活動であると同時に経済活動の側面を持つことはいうまでもない。巡礼路に組み込まれた教会には多くの富が落ちたであろうし、巡礼者を引きつける手段をまずわかりやすい聖遺物に頼るのは当然であり、そして教会の建築としての空間の魅力もま



中世の巡礼者を描いたタペストリー

た競われて当然であった。

今回我々は、この時期に集中的に建設され、人々を惹きつけてやまなかった巡礼路各地の郷土色豊かな教会群をかつて辿られた道に沿って追いかけてゆくことにした。

ヴェズレーを起点とする道は、恐らく多くのブルゴーニュ周辺の教会は巡礼路の中にはなかったにしても、ヴェズレーに代表される理想化した人物造形が特徴的な彫刻や、中世キリスト教の総本山とでもいうべきクリュニーの進んだ建築システムの影響下にある教会群に始まり、リモージュを通して連続ドームを持つ特異な空間が特徴のペリゴール地方へと向かうことになる。

パリ、サン・ドニ、オルレアンなどからトゥールへ向かい、ボワトゥー、アキテーヌを通過する「トゥールの道」は、ロマネスクの彫刻と壁画の最良の部分を鑑賞できる道である。ロワール川沿いに展開する教会には明るい赤を基調とした色調の壁画が多く残り、ボワティエ周辺の教会には極めて緻密な壁面彫刻や柱頭彫刻があって、中世装飾芸術の中心地である。

ル・ピュイを起点とする道は、交差部ドーム脇に袖廊へと1スパンのアーチを張り出すオーヴェルニュ独特の空間形式をもつ教会群に始まり、完成された巡礼教会の形式と考えられる内陣廻りの回廊と礼拝室を持つコンク、美しい中庭と驚くべき彫刻群をもつモワサックへと向かう山間路である。

「サン・ジルの道」は、地中海的な古代ローマの遺影を反映したプロヴァンスの教会から、確定した年代を持つ貴重な欄彫刻のサン・ジェニ・デ・フォンテーヌ、初期ロマネスクの代表的教会であり荒々しい小さな石の積み上げられた初源的空間であるキュクサヤカニグー、そしてこの地方の文化的中心地であるトゥールーズの、フランスに現存する中世最大の巡礼式教会と、周辺には古代と地域風俗的な要素が混成する彫刻などが見られる（なお本誌9610号においてすでに紹介された、フラン

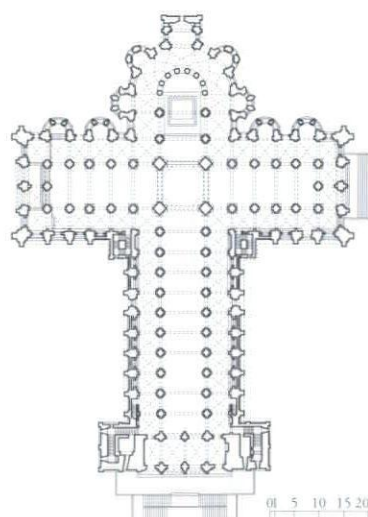
ス中南部のロマネスク教会は主にこのサン・ジルの道にあたり、重複を避けるため一部簡略化して紹介されているのでご了解いただきたい）。

こうして4つの道を辿ると、さまざまな空間、さまざまな装飾、多様性の中に全体を統合する共通点など、ロマネスク教会の全貌が明確に現れてくる。巡礼者の敬虔なる心を高揚させるに足るこの時代のすばらしい空間表現は、現代の我々にも多くの示唆と感動を与えてくれているのではないか。特に空間を実現する構造表現が直接的な形で素材感を伴いながら実現されていること、空間を光と闇のコントラストによって実現していること、装飾における意味の体系が多く物語を象徴的に語っていること、などの多角的な性格によって、今日における建築表現の価値観にも多く適合する要素を発見できる。と同時に、空間の質というものが、動かしがたい大自然の懷で人間の生活が展開していた中世において、どのように実現されるのかを見せてくれていることも我々を引きつける大きな魅力なのである。

修道院の重要な活動のひとつには、周知のとおりワインの醸造があった。最高のドメインは修道院が所有し、最高のワインは修道院が製造していたのである。中世の生活、巡礼の楽しみの重要な要素として、フランスの伝統であるこうした分野を忘れることはできない。

空間の感動と食の感動は、今日のフランスにおいても存分に味わうことのできる最高の組み合わせであり、活力にあふれた中世の人々の活動を連想しながら、ワインの味の中にその生活の全体像を思い描いてみるのも一興ではないだろうか。

巡礼路の教会をお好みのレシピで味わっていただきたい。
(さくらい・よしお／建築家)



巡礼の終着地サン・チャゴ・デ・コンポステーラの大聖堂（平面図、スペイン）

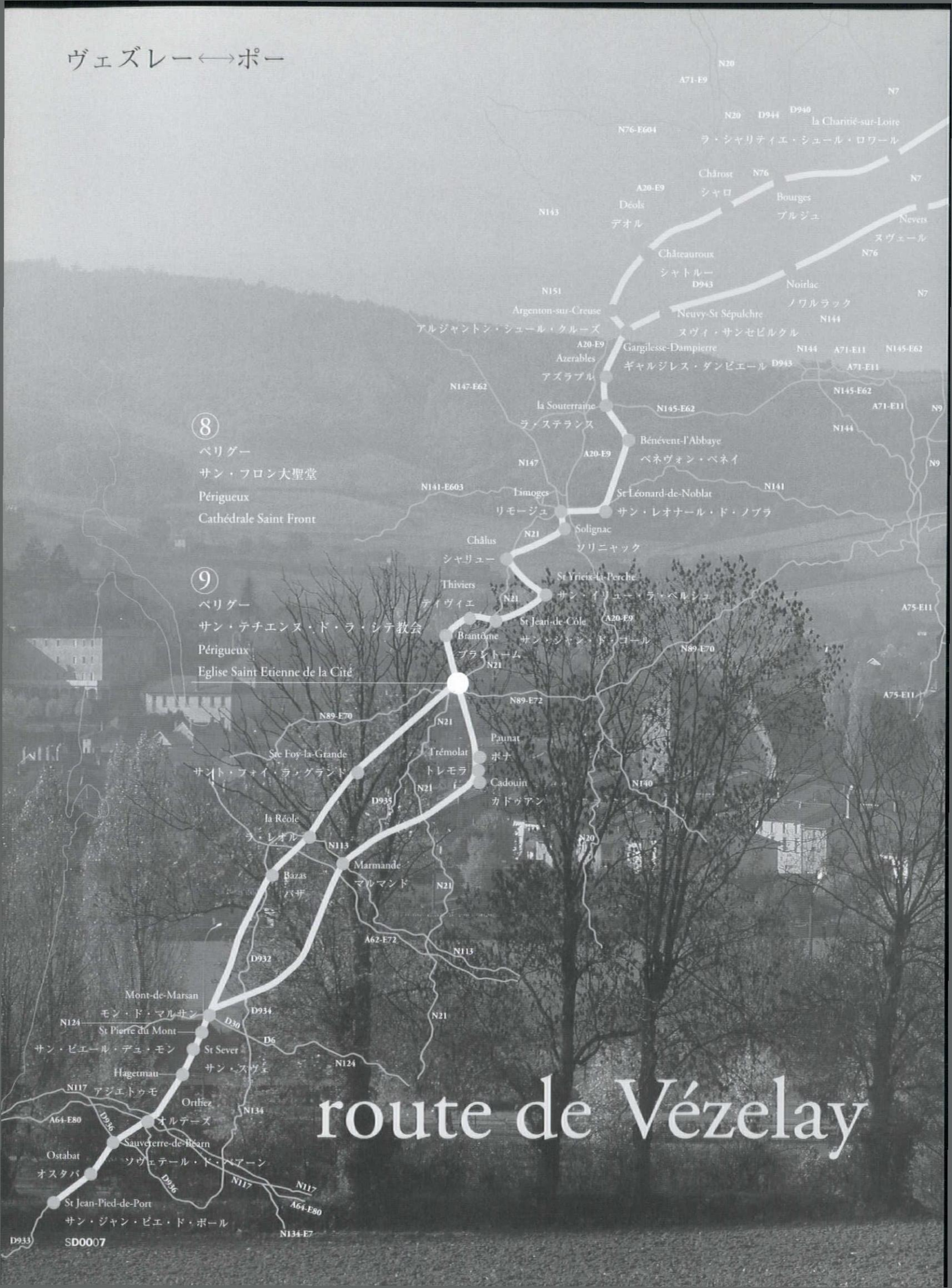
⑧

ペリグー
サン・フロン大聖堂
Périgueux
Cathédrale Saint Front

⑨

ペリグー
サン・テチエンヌ・ド・ラ・シテ教会
Périgueux
Eglise Saint Etienne de la Cité

route de Vézelay







丘のふもとよりみるヴェズレーの集落

ヴェズレー

Vézelay

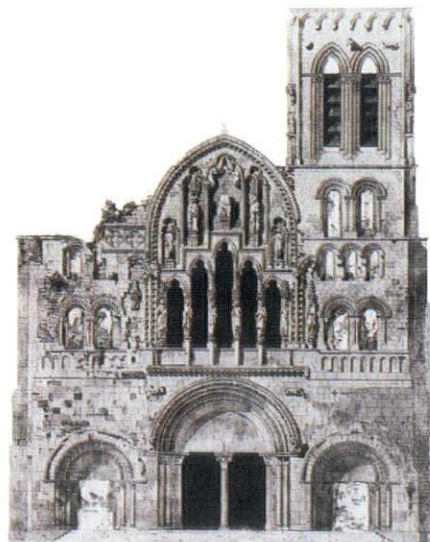
サント・マリー・マドレーヌ聖堂

Basilique Sainte Marie Madeleine

①

11世紀はじめに、マグダラのマリアの遺骨がプロヴァンスのサン・マクシマンを經由してもたらされたことによって著名となった。1120年に大部分を焼失し、その直後の再建が基本的に現在残る建築である。1145年に列柱玄関部分が完成し、1160年に古く小さくなった内陣が改造されゴシック風となった。

すばらしい環境と比類なき質の彫刻が見所である。彫刻は全部で200カ所に及び、さながら石の聖書が教会にちりばめられているかのようである。破風彫刻は人体を理想化する、スレンダーな人体造形に特徴がある。(S)



ヴィオレ・ル・デュクの手による19世紀の様子を伝える水彩画





route de Vézelay



ディジョン

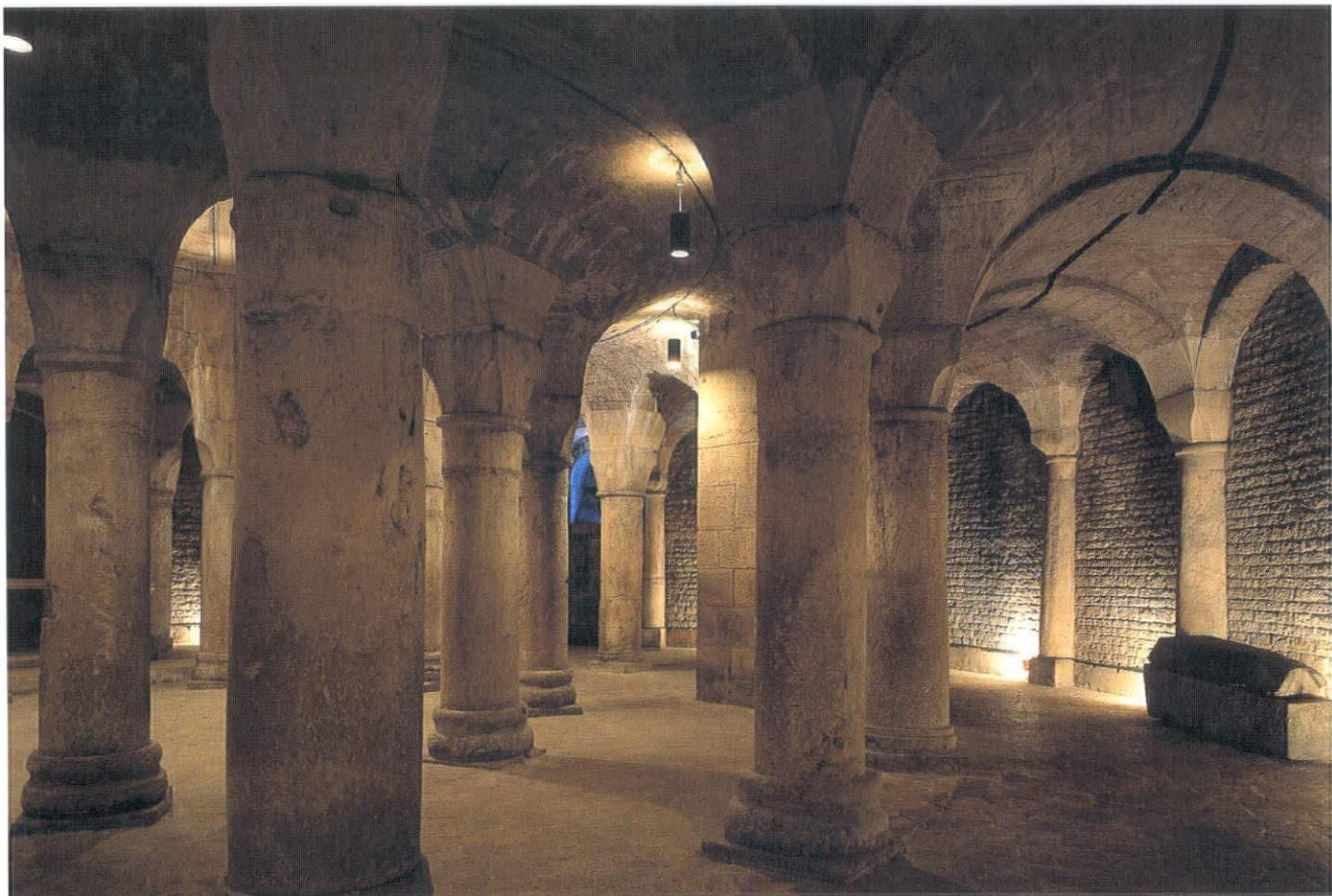
Dijon

サン・ベニーニュ修道院

Abbaye Saint Benigne

2

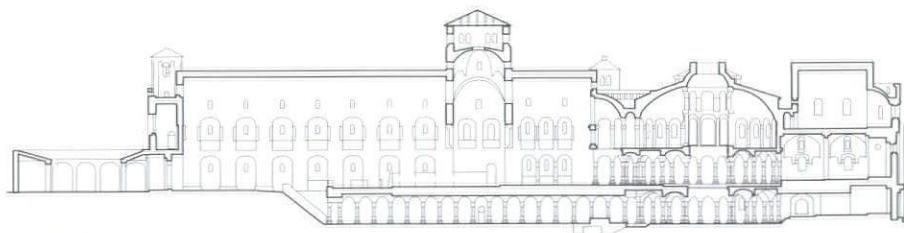
11世紀後半から1107年にかけて建設された。当初の建築は、第1層は洗礼者ヨハネを奉り、第2層は聖母を奉る空間で68本の柱から構成され、第3層は三位一体を奉る36本の柱による3層の円形空間として独創的な建築であった。現存するクリプトはその第1層部分である。(S)



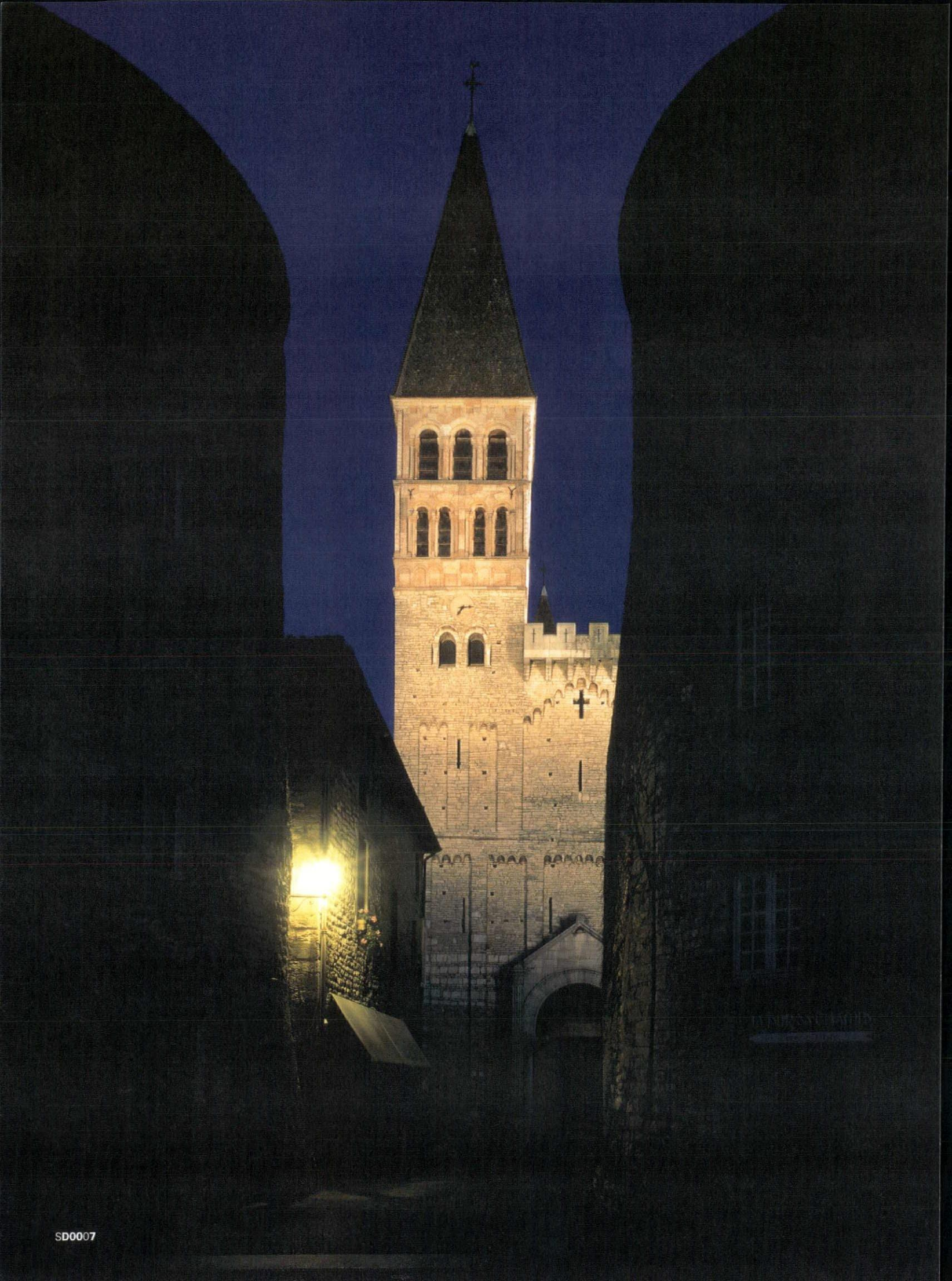
円形空間の第1層クリプト部分



クリプト柱頭彫刻



復元断面図



トゥルニュ

Tournus

サン・フィリベール教会

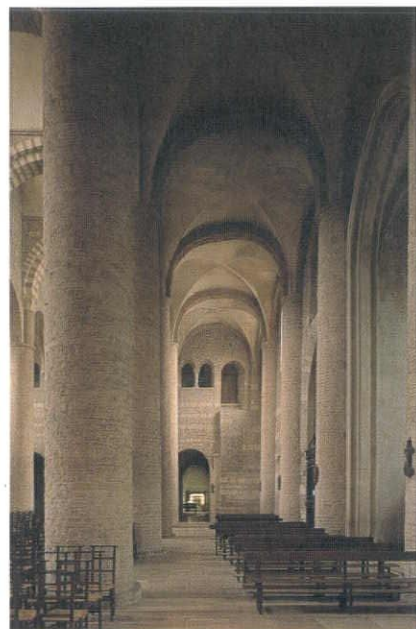
Eglise Saint Philibert

3

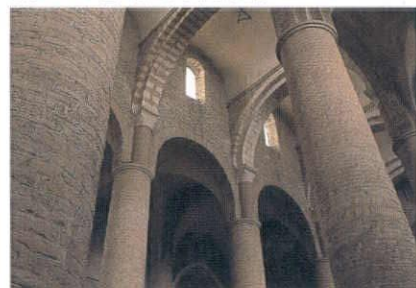
12世紀はじめまで工事は続いたが、主に1019年までに建設。初期ロマネスク教会らしい、装飾要素の少ない彫塑的な内部空間を持つ。入り口列柱廊の上に力強い4本の柱が象徴的なサン・ミッシェル礼拝堂を持つ。(S)



サン・ミッシェル礼拝堂。小さな開口部が印象的なファサード方向をみる



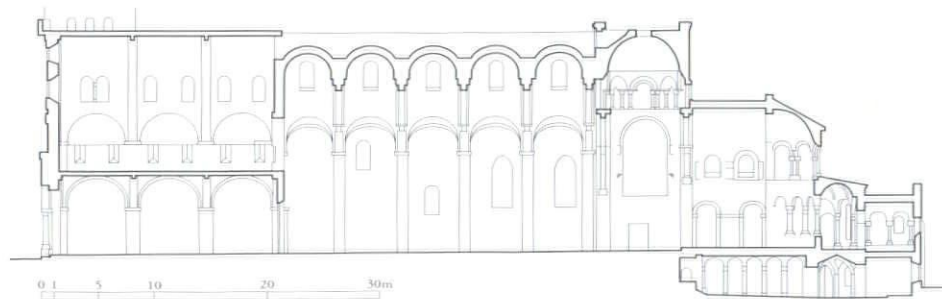
美しいピンク色の石による彫塑的空間



身廊に連続する半円筒ヴォールト

3

route de Vézelay



断面図

ベルゼ・ラ・ヴィル

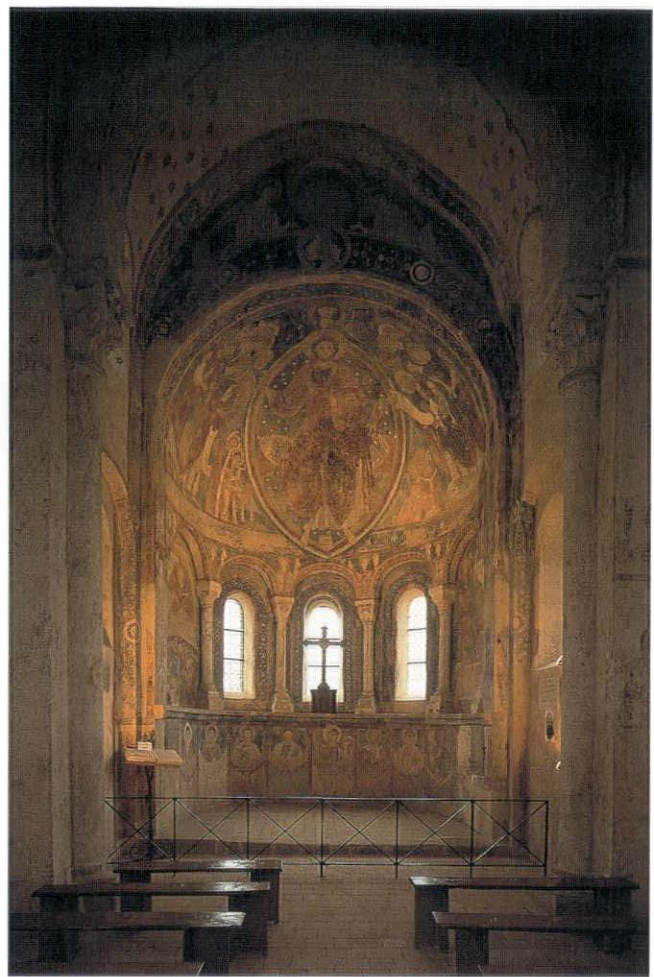
Berzé-la-Ville

修道院礼拝堂

Chapelle Priorale

4

12世紀後半の建築。クリュニーの第二の住居。濃く鮮やかな色のビザンチン風絵画は、ヴェズレー発の第2回十字軍が送られた当時の情勢や精神に影響を受けて描いているとも思われる。理想化した肢体に流れるような衣類、顔つきが明らかなビザンチン風の傾向をもつ。(S)



内陣天井画「栄光のキリストと天使たち」

パレー・ル・モニアル

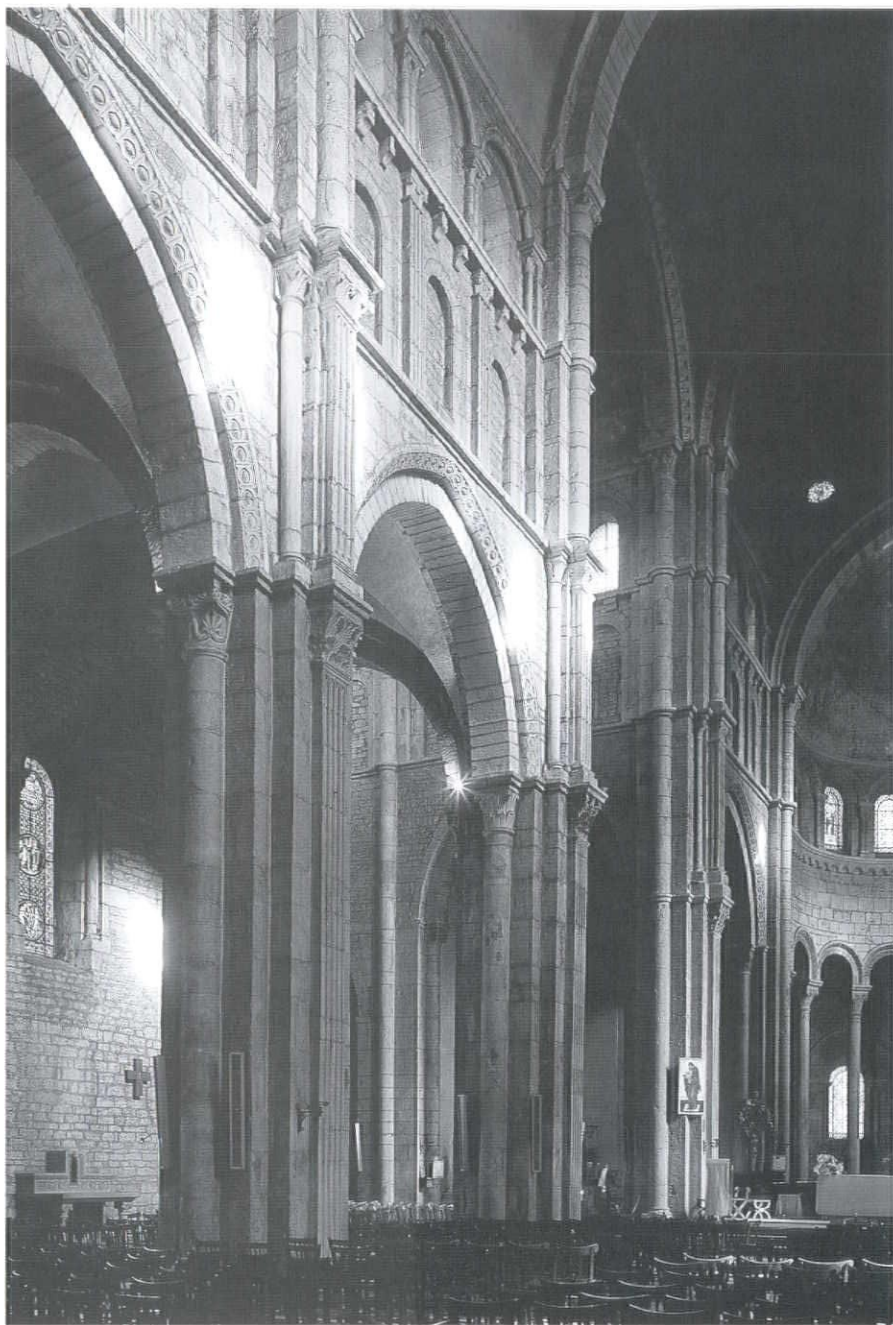
Paray-le-Monial

サクレ・クール聖堂

Basilique du Sacré-Cœur

6

12世紀中ごろ建設。ブルバンス河岸に面した美しい環境に建つモニュメンタルな教会。クリュニーの子院としての成り立ちから、双頭のファサードを持つクリュニー大聖堂を縮小した計画として考えられ、同時にクリュニーの修道院を発展させた整然とした形式を持っている。(S)



トリフォリウムをもって3層構成と尖塔アーチはクリュニー風の構成



ブルバンス河岸よりみる全景

クリュニー

Cluny

サン・ピエール・エ・ポール修道院

Ancienne Abbatiale Saints Pierre et Paul

5

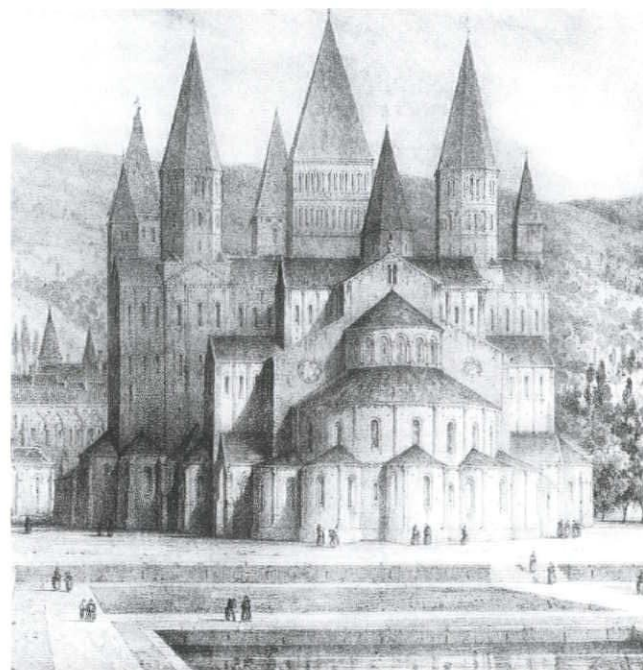
ベネディクト派の総本山。910年から1130年ころまで3期にわたる建築の集合体であった。かつてはロマネスク最大の教会であり、革命まではその巨大な建築はほとんどそのまま存在していたが、現在残っているのは南袖廊の一部にあたる巨大な搭状建物だけとなった。(S)



遺跡となった身廊の軸線上から唯一残る南鐘楼をみる



配置・平面図



後背部よりみる往時の全景



オータン

Autun

サン・ラザール大聖堂

Cathédrale Saint Lazare

7

1146年の完成。外観に見える部分はほとんど15世紀に改造・付加されたものであり、身廊柱から内陣にかけてが12世紀の部分である。タンパン彫刻の中央に描かれたキリストは独特の理想化されたスレンダーな造形が特徴であり、ヴェズレーとともに独特のスタイルである。(S)



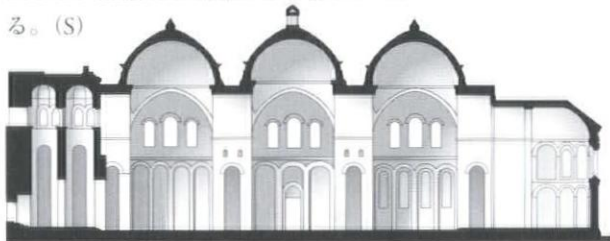
ナルテックスのタンパン彫刻「最後の審判」。楯には巡礼者たちも描かれている

ペリゲー
Périgueux

サン・フロン大聖堂
Cathédrale Saint Front

8

1120年の火事以後1170年ごろまで再建工事が行われたが、この時の教会はサン・テチエンヌに範をとった形式であったと考えられる。19世紀後半になっていわゆる「修復」が行われ、外観は今世紀にさらに大きく改造された。ギリシャ十字のビザンチン風大空間ですべて円と半円で成立しているが、12世紀後半のドームは尖頭アーチの上に載っていたことが既に知られているし、外部ドームのプロフィール変更や小さなピナクルの追加など、恣意的な改造が多く行われている。(S)

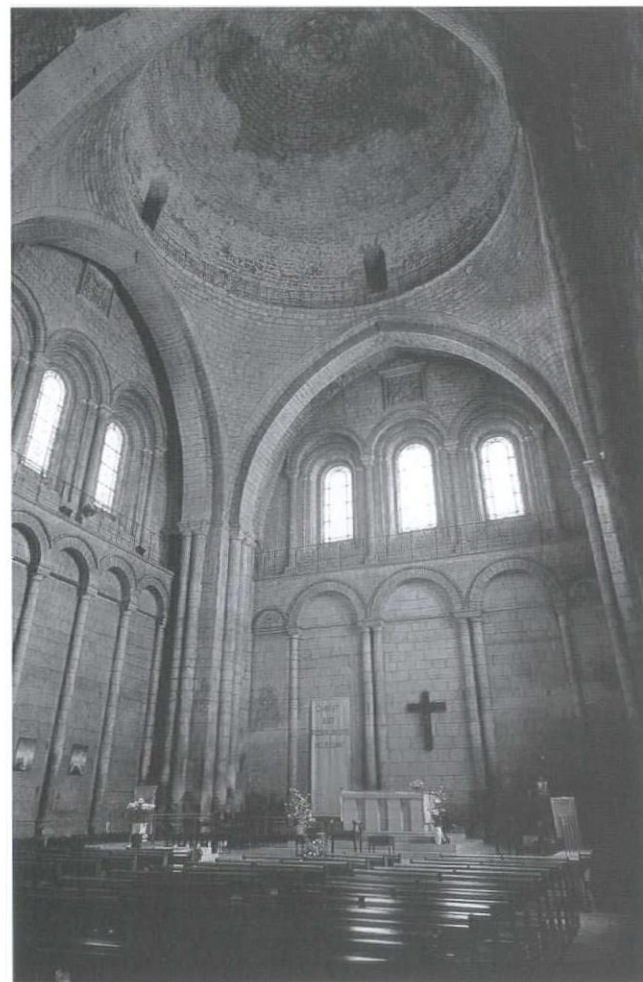
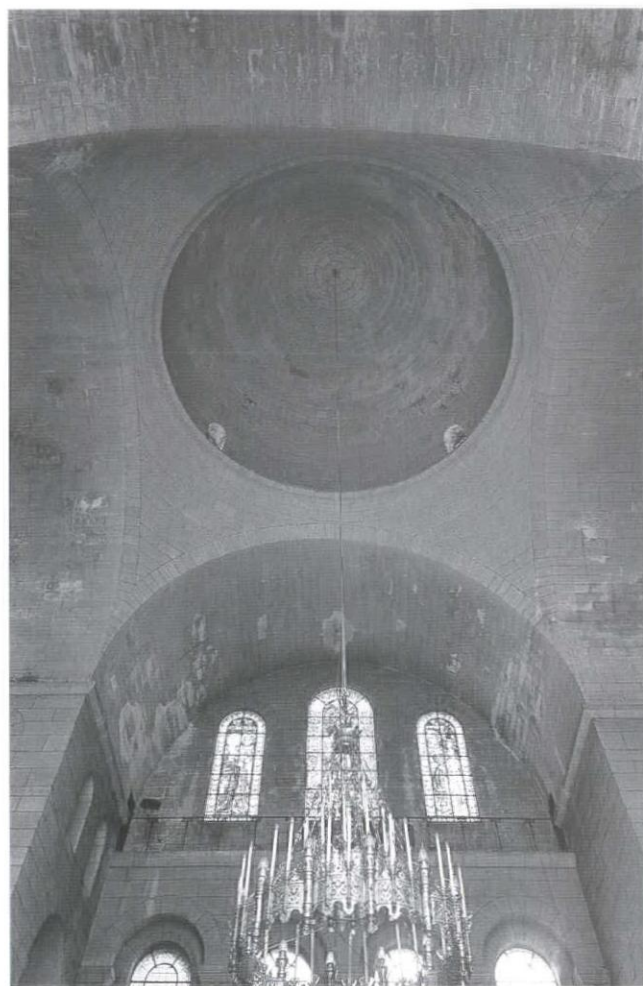


断面図

サン・テチエンヌ・ド・ラ・シテ教会
Eglise Saint Etienne de la Cité

9

ドームを縦に繋いでゆくという不思議な工程によって成立した、様々な直列ドームの重ね合わせを起源にもつ旧大聖堂。教会の西側は11世紀中葉、東側は12世紀の終りごろに建設されている。破壊されたナルテックスにあたるドームは独自の小さな巾を持ち、現存するふたつのドームも大きさが微妙に異なり、それぞれが球を内包するヴォリュームを表現している。このドーム建築がペリゴール地方全域からアングレームにいたるまでの一連のドーム建築の原型となった。(S)



東側ドーム部分。後世の再建部分を含む

羽生修二

今年は西暦2000年ということで、「ミレニアム」の名を借りて、いろいろなイベントが開催されている。それらの中で「ミレニアム」がイエス・キリストの生きた時代から数えて2000年目に当たることを十分理解してこの用語を使用している人々はどれだけいるのだろうか。ローマ・カトリックの中心であるバチカンでは、今年を「大聖年」として新たな出発の年と定めた。それによって、世界中の教会がさまざまな行事を実施、企画しているが、その中のひとつに「巡礼」が含まれ、一種のブームを巻き起こしている。

キリスト教の歴史において、この「巡礼」が大きなブームとなった最初の時代は、今から1000年前の第1回目のミレニアム(千年紀)の時だった。紀元千年にこの世が終わり、すべての人が最後の審判で裁かれるという「至福千年」の思想が、贖罪の証としての巡礼へと人々の心を駆り立てたのだ。地獄に落とされるのではなく、天国に上りたいという切羽詰まった願いが、キリストの受難にあやかった苦行の旅に出かける決意をさせた。そして、もっとも人気のあった目的地は、西南スペインのサン・チャゴ・デ・コンポステーラであり、連日数千人もの巡礼者たちがフランスの4つの道に沿って大移動したのである。巡礼者たちは、お目当ての聖人ゆかりの教会堂を途中巡りながら、サン・チャゴへ向かうのだが、どの道を経て、どの教会堂を訪ねるのかは、人気のある聖遺物があるかないかで判断された。それゆえ、有名な聖遺物を保有している教会堂や町は、巡礼の人々で溢れ、経済的に大きな発展が得られ、立派な教会堂を建設するようになる。その結果、巡礼路に沿う町に共通した様式の教会堂が建てられ、「巡礼路教会堂」と呼ばれる建築が誕生するのである。

巡礼路教会堂のプランと構造

巡礼者が大量に押し寄せて来る教会堂には、それなりの工夫が施されなければならなかった。まず、平面プランの上で扉口が入口と出口に分けられ、ナルテックスと呼ばれる玄関廊が重要な役割を果たす。初期キリスト教時代に洗礼を受けていない人々を迎える、いわば中間領域のような場であったナルテックスは、巡礼者でごった返す出入口の交通整理の場として利用されたのである。そして、教会堂内部の中央を貫く、身廊の両側に配された側廊がそのまま延びて翼廊を囲み、さらに祭壇が設けられた内陣を巡る周歩廊に続く動線計画も、巡礼者たちの動きを配慮して生まれたものだ。この平面構成によって、巡礼者たちは、身廊で祈る人々の妨げにならず、側廊から周歩廊を巡り、途中の小祭室で礼拝しながら、秩序正しくお参りすることが可能になったのである。こうした放射状祭室形式は、巡礼路教会堂だけではなく、フランスにおける多くの教会堂で採り入れられ、後のゴシック大聖堂の古典的プランの中で継承されることとなる。

つぎに構造について見ると、巡礼路教会堂に共通するものは、すべての天井が石造のヴォールトで覆われている点を挙げるこ

ができる。群をなして訪ねて来る巡礼者たちが捧げるローソクの火の粉が原因で起きる火災の防止や、荘厳なるミサ典礼のための空間的そして音響効果を考慮して、より高い天井を石造のヴォールトで覆いたいという願いは、ロマネスクの石工たちの大きな課題であった。そして、それを見事に解決したのである。つまり中央の身廊を横断アーチで分割された半円形のトンネル・ヴォールトで覆い、それによって生じる横力を四分の一円のヴォールト天井をもつトリビューンと交差ヴォールト天井の側廊で両脇から支える方式を採用していたのである。そして、交差部には採光塔が載り、薄暗い室内にスポットのような光の効果をもたらした(図1)。

以上のような共通点を備えた代表的な巡礼路教会堂の例としては、トゥールの〈サン・マルタン教会堂〉(トゥレーヌ地方、11世紀)、リモージュの〈サン・マルシャル教会堂〉(リムーザン地方、1095年献堂)、コンクの〈サント・フォア修道院〉(オーヴェルニュ地方、11世紀後半)、トゥールーズの〈サン・セルナン聖堂〉(ラングドック地方、1080頃~1096年)そして〈サン・チャゴ・デ・コンポステーラ教会堂〉(スペイン、ガリシア地方、1075~1122年)を挙げることができる(図2)。

その他オーヴェルニュ地方の典型例であるクレルモン・フェランの〈ノートル・ダム・デュ・ポール教会堂〉(11世紀末)、オルシヴァル(12世紀)、サン・ネクテル(1150~1175年ごろ)などの教会堂もこのタイプに含まれる。

巡礼路教会堂の変種

フランス・ロマネスク建築の特徴は「多様性の中の統一」という言葉でしばしば表現される。それは、先に述べた死後の世界への不安と期待によって培われたキリスト教的世界観の下で建築が構想されていたにもかかわらず、それぞれの形態や技術、材料が地域の風土に根ざした多様性を見せているからだ。ここで取り上げている巡礼路沿いの教会堂もすべて上述した建築様式を採用したタイプだけではなかった。地方独自の材料、技術、感性が優先され、多様な様相を呈した変種がロマネスクの世界を彩っていたのである。

例えば、材料ひとつを取り上げても、イル・ド・フランスの教会堂はバリ近郊の採石場から運ばれた石材が使用され、東部のロレーヌ地方ではこの地方特有の砂岩、そして石灰岩の採れない中部のオーヴェルニュ地方では火成岩、花崗岩、ぎょう灰岩などが利用され、石材の乏しい南部のトゥールーズ付近では煉瓦が多用され、素晴らしいローズ色の煉瓦建築が建設されるといった具合である。それはあたかもフランスのどの地方に行っても飽きない、変化に富んだ郷土料理を味わうかのようである。

それではここで巡礼路教会堂の変種をいくつか紹介してみよう。まず、サン・チャゴ巡礼路の起点のひとつであるヴェズレーの〈サント・マリー・マドレーヌ教会堂〉(ブルゴーニュ地方、1120

〜60年ごろ)の建築を見ると、プランも構造も巡礼路教会堂の典型的形式を採り入れていないのがわかる。プランは内陣部分が14世紀にゴシック様式で改築され、構造もトリビューンをもたず、身廊の高窓を大胆に開けた形式で、次のゴシック建築への橋渡しとなるものである。また、ブレ・ロマネスクの時代に建てられたトゥールニュの〈サン・フィリペール教会〉(ブルゴーニュ地方、1007〜1120年ごろ)も、トリビューンのない、同じタイプだが、時代的に初期のもので、粗石造の太いピアとゼブラ紋様の横断アーチで分断された身廊と、彫刻装飾を用いずロンバルディア帯の外部装飾だけの簡素でマッシブな外観が特徴的だ。これらふたつの教会堂は、巡礼路に沿って伝播した様式よりもブルゴーニュ地方のロマネスク以前からの形式を優先させた例といえる。ブルゴーニュ地方以外にもアルルの〈サン・トロフィーム大司教教会〉(プロヴァンス地方、12世紀)とボワティエの〈ノートル・ダム・ラ・グランド僧会教会〉(ボワトゥー地方、12世紀)がこのブルゴーニュの構造形式を採用しているが、前者はロンバルディア地方の石工技術の影が色濃く残り、背の高い身廊を厚い壁とバットレスで支持するブレ・ロマネスクの構造が相変わらず見られ、後者は身廊と側廊がほぼ同じ高さで並び、採光は間接ではあるが、側廊が高いために室内は明るく、天井に描かれた壁画の美しさが知覚できるように考案されたのである。〈サン・サヴァン・エ・シブリアン修道院〉(ボワトゥー地方、1050年起工)の美しい壁画は、このボワトゥー派の構造を用いていなければ、おそらく誰もその美を理解できなかったに違いない(図3)。

次に、もうひとつの巡礼路の起点であるル・ピュイの〈ノートル・ダム大聖堂〉(ヴレー地方、11〜12世紀)を注目してみると、典型的な巡礼路教会堂の形式とはまったく異なる独自の建築様式を示しているのに驚かされる。室内に入ると、トロンプによるドームを戴く正方形プランの連続で、明るくリズミカルな内部空間を構成し、三葉アーチやゼブラ模様の迫石がイスラムの雰囲気感を漂わせる。そして、同じ連続ドーム型のタイプでもペリグーの〈サン・フロン大聖堂〉(ペリゴール地方、1120〜1160年)は、ギリシア十字プランの上に大きなドームが4つ載るタイプで、ペンデンティヴによるドーム架構の方法が採られ、ル・ピュイの例とは異なる。以上のようなドームを連続させて天井を覆う形式は、ビザンチンやイスラム建築の影響を多く受けたもので、ヴレーやペリゴール地方だけではなく、ボワトゥー地方にも同じタイプのものが伝播した。単廊式十字形プランで、身廊に直径11mのドームが3つ架けられたアングレームの〈サン・ピエール大聖堂〉(ボワトゥー地方、1128年献堂)は、その代表例である。

巡礼路教会堂の風景

巡礼路の険しい道のりを辿る巡礼者たちにとって、目指す教会堂が近づくにつれて起こる心の高鳴りは、いかに感動的なものだったであろうか。ヴェズレーの聖なる丘を見下ろす〈サント・マリ

ー・マドレーヌ教会堂〉も、山の斜面にへばりつくように広がる小さな村に一段と高い塔が3基そびえ立つコンクの〈サント・フォア教会堂〉も、やっとの思いでたどり着いた人々にどんなにか安堵の気持ちを抱かせたであろうか。ロマネスク建築を旅する喜びは、中世の巡礼者たちが味わったであろう心の高鳴りを体験することであり、当時の人々が心に描いていた死後の世界を垣間見ることなのである。偉大なる神がつくり出した美しい自然の一部に溶け込むように佇む巡礼路教会堂を遠くに臨み、一步一步踏みしめながら神の国に近づこうとする巡礼者の姿は、まさに天国への階段をゆっくり昇る死者のそれだったのであろう。

(はにゅう・しゅうじ／建築史、東海大学教授)

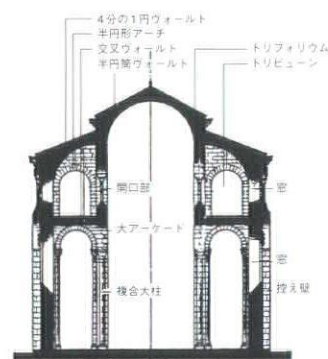
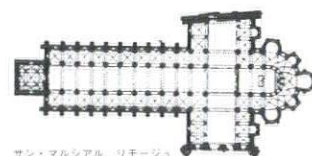
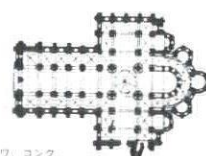


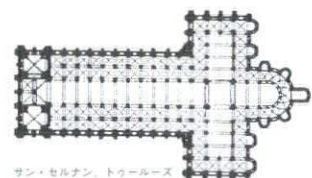
図1 巡礼路教会堂断面図



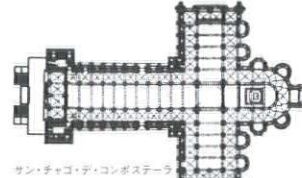
サン・マルシャル、リモージュ



サント・フィウ、コンク



サン・セルサン、トゥールーズ



サン・ジャコ・デ・コンポステーラ

図2 巡礼路にある4つの大教会堂比較

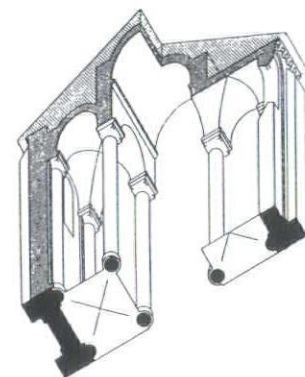


図3 サン・サヴァン・エ・シブリアン修道院
〈サン・サヴァン・シュール・ガルタンブ〉
アクトメ

②

モントワール・シュール・ル・ロワール
サン・ジル礼拝堂
Montoire-sur-le-Loire
Chapelle Saint Gilles

③

ラヴァルダン
サン・ジュネ教会
Lavardin

⑥

ボワティエ
ノートル・ダム・ラ・グランド僧会教会
Poitiers
Ancienne Collégiale Notre-Dame la Grande

⑦

ボワティエ
サン・ティレール・ル・グラン教会
Poitiers
Eglise Saint Hilaire le Grand

⑫

オネー
サン・ピエール教会
Aulnay
Eglise Saint Pierre

⑬

サント
サント・マリー・
オー・ダム修道院
Saintes
Ancienne Abbatale
Sainte Marie aux Dames

⑭

サント
サン・
ノートル・ド・ポワ
Saintes
Eglise Saint Eutrope

⑮

ラ・ソーヴ・マジョール
サン・ジェラルド修道院
La Sauve Majeure
Ancienne Abbatale Saint Gérard

①

サン・ブノア・シュール・ロワール
サン・ブノア聖堂
Saint Benoit-sur-Loire
Basilique Saint Benoit

④

サン・テニャン・シュール・シェール
サン・テニャン僧会教会
Saint Aignan sur Cher
Collégiale Saint Aignan

⑤

タヴァン
サン・ニコラ教会
Tavant
Eglise Saint Nicolas

⑧

ショーヴィニー
サン・ピエール僧会教会
Chauvigny
Ancienne Collégiale Saint Pierre

⑩

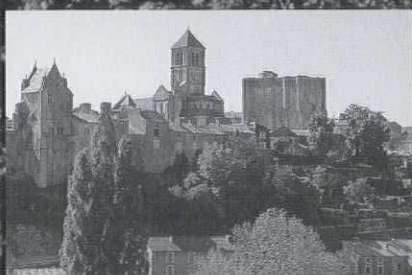
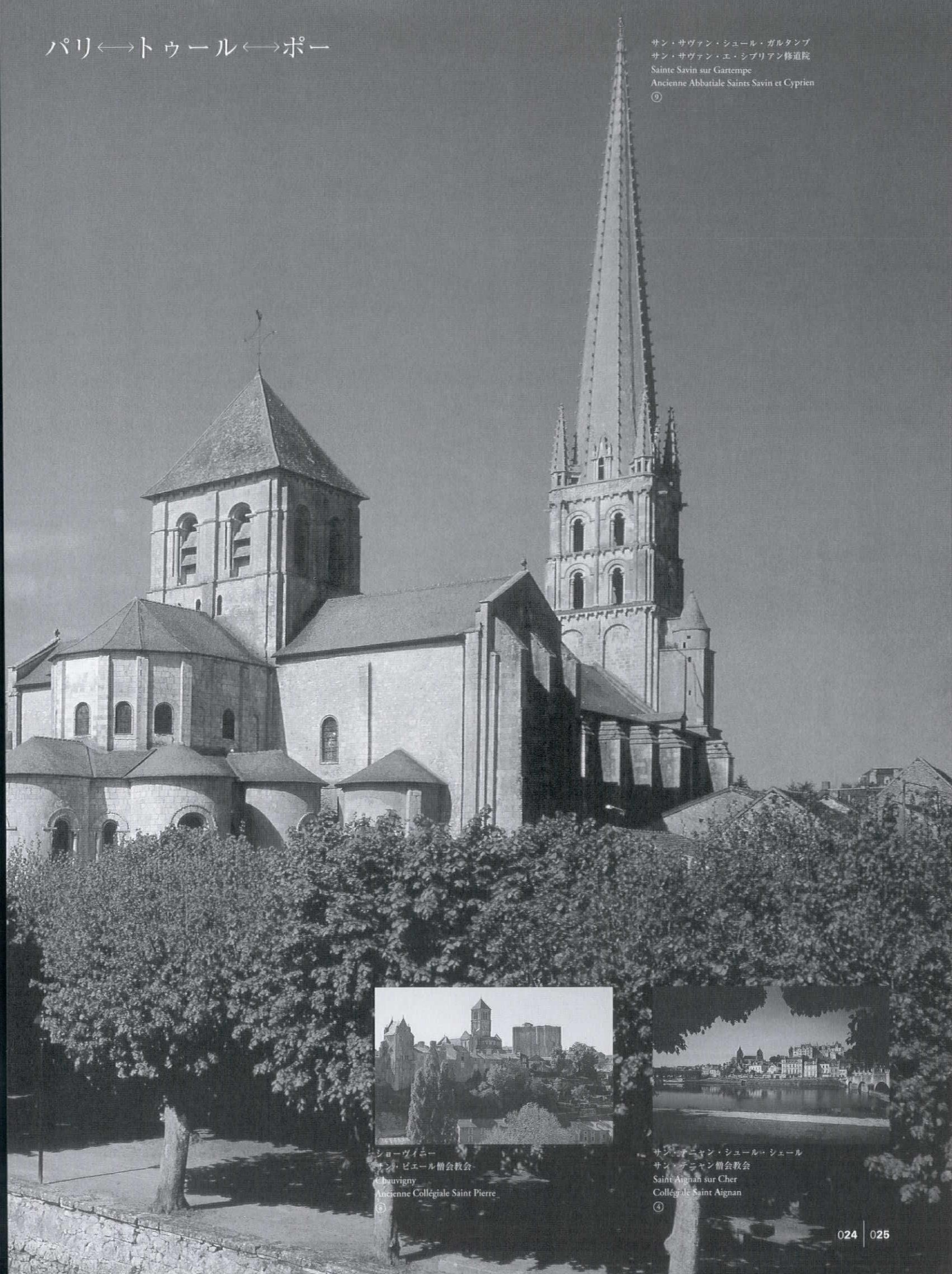
シヴレー
サン・ニコラ教会
Civray
Eglise Saint Nicolas

⑪

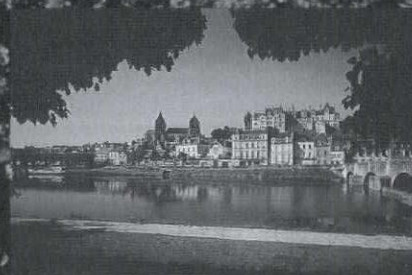
アングレーム
サン・ピエール大聖堂
Angoulême
Cathédrale Saint Pierre

route de Louis

サン・サヴァン・シュール・ガルタンブ
サン・サヴァン・エ・シブリアン修道院
Sainte Savin sur Gartempe
Ancienne Abbatale Saints Savin et Cyprien
⑨



ショーヴイニー
サン・ピエール僧会教会
Chauvigny
Ancienne Collégiale Saint Pierre
⑩



サン・オニャン・シュール・シェール
サン・デニャン僧会教会
Saint Aignan sur Cher
Collégiale Saint Aignan
⑪

サン・ブノア・
シュール・ロワール
Saint Benoît-sur-Loire

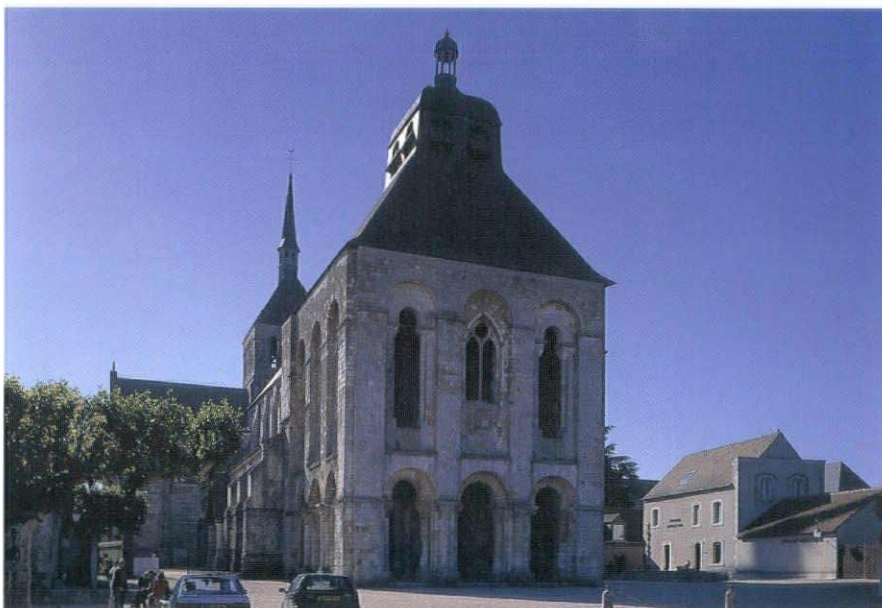
サン・ブノア聖堂
Basilique Saint Benoît

①

1026年に火事で焼失した後、再建されたが1207年に多くの司教たちを呼んで行われたサン・ブノワの聖遺物箱への移転式が実質的な竣工と考えられる。鐘楼玄関は司教の名をとり「ゴズランの塔」と呼ばれるが、2層に渡りそれぞれ16本の柱と54および74の柱頭彫刻があって、素晴らしいイコンの大集合体となっている。(S)

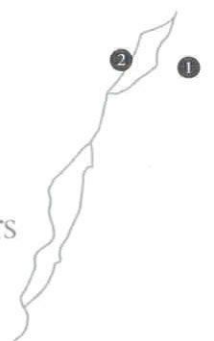


ナルテックスとなるゴズランの塔1階の柱頭彫刻



正面ファサードのゴズランの塔をみる

route de Tours



モントワール・シュール・ル・ロワール
Montoire-sur-le-Loire

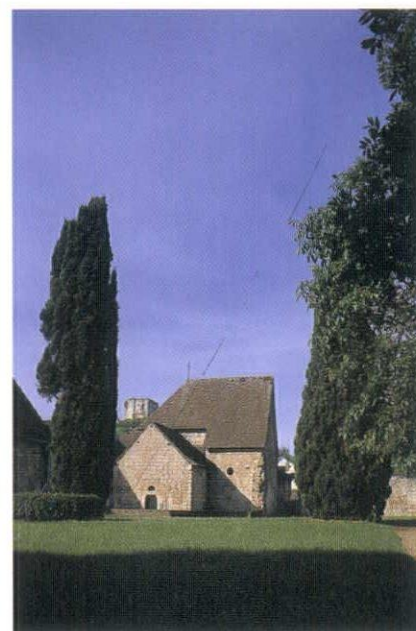
サン・ジル礼拝堂
Chapelle Saint Gilles

2

11世紀に建設されたものと考えられる。
本来身廊に4スパンの長さを持つ教会で
あったが、現在は1スパンのみ残る。後
陣と両翼天井にロマネスクを代表する3
つの「キリスト昇天」を描くフレスコ画
を持つ。(S)



後陣礼拝室。3つのフレスコ画は時代が異なり後陣部分が最も古いと考えられる



袖廊と1スパンの身廊

ラヴァルダン

Lavardin

サン・ジュネ教会

Eglise Saint Genest

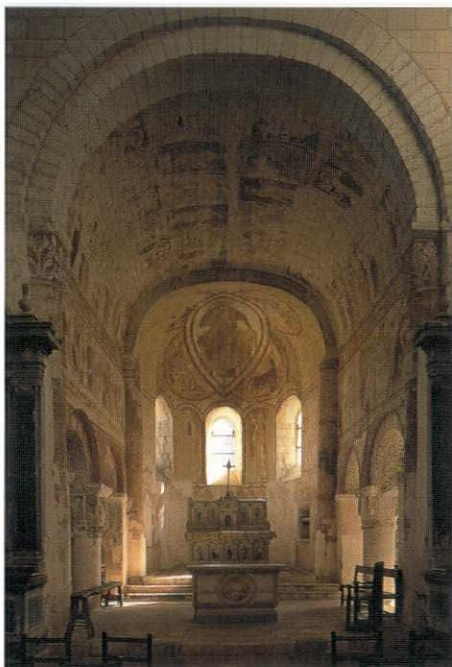
3

11世紀中ごろの建築と考えられている。当時の古い様式の柱頭彫刻が残るが、注目すべきは壁画である。最も古いフレスコ画と目されるのは内陣北側廊のキリストの洗礼であり、12世紀の作品と考えられる。それ以外の多くは13世紀後半までに描かれ、フレスコ画と一種のテンペラ画が混在している。(S)



最も古いフレスコ画「キリストの洗礼」部分

route de Tours



内陣、後陣全体に壁画・天井画が残る



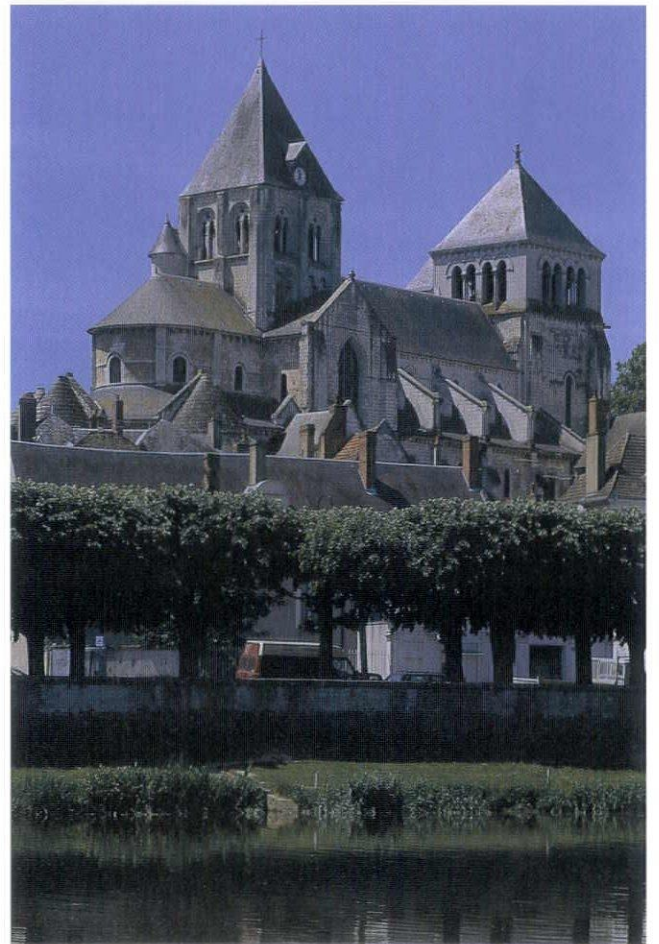
クリプト天井画

サン・テニャン・シュール・シェール Saint Aignan sur Cher

サン・テニャン僧会教会
Collégiale Saint Aignan

4

現在に残る僧院は11世紀の終りごろ内陣から始まり、12世紀を通して身廊からファサードの建設が続いた。クリプトにある壁画・天井画がロマネスクの代表的な作品であり、3つの小礼拝室のうち、北側礼拝室以外の2カ所と中央ドームの3カ所に分けられる。(S)



河岸より全体のコンプレックスをみる

タヴァン

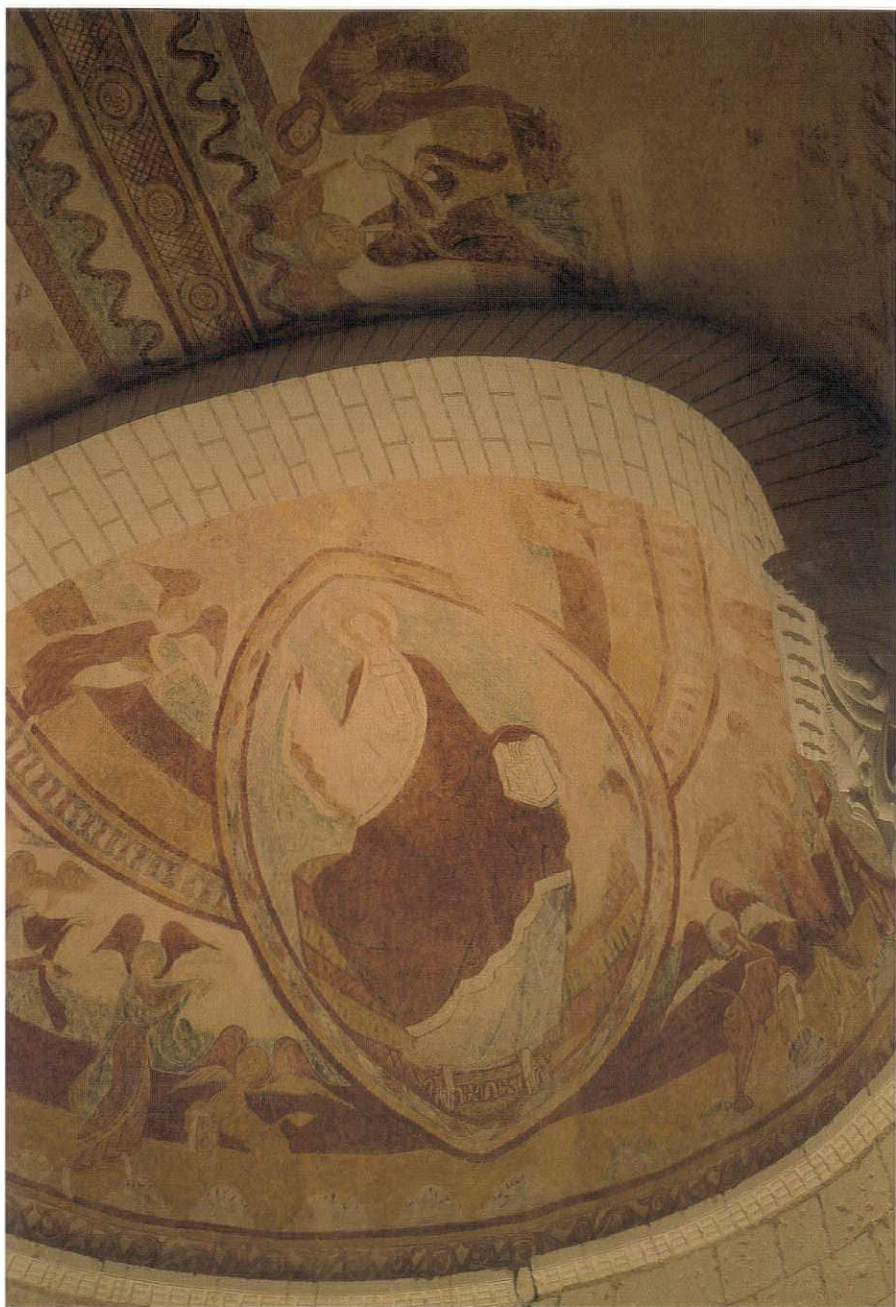
Tavant

サン・ニコラ教会

Eglise Saint Nicolas

5

建築は12世紀はじめごろと考えられている。本来ファサードで表現されているとおり側廊を持っていたが、現在は単身廊の構成のみ残る。最も注目すべき部分は壁画で、身廊にもあったとされているが、現在は内陣とクリプトに残っている。単純化された形態と自由な動きを持つ人物像、赤を中心とする明るい色調が特徴である。(S)



後陣天井画「栄光のキリスト」

route de Tours



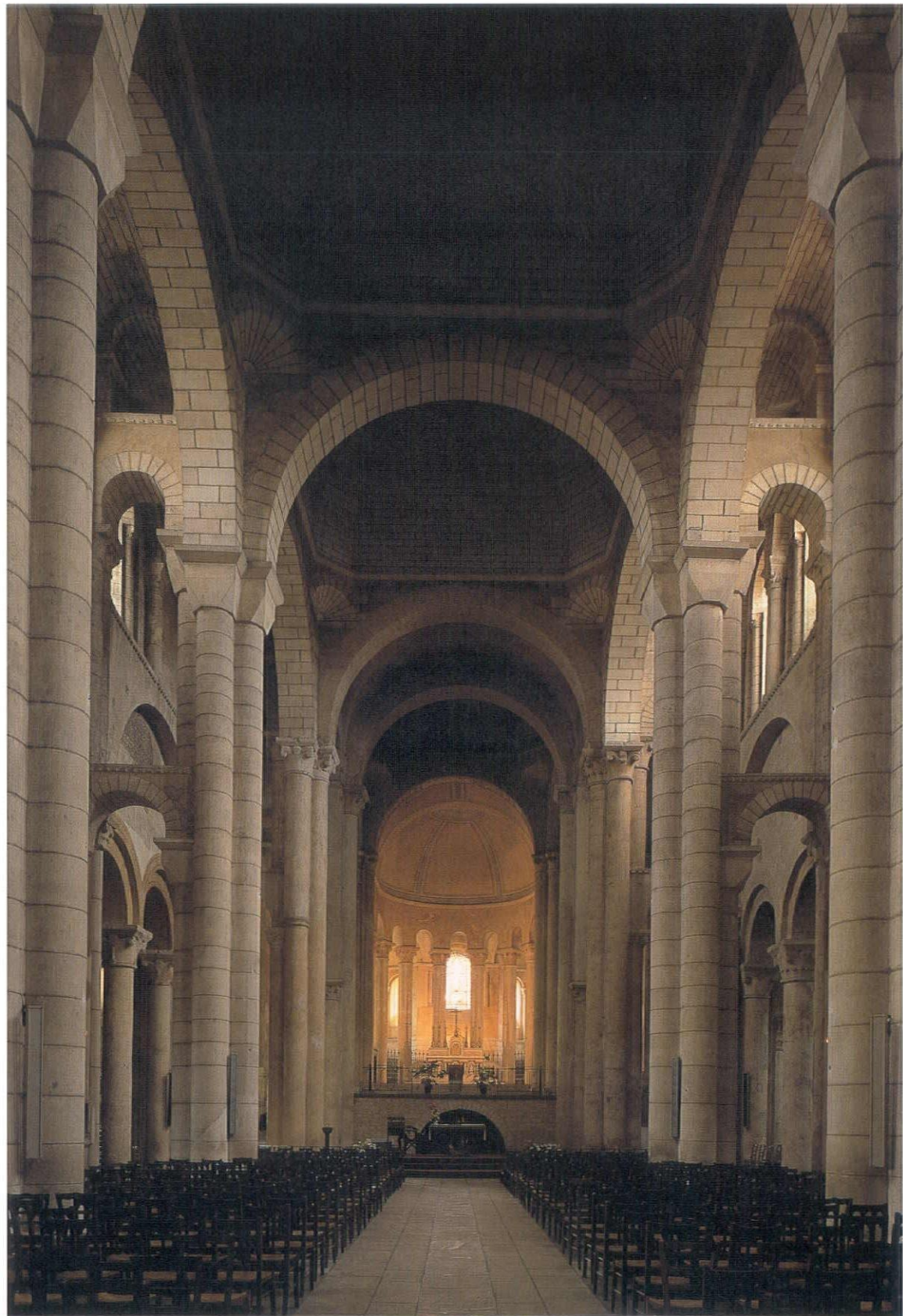
正面ファサード。側廊は現存しない

ポワティエ
Poitiers

サン・ティレール・ル・グラン教会
Eglise Saint Hilaire le Grand

7

現在の教会がほぼ完成したのは1049年とされるが、最初の2スパンは衰退期に完全に損失し、修復は19世紀に行われている。独特のダイナミックな内部空間構成が魅力。(S)



身廊と側廊の間に一種のバックゾーンがあり、小さな半円アーチを架ける独特の構成。

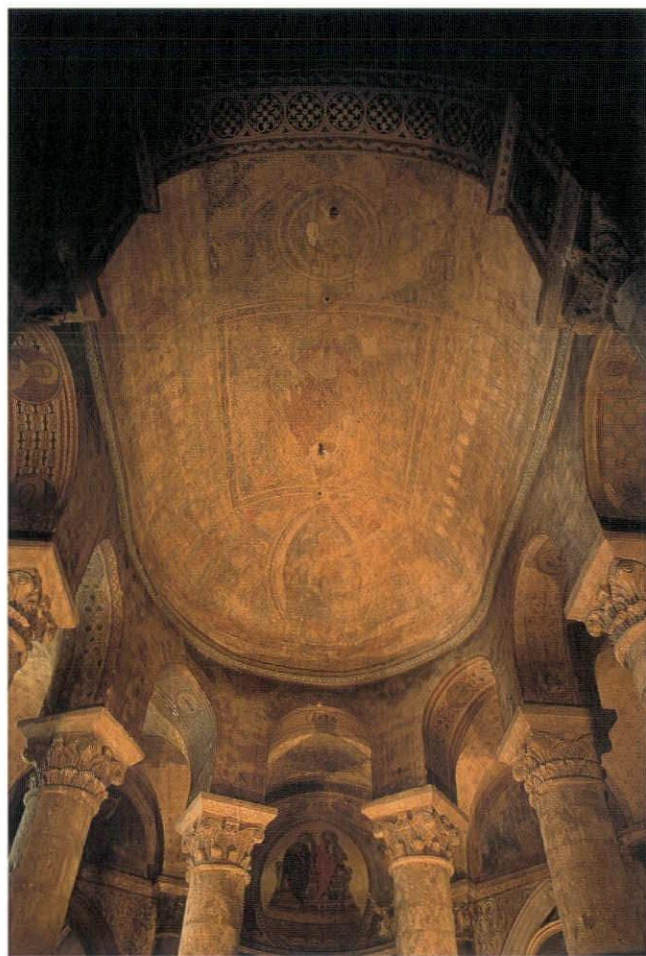


ポワティエ Poitiers

ノートル・ダム・ラ・グランド僧会教会
Ancienne Collégiale Notre-Dame la Grande

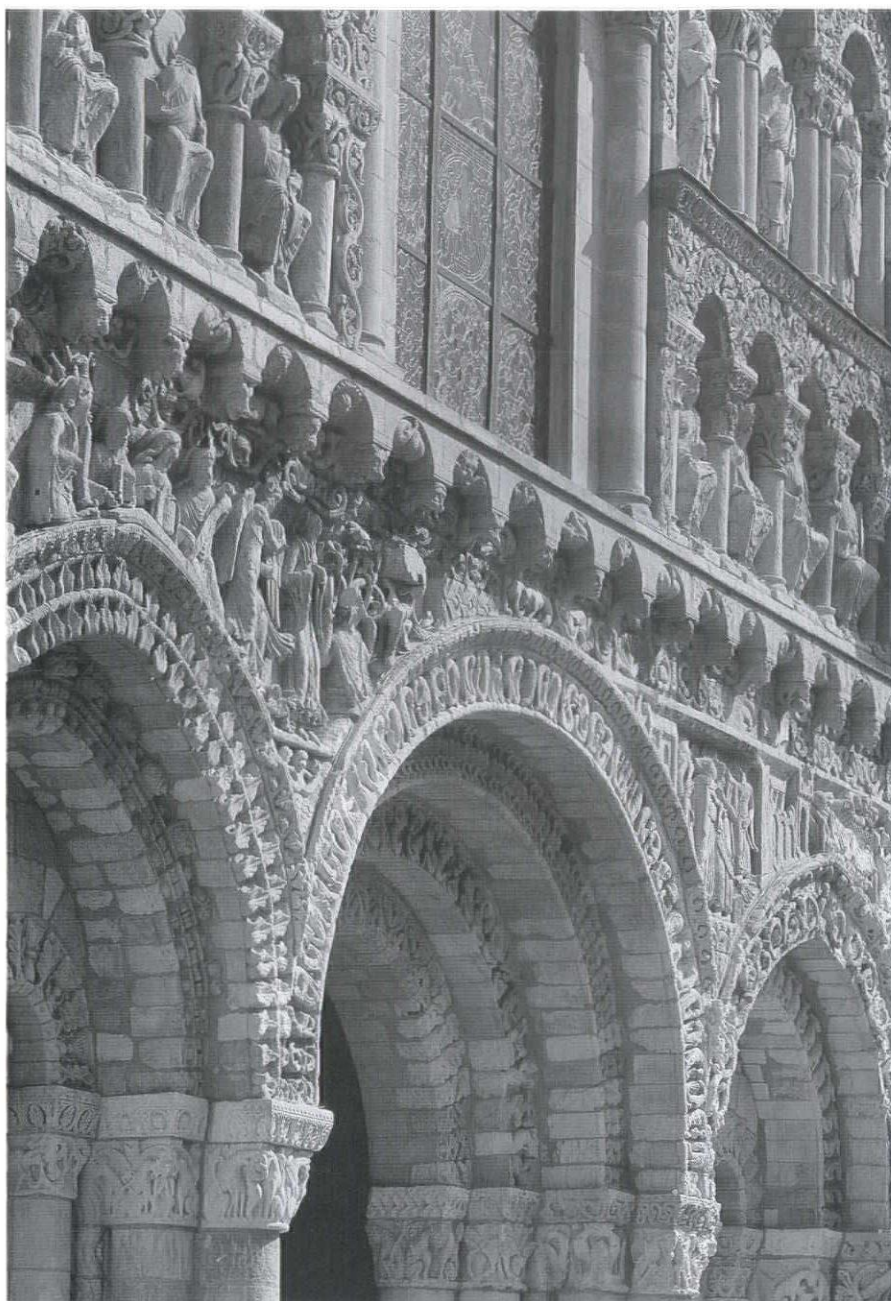
6

1090年ごろの建築と考えられている。ファサードを埋め尽くすように配置された彫刻に対して、両脇を締めるように立ち上がる柱の束の上に円錐の塔を載せる構成全体が美しい調和を持っている。上部アーモンド形に穿たれたキリスト昇天の彫刻は約60cmもの深さをもつ作品である。(S)



内陣天井画

route de Tours



深い奥行き彫刻群



「受胎告知」

長塚安司

ロマネスク聖堂は石造りのものが多い。その中にあって、堂内の漆喰壁に描かれた壁画に出会えたりするとほっとする。それは壁画を描いた画家の行為が、その筆致や絵の具の重なりから、直接伝わってくるからで、その素朴な暖かさこそがロマネスク壁画の魅力なのである。

地理的に見ると、現在、ロマネスク壁画を有する聖堂は、ロワール川に沿って存在している。特にトゥールの町を中心とした地域に多い。つまりロワール川渓谷とボワトゥー地方に集中し、オーヴェルニュと南ブルゴーニュ地方に散在している。

ロマネスク壁画を技法の観点から見ると、ふたつのグループが見られる。ひとつは「背景に当る背地が淡黄色に塗られ、人物や事物がややくすんだ濃い色で彩色される」もので、その代表的作例はボワトゥー地方の〈サン・サヴァン・エ・シブリアン修道院〉の壁画である。他方は「背地は青色または暗青色に塗られ、描かれる人物や事物が明るく、時には輝くような色調をみせる」もので、その代表的作例は、ブルゴーニュの〈クリュニー修道院〉近くにある、ベルゼ・ラ・ヴィルの「修道士の館」の小礼拝堂に見られる。このふたつのグループは、地域的にはっきりと区別されるようなものではなく、ある地域では混在したりし、また二派に正確に分類できない作例もあり、学問的な分類には必ずしもならないが、ひとつの見方ではある。「青い地の壁画グループ」は主として南フランスに多く、イタリアとの共通性が見られ、ビザンチン壁画との関係も指摘できるものである。一方、「淡黄色の地の壁画グループ」はより北のトゥールを中心とした地域に見られ、フランス独自の、地域性を持った壁画である。

量的にも多く、また質的にも優れたロマネスク壁画を有するのは、「淡黄色の地の壁画」の代表である〈サン・サヴァン・エ・シブリアン修道院〉の聖堂である。聖堂は中世の町ボワティエから30kmあまりの地に、ガルタンブ川を臨んで建っている。遺跡監督官でもあった文豪プロスペル・メリメにより、19世紀中ごろに、この聖堂の壁画の最初の研究がなされたことは興味深い。聖堂の入口に当る玄関の間に「聖ヨハネの黙示録」に基づく諸場面が描かれ、身廊への入口のティンパヌムに「再臨のキリスト」が配されている。玄関間の上のトリビューンには「十字架降下」を中心に「キリスト受難」の諸場面が描かれている。身廊の筒型穹窿天井には、よく知られている「天地創造」から「ノアの洪水」「バベルの塔」「ヨゼフの物語」「モーゼの物語」に至る、「旧約聖書」の諸場面が展開している。内陣の下のカリプトには「聖サヴァン（サウイス）と聖シブリアン（キブリアス）の殉教」が見られる。制作された時期については、トリビューンの壁画が最も古く、玄関間、身廊そしてカリプトの順に、11世紀末から12世紀初頭にかけて描かれたとされている。「淡黄色の地の壁画」の彩色は平塗りであり、全体として平面的で、強い装飾的效果をみせている。それゆえ描線はものの輪郭を示すと同時に、人物などの動きを表す重要な表現要素でもある。ものに即した線

でありながら、抽象絵画における線と同様に、線は自立していて、壁画の動勢を生んでいる。

サン・サヴァンの壁画と共通する要素を持つ壁画はボワティエの〈サンティレール・ル・グラン聖堂〉、〈ノートル・ダム・ラ・グランド聖堂〉、〈洗礼者聖ヨハネの洗礼堂〉に見られる。〈サン・ティレール・ル・グラン聖堂〉のものはサン・サヴァンに先立つ作例とする学者もいる。〈洗礼者聖ヨハネの聖堂〉の「コンスタンティヌス大帝の騎馬像」はサン・サヴァンの壁画との類似する点が指摘されている。そして離れては、アンジェー近くのシャトー・ゴンティエの〈洗礼者聖ヨハネの聖堂〉に見られる。ここには「旧約の物語」が部分的に、特に「創世記」が残されていて、サン・サヴァンの身廊の壁画との類似が指摘されている。ロワール川渓谷地方のヴァンドームの〈サン・トリニテ聖堂〉の参事会室の1972年に発見された「大漁の奇蹟」などを表す壁画は、サン・サヴァンのカリプトの壁画との類似を示し、その壁画様式の広まりがうかがえる。また、地理的には離れているが、ブルゴーニュのオーセールの大聖堂のカリプトの壁画も共通性を見せている。

ロワール川の南側、トゥールを三角形の頂点とするような位置にある2聖堂、ル・リジェの〈サン・ジャン小礼拝堂〉とタヴァンの〈サン・ニコラ聖堂〉のカリプトは非常に対照的な壁画を見せている。タヴァンの壁画をロマネスク早期とするか、末期とするかによって、ロマネスク壁画の展望が全く異なったものになる。つまり、タヴァンに見られる人物像の持つ動勢豊かで表現主義的な大胆さと独自の筆致をロマネスク早期のプリミティブな現象と捉えて、その後の展開を把握するのと、ロマネスク末期のデカダンスの現われと見て、ロマネスク壁画の終わりを告げるものと考えなかでは大きな違いが生じる。一方、ル・リジェの壁画はロマネスク末期の作例で、図像としてはイタロービザンチンのモデルによっていると推測されている。静穏な、節度ある表現を見せている。

ロワール川渓谷地方のサン・テニャン・シュール・シュールにある〈サン・テニャン僧会教会〉のカリプトの壁画はよく保存されていて美しい。祭室に「栄光のキリスト」、周歩廊に連結する3つの放射状礼拝堂の中央に「ラザロの蘇生」、南に「聖アエギディウスの殉教」が描かれている。12世紀末のロマネスク期からゴシック期への移行を示す壁画様式を見せている。

トゥールの北のヴァンドームを中心に、「ロワール派」と呼ばれる一群の壁画が見られる。それらは異国または他地域からの影響の少ない、最もフランス的な性格の美術と考えられている。とりわけラヴァルダンの〈サン・ジュネ教会〉の壁画はこの地域の基本的な要素を秘めていると考えられる。それは、「キリスト洗礼」に見られる裸体表現は〈サン・サヴァン・エ・シブリアン修道院聖堂〉の「ノアの泥酔」のそれとは根本的に異なっていて、また〈サン・ジャック・デ・ゲレ聖堂〉のカロリング朝以来の伝統を保持している「磔刑」の裸体表現とも異なる表現を見せてい

るからである。この地域で特に注目されるのはモントワール・シュール・ル・ロワールの〈サン・ジル礼拝堂〉である。3つの祭室が張り出た、3弁型の平面プランによる聖堂の東の中央祭室は「淡黄色の地」による技法の最も良い例を示しているのに、南北の祭室では、「青地」の技法を用い、ひとつの聖堂に二派の壁画様式が混在している。このことは注文に応じて、「移動して壁画制作に当る壁画工房」の存在を推測させる根拠となっている。

ベリー地方に対照的で、しかも共にフランス・ロマネスク壁画の特色をよく備えた作例がある。ブリネの〈サン・テニャン聖堂〉とノアン・ヴィックの〈サン・マルタン聖堂〉の壁画で、「淡黄色の地」のグループに入る。ブリネの壁画は、顔立ちに気品があり、人物像の態度は平静さがあり、よく計算された構成が見られる。それに比較して、ノアン・ヴィックの壁画は人物像に力強い動きがあり、顔立ちは特異で、表情が豊かである。鋭い折り目のついた衣の表現は独特で、動勢に満ちていて、スペインのカタルーニャの壁画との共通性が感じられる。

クリュニー派の大本山である修道院の3回目の改築による〈第3クリュニー聖堂〉が建設される1100年を前後する時期に、クリュニー派は隆盛期を迎えている。1130年の聖堂奉獻を待たずして、1109年に他界した修道院長聖フゴは、ベルゼ・ラ・ヴィルに個人的に「修道士の館」の礼拝堂を建て、壁画で飾った。それは「青地による壁画」の代表的な作例で、「淡黄色の地による壁画」には見られない、奥行を感じさせる絵画空間を持ち、陰影を伴う写実的表現が見られる。礼拝堂の祭室のコンクには「聖人たちに囲まれる栄光のキリスト」、祭室の両側壁には「聖ラウレンティウスの殉教」と「聖ブラシウスの殉教」が描かれている。

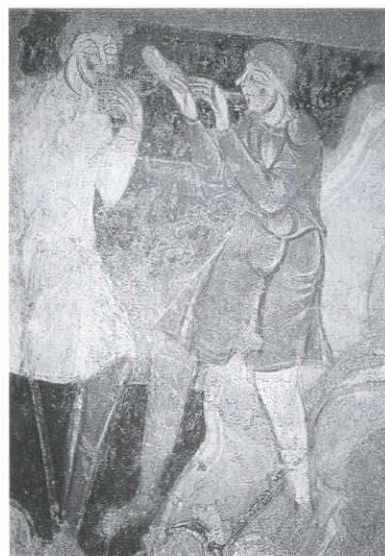
「青地による壁画」に属する作例は、リヨンの東にある〈サン・シェフ修道院聖堂〉の北翼廊の二階の礼拝堂の天井及び側壁の「天上のエルサレムとキリストを囲む聖人の位階」に見られる。同じく、オーヴェルニュ地方のブリウドの〈サン・ジュリアン聖堂〉のトリビューンの「最後の審判」やル・ピュイの大聖堂の「大天使ミカエル」にも見られる。また、より北に位置するエブリユの〈サン・レジェ聖堂〉には「諸聖人の殉教図」が描かれ、その背地は帯状に何色かに分けられているが「青地の壁画グループ」に属していて、やはりイタリアそしてビザンチン絵画との共通性が認められる。

ラングドック地方の首都トゥールーズの〈サン・セルナン聖堂〉には、かつて修道院に描かれていた「聖アウグスティヌスの座像」が、周歩廊の北側に残されているのみであったが、1973年に聖堂北翼廊の西壁に壁画が発見され、この地方にも絵画活動のあったことが知られた。その壁画は「青地による壁画」のグループに近いが、よりロマネスク壁画の根源的な要素を持ち、この地域にひとつの流派があったことを告げている。息の長い筆致は力強く、大らかさのある画風を示している。

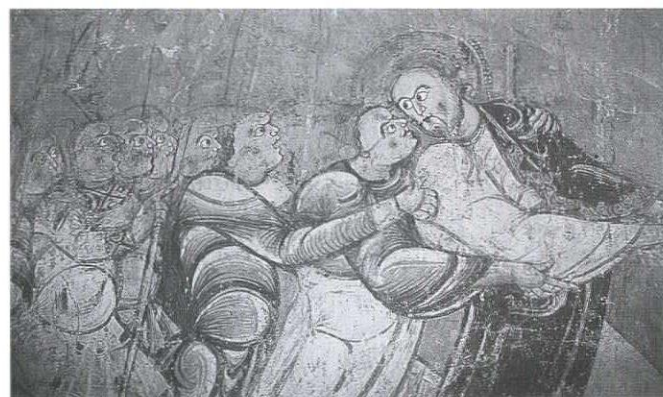
その外にも、スペインのカタルーニャ派に属する一派がフラン

ス側にも見られ、その代表例はフノラール（またはフヌヤール）の〈サン・マルタン聖堂〉の12世紀前半期の壁画である。小さな単身廊聖堂の穹窿と側壁に描かれた壁画は、大きな目の顔、簡潔だが誇張された動作が特徴で、表現力に富んでいて、黒色を用いた色調にカタルーニャ地方独特の配色が見られる。

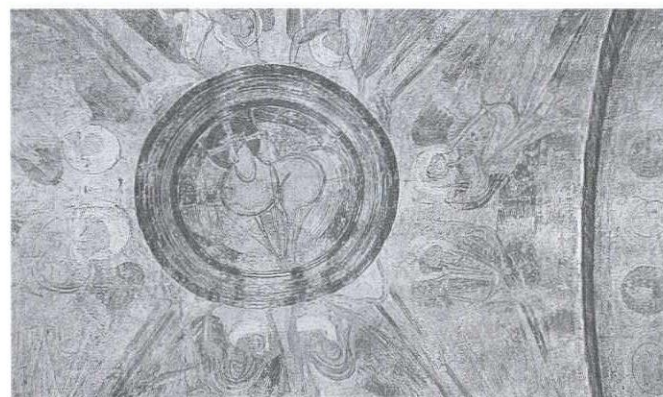
（ながつか・やすし／西洋美術史、東海大学教授）



「羊飼いの告げ」（部分）、12世紀中ごろ、ブリネ、サン・テニャン聖堂



「キリスト逮捕」（部分）、1140年ごろ、ノアン・ヴィック、サン・マルタン聖堂



「子羊礼賛」（部分）、12世紀、トゥールーズ、サン・セルナン聖堂

ショーヴィニー Chauvigny

サン・ピエール僧会教会
Ancienne Collégiale Saint Pierre

8

11世紀中ごろの建設。明るい灰色石灰岩と光のハーモニーが内部空間に軽さと透明感を与えている。柱頭の新約聖書を語る彫刻は独特の民族的香りを持つナイーヴな表現がみどころである。(S)



内陣廻りの柱頭は主に新約聖書の物語を描く



人をむさぼり食う鳥獣。内陣柱頭彫刻

シヴレー

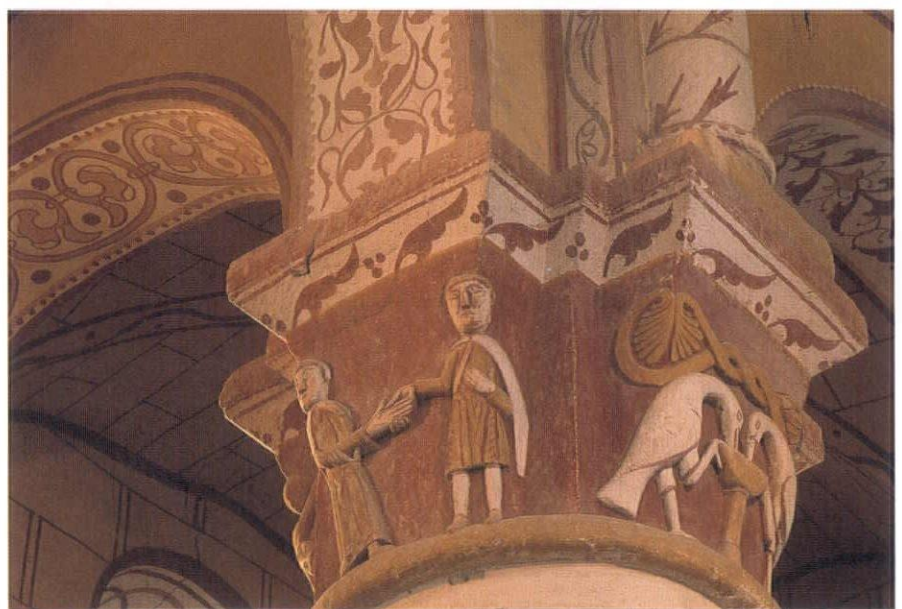
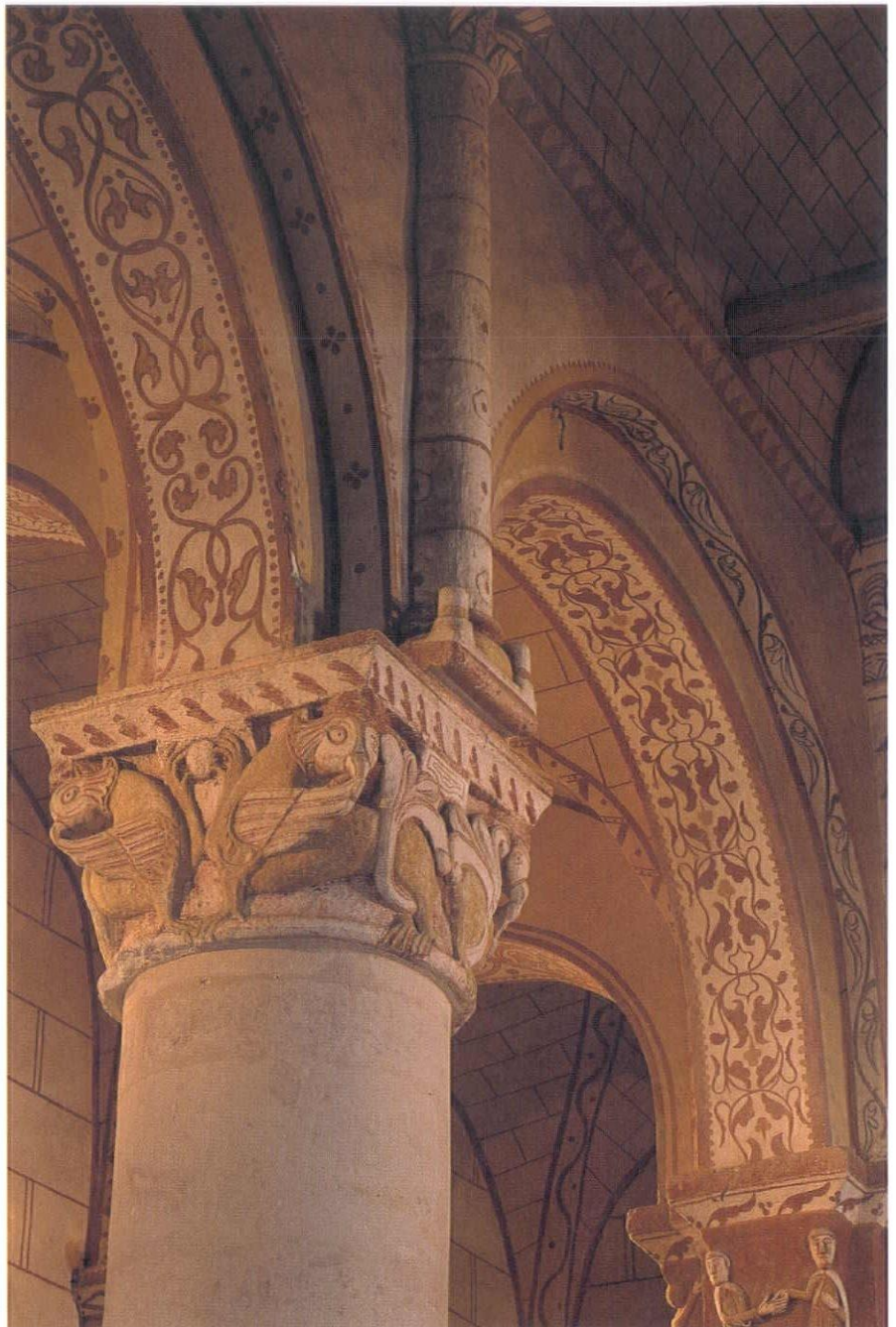
Civray

サン・ニコラ教会

Eglise Saint Nicolas

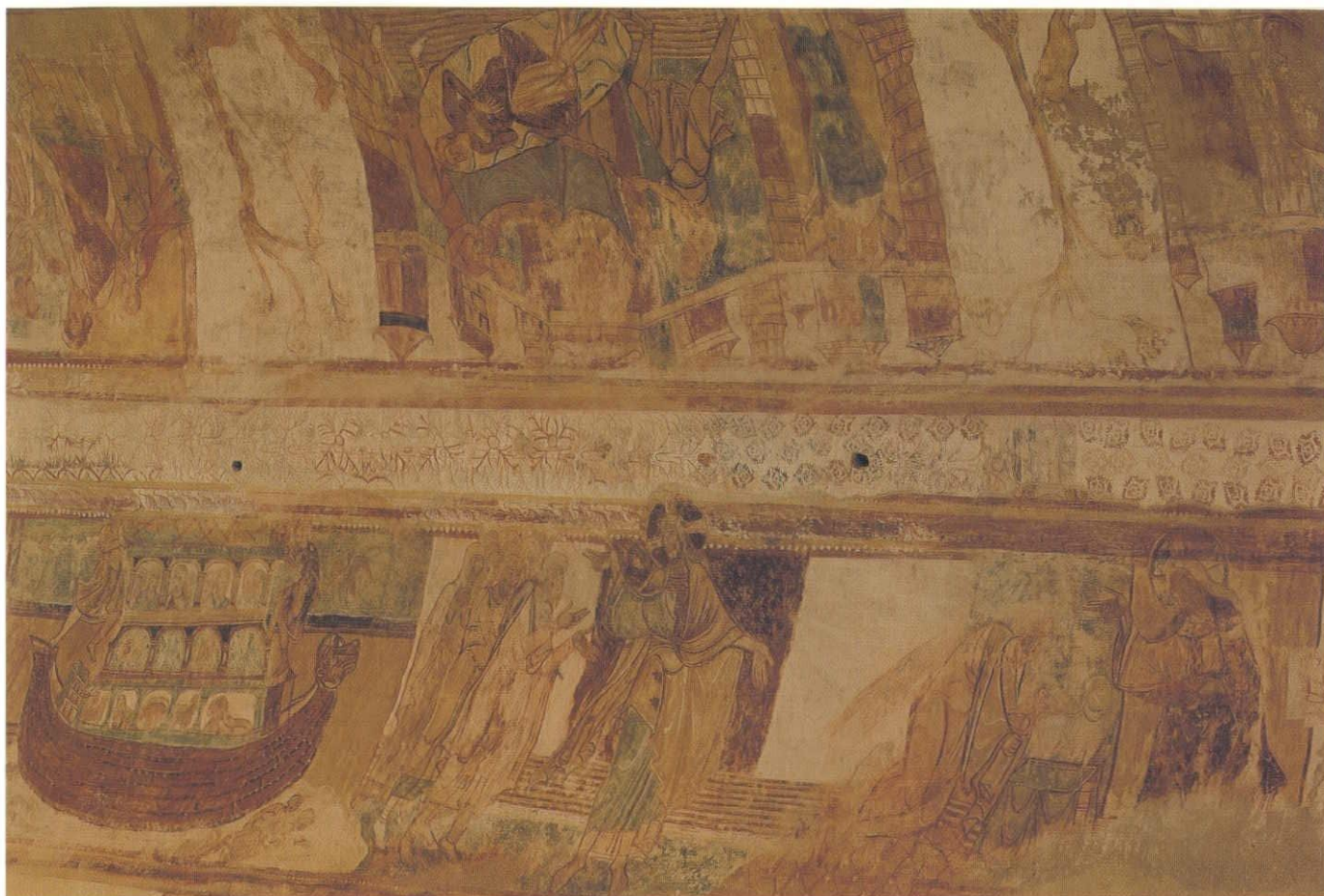
10

12世紀終わりごろに完成したと思われる。ファサードは、6つの大きなアーチによる明快な構成のなかに、ボワチエ風の高い質を誇る大胆な彫刻群をもつ。(S)



route de Tours





天井ヴォールト：下段（北側）にノアの箱船、ノアの家族への神の祝福、ノアの犠牲。上段（南側）に酔いつぶれたノアを発見するノアの息子たち

サン・サヴァン・シュール・ガルタンブ Saint Savin sur Gartempe

サン・サヴァン・エ・シプリアン修道院
Ancienne Abbatiale Saint Savin et Cyprien

9

11世紀末から12世紀はじめごろの建設。
一気に天井ヴォールトまで立ち上がった
列柱から上は、数々の旧約聖書のエピソ
ードが盛り込まれた中世最高最大のフレ
スコ画が展開する。(S)



route de Tours





アングレーム

Angoulême

サン・ピエール大聖堂

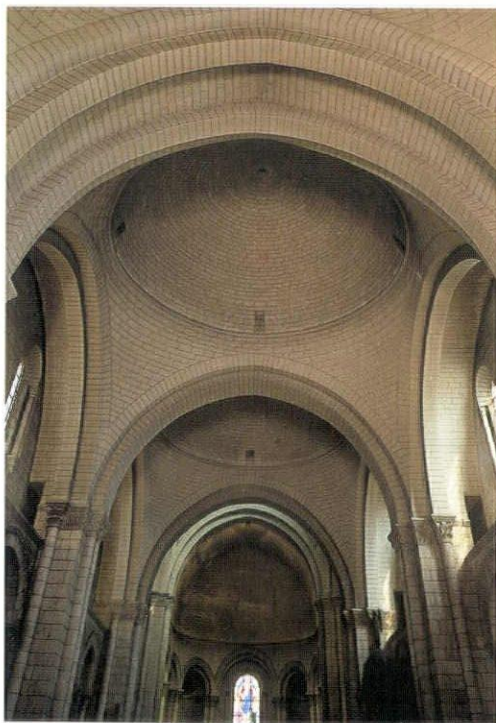
Cathédrale Saint Pierre

11

1114年から1140年ごろの建設。南西フランスのみに存在するビザンチン風でスケールの大きな独特の空間構成を持つ。ドームを連ねる構成は、ペリグーのサンテ・チエンス、カオールの大聖堂、スイヤック、ソリニャックなどにみられるが、リブを柱で受けるのはアングレームだけである。「ローランの歌」彫刻を含む豪華なファサードを持つ。(S)

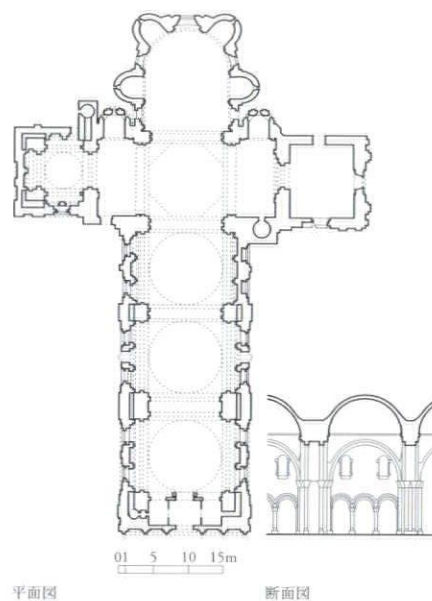


正面ファサード上半部。中央にキリスト昇天と4福音書聖人。下に生命の木と2天使が描かれる



ドームを連ねる構成を持つ教会では最も軸線の強い空間

SD0007



平面图

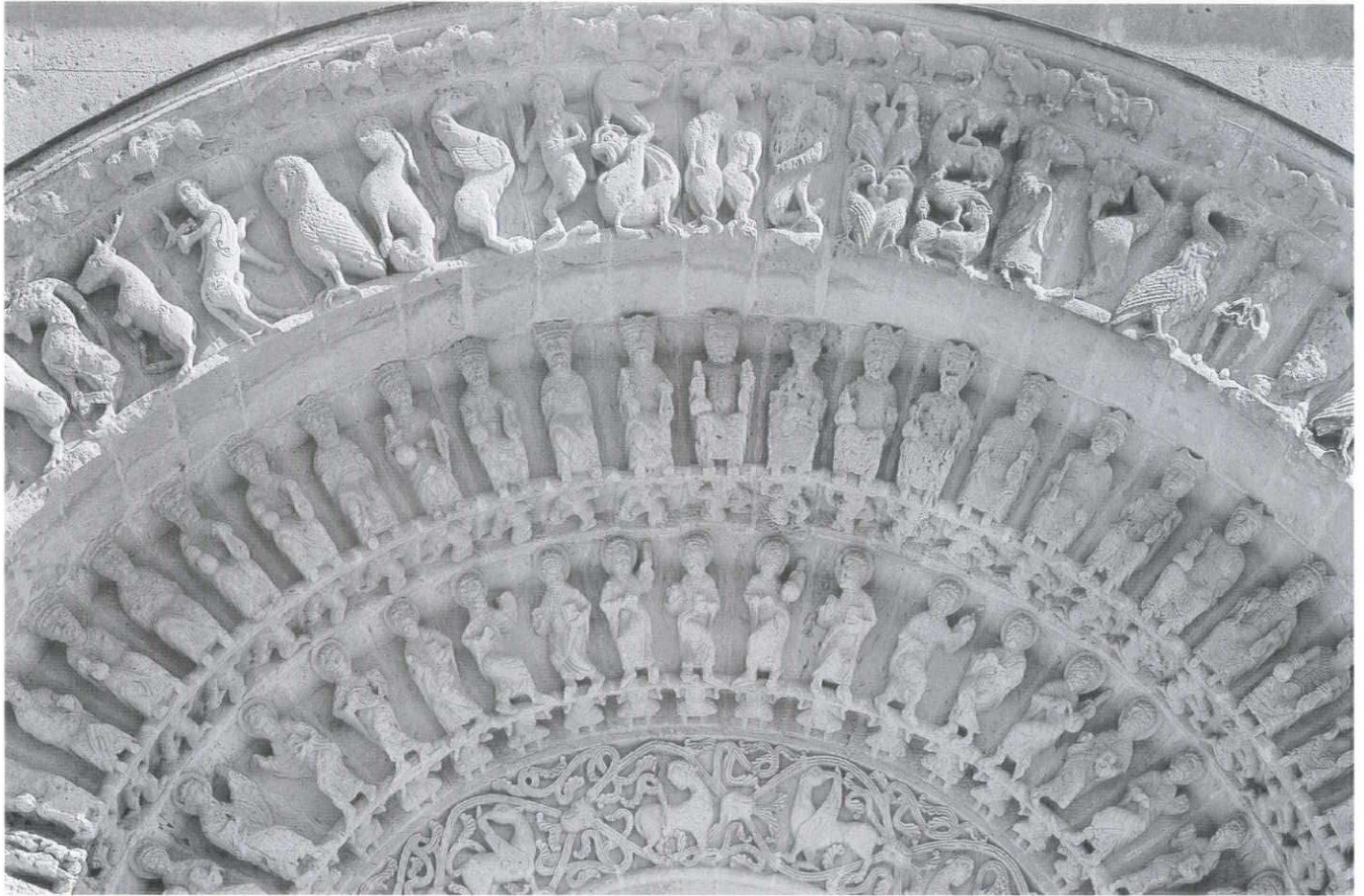
断面図

オネー
Aulnay

サン・ピエール教会
Eglise Saint Pierre

12

1170年ごろの建設になる。ボワトーでも最も密度の高い彫刻群を持つ。南ファサードの破風彫刻および完成された端正な外観と西側ファサードのアーチを中心とする多くの彫刻は、他に類をみない緻密に纏め上げられた彫刻群である。(S)



南側入口アーチ彫刻詳細



西ファサード前は墓地が広がる。正面バットレスは後補

route de Tours

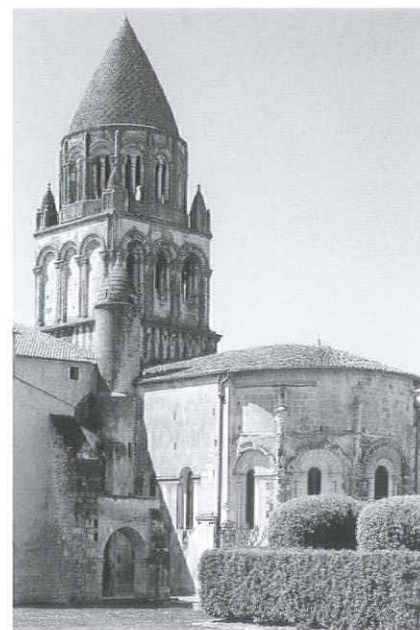


route de Tours

13 14



西ファサード正面入口上アーチ詳細



後背部より鐘樓をみる

サント

Saintes

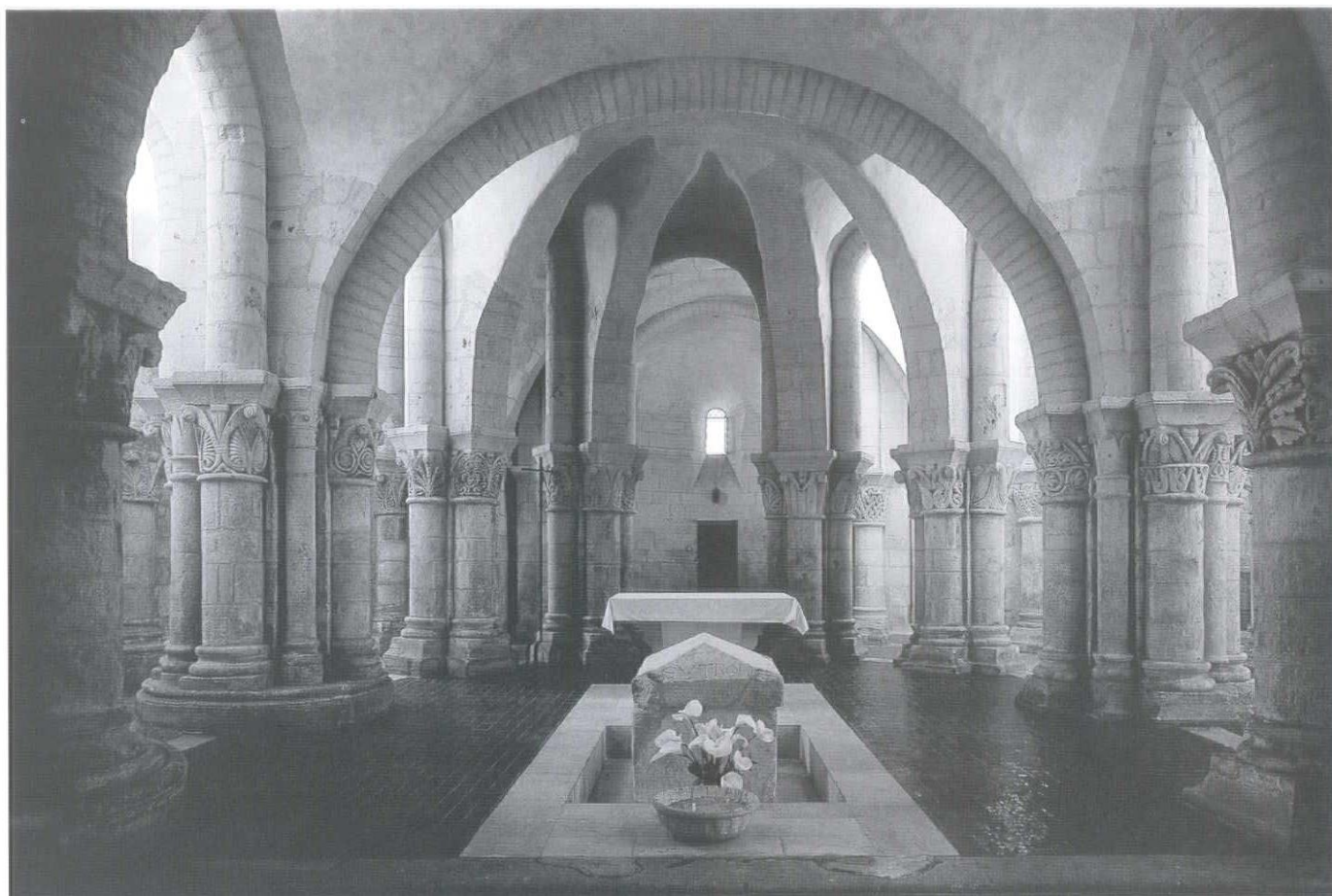
サント・マリー・オー・ダーム修道院

Ancienne Abbatiale Sainte Marie aux Dames

13

1047年の設立で12世紀にファサードや鐘楼などに大きな改造を受け、ほぼ現在の形態になっている。美しい鐘楼を持つ優雅な女子修道院。サントの教会の特徴である貫通する柱によって3分割されたファサードに繊細な彫刻が配されている。

(S)

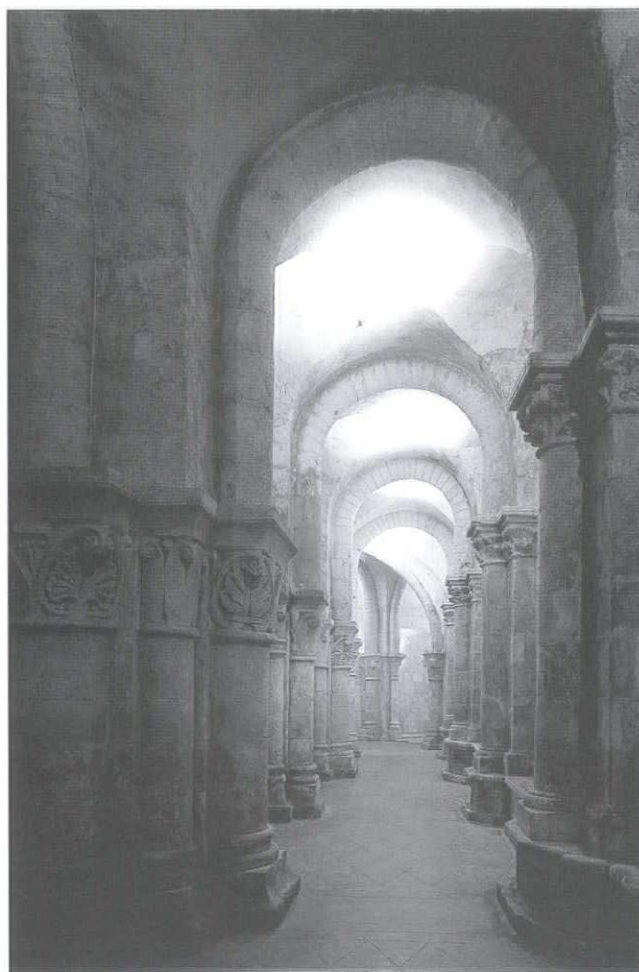


第1層クリプト後陣をみる

サン・トートローブ教会
Eglise Saint Eutrope

14

現在の建築は1096年ごろに完成した部分が中心となっている。建築当初は長い身廊と交差部以降が半層ずつずれて上下に分かれる構成であった。現在は身廊を失い内陣部分のみ残っているが、特に下のクリプトはオリジナルを良く残した構成と彫刻がみられる。(S)



側廊から周歩廊へ

ラ・ソーヴ・マジョール
La Sauve Majeure

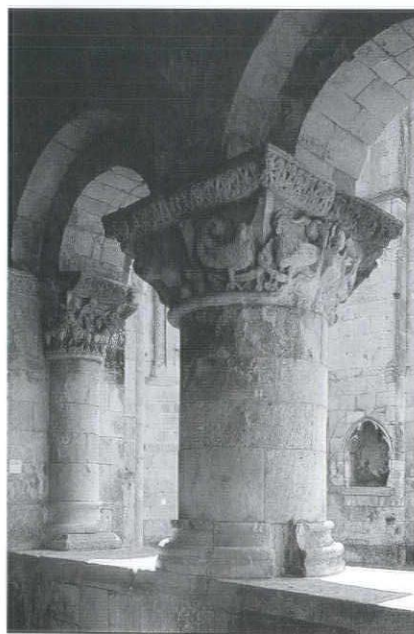
サン・ジェラルール修道院
Ancienne Abbatiale Saint Gérard

15

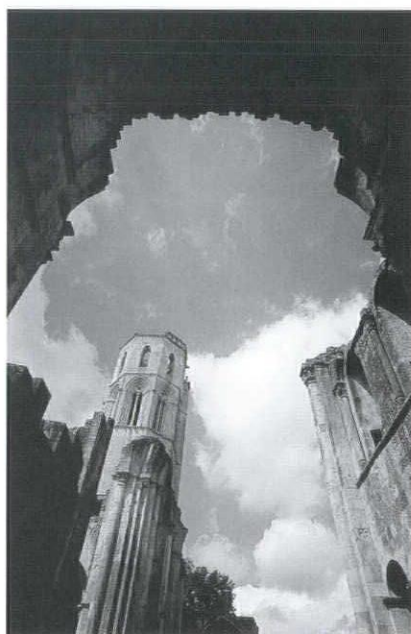
1080年から1083年ごろ、および1180年ごろから1231年に建設。ポワトールの豊かさとベリゴールの厳格さを兼ね備えた大修道院の廃墟。ベネディクト派の典型的なプランを持つ修道院で、空間構成もバジリカ形式の教会と中庭を中心とする諸施設がコンパクトにまとまった平面形に配置される。旧約聖書、新約聖書、架空の動物、植物などの題材による柱頭彫刻が素晴らしい。(S)



入口より身廊の軸線をみる



内陣柱頭彫刻



後陣ドーム部分より、身廊方向を見上げる

route de Tours

15

田窪恭治

パリのサン・ラザール駅で北フランス・カン行きの切符を買い、「GRANDE LIGNE (グランド・リーニエ)」のホームに出ると頭上に取りつけられている「DEPART」の黒い掲示板がバタバタ音を立てて変わり、行き先とホームの番線を知らせる。カン行きはたいがい16番〜25番から出発する。私はカンで降りてさらに30 km南に下ったフェレーズという小さな町に住んでいた。この町のそばにあるロマネスクの小さな礼拝堂を再生するために、この町に家族とともに10年間住んでいたからである。

その仕事のため、カン〜パリを何度も往復した。ノルマンディー方面にはTGVは通っていないものの、いまはカン〜パリを1時間45分足らずで結ぶノンストップの特急が走っている。しかし私は途中2、3駅停まる急行の方が好きだった。四季折々に変わる、のどかでゆったりとした風景を見つめながら、私は電車の中で礼拝堂の尖塔はどんな形にしようか、屋根のガラス瓦の色の配分はどうしようか、扉の取っ手は……などその時々いろいろなことを考えたり、メモったりするために、電車の中の空間と時間は私にとって大切なものだった。ふと気がつくや電車の外に広がるノルマンディーの風景の中に、10km間隔くらいで、ひとつまたひとつと小さなロマネスクの村の教会が、近づいては消えて行く。鐘楼の屋根の形に多少の違いはあるものの、それらは何の変哲もない教会たちだ。外壁は「カンの石」と呼ばれる少しページュがかった柔らかい石が使われていて、ノルマンディーの田園風景によく似合っている、いわゆるノルマンディー・ロマネスクだ。中に入ってみると手仕事の良さを活かした非対称の壁や柱、ノミの跡が残る床の石にくりぬかれた窓から射し込んできた光が融合して、しっとりとした空気が全体を包む。

私がノルマンディーの田舎で見て歩いた教会は、11世紀から16世紀までに建てられたもので、今は廃墟化し、現在まで置き去りにされてきたものも多い。もちろん使用されている教会もあるが、それらは資金的理由のせいか、中途半端な解釈によってつくり直されているため、内部の祭壇画や壁画からステンドグラスや鐘楼の形、果ては雨漏りから救うための目的で無神経に塗り込められた外壁などを見ると、全体が醜悪に見える。過去の人々によって生み出されたものが時と共に崩れ、再び後世の人々によって手が増えられる場合には、あくまでもその特定の場所や性質を持つ建物の側から選ばれた人々の手によって、つくり直されるべきである。なぜならば、政治的・道徳的な義務感だけで歴史的建造物を再構築する行為は、馬鹿正直な修復や復元に終わるか、あるいは根柢のない主義主張や時代の流行により、感性の鈍い芸術家の解釈や三流の職人達の手によって、昔のイメージとは程遠い姿、形につくり変えられる結果となるからである。

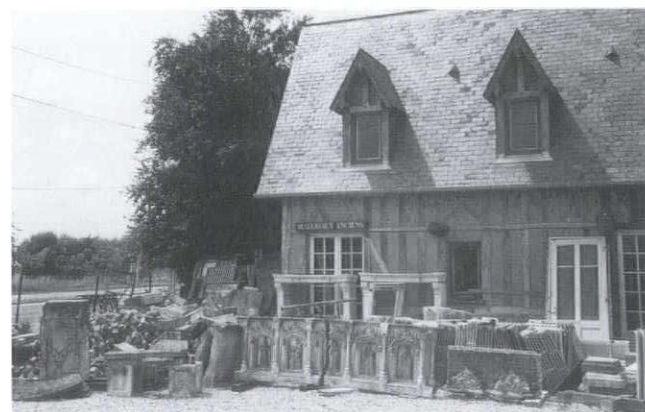
フランスでは革命以降、パンダリズムの嵐の中で文化財が破

壊され、有名無名を問わず歴史建造物が犠牲となった。そんな中で登場してきたヴィオレ・ル・デュク（1814〜1879年）という建築家がいる。彼の修復した歴史建造物の数は多く、今なおフランスのあちこちで目にすることができる。彼の仕事の特徴は、まず自分の対象とする歴史建造物を丁寧に観察した後、崩れた部分を修復しながら、さらに彼独自の表現を対象物にかぶせていくところにある。彼の仕事に対して、古典主義一辺倒の当時のアカデミックな教養人たちからの非難はもちろん、現在でも彼の評価は賛否両論に分かれる。しかし、第二次世界大戦後、急速に世界中に広がっていったスクラップ・アンド・ビルドが臨界点に達して久しい今、我々は彼の仕事を始め、18世紀末からつづく表現の社会的問題について問い直す必要があるだろう。

私はヴィオレ・ル・デュクの中世百科事典を見ながら、その成果を認めながらも改めて古いものを表現の対象として、さらに新しくつくることの難しさを感じる。そしてさらにページをめくっていくと、彼の手掛けた大聖堂や要塞都市のプランや詳細が続く中で、ノルマンディーの古い民家や当時の人々の暮らしぶりを描いたスケッチを見つけて、なんとなくほっとした気持ちになる。私はある時期、集中的にロマネスクの教会や修道院を見て歩いたことがある。しかし、なぜか立派な大聖堂よりも、農村風景の中にすっぽりと溶け込んだ、小さな礼拝堂や民家の自然な感じに目を奪われる。私は自然が好きなのである。

私の住んでいたノルマンディーの風景の中に取り残されている教会や礼拝堂は、それぞれロマネスクだらけである。今の季節、電車に乗って見える景色は、なだらかな起伏の広がる緑の畑や牧草地の中で、牛や馬や羊の群れがノンビリと寝転んだり、草を食べたりしていることだろう。そして、その横には白い花を咲かせた林檎の木が寄り添う。ノルマンディーは景色そのものが、ロマネスクなのだ。それは建物だけではない、人と自然の豊かな関係を現代にまで残している、そのことこそが、特定の地域の文化の本質でもあるからだろう。

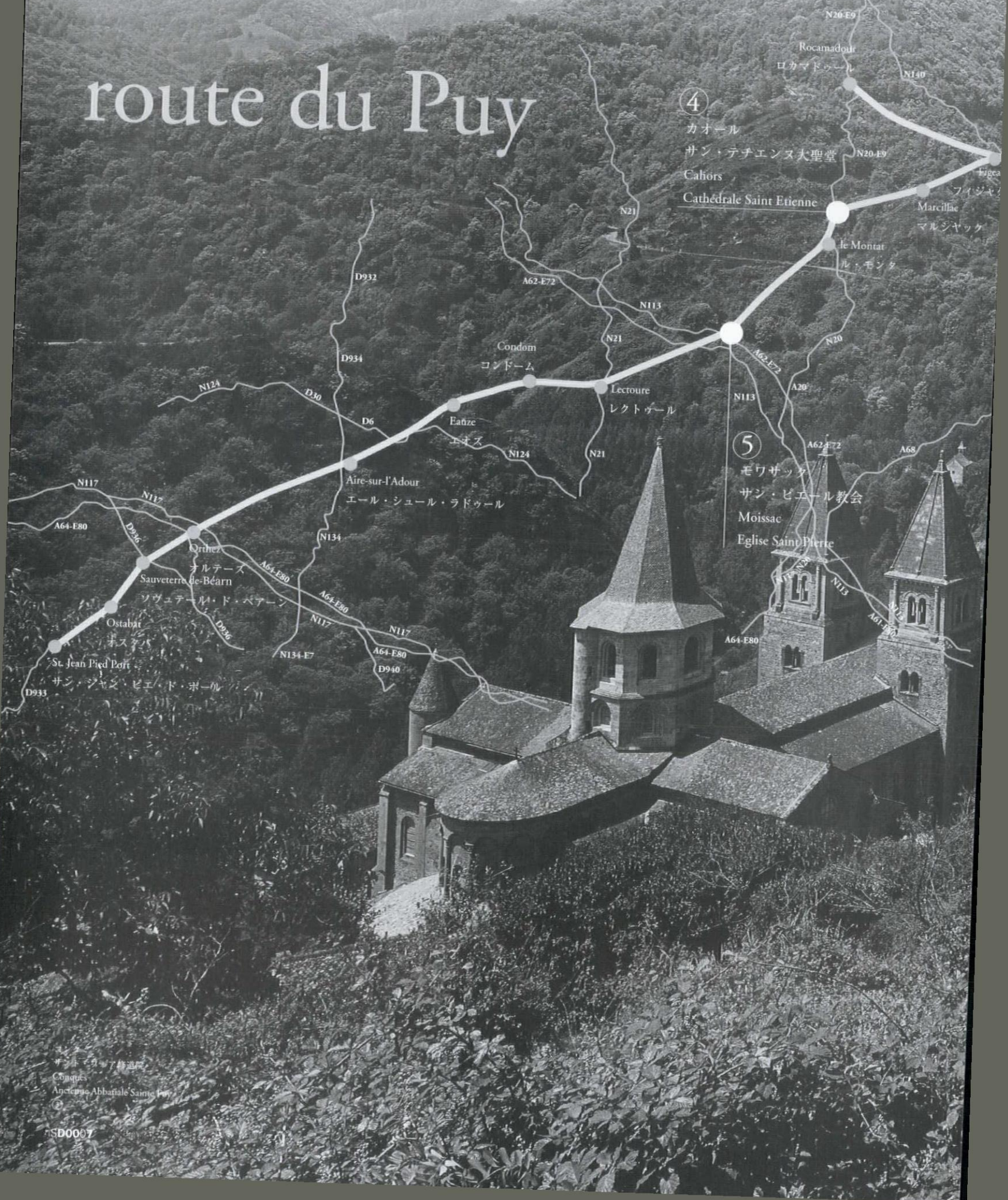
(たくほ・きょうじ／アーティスト)



古い物愛するフランスでは大きな梁や建具、屋根瓦から敷石に至るまで昔の物売の店がある

ル・ピュイ ↔ ポー

route du Puy



④

カオール

サン・テチエンス大聖堂

Cahors

Cathédrale Saint Etienne

le Montat

ル・モンタ

Le Montat

レクトール

Lectoure

レクトール

Lectoure

レクトール

Lectoure

レクトール

Lectoure

レクトール

Lectoure

レクトール

Lectoure

レクトール

Lectoure

レクトール

Lectoure

レクトール

Lectoure

レクトール

Lectoure

レクトール

Lectoure

レクトール

Lectoure

レクトール

Lectoure

レクトール

Lectoure

レクトール

Lectoure

レクトール

Lectoure

レクトール

Lectoure

レクトール

Lectoure

レクトール

Lectoure

レクトール

Lectoure

レクトール

Lectoure

⑤

モワサック

サン・ピエール教会

Moissac

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

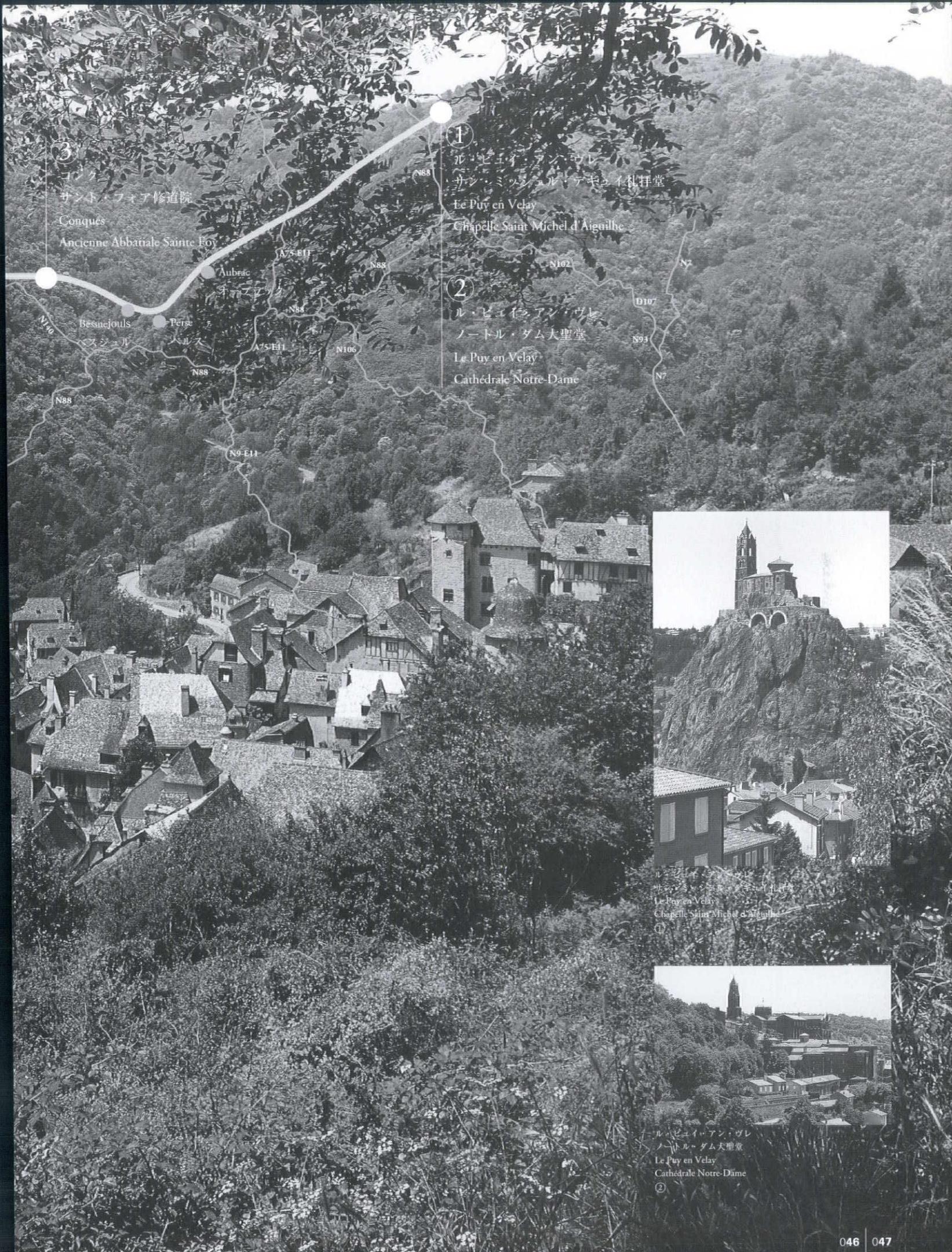
Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

Eglise Saint Pierre

サン・ピエール教会
Ancienne Abbaye Sainte Puy

SD0007



③

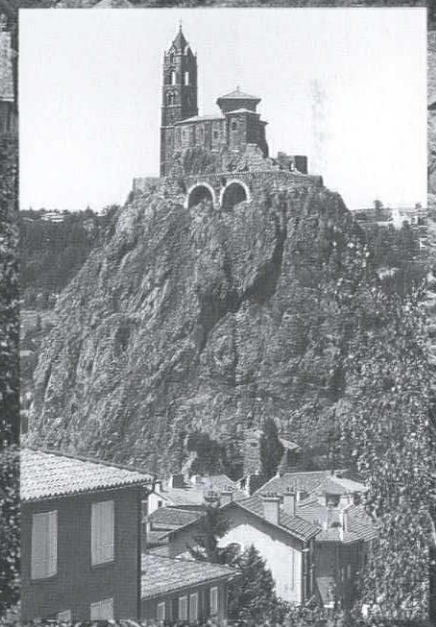
コンク
サント・フォア修道院
Conques
Ancienne Abbatiale Sainte Eoy

①

ル・ピュイ・アン・ヴレ
サン・ミッシェル・デキューイ礼拝堂
Le Puy en Velay
Chapelle Saint Michel d'Aiguille

②

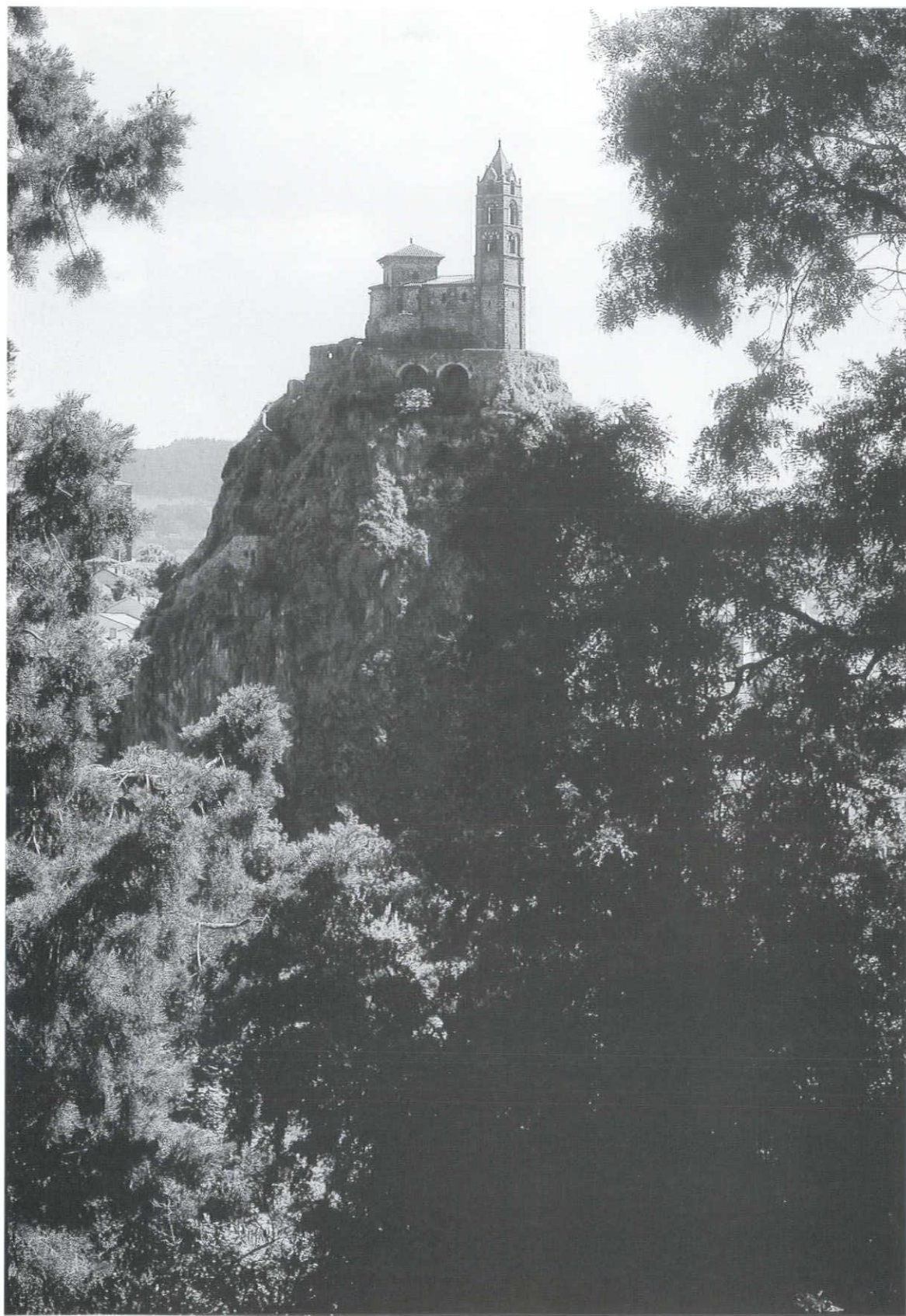
ル・ピュイ・アン・ヴレ
ノートル・ダム大聖堂
Le Puy en Velay
Cathédrale Notre-Dame



ル・ピュイ・アン・ヴレ
ノートル・ダム大聖堂
Le Puy en Velay
Chapelle Saint Michel d'Aiguille
①



ル・ピュイ・アン・ヴレ
ノートル・ダム大聖堂
Le Puy en Velay
Cathédrale Notre-Dame
②

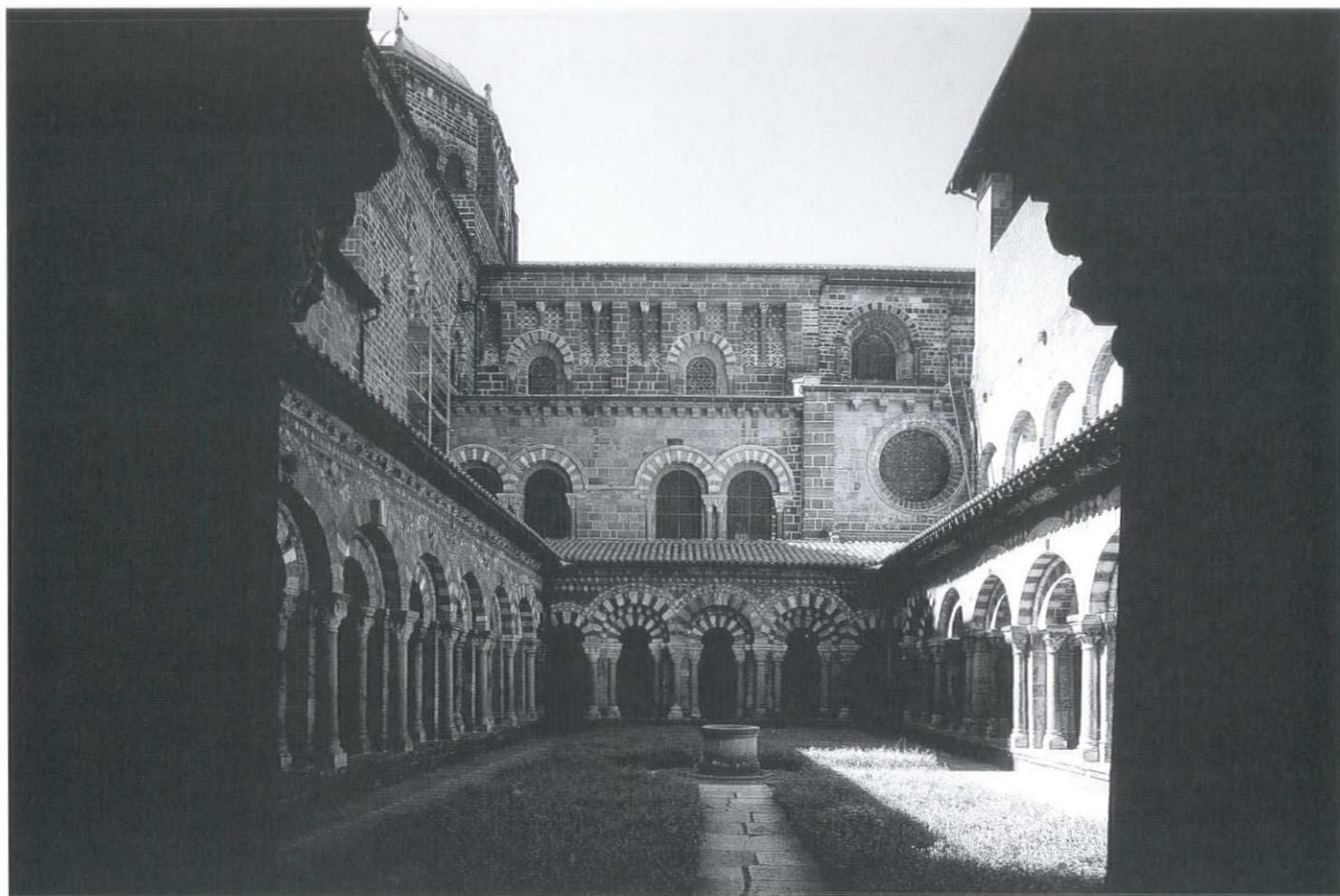


ル・ピュイ・アン・ヴレ
Le Puy en Velay

サン・ミッシェル・デギユイ礼拝堂
Chapelle Saint Michel d'Aiguilhe

①

高さ82mの切り立った岩山に建設された礼拝堂。最初の部分は、10世紀末の建設。その他は11世紀末に増築された。268段の石段を昇ってようやく辿り着く。イスラムの影響を受けた石のモザイクとビザンチン風の扉口が特徴的。(H)



ノートル・ダム大聖堂
Cathédrale Notre-Dame

②

11～12世紀に建設されたヴレー地方の建築。身廊に6個のドームが連続して架けられ、フランス・ロマネスクではもっとも例外的な建築。西正面には階段が設けられ、入口は地階にある。また、イスラム建築の影響をもっとも多く受けた教会建築でもあり、三葉アーチやゼブラ模様の迫石が特徴的。12世紀の回廊もイスラム的雰囲気を感じ出す美しい石のモザイクと彫刻が見事。屋根の軒廻りを飾るフリーズ彫刻を眺めているだけで、時が経つのを忘れてしまう。(H)



コンク
Conques

サント・フォア修道院
Ancienne Abbatiale Sainte Foy

3

ベネディクト会修道院の付属教会堂。1045年起工。巡礼路教会堂の典型例を示す。小さな村に不釣り合いな規模の教会堂であり、いかに多くの巡礼者が訪ねてきたのかを知ることができる。3世紀末に12歳の若さで殉教した聖女フォアの聖遺骨がまつられ、10世紀に製作された聖遺物箱は、宝石で飾られた聖女フォアの姿をかたどり、典礼美術史のうえで、重要な作品。西正面入口上のタンパン彫刻は、「最後の審判」をテーマとし、ロマnescu彫刻の傑作。(H)



カオール
Cahors

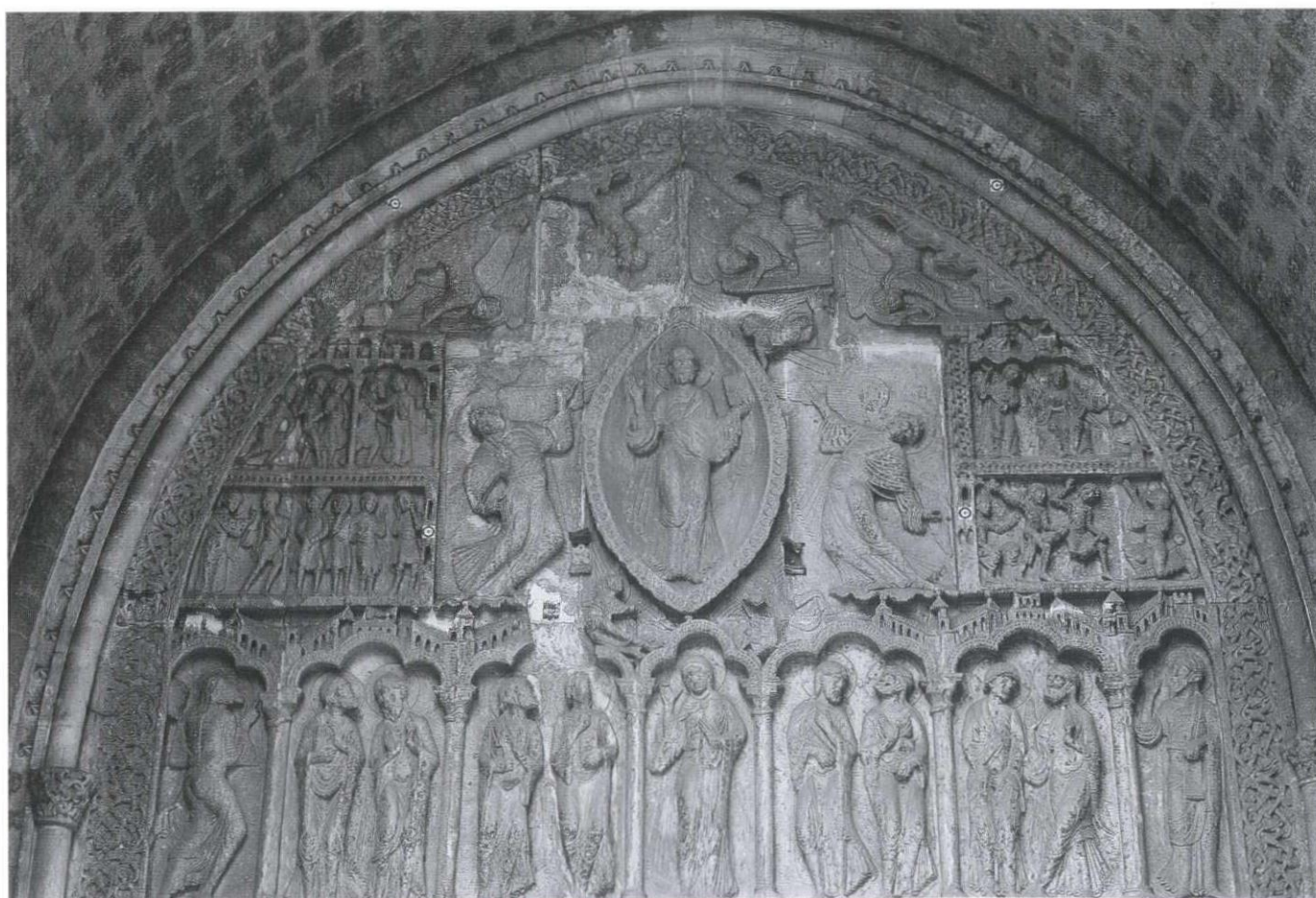
サン・テチエンス大聖堂
Cathédrale Saint Etienne

4

12世紀前半の建築。彫刻を持つ北側入り口は1150年ごろの作品で、タンパンにはキリスト昇天、使徒たちと聖母マリア、サン・テチエンスの殉教などが描かれており、モワサック派と言われる。ふたつの直径18mに及ぶ大ドームが並ぶ内観は、圧倒的な迫力を持つ。ペリゴールの教会にあるこの空間構成は、モスクにも似た一種のビザンチン風であり、方向性よりは一堂に会する求心性を感じずる構成である。(S)



街並みに浮き上がる2連ドームのシルエット



北側入口のタンパン彫刻

モワサック

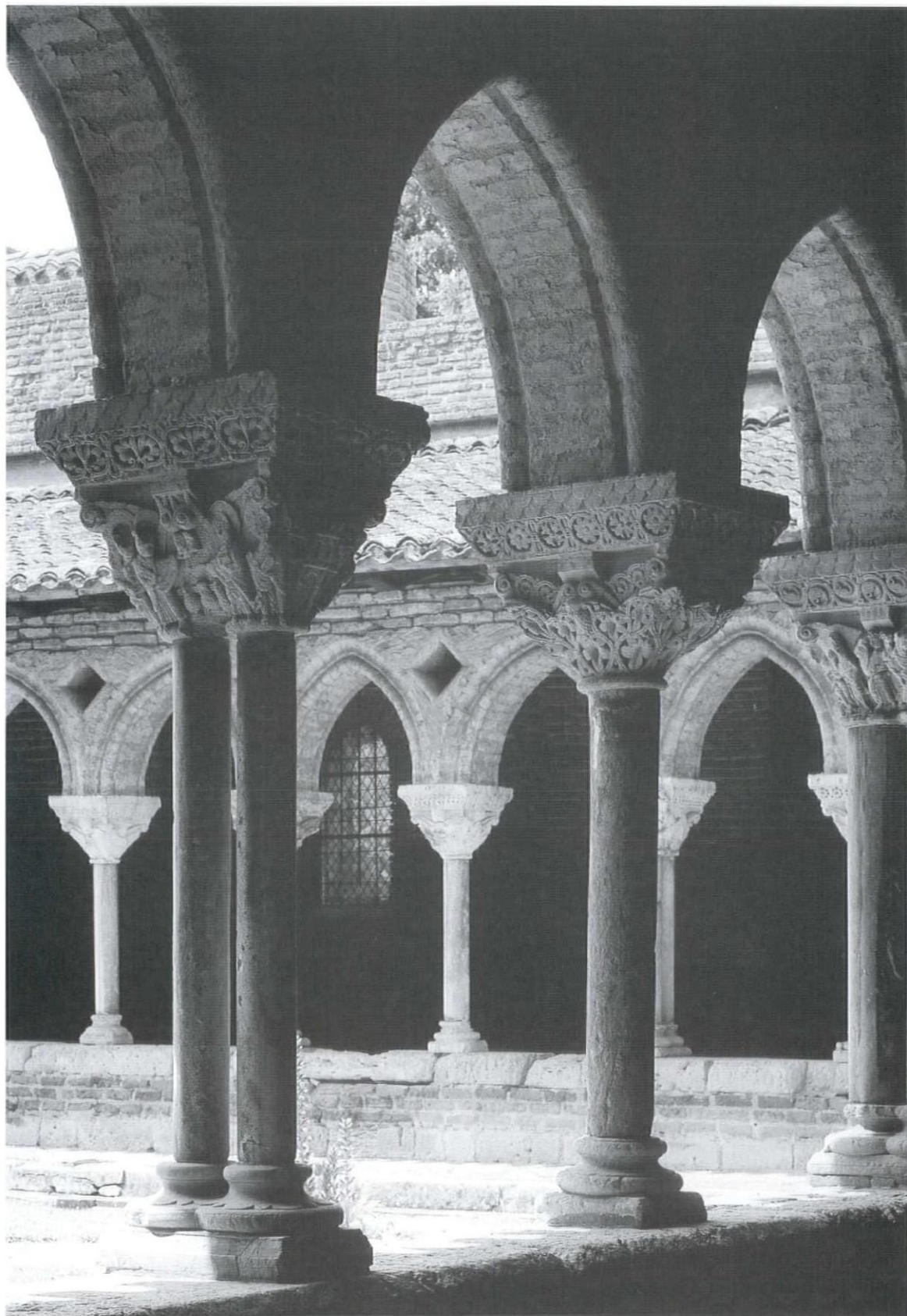
Moissac

サン・ピエール教会

Eglise Saint Pierre

5

サンチャゴ巡礼路に沿うベネディクト会修道院で、付属教会堂入り口は1120～40年。単廊式プランの室内は、かつてはドームで覆われていた。正面扉口に残されているキリストと24人の長老を描いたタンパン彫刻と預言者エレミア、聖パウロとライオンが彫られた中央柱はロマネスク彫刻の傑作。そして、1100～20年ごろに建てられた回廊は、フランスでもっとも美しい回廊のひとつ。軽快なアーチのリズミカルな柱列に囲まれた明るい中庭空間は、別世界ににいるような錯覚を起こさせるほど瞑想的である。(H)



山田 健

時は1305年、フランス王フィリップ4世は、ローマ教会を自らの膝下におさめることを決意、ローマの枢機卿会議に介入して、ボルドーの枢機卿ベルトラン・ド・ゴートを、次期ローマ法王に選出させた。

こうしてクレメンス5世となったベルトラン・ド・ゴートは、あろうことか、1309年に、法王庁を、ローマからアヴィニオンに移してしまう。

歴史の教科書で誰もが習う、「法王のアヴィニオン虜囚」がこれなのだが、その実態は、「虜囚」どころではなかった。教会へのフランスの影響力を、いっそう強めるために、自らの意志で移ったのだ。当然、アヴィニオンの豪華な宮殿での生活は、贅沢三昧を極めていたと伝えられている。

なぜ、こんな話から始めたかという、今回の特集で話題になっている、フランスからスペインのサン・チャゴ・デ・コンボステラへの巡礼を奨励したのが、まさにこのクレメンス5世だったからにはほかならない。

ようするにクレメンス5世は、ローマ

への巡礼者をできるだけ減らすために、もうひとつ別の聖地を用意した、ということなのだ。

そして、この宣伝方針は、彼の後を継いでアヴィニオンに住んだ6人のフランス人法王にも引き継がれたため、驚くほどの成功をおさめた。

現在でも、この巡礼路には、バックパックをかついだ、ちょっと見にはハイキングの観光客みたいにししか見えない巡礼者たちが、ひきもきらずに歩いている。まさに、宣伝の力、恐るべし、である。

ちなみに、このクレメンス5世と、彼につづく法王たちは、ふたつの名ワインに関係している。

ひとつは、クレメンス5世が、ベルトラン・ド・ゴート時代にボルドーに所有していた葡萄園で、ここは現在「シャトー・パプ・クレマン」、つまり「クレマン法王」という名のシャトーになっている。ボルドーのグラヴ地区を代表する名シャトーのひとつで、パリ発の巡礼なら、ここに立ち寄ることもできるだろう。

もうひとつは、彼のあとを継いだクレ

メンス6世が、夏の別荘用に築いた城「シャトーヌフ・デュ・パプ」つまり「法王の新城」のまわりに（自分の食卓に欠けている高級酒をつくるためだけに）開墾させた、石ころだらけの葡萄園からのワインである。城のほうは今では廃墟になってしまっているが、ワインは、その後も発展をつづけ、城の名にちなんだ「シャトーヌフ・デュ・パプ」という原産地呼称名で、世界中で人気を博している。穏やかさと力強さをあわせもった不思議に魅力的なワインで、地元でとれた野鹿や野鴨などの野生の肉料理と、驚くほどの相性を発揮する。

ワインの味というものは、基本的にその地方の料理と一緒に発展してきたものだから、代々の法王たちは、きっと、そういう獣肉料理にあわせて、「シャトーヌフ・デュ・パプ」を楽しんでいたに違いない。聖職者が、そんな殺生を重ねるような食事をしていていいのかね、と首をかしげたくなるのは、ほくだけだろうか。

ついでにいっておくと、巡礼の目的地のサン・チャゴ・デ・コンボステラの



シャトー・パプ・クレマン

あたりは、「リアス・バイシャス」という、スペイン最高の白ワインの産地である。みずみずしさと深みをあわせもった、素晴らしく心地よいワインだ。大西洋の新鮮な魚介とあわせれば、非常に幸せなひとときを過ごすことができるだろう。

さて、いま話に出た3つの教会関係地が、いずれも優れたワイン産地だというのは、決して偶然ではない。

フランスの、というか、ヨーロッパのワイン産地が、もともとキリスト教と密接に結びついていたということは、いまさら言うまでもないことだが、この関係が特に密接になり、今日の「銘醸地」の基礎が築かれたのが、まさにロマネスク時代、つまりクレメンス5世の登場にいたる2～3世紀間の出来事だったのである。

その担い手こそ「シトー派修道会」の修道僧たちにはかならなかった。

シトー派は、11世紀末に、ベネディクト派から派生した修道会である。ベネディクト派は、9～10世紀にかけて隆盛した修道会で、農奴を解放し、小作農と

することで、農民の労働意欲を飛躍的に高め、ヨーロッパ経済をかつてないほどに潤沢にした。

しかし、その方針は、わずか200年で行きづまってしまう。豊かさが、そのまま人口増加を生み、肝心の土地が足りなくなってしまうのだ。そこに登場したのがシトー派だったのである。

この新しい会派は、「勤勉」にプラスして「農業」をモットーとした。そして、その農業を振興するための労働力として、「第二修道会」という画期的ともいえる組織を創造したのである。ようするに、人口増加で、土地と職からあぶれた大量の若者たちを修道僧として迎え入れ、面倒な文字を教育するかわりに、「勤勉な労働」だけで天国への鍵が手にはいるのだという、新しい教義を教えこんだのだ。

皮肉な見方をすれば、新しい形の農奴制の復活ともいえるのだが、しかし、これほどモチベーションの高い「農奴」は、人類史上存在しなかったといっている。

この新しい労働力を使って、シトー会は、ヨーロッパ中の、従来不毛だった土

地を、次々に伐り開いていった。

ブルゴーニュの多くの「特級畑」が開かれたのも、まさにこの時代のことである。当初、ブルゴーニュのシトー派修道院は、丘の下の方の平地にあって、葡萄園も、その周辺に広がっていたのだが、間もなく彼らは、丘の中腹の斜面のほうが、はるかに品質の高いワインを生み出すことに気がついた。こうして最初に開かれたのが、現在「クロ・ド・ヴージュ」として知られている特級畑である。

さらに彼らは、畑のちょっとした条件の違いにも目をつけ、あそこの区画が一番で、こっちは二番だ、などという、今日の「格付け」に近い分類を始めたり、あるいは、樽に寝かすと味が向上するという、「熟成」の原理を発見するなど、ワイン史に残る「技術革新」をなしとげていく。

こうしてワインは、それまでの単に葡萄汁が発酵しただけの飲み物から、「液体の芸術品」へと、みごとに変貌を遂げていくことになるのである。

今日の我々の目からすると、こういう



シャトーヌフ・デュ・パブの葡萄園と城館

偉大な名酒の「味」にこだわるのは、官能的な快楽の追求以外のなにものでもないように思われるのだが、他のことでは、あきらめるほどにストイックなシトー派の修道僧たちが、ことワインに関する限り、これほどまでにこだわったのは、キリストの血たるワインを、より一層の高みに引き上げたかったからなのではない。

もっとも、うますぎるワインというものは、残念ながら、当然そんなに道徳的なものであるはずもなく、時代が下るにつれて、世俗的な快楽の泉へと変化していつてしまうのだけれど……。

さて、それはそれとして、シトー派以降、キリスト教の修道僧たちは、会派の違いをこえて、ワインの質に磨きをかける伝統ができあがっていく。例えば、17世紀にシャンパンをつくったとされているドン・ペリニオンがベネディクト派の修道僧だったことなどは、特に有名である。

そういうわけで、今回、巡礼してめぐることになる数々のロマネスク時代の教会の周辺は、基本的に名酒の産地であり、名酒には必ず名物料理がついてまわ

るので、うまいものの産地でもある、という構図がなりたつのである。

さあ、ここからは、純然たる観光案内である。

まずブルゴーニュ。ここでワインを選ぶときには、畑だけでなく、醸造元にも注意しなければならない。シトー派にちなんで、クロ・ド・ヴージュのワインを注文するのもいいのだが、この50ヘクタールほどの畑は、フランス革命の際に小さな農家に分割して払い下げられたものが、その後の相続で、さらに細切れに細分化されてしまったため、いまでは80人以上の農家に分割所有されている。この80人が、全部立派な醸造家なら、なんの問題もないのだけれど、当然そんなことはありえない。同様のことが、他のほとんどの有名畑にもいえるのだ。

レストランで注文するときには、必ずソムリエさんに、「どこの醸造元が、おすすめですか」と聞くのを、忘れないようにしたい。

名物料理は、いろいろあるが、「コッ

ク・オ・ヴァン」、つまり「雄鶏の赤ワイン煮」は、ぜひ試しておきたい。地元の赤ワインで煮込んでいるのだから、地元の赤と合わないわけがないのである。ちなみに、修道会の規則の食事の項に「四足獣の肉は、これを禁ず」という一条があるので、鶏肉は、最高の贅沢品ということになる。コック・オ・ヴァンが名物になったのには、そんな背景もあったのだろう。

さて、ブルゴーニュから西にとんで、ニベルネを通り、リモージュにいたる巡礼路は、実はワインそのものではなく、ワイン樽のためのオークの木の大産地である。ニベルネ周辺では、アリエールやヌヴェールの森などが有名だが、なかでもトロンセの森は美しい。

もともと、ルイ14世の宰相コルベールが、フランス艦隊の帆柱をとるために国営化したフランスで最初の国営林で、すっとまっすぐに伸びた、みごとに太いオークが、雄姿をうかがっている。

焼き物で有名なりモージュの周辺に広がるリムーザンの森のオークは、ワイン



クロ・ド・ヴージュのシャトー



かつてのサン・ヴィヴァン修道院（ブルゴーニュ地方）の地下にあるロマネ・コンティの樽蔵

ではなく、コニャックの樽材として知られている。コニャックに特有の、あの深い琥珀色と、甘く華やかな熟成香は、リムーザン・オークなしには、得られないものである。

リモージュからペリグーを抜けたあたりから、再び巡礼者は、ワイン産地のまんなかに入り込む。ごくおおざっぱに「フランス南西部」と呼ばれている産地がここで、パリ発以外の3つの巡礼路は、すべてこの地方を通る。ワインとしては、濃厚で果実味豊かなカオールの赤、戯曲の「シラノ・ド・ベルジュラック」でやたらに有名なため、ワインの名前がかすんでしまいそうで可哀相なベルジュラック（ワインの風味は、小振りのボルドーだと思っておけばいい）、気楽な甘口のモンパジャックなどがある。いずれも手頃な値段で旅の気分を満喫させてくれる、なかなかの名酒である。

この地方には、ただし、ワイン以上に有名なものがふたつある。フォアグラとトリュフだ。

世界の三珍味のうちのふたつとされる

この高級食材は、もちろんフランスの他の地方でもとれるのだが、最上のは、この南西部からのものだとされている。

最近のうれしい傾向として、フランスの田舎のレストランは、ますますおいしくなっている。驚くほど美味なフォアグラ料理、トリュフ料理を楽しめるはずだ。

さて、いまいった3つの巡礼路のうち、ル・ピュイ発の道は、美食という意味では、南西部のカオールがクライマックスになるだけだが、アルル発のほうは、まさに美食街道だと言ってい

ても、この道は、ブルゴーニュ発の巡礼者が選ぶ選択肢のひとつでもあるわけで、その場合、彼らは、ブルゴーニュの美酒を飲み尽くし、パリに勝るとも劣らない美食のセンターであるリヨンの街で飽食の限りを尽くし、さらにローズの名酒の数々を飲みながら、ローヌ河ぞいに南下して、アヴィニオンで、かつての法王たちの豪華な宴席を忍んだ末に、アルルに到着することになる。

すでに、ゲップがでそうな話だが、幸

いなことに、ここで料理が、肉主体のものから、地中海の新鮮な海の幸中心に切り替わる。ワインもラングドック・ルーション地方の、フレッシュで果実味たっぷりのタイプのものになるので、ほっと一息つけるというものなのだ。

この道も、さきほどの南西部を通るのだが、その先に、今度はアルマニャック地方が待ち受けている。コニャックと双壁とされている、素晴らしいブランデーの名産地である。

ここでは、ぜひ自分の生まれ年のアルマニャックを一杯飲んでいきたい。コニャックは、つい最近までヴィンテージ、つまり葡萄の収穫年の表示が許されていなかったのだが、アルマニャックのほうは、早くから、ヴィンテージものを売りにしてきた。このため、そこそこのレストランでも、しばしば1900年代初頭からのヴィンテージものが、ずらりと並んでいるのである。ワインと違って、どんなに古いものでも、グラス一杯から頼めるので、お値段のほうも、そんなに心配することはない。



ロワール流域に典型的な穴蔵を利用したワイン醸造庫



穴蔵を利用したロワール地方の樽熟庫

そして、パリ発の最後の巡礼路である。

この道で、最初に出会う美食の町が、トゥールである。かの大食漢の巨人ガルガンチュアを創造した詩人フランソワ・ラブレは、この町のすぐ近くで生まれた。大食漢にふさわしく、このロワール河流域のワインは、フランスでも、最も味わいのバラエティにとんでおり、人を飽きさせない。

上流から、ハーブと柑橘類の香りが爽やかな辛口白ワインの「サンセル」と「ブイ・フュメ」、辛口から甘口までのすべてがそろっている「ブーブレ」の白ワイン、ほどよいコクで品のある赤ワインの「シノン」と「ブルゲイユ」、スパークリングワインで有名な「ソーミュール」、フルーティなロゼワインの「ロゼ・ダンジュ」、軽やかな辛口の白「ミュスカデ」……と、枚挙にいとまがない。

河沿いに点々と現れては消える、中世の美しい古城をながめながら、土地土地の個性的なワインを飲む旅は、忘れがたいものになるだろう。すぐそこの河でとれた、川魚をつかった料理も、なかなか

オツなものである。

このあと、巡礼路は、フランス最高のブランドー産地であるコニャック地方を横目に見つつ、ついにボルドー地方に入る。

言うまでもなく、ボルドーこそが、フランスワインの最大の聖地である。ここでは、シャトーという言葉も、単に「城」という意味ではなく、「自家葡萄園をもつ醸造所」という意味になる。

そのシャトーが、文字通り数千もあるのだから、それをひとつひとつ回ってやろうなどという、無謀なことは、やめておいたほうがいい。

冒頭に話にでた、グラヴ地区のシャトー・パプ・クレマンを訪ねるのもいいが、ここではむしろ、サンテミリオン地区をおすすめしたい。

サンテミリオンは、もともとブルターニュからサン・チャゴ・デ・コンポステラへ向かう巡礼者たちをもてなす街として栄えた所で、今も、そうした宗教的雰囲気の色濃く残している。ワインは赤ばかりだが、しっかりとしたコクを特長とするボルドーのなかでは、最も親しみ

やすいタイプで、しかも十分に長寿である。できれば、60年代、70年代のものを試されたい。もちろん、お値段もそれなりのものになるが、日本にいては、なかなか味わえない感動に出会えることだろう。

そして、いよいよ4つの巡礼路が、ピレネー山脈の中で合流する。

ここは、言うまでもなくバスク人たちの土地である。バスクは、ヨーロッパで最高の羊飼いとして知られる民族なので、当然ここには、素晴らしい羊料理がある。ただし、彼らが、好んで客に饗したがる「仔羊の丸焼き」は、普通の日本人の胃には重すぎる。

どうかすると、3日くらい、肉の顔を見たくなくなることがあるくらいだ。

もっとも、それは、ほくのように車で移動している軟弱者だけの話で、フランスの半分を自らの足で歩きとおしたような、巡礼者の強靱な胃袋には、あのくらいに重たい料理が、ちょうどいいのかもしれない。

(やまだ・たけし／ワイン・ライター)



サンテミリオンの街



地中海名物のフイアベース

アルル⇔サン・ジル⇔ハカ

10

ロピタル・サン・ブレース
サン・ブレース教会
L'Hôpital-Saint Blaise
Eglise Saint Blaise

9

オロロン・サント・マリー
サント・マリー大聖堂
Oloron-Sainte Marie
Ancienne Cathedrale Sainte Marie

Col du Somport
ゴル・デュ・リンポール

A64-E80

N117

Lacommande

ラコマンド

D936

Lescar

レスカール

Morlaàs

モルラス

Pau

ポー

N134

D940

N117

N117

N117

N117

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

N21

Jaca

ハカ

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N330

N124

N21

Auch

オーシュ

4

トゥールーズ
サン・セルナン聖堂
Toulouse
Basilique Saint Sernin

Pibrac

ピブラック

N20

N117

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

N113

5

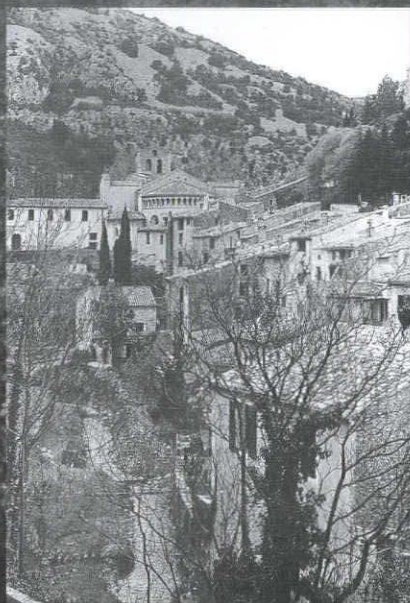
ヴァルカブレール
サン・ユスト・エ・パストール教会
Valcabrère
Eglise Saint Just et Pastor

6

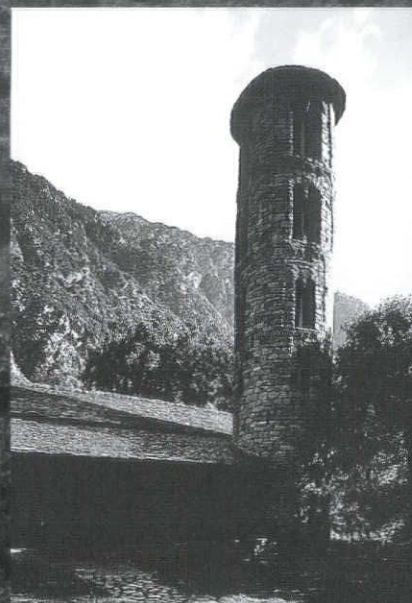
サン・ベルトラン・ド・コマンジュ
ノートル・ダム大聖堂
Saint Bertrand-de-Comminges
Ancienne Cathedrale Notre-Dame

7

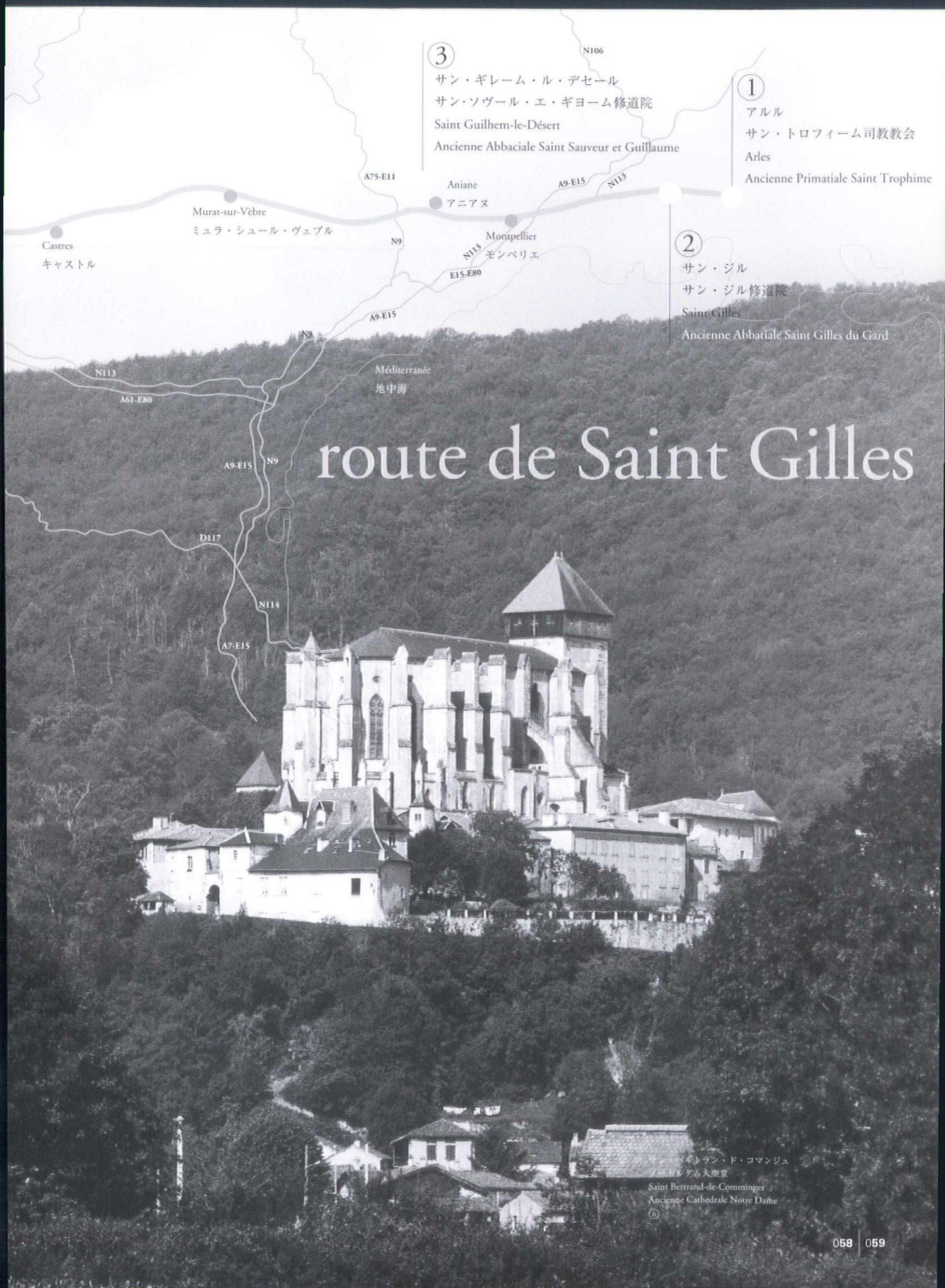
サン・タヴァンタン
サン・タヴァンタン教会
Saint Avenin
Eglise Saint Avenin



サン・ギレーム・ル・デセル
サン・ソヴール・エ・ギローム修道院
Saint Guilhem le Désert
Ancienne Abbaye Saint Sauveur et Guillaume
①



アンドラ
サンタ・コロマ
Andorra
Santa Coloma
(フランスとスペインの国境上にある小さな国)



③

サン・ギレーム・ル・デセール
サン・ソヴール・エ・ギヨーム修道院
Saint Guilhem-le-Désert
Ancienne Abbaciae Saint Sauveur et Guillaume

①

アルル
サン・トロフィーム司教教会
Arles
Ancienne Primatiale Saint Trophime

②

サン・ジル
サン・ジル修道院
Saint Gilles
Ancienne Abbatiale Saint Gilles du Gard

route de Saint Gilles

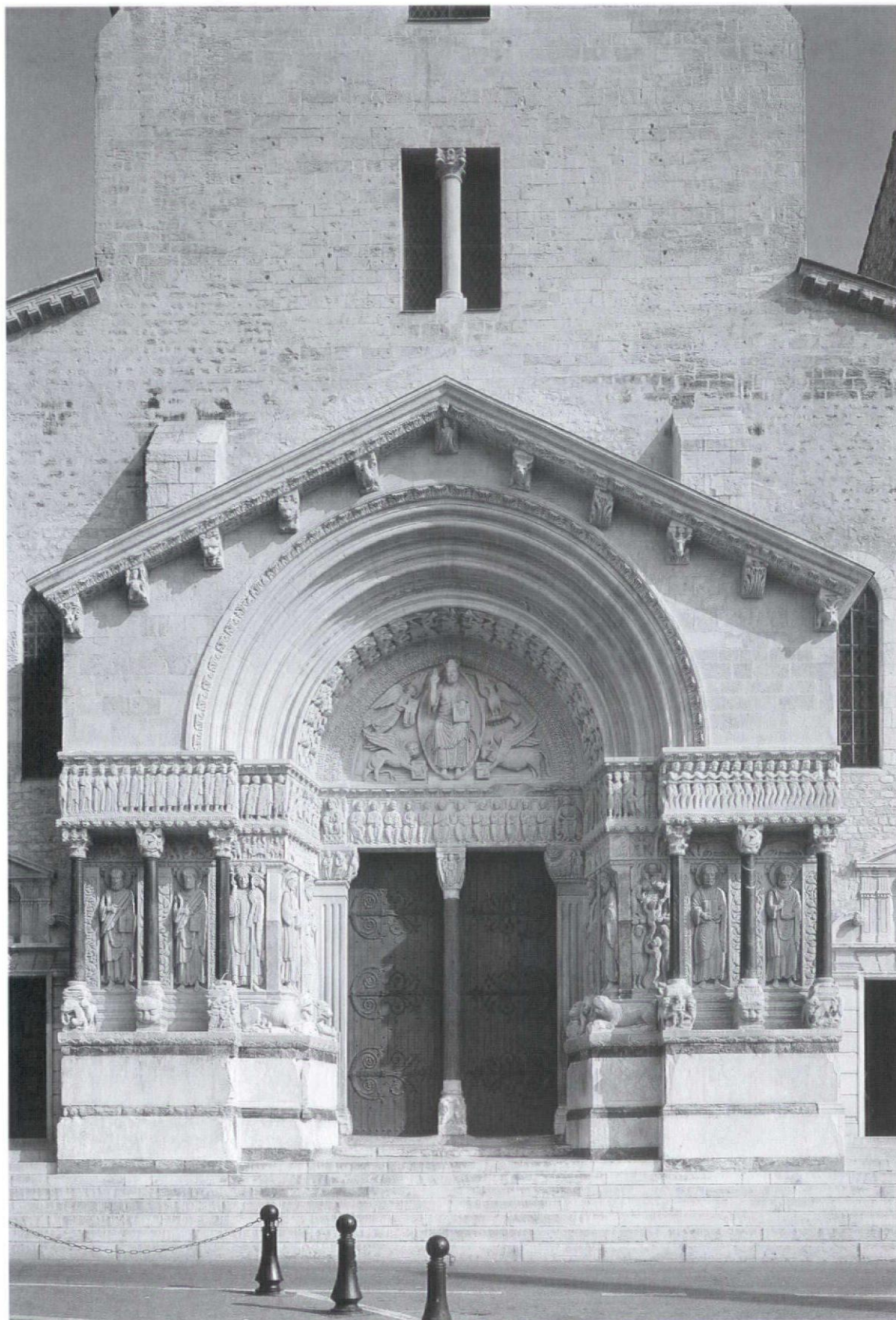
サン・ベリラン・ド・コマンジュ
ノートルダム大聖堂
Saint Bertrand-de-Comminges
Ancienne Cathedrale Notre Dame
⑥

アルル
Arles

サン・トロフィーム大司教教会
Ancienne Primatiale Saint Trophime

①

11～12世紀。古代ローマの影が色濃く残るプロヴァンス派の代表的教会堂で、西正面の「最後の審判」を描いた彫刻はプロヴァンス・ロマネスクの代表例のひとつ。プロヴァンス地方独特のロンバルド帯で飾られた鐘塔は12世紀末の作品。付属の回廊は1150年ごろ起工し、14世紀に完成。ファサードの彫刻と同時に、回廊の柱頭彫刻と角部のレリーフ彫刻は必見に値する。(H)





サン・ジル

Saint Gilles

サン・ジル修道院

Ancienne Abbatiale Saint Gilles du Gard

2

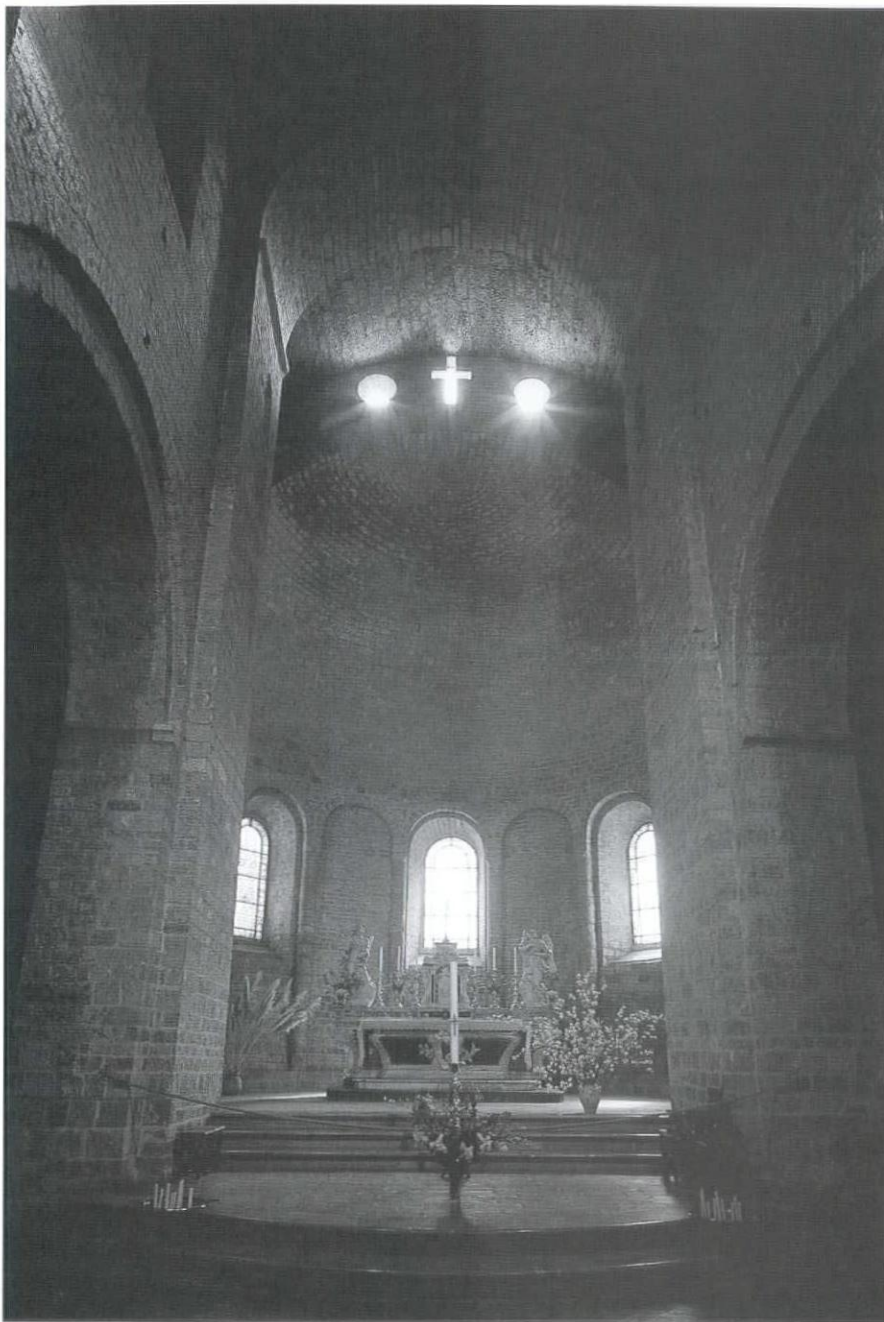
ベネディクト会修道院。1180～1240年にかけてつくられた付属教会堂西正面の彫刻は、トゥールーズの彫刻家たちによって彫られた中央扉口と、イル・ド・フランスと地元の彫刻家たちによる両脇の扉口で構成される。異なる地方の彫刻家の作品ながら、全体的に素晴らしいアンサンブルを奏でている。(H)

サン・ギレーム・ル・デセール
Saint Guilhem-le-Désert

サン・ソヴール・
エ・ギヨーム修道院
Ancienne Abbatale
Saint Sauveur et Guillaume

3

ベネディクト会の修道院。キリストが磔にされた十字架の断片があったということで、巡礼者の目標とされた。付属教会堂は11～12世紀に建てられたもので、簡素で開口部の少ないラングドック・ロマネスクの建築的特徴を示している。付属回廊は、12～13世紀の建造。現在は廃墟だが、かつては2階建てだった。(H)



初期ロマネスクの彫塑的空間

3
route de Saint Gilles
6



村や景観と一体化した均質な石の構築物

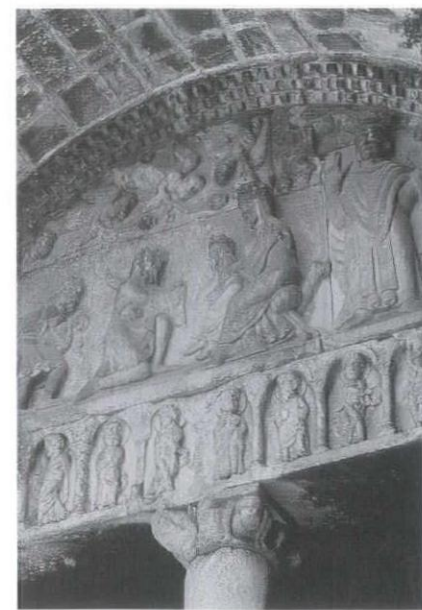


サン・ペルトラン・
ド・コマンジュ
Saint Bertrand-de-Comminge

ノートル・ダム大聖堂
Ancienne Cathédrale Notre Dame

6

11世紀終りから12世紀前半の建築。中世丘の街の頂点にあって遠方から際立った外観をみせる。中庭西側の人物柱は地中海世界の影響が濃い古代風の表現を守り、ヴァルカブレールの入り口両側にある彫刻と類似する。(S)



入口タンパン彫刻の右に描かれているのがサン・ペルトラン



後背部に放射状に展開する礼拝室群

トゥールーズ

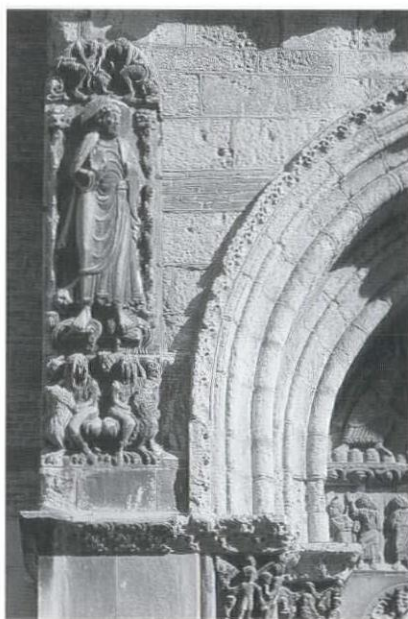
Toulouse

サン・セルナン聖堂

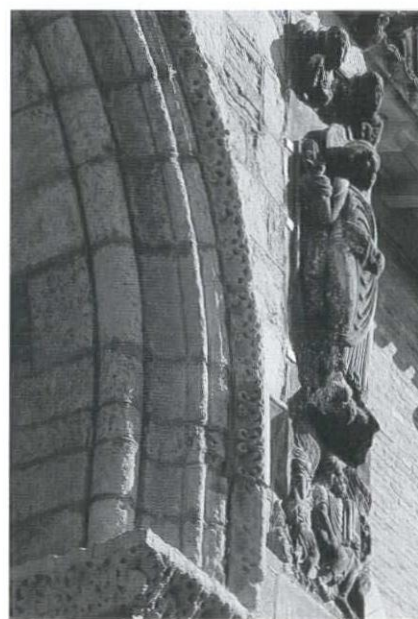
Basilique Saint Sernin

④

ロマネスクの部分は1080年ころから12世紀前半に建設。多くの部分がその後の後補になるもの。現存する最大のロマネスク教会であり、発達した後陣構成による完成された巡礼教会としての形式をもつ。多くのロマネスク彫刻が残っており、ミエジュアンの門と呼ばれる南側入り口は1090年ごろの作品として貴重な存在。(S)



ミエジュアンの門 詳細



④

route de Saint Gilles



ヴァルカブレール
Valcabrère

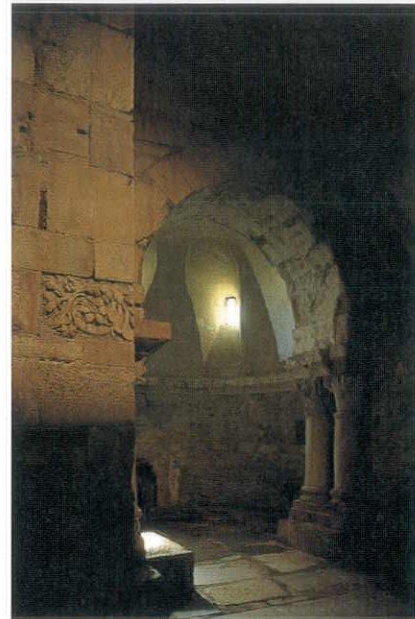
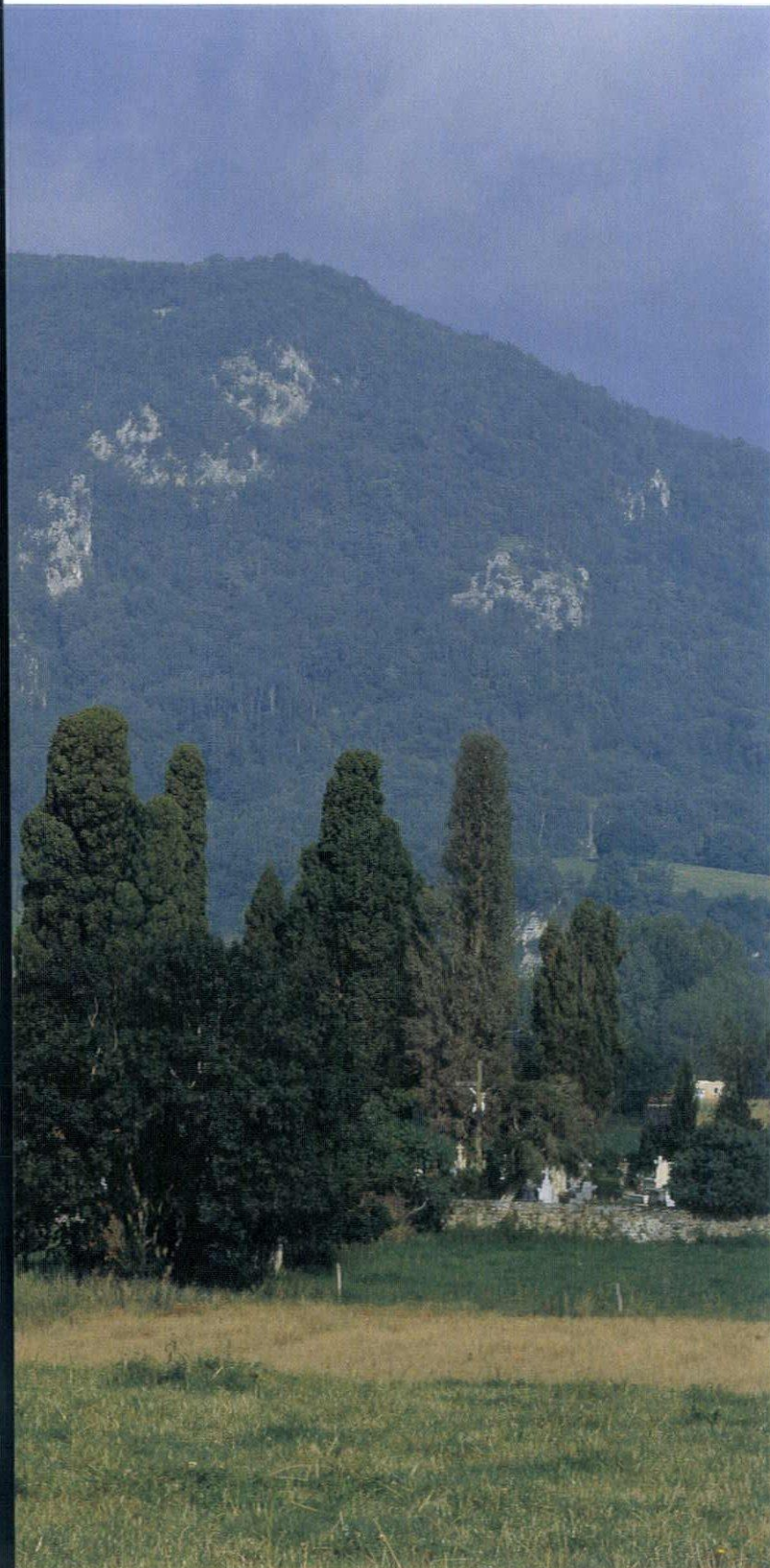
サン・ジュスト・エ・パストール教会
Eglise Saint Just et Pastor

5

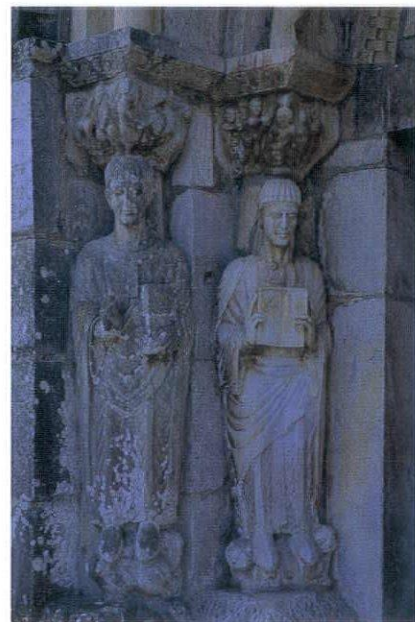
11世紀の中ごろに建設。ローマ時代には墓地であった土地に建てられた古代風教会。丘の上のサン・ベルトラン・ド・コマンジュを間近に見る。そこここに見られる彫刻の断片はローマ時代の遺跡から再利用された部品である。入り口の人物柱も古代風の古典的造型感覚を持つ作品。(S)



ローマ時代には丘を中心とし、数々の公共施設をもつ都市が展開していた



壁に埋められた彫刻断片はローマ起源のもの



サン・タヴァンタン

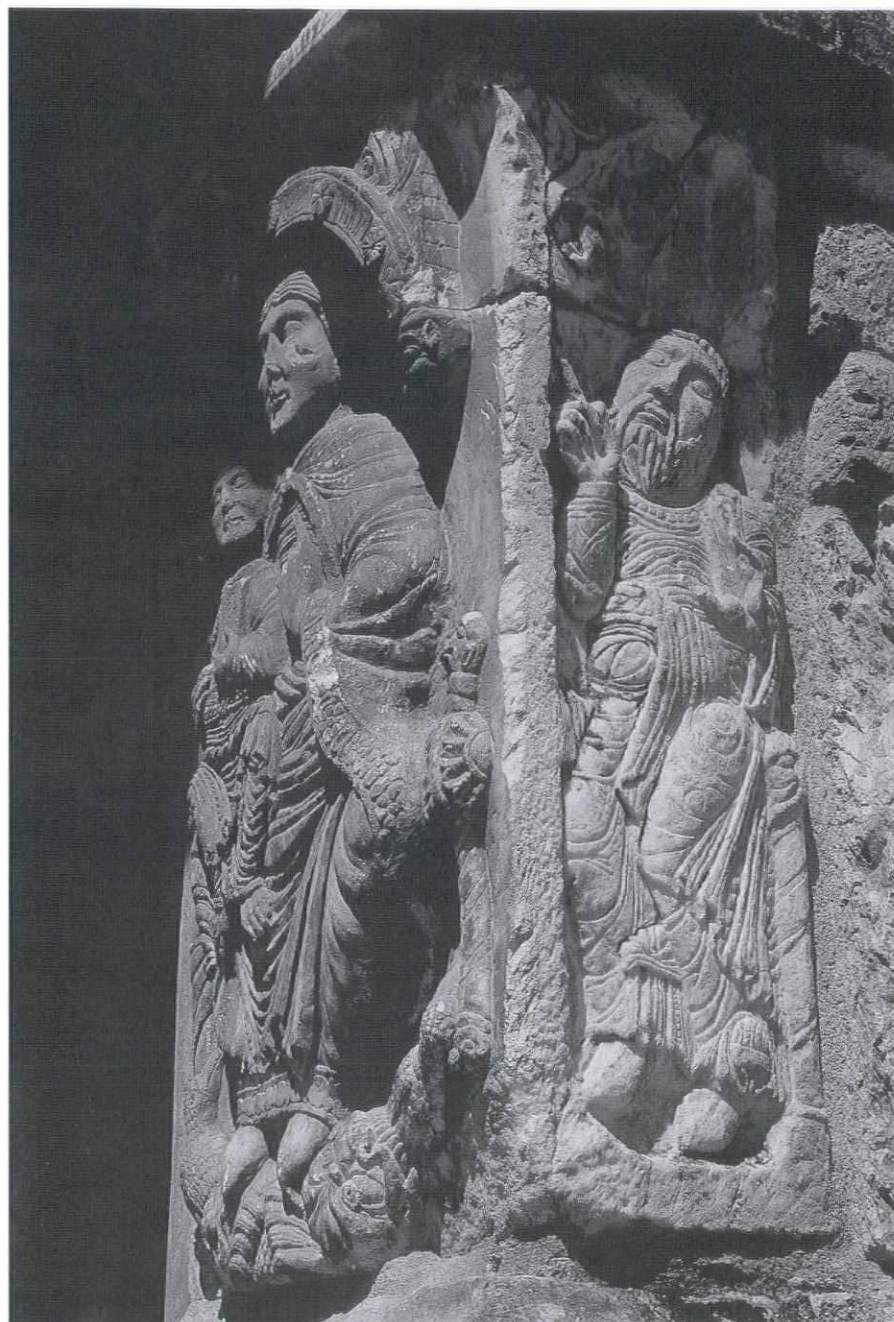
Saint Aventin

サン・タヴァンタン教会

Eglise Saint Aventin

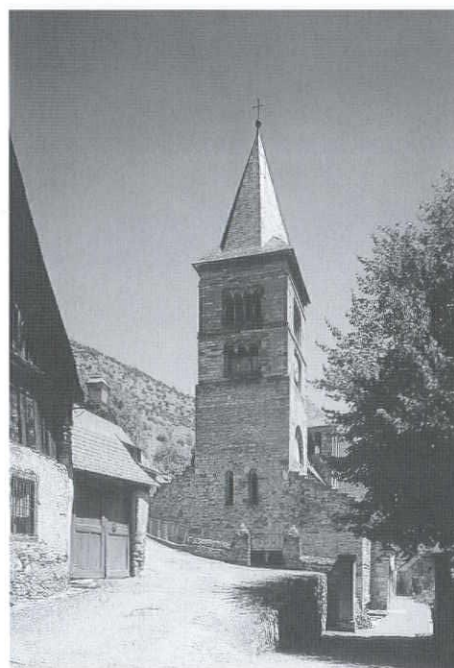
7

11世紀中ごろに建設されたとみられる。谷あいの美しい自然の中に石の量塊を調和させた初期ロマネスク教会。トゥールーズの彫刻に類似した手法の彫刻を持つ。南側壁には先行する建物の断片を利用したと思われるいくつかの浮き彫りがはめ込まれており、この土地に当時残っていたガリア・ローマ時代の雰囲気を伝えている。(S)



トゥールーズに似た表現をもつ入口柱部分の聖母子彫刻

8 7 route de Saint Gilles



斜面を切り取るような狭い棚状の空間に建つ

サン・サヴァン
Saint Savin

ノートル・ダム修道院
Ancienne Abbatiale Notre-Dame

8

現在の建物は1114年ごろから建設が始まりほぼ12世紀いっぱい続いたであろうとされている。ロマネスクのシンプルなファサードと14世紀に架け替えられた鐘楼が美しいシルエットをつくっている。単純な整数の比例による幾何学的な解決で計画されていると考えられている。(S)



ロマネスクのアーチ上にゴシック時代に載せられた八角形リブによるドームをもつ



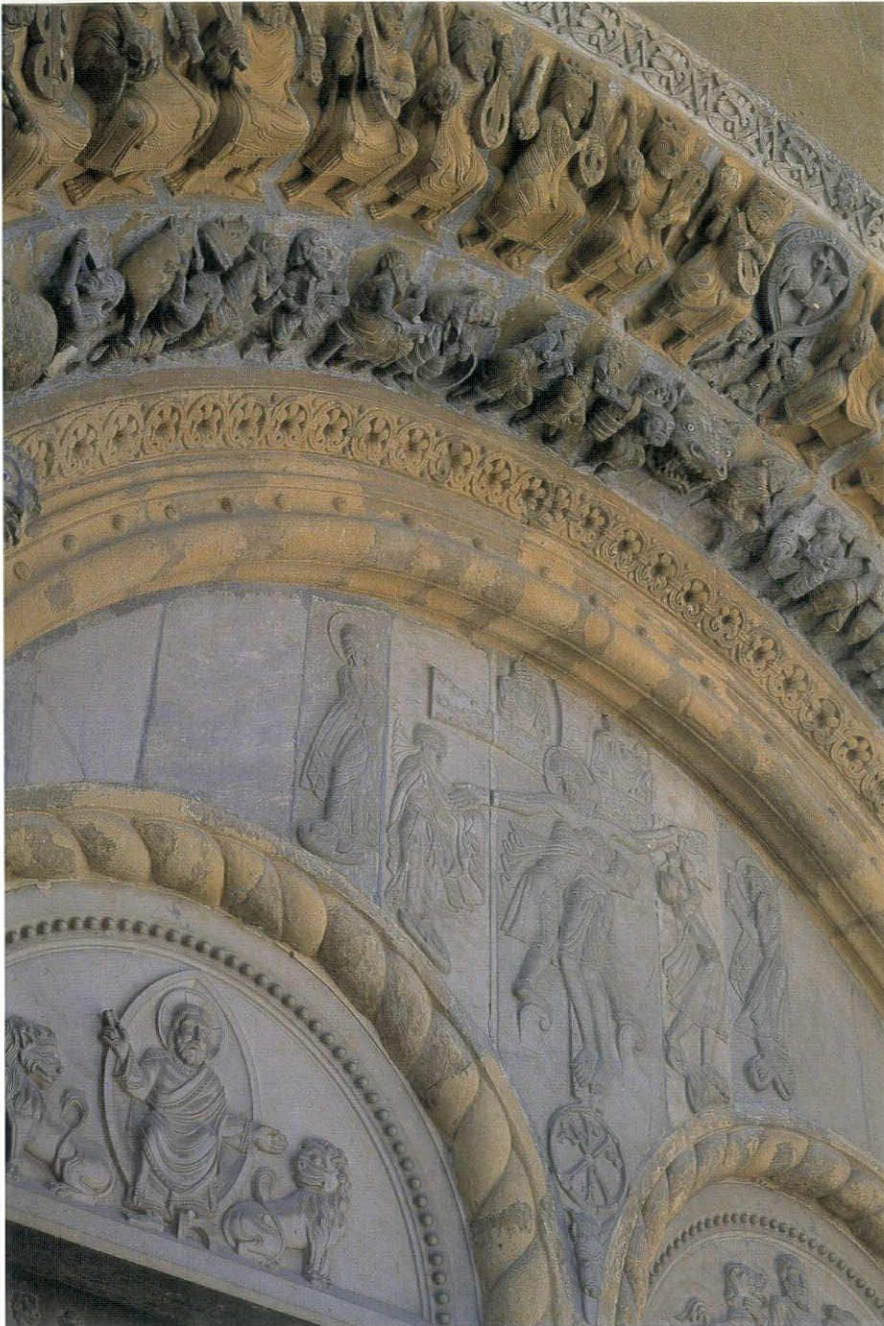
小さな村の中央広場より教会南面をみる

オロロン・サント・マリー
Oloron Sainte Marie

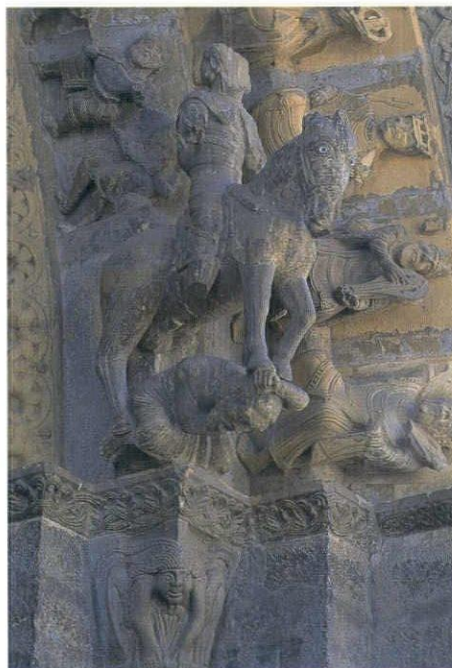
サント・マリー大聖堂
Ancienne Cathédrale Sainte Marie

9

1102年ごろ建設がはじまり、13世紀まで続けられた。入り口彫刻はモワサックに範をとり、黙示録の24老人達の遊びと楽器を操る喜びが外側のアーチ、猪を仕留める者や魚をとる者、樽を作る者など中世の庶民の活動が内側のアーチに描かれ、民俗的な表情を持つ。(S)



正面タンパン彫刻



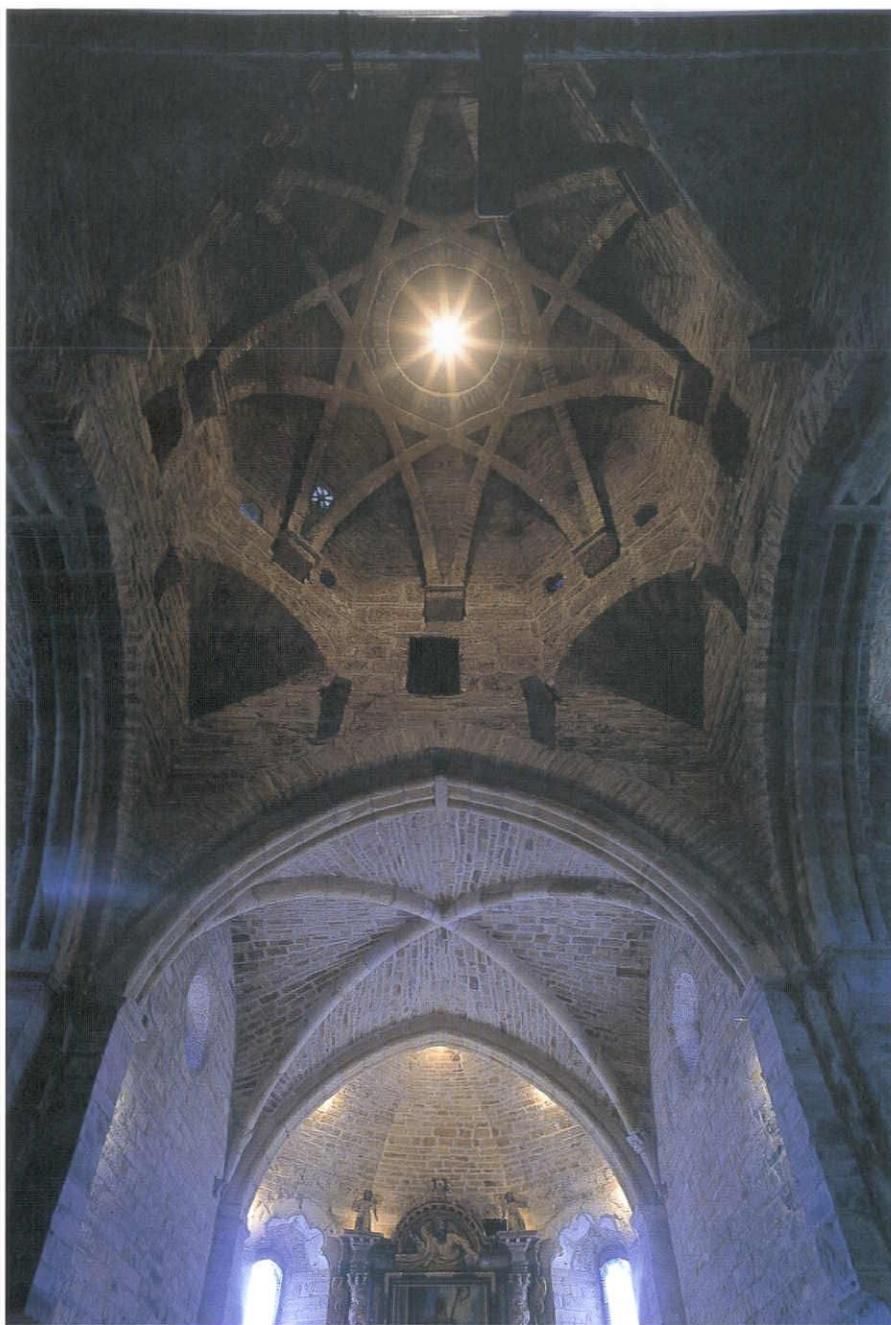
めずらしいファサードから突出した騎馬像

ロピタル・サン・ブレース
L'Hôpital Saint Blaise

サン・ブレース教会
Eglise Saint Blaise

10

12世紀終わりから13世紀の初めごろの建設と推定されている。プリミティヴな形態の集中式礼拝堂。コルドヴァを連想させる8点からアーチを星型に架けて支えるドーム、窓廻りの細かい装飾にはスペイン経由のアラブ様式の影響が見られる。(S)



不規則な開口部をもつドーム

10
9

route de Saint Gilles



納まりの悪いドームの立ち上がりと屋根の詳細

ロマネスク教会を見に行こう

今回の特集は本誌9610号「中世の光と空間」の続編であり、前号は主に南部フランスを対象としたロマネスク建築教会の概論であったのに対し、今号は巡礼の道をテーマに、中部、西部のロマネスク教会を紹介した。ロマネスクの魅力は、堀内広治氏の写真によってあますところなく表現されていると思う。しかし写真と論文だけでは物足りない、空間をじかに体験したいという読者に向けて、この2回の特集で語られた魅力が気楽に持ち歩けるサイズのガイドブックとなって近々登場予定である『フランスのロマネスク教会』(鹿島出版会)。同書では、フランス全土を9つの合理的なルートに分け、具体的な道案内としての情報や周辺のみどころ、さらに食文化にも簡単にふれている。もちろん堀内氏の写真の魅力も存分に鑑賞することができる内容になっている。このガイドブックを持ってフランスに旅立ち、同国の歴史的な建築文化や食文化の最も魅力ある部分を堪能してきていただきたい。(櫻井義夫)

「ロマネスク」「フランス・ワイン」ブック・ガイド

『ヴィオレ・ル・デュク』羽生修二＝著、鹿島出版会、1992年
『大塚国際美術館全作品集——2 中世』長塚安司＝著、有光出版、2000年
『カラー版西洋建築様式史』羽生修二・渡辺道治＝著、美術出版社、1995年
『キリスト教の2000年』ポール・ジョンソン＝著、別宮貞徳＝訳、共同通信社、1999年
『キリスト教美術事典』柳宗玄＝編、吉川弘文館、1990年
『黒い聖母と悪魔の謎』馬杉宗夫＝著、講談社、1998年
『建築全史——背景と意味』S. コストフ＝著、鈴木博之＝監訳、住まいの図書館出版局、1990年
『修道院——禁欲と観想の中世』朝倉文市＝著、講談社、1995年
『巡礼の構図』杉山二郎＝編、NTT出版、1991年
『スペイン紀行』アランダ＝著、未来社、1991年
『聖ペルナル小伝』P. リシェ＝著、稲垣良典・秋山知子＝訳、創文社、1994年
『世界美術大全集 第8巻 ロマネスク』長塚安司＝著、小学館、1996年
『大聖堂のコスモロジー——中世の聖なる空間を読む』馬杉宗夫＝著、講談社、1992年
『中世・美の様式 上・下』ハナ・ロソウスカ＝著、太高保二郎＝訳、連合出版、1991年
『バスターニ・ロマネスク』岡部あおみ・港千尋＝著、学芸出版社、1990年
『薔薇の名前』ウンベルト・エーコ＝著、河島英昭＝訳、東京創元社、1990年
『ビジュアル版西洋建築史——デザインとスタイル』長尾重武＝著、丸善、1996年
『フランス歴史の旅』田辺 保＝著、朝日新聞社、1990年
『フランス・ロマネスク』饗庭孝男＝著、山川出版社、1999年
『ヨーロッパ古寺巡礼』饗庭孝男＝著、新潮社、1995年
『ヨーロッパとは何か』饗庭孝男＝著、小沢書店、1991年
『ヨーロッパが面白い 上・下』紅山雪夫＝著、トラベルジャーナル、1991年
『ヨーロッパの中世 芸術と社会』G. デュビー＝著、池田健二・杉崎泰一郎＝訳、藤原書房、1995年
『ヨーロッパのキリスト美術——12世紀から18世紀まで』E. マール＝著、柳宗玄・荒木成子＝訳、岩波書店、1995年
『ロマネスク聖堂の窓』高野禎子＝著、季刊ichiko、1991年
『ロマネスクの美術(大系世界の美術11)』学習研究社、1990年
『ロマネスク古寺巡礼』田沼武雄＝著、岩波書店、1995年
『ロマネスク世界論』池上俊一＝著、名古屋大学出版会、1999年

『新フランスワイン』アレクシス・リシーヌ＝著、山本 博＝訳、柴田書店、1985年
『世界のワインカタログ2000 by Suntory』ソニー・マガジズ、2000年
『ワイン物語』ヒュー・ジョンソン＝著、小林章夫＝訳、日本放送出版協会、1990年
『ワインと風土』ロジェ・ディオ＝著、福田育弘＝訳、人文書院、1997年

写真クレジット

長塚安司 p.035
田窪恭治 p.045
サンアド pp.053～057

上記を除くすべての写真
堀内広治／新写真工房

著者プロフィール

櫻井義夫／Yoshio Sakurai
1957年 埼玉県生まれ
東京大学工学部建築学科、ヴェネチア建築大学に学び、
1987年 東京大学大学院修士課程修了
丹下健三都市建築研究所、マリオ・ボッタ事務所、クリスチャン・ド・ボルザンバルク事務所を経て、
1993年 櫻井義夫+I／MEDIA設立
主な作品に〈チェリドーム〉〈Villa KNT〉など。
主な著書に『日本建築における光と影』(翻訳、a+u、1995年6月号)などがある。

羽生修二／Shuji Hanyu
1948年 東京都生まれ
千葉大学工学部建築学科、フランス文化省「古建築保存と歴史研究所」(パリ)に学び、1976年 千葉大学大学院修士課程を修了。東京大学大学院博士課程を経て、
1995年より東海大学教授。工学博士
専攻は、フランス建築史、歴史的建造物保存・修復学
主な著書に『ヴィオレ・ル・デュク——歴史再生のラショナルリスト』(鹿島出版会)、『建築史の証』(共著、中央公論美術出版)、『建築全史』(スピロ・コストフ＝著、共訳、住まいの図書館出版局)などがある。

長塚安司／Yasushi Nagatsuka
1936年 東京都生まれ
1962年 東京芸術大学芸術学科専攻科修了
1995年 パリ大学I博士号取得
現在、東海大学教養学部教授
主な著書に『アッシージのサン・フランチェスコ聖堂建立初期の美術』(共著、岩波書店)、『DESCENTE DE CROIX. Son développement iconographique des origines jusqu'à la fin du XIVe siècle』(東海大学出版会)、『世界の聖域14 アッシージの修道院』(講談社)、『世界美術大全集 第8巻 ロマネスク』(小学館)、『大塚国際美術館全作品集——2 中世』(有光出版)などがある。

田窪恭治／Kyoji Takubo
1949年 愛媛県生まれ
1972年 多摩美術大学卒業。70年代より「パリ・青年ビエンナーレ」、「ベネチア・ビエンナーレ」など国際美術展に出品。その一方で、80年代には、既成の作品制作や発表の方法に疑問を感じ、新たな表現形式を形成していく。
主な作品に『絶対現場—1987』、オペラ「ゴレム」の舞台美術制作(ロンドン)、『礼拝堂プロジェクト』(フランス・ファレーズ)など。礼拝堂の再生は1999年に「村野藤吾賞」を受賞し、著書『林檎の礼拝堂』(集英社)にもまとめた。

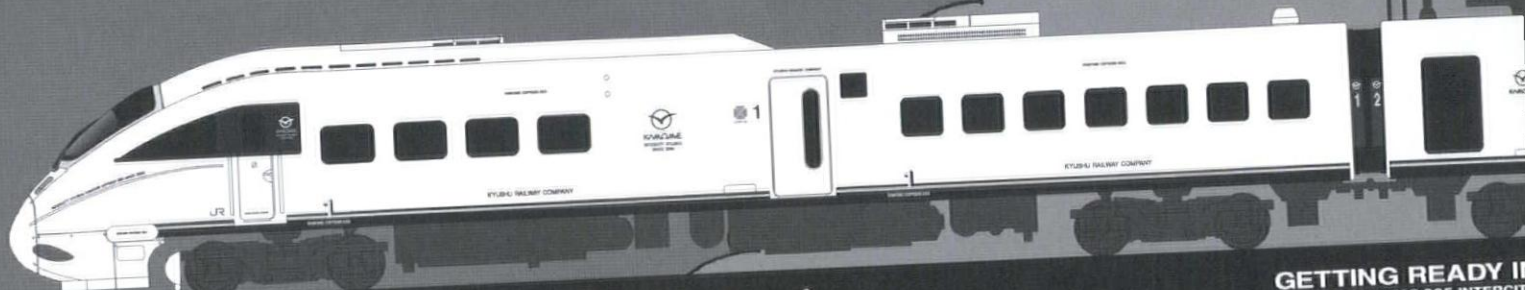
山田 健／Takeshi Yamada
1955年 神奈川県生まれ
1978年 東京大学文学部独文専科卒業
現在、サントリー宣伝事業部クリエイティブ・ディレクター
著書に『今日からちょっとワイン通』、『バラに守られたワイン畑』(ともに草思社)がある。

堀内広治／Kouji Horiuchi
1952年 大阪府生まれ
1974年 東京写真大学研究科修了後、村井修に師事
1984年 新写真工房を設立、現在に至る。
1997年より慶応義塾大学環境情報学部非常勤講師を務める。
主な写真集に『パリ・グランプロジェクト』、『フランス・ロマネスク』、『ロマネスク』(すべて鹿島出版会)などがある。

エコロジー・エクスプレス 水戸岡鋭治の最新列車デザイン

取材・構成＝磯 達雄

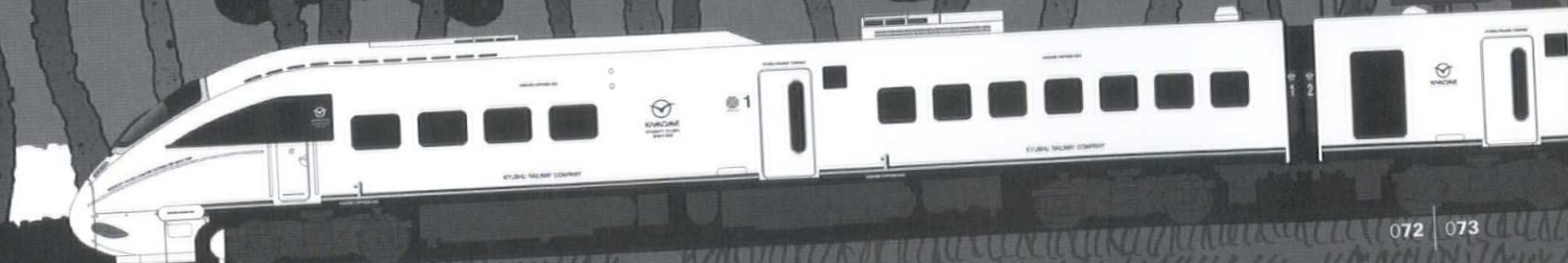
イラスト＝水戸岡鋭治＋ドーンデザイン研究所



KAMOME
JR KYUSHU RAILWAY COMPANY
PLUS BISHOKA + DON DESIGN ASSOCIATES

白い特急 **かもめ**

GETTING READY IN
KAMOME EXPRESS 885 INTERCITY





〈かもめ〉先頭車両／写真＝岡次宏幸

885系特急〈かもめ〉

2000年3月、長崎本線にデビューした最新の特急車両。車体には軽量でリサイクル性の高いアルミ合金の中空押し出し材を使用している。グリーン車、普通車、ともに室内の床はすべてフローリング仕上げ。黒い革張りのハイバックシートで、白木の収納テーブルを備える。ノート・パソコンを安心して使えるコンセントが付いた座席もある。携帯電話コーナー、ギャラリーコーナーなどのコモンスペースが、旅の楽しさをさらに盛り上げる。



グリーン座

写真提供＝松下電工 写真＝石井紀久



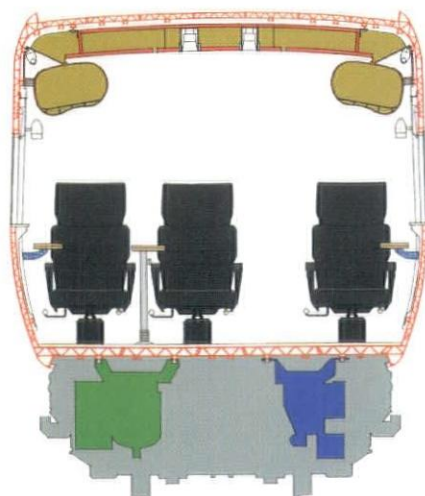
グリーン座

写真提供＝松下電工 写真＝石井紀久

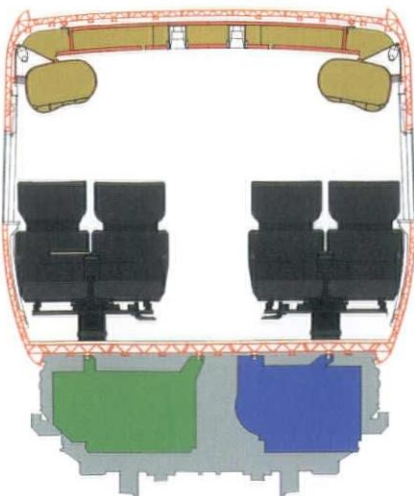


指定席・自由席

写真提供＝松下電工 写真＝石井紀久



グリーン座 断面図



指定席・自由席 断面図

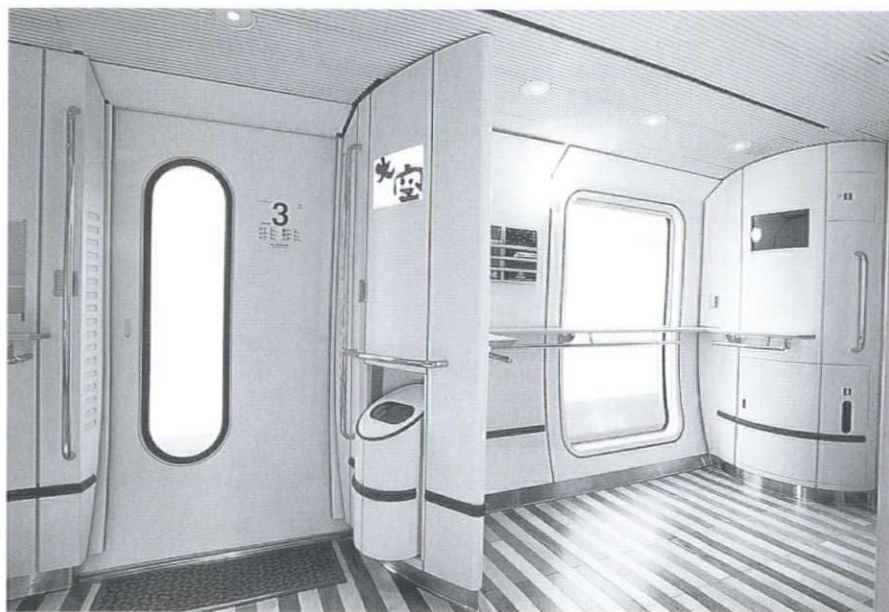


指定席・自由席 内観/バス



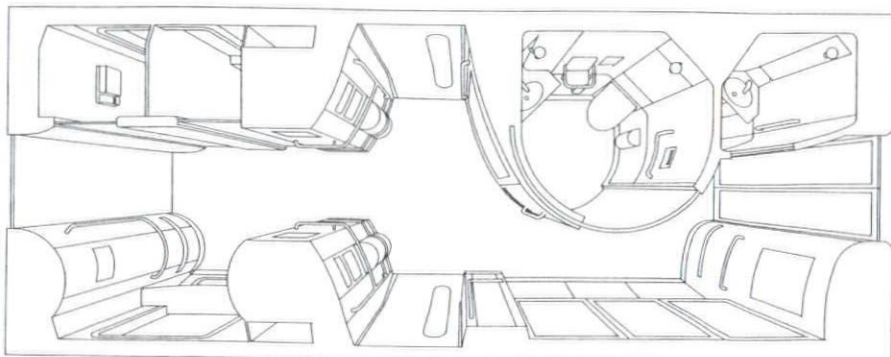
2号車 ギャラリーコーナー

写真＝岡次宏幸

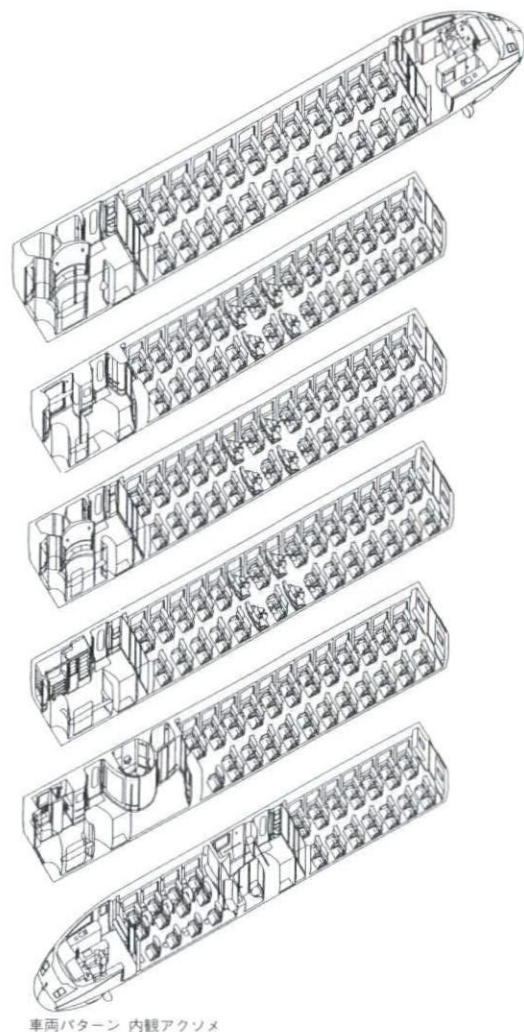


3号車 コモンスペース・携帯電話コーナー

写真＝岡次宏幸



2号車 コモンスペース内観パース
SD0007



車両パターン 内観アクソメ

「茶室のような電車が理想」

水戸岡鋭治が語る 21 世紀の列車デザイン

リサイクルしやすい素材

列車のインテリアデザインについては、僕はいつも椅子のデザインから始めます。一人ひとりの旅を満足させるには個人に一番近いところが重要だからです。そこから床、壁、天井に進み、照明、音、とデザインを広げていきます。

今回、〈かもめ〉の設計で特に意識したのは、10 年先、15 年先にはこれを壊して作り変えることがありうるということです。そのときに発生するゴミの問題を、僕たちはもう無視できない。それで廃棄が難しい合成樹脂系の材は極力少なくしたんです。床は木、椅子は革。そのほか鉄、ガラスなど使用したのはほとんどがリサイクル可能な材料です。ボディーもアルミですしね。そういったものを今の人たちは一番望んでいます。高級である必要はないのです。そうした将来的にゴミになりにくい素材の方が、社会的にもふさわしい快適であるということが分かってきたんですね。

僕は次の機会があれば、電車の壁を土壁にすることを考えています。技術的には問題ありません。アルミに土壁を吹き付けばいいわけですから。それで仕切りには和紙を使って、「茶室のような電車」が走るというのが理想です。これができれば、国際的にもインパクトのあるものになるでしょうね。

これからの列車のデザイン

21 世紀の列車のデザイン・テーマは、素材のリサイクルといった問題の解決へと進むと思います。〈かもめ〉はその始まりです。列車だけでなく、飛行機、住宅など、みんなそういう方向に向かっています。我々の罪の意識がなるべく薄らぐような空間をどのように作るか。それをつくれれば評価も高くなるし、みんな乗ってくれるのではないのでしょうか。デザインは色や形ではなくて、精神論というか志の問題になってきていますから、そこを捉えたものでないと、僕はまずいという気がしています。

鉄道はもともと環境破壊が少ない輸送手段で、道路を建設する必要もないし、最低

のエネルギーで最大の人数を安全に運べるんです。これは時代の要求とも合っています。それをみなさんにわかってもらうためには、環境にいいからといっても古くさいものではダメで、最高の新しいものを提供しなければならないのです。

コモンスペースの意味

JR 東日本や JR 東海の車両ではお客さんが多いので、いかにたくさんの席を確保するかが設計の第一条件になります。ところが JR 九州の場合は、週末や夏休み期間は込みますが、それ以外のウィークデーは空いていて、満席にはならないわけですよ。それであれば、席を減らして、余った広いスペースをうまく使った方がいい。それで僕がこれまでにデザインした JR 九州の車両では、少しずつ席を減らし、コモンスペースをつくっていきました。〈かもめ〉では車椅子にも使えるゆったりとしたトイレや、携帯電話をかけるためのコーナーを設けています。

極端な話をすれば、美容院だろうがパチンコ屋だろうが、列車の中で何でもできるんです。そうして地元の人に電車の旅の楽しさを理解してもらい、ウィークデーの乗車率を上げようと目論んだわけです。

電車が空のまま走っているのはナンセンスだし、お客さんが常にぎゅう詰めか、がらがかどちらかというのでは、働く人も十分なサービスがしにくい。ウィークデーの乗車率を上げるのは、そういう意味でも良い効果を得られるのです。椅子や空間の良し悪しはデザインの問題だから気が付かない人もいる。でもスペース的にゆとりがあるというのは、誰が見ても分かるサービスなんですね。それと、これは後から分かったことなのですが、そういったゆとりのスペースは、お客さんがたくさん乗り込んだときも、立ち席の場所として有効に使われているんですよ。

コスト抑制の工夫

豪華に見えるかもしれませんが、車両をつくる予算は他社とまったく同じです。JR 九州

の電車が特別に高いわけではない。ただし材料のメーカーと直接、話をできるように許可はもらっています。

何に一番お金がかかるかといえば、デザインを決定することなんです。たとえば通常はひとつの椅子の生地を決めるのに、メーカーでは 30 から 40 ものパターンを出してプレゼンテーションを行います。僕らは 1 種類だけをメーカーにつくらせて、それで終わりです。モックアップもたいていの場合つくりません。図面や絵をいろんな方向から描いて、自分の頭の中に完全なイメージをつくりあげます。要は、デザイナーが手を抜かずに、たくさん図面を描くことです。描かなければ描かないだけ、高くつくわけですよ。

「質」を見極めること

〈かもめ〉の外観は、新幹線の予行演習の意味合いもあり、ロングノーズが採用されました。色は白、それも明度 9.5 の最高に明るい白です。汚れやすいし、メンテナンスは大変ですが、その代わり、どこを走っていても鮮やかに見えます。

先頭の連結器の形などから、ドイツの ICE という列車に似ていると言われるのですが、3 次曲面を用いてオーソドックスな形をつくるようになってしまったのです。僕にとって大切なのは、自分の個性を表出することではない。もっともいい車両をデザインすることなのです。だから、結果的に同じようなものになったとしても、それほど気にしません。それに、よく見てもらえば違うことも分かると思います。

デザイナーがやるべきことは、個人的な趣味でものを決めるのではなく、多くの人々が満足できるような平均点を上げること、そうした「質の見極め」ではないでしょうか。様式はアメリカ風であれ、ヨーロッパ風であれ、日本風であれ、構わないし、それはクライアントの好みに合わせてもいいと思う。質さえあるレベルを越えていけば僕はオーケーです。鉄道のような公共性の高いものでは特に、そうした「デザインの底上げ」が必要だと感じますね。(談)

特急〈新ゆふいの森〉

博多と湯布院の間を結ぶリゾート列車。ハイデッカー車両でありながら、連結部をブリッジ状の通路で結ぶことで、ワゴンサービスも可能にしている。内装には木を中心に、ガラス、アルミ、金属など、リサイクルしやすい素材を採用した。



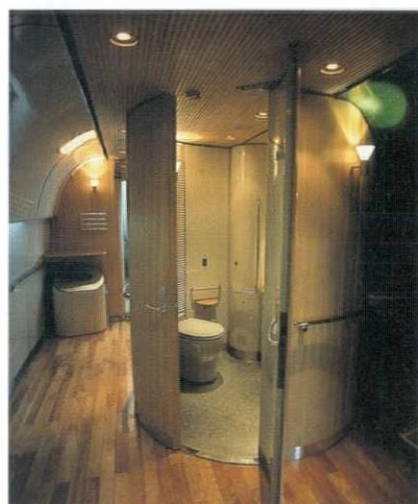
連結ブリッジ

写真＝岡次宏幸



座席

写真＝岡次宏幸



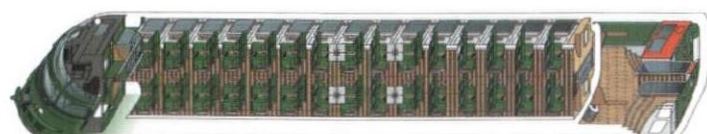
車椅子用トイレ

写真＝アートスタジオ



先頭車両外観

写真＝アートスタジオ



上：立面図 下：内観アクセメ

SD0007

815系新型近郊電車

骨組みのないアルミダブルスキン構造で、ステンレス車体に比べて約30%もの軽さを実現。摩擦攪拌溶接の技術により、継ぎ目のない美しいボディを見せる。内部の様々な機能はモジュール化され、取り外しや組み立てを容易にしている。現在、大分、熊本地区で通勤通学の脚として活躍中。



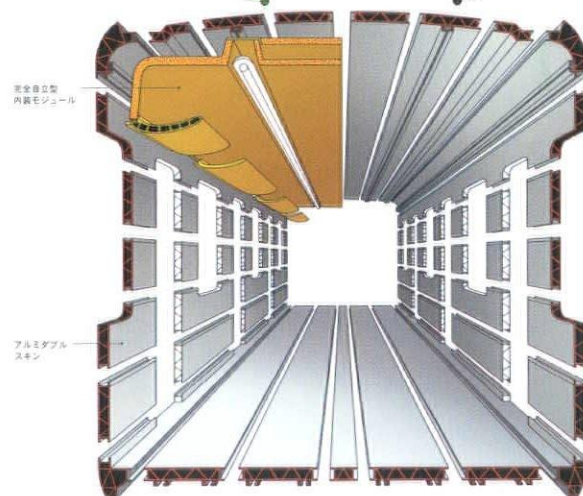
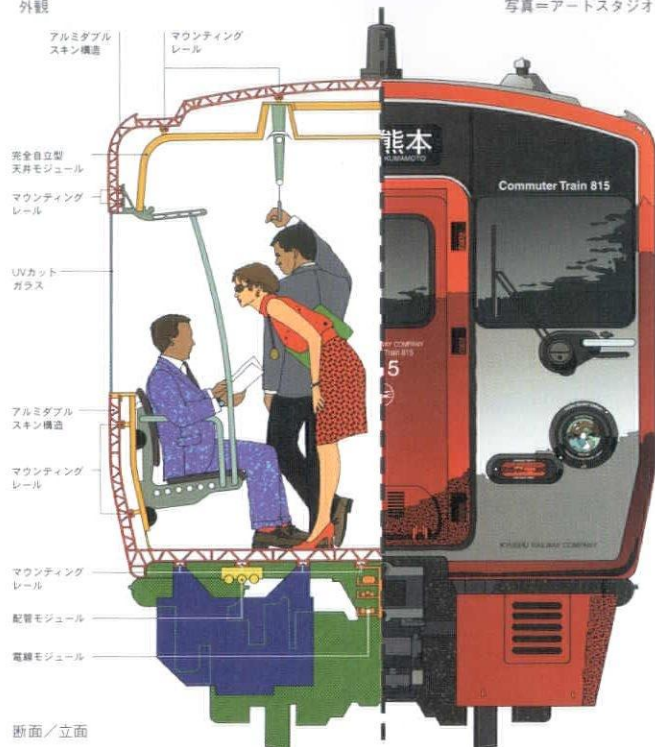
車両内部

写真＝岡次宏幸



外観

写真＝アートスタジオ



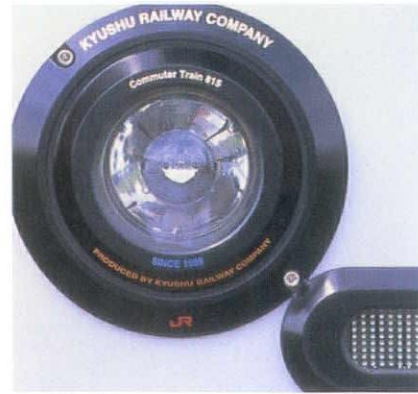
トイレモジュール

写真＝岡次宏幸



片持ち式ロングシート

写真＝岡次宏幸



ヘッドランプ

写真＝アートスタジオ

森山明子

九州旅客鉄道会長の石井幸孝氏とデザイン関連の会議で3度一緒になったことがある。福岡で開催されたユニバーシアード・アートプログラムのセミナー、環太平洋スペースデザイン会議、そして昨年11月に国際デザインセンターで開かれた「デザインマネジメント国際会議'99名古屋」だ。国鉄のエンジニアとして工作局長、九州総局長を歴任し、1987年の民営化と同時にJR九州社長に就任した石井氏は、いずれの場でも、「Good Design is Good Business」を語る産業界の代表者として、率直かつ自信に満ちた講演者、パネリストぶりだった。1994年には〈つばめ〉が、1996年には〈ソニック〉が2年に1度開催される鉄道デザインの国際コンテストである「ブルネル賞」を受賞。また、1996年には1日の乗車人数が87万人とピークを記録し、10年前の68万人から21万人増加する実績を上げたことが背景にあった。

水戸岡デザインは石井会長のデザイン戦略とともにある。岡次宏幸の写真集「JR九州の列車たち」(2000年4月刊)の序文で石井会長は「民営化後まもなく、車両づくりのプロジェクトチームに、水戸岡鋭治という社外の、それも車両を専門としないデザイナーを迎えることになり、これを機にJR九州の車両づくりは、さらなる一步を踏み出します」と書く。ジェットフォイル〈ビートル〉(90年就航)のカラーリングから、〈つばめ〉、〈ソニック〉、〈かもめ〉に至る車両デザインは、水戸岡氏によるものだ。それまでの車両とは明らかに異なり、グラフィカルな個性が際立つ水戸岡デザイン。その誕生にはJR九州の経営が関わっている。

80年代末の世界の鉄道会社は「打倒エアライン」を目標に、「サービスをデザインする」「時間をデザインする」をテーマに掲げた。それに対し、「東京圏ならJRが60%、九州は車が70%以上」というくらい九州では鉄道が劣勢で、JRのシェアは5.7%に過ぎない。

JR九州では、便利で廉価で安全といっ

た「理性的価値観」に訴えるために、民営化後列車本数を1.5倍増やし、駅総数の約1割を新駅に変え、時間短縮に努力しつつ、運賃改訂は1回しかやっていない。それと同時に打った手が、デザインによって利用者の「感性的価値観」に訴える方法だった。

そのためには利用者の反応が「好き」と「嫌い」に分かれることも辞さなかった。そればかりか、従来の価値基準では「ムダ」とも思えるデザインも許容したのだ。たとえば、グラフィカルな線を鉄板の溶接によって表現するのは製造技術に照らせばムダだし、客席以外のさまざまな楽しいスペースも輸送効率から見ればムダだろう。

もちろん、今年3月にJR西日本がエアライン対抗用に投入した〈ひかりレールスター〉の指定席車両の座席が4列であることは、利用者にとってはサービス向上だ。ムダはゆとり、サービスの別名である場合がある。「デザインはトータルにはコストを下げる」(石井会長)。

〈つばめ〉のブルネル賞は車両のみならず客室乗務員の制服にも与えられ、同様に〈ソニック〉でのブルネル賞は車両デザインと、振り子式列車の特徴をいかした動く彫刻の両方に贈られている。会社案内でも同賞の奨励賞を受賞し、1989年来の車両・駅などの各種受賞歴は22に及ぶ。ブルネル賞のスローガン「Good Design is Good Business」は、デザイン抜きで企業経営は成り立たないという石井会長の信念そのものののだ。

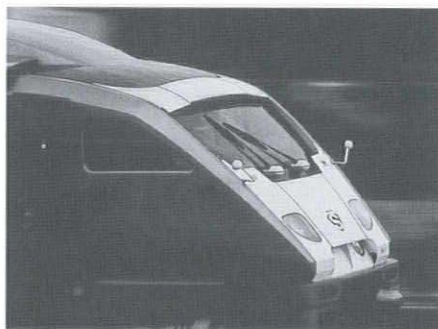
「デザイン委員会方式では効果はあがらなかった。社内にデザイン部門はおかない」。石井会長の名古屋でのこの発言は、水戸岡デザインを生んだ条件でもあれば、その結果でもあるだろう。

専門分野外の人材の起用で成功した事業は少なくない。あらゆる業種、企業から成功の秘訣を教えてほしいという依頼が舞い込むというNTTドコモの〈iモード〉は、人材の社内公募とヘッドハンティングで成功した。その立役者となった松永真理氏

が、リクルートの雑誌編集長だったことはよく知られている。〈iモード〉の月額利用料金300円は週刊誌の値段と同じだ。スイス時計産業の救世主となった〈スウォッチ〉ブランドは、企業群の整理統合によって設立されたSMH社が自動車分野でコンサルタントをやっていたエルネスト・トムケを総合支配人にむかえたことが奏効した。トムケと彼が起用したエンジニアは、アッセンブリー産業だった時計の製造技術をすっかり変えてしまった。そして、グラフィックとインテリアでキャリアを積んだ水戸岡氏も10年前、やはり外の眼をもった人だったのだ。

デザイン概念を経営に持ちこむのには、大変な内部の葛藤があったと聞く。それを克服できてこそ、デザインは環境負荷の少ない鉄道を愛する人々にすぐれた贈り物となれる。JR九州の救世主がデザインだとするなら、石井会長のデザインマネジメントと水戸岡氏のデザインワークがその両輪だと言いたい。

(もりやま・あきこ/武蔵野美術大学デザイン情報学科教授)



日豊本線〈ソニック〉外観

写真＝岡次宏幸



日豊本線〈ソニック〉内観

写真＝岡次宏幸

mitsubishi
三菱電機

エネルギー効率に優れた
PMギヤレス巻上機を採用。

薄形制御盤を昇降路内に収納。
全階で多様な乗場意匠を実現。

昇降路だけの エレベーター 三菱〈エレパック〉誕生。

新登場

エレパック

ELEPAQ

三菱エレベーター
機械室レスタイプ／乗用・住宅用・寝台用

機械室にあったすべての機器を昇降路内にすっきり収納しました。もちろん制御盤も昇降路内に設置。エレベーター乗場の出入口わきなどに置く必要はありません。昇降路だけのエレベーターですから、設計の自由度がアップ。すべての階で多様な乗場デザインを可能にします。

建物の設計自由度がアップ

ベントハウスがないので、日影規制への対応が容易。機械室と居室の位置関係で悩むこともなく、建物内外の設計がいっそう自由になります。

ビル有効面積の増加

機械室がないうえに、昇降路面積も従来のロープ式並みの省スペース。居室などに利用できるスペースが大きくなり、レントابل比も向上します。

なめらかな乗り心地と省エネルギー設計

加速・減速がなめらかで騒音も少なく、エネルギー効率に優れたPMギヤレス巻上機を採用。高級エレベーター並みの、静かでスムーズな運転を実現しました。また、油圧式エレベーターに比べて電力消費量はおよそ1/3になります。

環境に配慮

油圧式エレベーターでは避けることのできなかった廃油処理の必要もありません。「環境にやさしいエレベーター」、これも〈エレパック〉の優れた特長です。

Efficient, Reliable & Comfortable
Vertical Transportation Systems
All Over The World

効率がよく (Efficient)

信頼性に優れ (Reliable)

快適な移動空間の創造 (Comfortable)

エレベーターの3つのキーワードを基に
そのすべてにおいて、世界トップクラスの製品を
全世界に向けて提供します。

 三菱電機株式会社

お問合せ・資料のご請求は……………三菱電機株式会社 〒100-8310 東京都千代田区丸の内2-2-3 (三菱電機ビル)

本社ビル事業部 TEL. (03) 3218-4544

服部等作

はじめに

玉座は、特定の階級のための特別な「坐」である。古代においてその階級は、頭たる長であり、神からのメッセージを聞き伝える役となる帝、王、法皇、さらには絶対権力者の「坐」に連なる人物であった。今日では国家元首、社長、あるいは政党総裁の「椅子」といった類にその残影を見る。玉座は、象徴性を併せもつ特別な空間装置でもある。

玉座が象徴するものとは何であろうか。ここで「坐」がもつ原意を漢字の源流となる甲骨文字にたどれば、神を祀る土を中心にくたないし複数の者が座り、是非を争って訴訟する姿がある。神の前で行う重要な訴訟の座に神が連なることから「神の坐」を意味し、声符の「坐」は法に座すること、また起座の関係からは低い姿勢をとることでもある。また椅子の形声である「倚」の象形は、人によりかかる刀に由来する。古代に刀を所有し姿と一体となる人物は、天なる神に伺いをたて、また天の声を伝達する地上にお

いて特別な存在であったことは明らかである。

この天・地・人の関わりを三才という。才とは本来あるもので神がその存在をあらわすもの、その標識が才である。才を基本の象形にもつ「存在」とは、十字形の標木に祝詞の器の形の口を結びつけた、聖なる記号としての形をもつ存在の標識なのだ。「存」はその標識に人の形を加えたもので、生命の聖化を意味し、また「在」は場所的占有の意味をもち、時間に「存」、空間に「在」をあてる。王の玉座、神の神座、さらに天空の星座のいずれにも存在する「坐」は、神の存在を象徴する特別な空間であった。①

本稿では、「坐」を単なる腰かけから「神の坐」として玉座（註1）の象徴性を獲得するまでをとりあげる。

はじめに取り上げるスツールは、その初期において特別な性格をもった人物の存在に替わる象徴的役割を担い、また時代ごとの王朝文化と文化交流を解明するに足る鍵がある。「坐」と共に玉座の

性格を兼ね備え発達したそのイメージを拡げる手掛りとして、まずスツールから取り上げたい。

床座姿勢と座具の誕生

直立歩行をはじめた原人に、まず休息姿勢をとる必要が生じたことは容易に想像できる。大きく「立位・立つ、倚座位・腰掛ける、座位・座る、臥位・寝る」と4つの種類がある人間の静的姿勢を米国の文化人類学者G.W.Hewesは、四百数十種以上を抽出した。一般的な座姿勢として両足だけを休める姿勢は、なんらかの物に腰をかけて両足をたらず「倚座」、および平らな座面に腰をおろして両足を伸ばしたり折ったりする「床座（平座）」とに大別できる。さらに座姿勢をとる場合、座るべき地面に棲息する有毒生物、環境条件に乾燥・砂漠地帯の昼／夜の温度差、さらに湿潤／乾燥、焦熱／寒冷の条件も加わるために、床座は足の扱い方だけの変化があり、また、倚座も安全・快適のために台や座面の高さ、足の処置



①「坐」と「倚」の象形について



①-1 自然木を使ったスツールに休む人 コンゴ共和国トボケ村／1905年



①-2 自然木を使った三脚のスツール／第1王朝ごろ（紀元前3100～2890年）高さ305、幅610（mm）ロンドン大学蔵



② 伝統の片立て膝の床座姿勢で食事する光景 パキスタン西北辺境州・ハヤタバットのアフガニスタン人一家（筆者撮影）



①-3 自然木を使った四脚のスツール／第12王朝ごろ（紀元前1991～1786年）高さ270、奥行き440、幅275（mm）マンチェスター美術館蔵

によって変形がある。

元来は、自然木を利用したスツールに座りくつろぐ光景のような倚座の源流があったに違いない。自然材を利用したスツールは、紀元前3000年ごろのエジプトの第一古王朝出土品に残り、またナイル川上流沿いのヌビア、スーダンに三脚スツールの使用が近年まで認められていることから、蓋然性として自然形態の有効利用、加工、さらに意図的なデザインをすすめるといった道具の変容過程が浮かんでくる。①-1 ①-2 ①-3

一方で姿勢習慣の伝統も根強い。日本では和・洋室の起居様式のなかで伝統と変容が混在し、とりわけ戦後から倚座生活に劇的な変化を見たが、和室と座の強い関係が今も続く。またアフガニスタンでは一族の長老、家長を囲み数千年間も変わらない西アジア伝統の片立て膝の床座姿勢で食事する光景が今もなお続いている。床座は多様であるが、民族的な姿勢、ゼスチャーより、むしろ汎アジア世界におよぶ姿勢でもあるのだ。②

西アジアのスツール

1 西アジアの印章圖像について

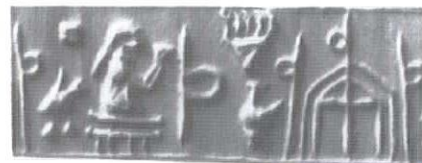
前述した座をとりまく環境や道具の進展



① 床座姿勢の土器製作風景（円筒印章）ジェムテド・ナスル様式／紀元前3100～2900年 大英博物館蔵



② スツール上の床座と床座の光景（円筒印章）ジェムテド・ナスル様式／紀元前3100～2900年 大英博物館蔵



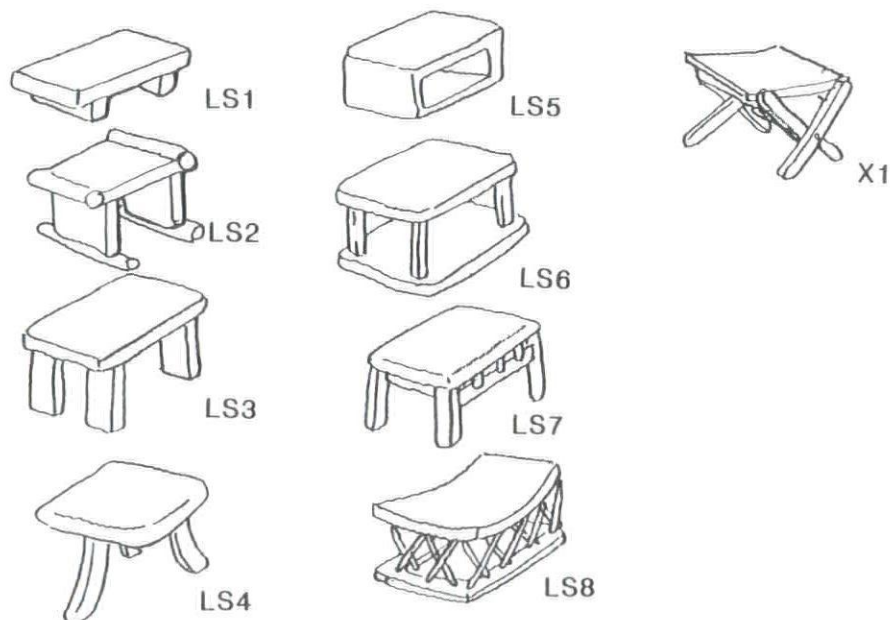
③ スツール上の床座巫女像（円筒印章）ジェムテド・ナスル様式／紀元前3100～2900年 大英博物館蔵



④ スツール上の床座巫女像（円筒印章）ジェムテド・ナスル様式／紀元前3100～2900年

と符合するのがティグリス・ユーフラテス川（ギリシャ語で川の間）を意味するメソポタミア文明である。その第一期にあたるウルク、ジェムテド・ナスル（紀元前3300～2900年）のシュメール人の古代都市でスツールが誕生していたのは偶然ではない。当時のスツールは今日まで実物がほとんどないが、当時の印章に彫り込んだ図像と共に、人々の生活光景とイメージが残されている。

印章は紀元前4000年半ばよりその表面に図像を彫り込み粘土球（塊）に押し当て、個人の所有、権利を証す用途をもった。古くより小麦栽培が始まり醸造が発展し、経済の活発化に伴い印章がメソポタミア、エジプト、インダス、地中海沿岸各地で用いられ、さらには今でも世界各地で印鑑として使用されている。ウルクおよびジェムテド・ナスル様式で、主に円筒形態をもつ印章の図像の百数十例からスツール、座姿勢を含めた当時の生活光景を見ることができる。登場する座像の大部分が弁髪状（おさげ）で髪を結んだ女性で地面に直接座る正座（割座）や片立て膝で床座する姿勢で生産活動（土器製作、パン作り、紡績や搾油作業）や炊事光景を示している。③



③ 古代西アジアにおけるスツールの想定形態の分類「ウルク様式円筒印章128例」／ジェムテド・ナスル様式から

2 スツールと床座姿勢

次に取り上げるように、スツールが現われる印章の図像は数十例程残されている。その中には、敷物上の床座する像や、牀の上の床座像が地面に直接肌を接した床座姿勢から変化して、板状に表現した敷物、あるいは台座や背板、および肘かけをもたないスツールの上で正座（割座）や片立て膝で床座する座像が混在する。

特に女性たちが生産活動に携わっている光景で興味深い図像がある。先にあげるのは、玉飾りのついた棒を持った随伴する床座の女性たちが一定方向に向い、そのなかに弁髪状の髪をした上級巫女（シャーマン）風の女性がスツールと見なせる低い座面と脚部をもつ構造体の上に座り祈祷する姿である。他の女性たちとの役割に差があることがわかる。④

第2の例は、上級巫女とおぼしき人物が、スツールの上に片方を立て膝で床座し、神殿風の建物前で祈祷する姿である。人物の前には鐘をつけた旗、鐘の間に神殿のあるところでベンチかマット上で球状のスカートをつけ、弁髪状の女性が真鍮細工か穀物か壺を触り、片立て膝で床座し祈祷する像とスツールとの組み合わせである。図像には、四脚で支えら

れ、その両端には丸い断面状の支柱を持った本格的なスツールと座像、ならびに神殿風の建物が組合わされていることから、神と交流する特定階級以上の人物のための特別な性格を併せもったと考えられる。このことから、これは玉座の性格を具えたスツール上の極めて初期の座像とみなしている。⑤

第3の例は、正面に2枚の大きな扉をもつ神殿風建物の前で、鉢巻で長髪を結わえ、片立て膝で牀の上で床座する上級巫女とおぼしき女性が、盃をもった従者風の人物と飲み酌みかわしている場面である。その従者風人物の背後には、手になにかをもった長髪の女性が片方を立て膝にした床座姿がある。床には祀り用容器が並べられている。スツール上の座像、立像、床座像がそれぞれの立場上の差を意図した表現が認められる。③と同様に座面の両端の断面が丸い棒（丸太風）で製作されている。⑥

以上4例の印章図像から、片立て膝でスツールに床座する座像が特別な性格をもった玉座（この場合神座）と共に特定の階級を象徴する存在だとわかる。

3 スツールと形態と性格

メソポタミア第一期の円筒印章から128

例に表現されたスツールの類いを分類すると三脚形、四脚形、箱形、ならびに1列のX脚の形態があり、四脚で背もたれ付きの椅子はまだ現れていない。最も一般的なスツールは、四脚で座面を支えるが、その構造を強化するための、脚と座面を対角線で支えるトラス構造はまだなかったようである。一方で入手しやすい材料である籐や革は、一般住民、共同体で広く普及していたことは、間違いない。②

X脚、いわゆる折畳み可能なスツールは、ジェムデッド・ナスル期の円筒印章に1例あるがテーブルや表現方法の相違で他に存在した可能性がある。メソポタミア片立て膝で床座する巫女が使ったスツールは、同時期のインダス、エジプト両文明においても玉座の性格を備えた共通のものがある。

インドのスツール

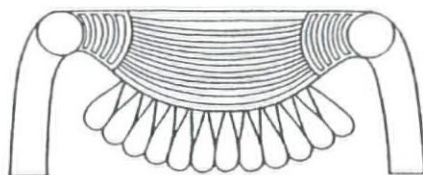
インダス文明（紀元前2500～1500年ごろ）のモヘンジョ・ダールやハラッパ遺構の出土品に石像や方形印章で床座の座像がある。モヘンジョ・ダールのは、四脚のスツールの座面上であぐらをとる4例の床座像がある。

動物の角状の頭に被りものをつけ、腕

輪や胸飾りで身体を装飾した人物は、スツールの上に前向きの結跏趺坐で、両足のかかとを会陰部につけるシッダ・アーサナの座法（Asana）と呼ぶヨーガの座姿勢をとる。人物を囲むように象徴的な神獣を配置し、また台座の脚部は動物の脚風に似た装飾であるが、その威圧的表現から特定階級以上の立場にある人物、シバ神（Siva Pasupati）や野牛神の祖形とする説がとりざたされている。ハラッパ都市遺跡出土のテラコッタ製人物像も同類のものとされる。⑦-1 ⑦-2

いずれの印章の座像も男性像で、前述のメソポタミアの女性座像と相違するが、その座姿勢が地面に直接肌を接して床座（正座）し、その手は軽く膝にそえるか片立て膝をとる点、また長髪を後頭部で結わえた弁髪風であるという点で共通している。

以上のスツールは、正面観で表現される。その形態は、背もたれがなく、四脚で低い位置の座面を特長とし、メソポタミアの印章図像と共通する。その後の西北インドの長い歴史のなかでムガル朝代に至るまで、スツール上の「ヨーガの座姿勢」の伝統的な証拠が貨幣の図像や絵画に継続してみられる。



③ スツール形のヒエログラフ（呼称：nbw）



⑩ 片立て膝を立てたヘフ女神床座像 ニムルド西北宮殿址出土 象牙製／新アッシリア帝国（紀元前8世紀ごろ）大英博物館蔵（写真提供＝大英博物館）



⑦-1 スツール上のシバ神 シッダ・アーサナの座像（方形印章）モヘンジョ・ダール都市遺構出土 ステアタイト製／インダス文明（紀元前2600年ごろ）国立ニューデリー博物館蔵



⑦-2 モヘンジョ・ダール都市遺構出土 ステアタイト製／インダス文明（紀元前2600年ごろ）アシュモレアン博物館蔵



⑨ 玉座上の仏陀座像：ガンダーラ、パキスタン・西北辺境州／クシャーン朝（1～3世紀ごろ）ヴィクトリア＆アルバート美術館蔵



⑧ スツール上の仏座像：カニシカ一世ドラクマ銅貨裏面（左）弥勒—仏陀座像、（右）弥勒仏陀座像 パキスタン・西北辺境州／クシャーン朝（100～125年ごろ発行）大英博物館蔵

なかでもイラン系遊牧民が興したクシヤン朝（紀元1～3世紀ごろ）カニシカ一世発行貨幣には「ヨーガの座姿勢」をとる弥勒一仏陀座像を採用している。貨幣図像と符合する仏教美術で一般的に玉座とよぶスツールは、彫刻した四脚をもち、座部は敷物をのせる小ぶりの台座である。クシヤン朝下のガンダーラ仏教美術に表現されるスツールは、石製の台座、籐か柳を編んだ製作物、四脚の木製物など多彩である。それぞれ敷物にはクシャ草、丸く薄いクッション、布敷きがあり、布端は髪かフレーア状に垂らす。この尊者と座の伝統は、古代インダスの床座像を受け継ぎ、ムガル朝細密画に至る玉座上の人物座像に踏襲され、伝統化している。⑧ ⑨

エジプトのスツール

かわってエジプトでスツールとは、「黄金」を意味するヒエログラフでもある。後の新アッシリア帝国においても、ニムルド西北宮殿址からエジプトの工人の手による象牙製レリーフに四脚のスツール上で片立て膝をとるヘフ女神が祈祷する姿を表した床座像が残されている。同時に初期王朝（紀元前3100～2686年）以

降のエジプト彫刻、太陽神への祈祷書に高官である書記官像のあぐら座や跪座（足首を立てて座る）、箕踞（しゃがみこんで座る）といった表現が多数あることから、スツール上の床座と直接床座する両者の間に階級の差があったことは明らかである。③ ⑩ このスツールをたどれば、前述した初期王朝の自然木利用のスツールや、編んだ座面をもつ四脚のスツールがあり④ ⑪-1、さらに編んだ座面を支える洗練された獣足の意匠をもつ四脚で支持するスツールがあらわれてくる。⑪-3

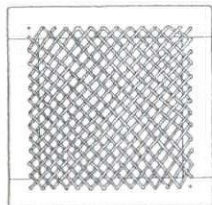
一方で低い座面で倚座用に応用されたスツールがある。新王朝時代（紀元前1567～1320年）の墓室内の壁画にも表現され、実際のアカシア製椅子が残る。その構造は、正方形で4本の獣足をデザインした彫刻による脚をもつ。上面の座面は、4本の湾曲した横木からなる。横木は隠れたほぞによって脚と接続されており、各板の内側の縁に沿って穿たれた孔にはひもを通す。脚部の下方はほぞつぎで接続された4本のつなぎ材で補強し、安定感を増している。最後に皮カバーを上面に張り、脚に縛り付けている。④ ⑪-2

新しい技術として轆轤を使用した脚部をもつスツールは、新王朝（本品は前

1400年ごろ）のテーベから出土している。構造用の部材を巧みに構成し、皮革製の2重曲線の座面を使う。脚部は、轆轤引され、0.5～2mmの薄い象牙片を象嵌し装飾する。座面にトラス構造で補助支柱に使うなど合理的なデザインがなされ、また組み立てのほぞ穴は、ドリル、錐、鑿、鉋で制作され、パーツのほぞを組んだ後に木くぎで固定し強度を強化する点など、エジプト家具の高度な技術がみられる。⑤ ⑬

このスツールをまねたマホガニー製スツール〈テーベ〉がおおよそ100年ほど前に販売された。1884年リパティー百貨店（英国）の直属工房のデザインで、四脚と三脚のスツールが樺や胡桃材で製造され、1907年まで販売され、古代エジプト、ゴシック、イスラム、サラセンなど伝統的なデザインを踏襲したりリパティー製の古典家具として店売された。このようなエジプト家具のリデザインは、近年ではデンマークのベアント・ビータセン、オーレ・ヴァンシャーなどに優れたものがある。⑬

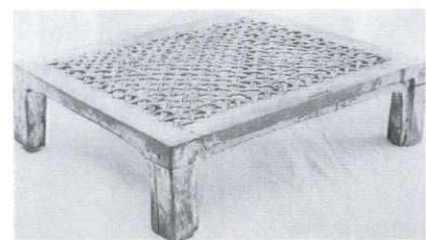
エジプトのX脚スツールは、折り畳みと運搬可能な軍用目的で、ファラオの前で將軍の専用席として使われた。X脚ス



④ スツール外形図／エジプト新王朝時代頃（紀元前1250年ごろ）大英博物館蔵



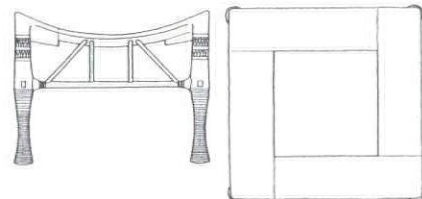
⑪-1 スツールの古形 高さ260、幅482.5、奥行き826 (mm)／初期王朝（紀元前3100～2686年ごろ）カナダ・王立オンタリオ美術館蔵



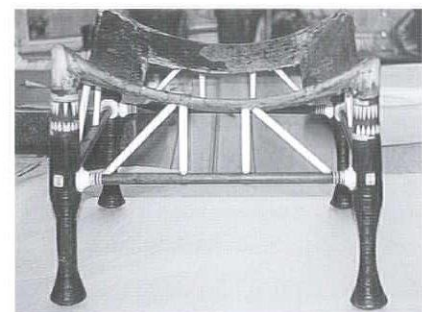
⑪-2 スツールの古形 高さ110、幅430、奥行き430 (mm)／時代不明 大英博物館蔵



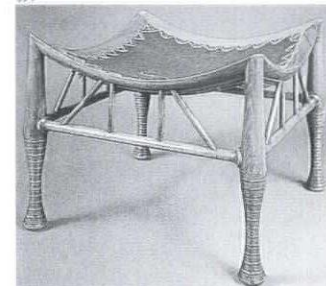
⑪-3 アカシア製スツール／18王朝時代（紀元前1567～1332年ごろ）イタリア・トリノ博物館蔵



⑤ スツール外形図／エジプト新王朝時代（紀元前1250年ごろ）大英博物館蔵



⑬ アカシア製スツール／18王朝時代（前1400年ごろ）高さ360×長さ460×幅460 (mm) 大英博物館蔵（筆者撮影）



⑭ エジプトスツールのリデザイン（テーベ）マホガニー製リパティー百貨店（英国）／1884年～1907年製造

ツールは、折り畳み座面が隠れるが、木材製の豹の皮に似せた塗装を施す例が多数あり、最も多い意匠は、ガンの頭部を応用した支柱が、横木のほぞをくわえ込む形である。X脚のツールは、その十字構造が視覚的な階級の象徴性を示したことで装飾と視覚的効果をあげ、さらに椅子の玉座と組み合わせり紀元前7～8世紀まで続いた。^{⑥ ⑦ ⑧ ⑮ ⑯ ⑰}

明らかに職人の作業用につくられた三脚のツールは、前述した^①の自然木の利用から始まったとも考えられるが、脚部で座面をささえる構造、その材質、作り方の簡便さ、軽量さから広く利用された。^{⑨ ⑬}

古代のツールと玉座の性格

本稿でとりあげた円筒印章の図像、およびわずかな残存例から、ツールの上に床座する座像は、メソポタミア第一期の片立て膝で床座する巫女、インダスのシバ神、新王朝時代のエジプトにおいては、王宮に属する特別な人物などだ。そのほとんどが地面に直接床座するのではなく、庶民と天地を分かちものとしてツールの上の床座像となっているとわかる。

しかし古代西アジアのツールの呼称は、シュメール人の時代には文字に残ら

ず不明である。後の初期王朝以降に四脚の低い背もたれの椅子が出現し、さらに玉座の構成が充実にむかうが、少なくとも西アジアにおいては初期においてツールは、特別な階級が座るべき「玉座」の性格を備えていたのである。

一方中国や日本では、ツールを古くより胡牀、牀几と称した。西洋ではそれを非文明的な「野蛮人の椅子」とし、ヘレニズム期以降を家具の源流とする傾向が長く続いたため、今日では脇役の意識が定着している。後に本格的な玉座の考古学的発見は、後のエジプト新王朝（紀元前1567～1320年）、新アッシリア帝国（紀元前1100～625年ごろ）、さらに東アジアにおいて古代中国の春秋時代（紀元前770～403年）以降のものである。

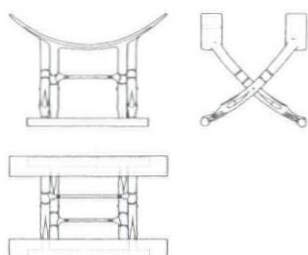
製作技術

1 家具製作のための木材

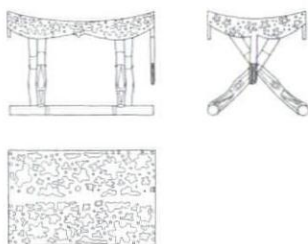
古代西アジア世界と交易や戦争を通じ交流をもったナイル、インダス川流域などで多数発見される貴石のラピスラズリを使った出土品がある。西アジアではアフガニスタン北部のバクシャンだけで産出するこの貴石が、紀元前数千年紀より交易された。他にメソポタミア独特の

粘土塊を壁に使う表面処理技術や陶器がシリアの遺跡で発見され、さらに円筒印章がクレタやインダスでも出土することから、交流は広範で長期間に及んでいるとわかる。しかし冷静に考えれば古代メソポタミアと各地が交流し、各地域の材料資源、職人技術、使用工具が異なることを理解しても、メソポタミアの影響が西アジア全体に波及したと期待したいが、円筒印章の図像で見た限りツールが多数作られたとは考えにくい。なぜなら、古代メソポタミア南部の自然環境、および棗椰子、タマリスク、ユリノキといった扱いやすい木材資源に工具を多用するには経済力が未成熟で、また初期王朝以降に役割を交代する椅子がウル王墓（紀元前2600年ごろ）で出土しないからだ。エジプトでも木材資源は同じ事情だ。

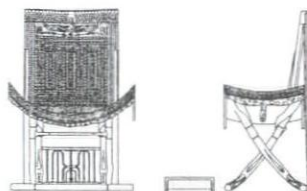
ただ新王朝の時代よりレバノンから杉材が神殿や王宮の内装用、またミイラの本棺用材として輸入されていた。他にも輸入木材に黒檀、シカモア、樺材、楡、樺、イチイガシ、およびエジプト国内産に棗椰子、イチジクがあるが、なかでもアカシアがツールのみならず建材の一部や棺、人形、把手などに多用された。



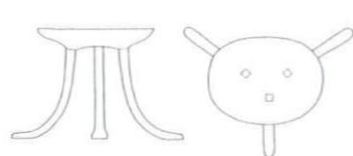
⑥ X脚ツール／18王朝時代（前1250年ごろ）高さ1020、奥行き440、幅700（mm）大英博物館蔵



⑦ X脚ツール外形図／18王朝ツタンカーメン王代（前1350年ごろ）高さ342、奥行き470、幅317（mm）カイロ博物館蔵



⑧ X脚ツール外形図／18王朝ツタンカーメン王代（前1250年ごろ）高さ1020、奥行き440、幅700（mm）カイロ博物館蔵



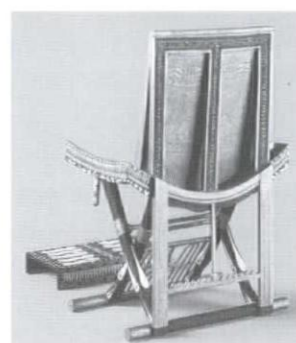
⑨ 三脚ツール外形図／19王朝時代（前1400年ごろ）高さ328、奥行き285、幅360（mm）大英博物館蔵



⑮ X脚ツール／新王朝時代（前1250年ごろ）高さ470、長さ450、幅350（mm）大英博物館蔵（筆者撮影）



⑯ X脚ツール／18王朝ツタンカーメン王（前1350年ごろ）高さ342、奥行き470、幅317（mm）カイロ博物館蔵



⑰ X脚ツール椅子／18王朝ツタンカーメン王（前1350年ごろ）高さ1020、奥行き440、幅700（mm）カイロ博物館蔵



⑱ 三脚ツール／19王朝時代（前1400年ごろ）高さ328、奥行き285、幅360（mm）大英博物館蔵（筆者撮影）

2 家具製作のための工具

メソポタミア第一期のスツール製作技術は、紀元前4千年紀に始まる初期の銅、銅の鋳打ち技術、および以前より金と銀を扱う輝かしい金石併用の製作技術が貢献した。元々石材を産出しないメソポタミア南部では、貴重な石材を使う石器や円筒印章の製作材料に制約があった。印章の彫刻技術では、貫通孔や図像彫刻用に弓錐の動力で回転切削する原始的な旋盤とドリルの使用、合せ鋳型から製作した小型部品、さらに合金やハンダ付けなど技術的進歩と共に、印章の再利用など石が大切に扱われたことがわかる。本格的なスツール製作のための金属刃は、約400年後の初期王朝時代のウルの王墓で発掘されたわずかな銅製の手斧、そして小さな銅製鑿である。また堅琴、スタンダードのように象嵌や黄金細工がなされ精緻に作られた木工製作技術が、初期王朝よりも前の時代にそのまま符合するとは言えないことから、家具の製作技術・工具は、まだ発展途上の段階にあった。家具製作にたずさわる職人たちの作業の光景は、テラコッタ製の板にスツールに座り、手斧で椅子の曲脚を作る職人姿が残されている程度である。¹⁹ ²⁰

一方エジプトの支配者や王侯貴族らは、

墓室壁画に王家専属の家具工房、職人たちの光景を克明に表現し、後世での再生を願った。また幸いにも乾燥風土と王墓のなかで状態がよく、家具や工具の実物が残されている。このような古代からの伝統的な作業で使われた、弓ドリルによる製作方法が現在もなお、パキスタンの西北辺境州で使われ、残されている。¹⁰

21 22 23

まとめ

直立歩行にまで溯り、原人が休息姿勢をとった瞬間から腰掛けが模索され、椅子のデザインの長い歴史が始まった。椅子が基本的に等身大のデザインをとるのに対して、玉座は身体性に沿うデザインを指向しなかった。円筒印章の図像でとりあげたスツールは、「坐」のもつ根源的な意味、神に伺いをたて、天の声を聞くための座であり、地平をへだて、天地を分かたぬにより高く、より天に近づくことをめざした玉座の初期的な性格を備えていったと読み取れる。

後にエジプトやメソポタミアの初期王朝以降には、床座から倚座に主役が代わり、スツールが脇役となった。しかし西アジアには、今日においてもなお根強くスツールの伝統が残る。次の機会には地

平をへだてて天空を目指した、倚座による玉座のデザインを考えてみたい。

最後に資料調査では大英博物館、ヴィクトリア&アルバート美術館、アシュモレーン博物館から資料協力を得たことを本稿をかり、謝辞としたい。

(はっとり・とうさく/広島市立大学教授)

引用資料

- ・白川静、1999：漢字1、白川静著作集、巻1、平凡社
 - ・Collon, D, 1993: The first Impression, Cylinder Seals in the Ancient Near East, The British Museum Press
 - ・Dan, S, 1998, ; Egyptian Mobelkunst fra Faraotiden, Denmark.
 - ・Hattori, T, 1999: Study of the Throne and Sitting Figures, Bulletin of the 4th ADC, E05 pp.1-13, International Symposium of Design Science at Nagaoka
 - ・Killen, G.P, 1994: Ancient Egiptian Furniture I, 4000-1300 BC, Aris & Phipps-Warminster
- 註1) 異なる椅子の呼称が現れるのは、エジプト、地中海沿岸、小アジア、西アジア各地で文字表記ができるようになってからである。後のギリシャでは、玉座をスロノス (Thronos, ローマ・Solium)、四脚で背もたれなしスツールをディフロス (Diphros, ローマ・Biselium)、X脚のをオクラディアス (Okkladias, ローマ・Sella Curulis) と呼び形態と性格的な区別をもった。



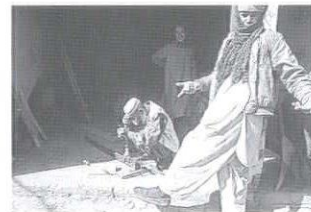
19 鑿工具/ウル王墓出土品(前2600年ごろ)長さ127、小型54 (mm) 銅製、ペンシルバニア大学博物館蔵



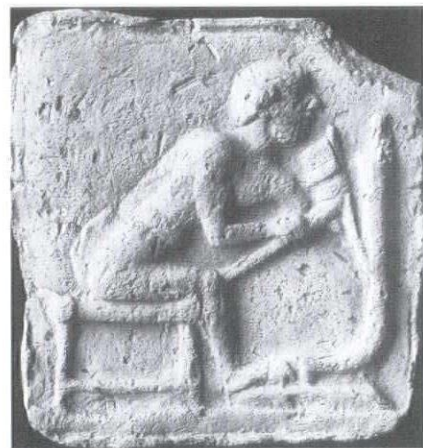
21 家具工房の光景(ティの墓レリーフより) エジプト/古王国時代(前2400年ごろ)



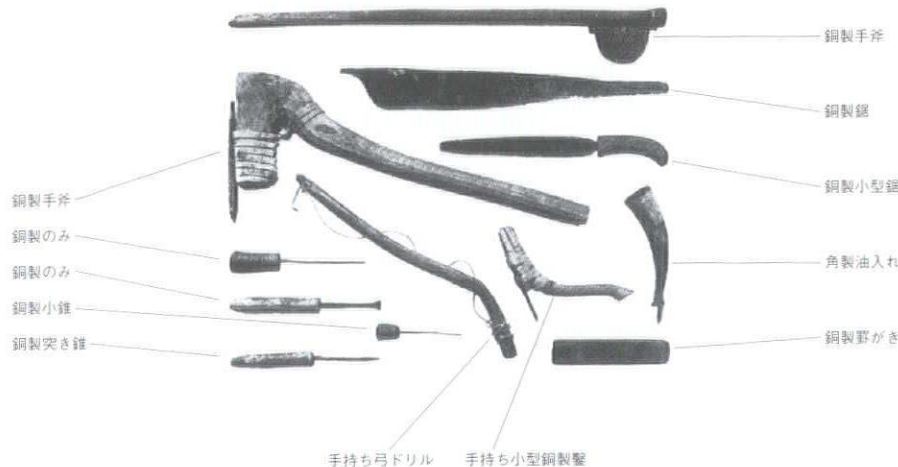
10 ティの墓の家具工房の光景レリーフ/エジプト古王国時代(前2400年ごろ)



23 手持ち弓ドリルの伝統的な作業 パキスタン・西北辺境州スワート・ミンゴラ近郊にて/1999年春(筆者撮影)



20 椅子の曲脚を作る職人姿 テラコッタ製/バビロニア第一王朝(紀元前1894年ごろ)



22 木材工作用の工具/エジプト新王朝時代



で注意!!

窃盗団による、カギあけ侵入被害が激増中!!

ピッキング攻撃に強い ロータリーシリンダー「U9シリンダー」を お勧めしています。

防犯性能が低いシリンダー（鍵穴がタテ式）



ウェーバー
タンブラー式



ディスク
タンブラー式



ピンタンブラー式
（カギの形が透け、盗みやすい）

ヨコ式でW形の
鍵穴が
安心の目印!



CP錠認定のシリンダーです。

ロータリータンブラーとロッピングバーを組み合わせた全く新しい構造の上、さらにタンブラーの外周にアンチピッキング切り込みを持たせたピッキング攻撃に強いシリンダーです。鍵違い数は1億5千万以上を達成し、キーの抜き差しも大変スムーズです。現在ご使用の錠前のシリンダーだけを交換するだけで防犯性能が向上します。お取り換えは、全国ネットワークの美和ロックサービス代行店SDがお引き受けしています。



ピッキング攻撃に強い全く新しい構造
鍵違い数1億5千万以上

ロータリーシリンダー
「U9シリンダー」

世界最高峰、172億の鍵違い数。

ディンプルキーを持ち、操作性と防犯性をより高めたリバーシブルシリンダー「JNシリンダー」もあります。



当社の伊勢工場・玉城工場はISO 9001認証取得工場です

さらに防犯強化をするために…

CP錠をお勧めしています。



CP錠とは、警察庁が制定した優良防犯機器型式認定制度にもとづき、現在は(財)全国防犯協会連合会が厳しく審査し、認定した錠前のことです。



全防連認定優良防犯機器
型式認定番号LA-00-06
U9LA-CP型 レバーハンドル錠

◆新規施工には、彫込みタイプでCP錠認定の主錠、補助錠を。



全防連認定優良防犯機器
型式認定番号LA-00-07
U9DA-CP型 本錠錠

◆既存の扉には、CP錠認定の面付補助錠を取り付けて1ドア2ロックに。



全防連認定優良防犯機器
型式認定番号LA-00-09
U9CPNDR型
面付本錠錠

シリンダー交換は、SDにお任せください。

SDは全国に約800店。アフターメンテからリフォームまで確かな技術で迅速に対応しています。



SDとは、美和ロックが専門技術や社会的モラルなどの研修後、厳重な審査を経て認定したロックミス(錠前取扱技術者)のこと。この(技術者証)が信頼の証です。



*ここに紹介した製品は一例ですが、他にも各種高級ロック、各種セキュリティシステムとその機器類、ドアクローザ、建築金具類など豊富に揃えていますのでご相談ください。

Exhibition Report

展覧会レポート

第39回ミラノ・サローネ・インターナショナル
「モービレ2000」

会期：
2000年4月11日～16日

会場：
ミラノ、フィエラ会場および市内各所

荒知幾

ミラノ・サローネの「イノベーション」

世界最大の規模と内容を誇るミラノ・サローネが、ここ数年の世界的な不景気の影響を受けて低迷していたが、2000年を迎え各家具メーカーが充実した内容の新作モデルを発表した。ヨーロッパでは、21世紀を迎えるというよりは、キリスト誕生から2000年を経過した重要な記念年として捉え、新年には、各都市で祝祭の花火を打ち上げるなど、近年になり盛り上がりを見せている。また、EC統合も順調に機能し始め、2年後のEURO貨幣統一に向けてヨーロッパの社会経済が始動したといえるだろう。

今年のミラノ・サローネの傾向としてひとつめに挙げられるのは、ライフスタイルのトータルデザインを総合的にプレゼンテーションすることであろう。これはここ数年に見られた傾向であるが、今年に入りより充実したものになってきた。特に大手メーカーのCAPPELINI社、ZANOTTA社、さらにDRIADE社は、家具からテーブルウェアまで各社のデザインフィロソフィーにより、総合的なライフスタイルの提案を行っている。

ふたつめに、デザインの傾向として、ミニマリズム全盛期に比べて、オーガニック・デザインが少しずつプロダクト化されてきたことだ。B&B社のG.ベッシーのデザインによる《UP》というソファは60年代にデザインされたものだが、今見ても新鮮さは失われていない(①)。またMOROSO社から発表されたR.アラッドがデザインした《V&A》ソファも、彼独特のウェーブをもつ個性的なデザインにも関わらずプロダクト化に成功している(②)。

そして、SAWAYA&MORONI社からZ.ハディドのデザインによる《Z.SCAPE》が発表されたが、いわゆるデコン・デザ

インに見られた角ばったデザインの角がとれて、ダイナミックなフォルムのソファ・デザインとなっている(③)。このように、ミニマリズム・デザイン一辺倒ではなく、オーガニック・デザインのようなニューデザインの傾向が見られたのも、今年のミラノサローネの大いなるデザインの「イノベーション」といえる。

3つめに挙げられるのは、ニューマテリアルの開発が活性化しているということだ。例えばZANOTTA社のW.アイズリンガーがデザインした《SOFT》というロングチェアは特殊プラスチック「TECHNOGEL」という新素材を使用している(④)。また、SEGIS社のA.カステッリ・フェッリエリのデザインによる《DAWN TOWN》は、カラーレザーとアルミとの組み合わせによる軽量チェアである(⑤)。

そしてCAPPELINI社のP.ノルゲがデザインした《RAINBOW CHIAR》は、特殊プラスチック「METACRYLATE」を使用して、素晴らしいカラーのチェアのプロダクト化に成功している(⑥)。

今年のミラノ・サローネの若手デザイナーを見ていくと、フランス、イギリス、スウェーデン、スイスなど、イタリア以外のデザイナーの台頭が目立つ。A.ヒューベリ、C.ピエ、J.アーヴィン、T.サンデル、R&E.ブルレらの活躍がめざましいといえる(⑦)。

このような若手デザイナーの動向に関して、巨匠E.ソットサスは、ミラノの新聞「コッリエレ・ディッラ・セーラ」のインタビューに次のように答えている。「私から見る若手デザイナーたちは、デザイン市場のことを考えすぎている。デザインリスクを引き受ける意志が少ないのでは



ミラノ・サローネ、フィエラ会場



展覧会「essere ben essere」、トリエンナーレ・ディ・ミラノ会場

ないか。デザインの費用が安く、安易に製作できるグッド・デザインが多い。私にとってデザインとは『ポエム』である。すべてが売るためだけにあるのではない。ナボリのカンツォーネ歌手は、決して高額な収入を得ているわけではない」。

この痛烈ともいえる批評は、ラディカル・デザイン、そしてメンフィスとデザインの「自由な解放」のために闘ってき

たソットサスにとっては、現在の若手デザイナーたちのデザインが菌がゆいのだろう。彼らに新しい世界を切り開いてくれることを期待したいものだ。

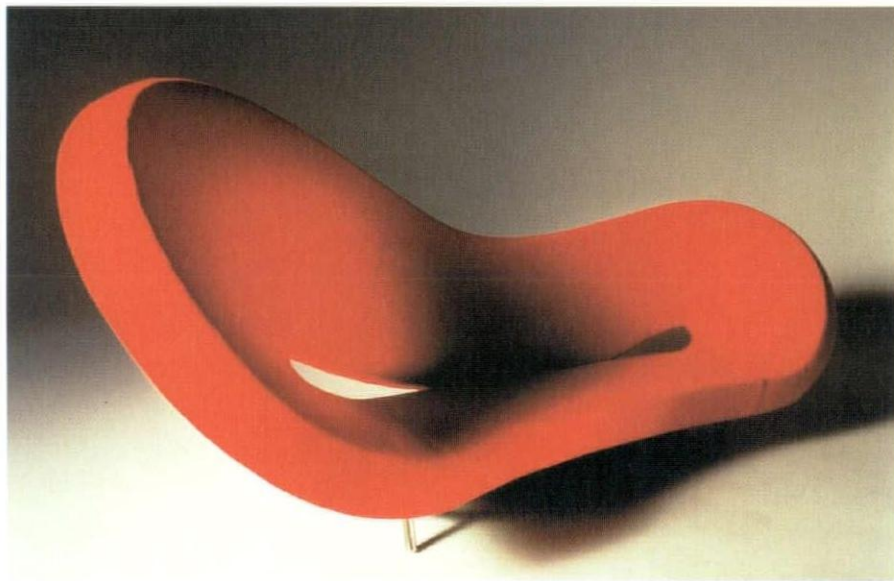
そして、ミラノ・サローネの会期中、3つの重要なイベントが開催された。そのひとつにトリエンナーレ・ディ・ミラノで開催された「eaaere ben essere (存在と

幸福)」展がある。これは、A.メンディーニがディレクターを務め、会場構成とパブリック・スペースのデザインを担当している(⑧)。

このイベントに参加したデザイナーは、A.ブランジ、P.スタルク、D.サンタキアラ、M.イオザ・ギーニ、日本から内田繁、喜多俊之ら世界中から著名人が参加した(⑩)。日本を代表するデザイナー内田は、過去



①ソファ (UP)、G.ペッシェ、B & B



②ソファ (V & A)、R.アラッド、MOROSO

photo: A. Paderni



③ソファ (Z.SCAPE)、Z.ハディト、SAWAYA & MORONI



④ロングチェア (SOFT)、W.アイスリンガー、ZANOTTA
photo: M. Ramazzotti



⑤チェア (DOWN TOWN)、A.カステッリ・フェリエリ、SEGIS
photo: DI PALMA

にミラノで発表した茶室の展開をもう一步進めたものを発表している(⑨)。ブースの中央に壁、天井が和紙の茶室を構築し、露地に見立てられた周囲を通り、中に入ることができる。壁面に道庫として取り付けられた左右にスライドするカラフルなキャビネットは、それがちょうど風景のような印象を与え、人が自然に回遊できる空間となっている。ヨーロッパ

の作家がハードなマテリアルを使用する中でこの「柔らかな空間」は、多くの注目を集めていた。

そしてもうひとつのイベントは、『SUPER STUDIO』と題するフランス人デザイナーたちのイベントであった。このイベントはV.I.A.というデザイナー組織を設立し、P.スタルクから若手デザイナーまでが参加している(⑪)、(⑫)。最

近のフランス人デザイナーの活躍はめざましく、数々のニューデザインの中にエキサイティングなデザインが多く見られた。特に注目すべきことは、ニューマテリアルの開発に各デザイナーが集中していることで、ラディカル・コンフォルト・デザインを提案していることだ。

最後にDRIADE社が主催するイベントに日本の妹島和世、D.チッパーフィールド

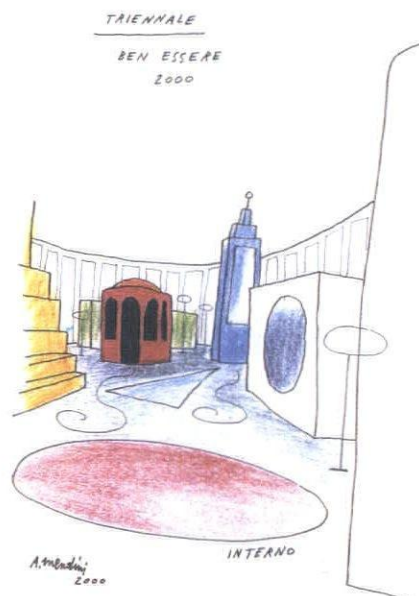


⑥チェア「RAINBOW CHAIR」、P.ノルゲ、CAPPELLINI



⑦収納BOX「FLORENCE」、A.ヒューベリ、ZANOTTA

photo: A. Brusaferrì



⑧展覧会「essere ben essere」会場構成ドローイング、A.メンディーニ



⑨展覧会「essere ben essere」より「Method Remembered II」、内田繁、PASTOE

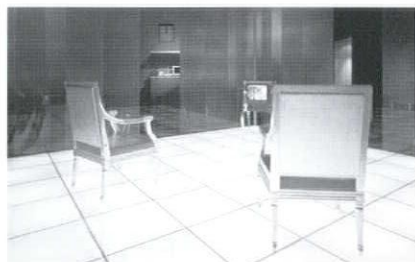
photo: T. Libiszewski

ド、A.アストーリが参加した。妹島は「UNA STANZA TUTTA PER SÉ (自分だけのための部屋)」を提案した⁽¹³⁾。照明を暗くした空間に、畳のモジュールを光る照明ラインで表現し、その空間に蒲団状のローベッド、ドーナツ状のソファ、スチールINOX製の光沢のある小テーブル、PC製のイエローのチェア、スチール製のナチュラルな花台をレイアウト

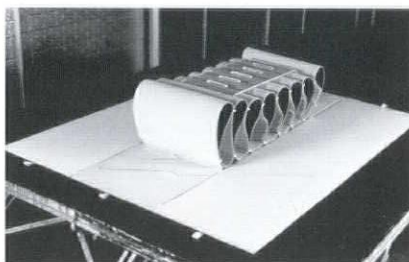
している。彼女がデザインしたキュートなファニチャー群が暗闇に静かに浮かび上がり、現代的な日本のイメージを見事にプレゼンテーションしていた。また、部屋にある古い壁画とインスタレーションがミステリアスなハーモニーを醸し出していたのが印象的だった。

2000年のミラノ・サローネは、昨年までのサローネを完全に「イノベーション」

したと言ってよいだろう。デザイン文化と社会経済が、相対的な補完関係にあることは周知の事実だが、デザイン文化が活性化することにより、社会経済が活性化することを、今年のミラノ・サローネはパラドキシカルに証明しているのである。(あら・ともいく／建築家・デザイナー、在フィレンツェ)



⑩ 展覧会「essere ben essere」より〈OBSOLETE OBSCENITY (時代遅れのワイセツ)〉P.スタルク、TECNOGEL



⑪ 展覧会「SUPER STUDIO」よりローテーブル〈FRAISE〉I.コラン、V.I.A. photo: V. Muracciole



⑫ 展覧会「SUPER STUDIO」より照明〈BALADEUSE〉X.ムーラン、V.I.A. photo: V. Muracciole



⑬ 〈UNA STANZA TUTTA PER SÉ (自分だけのための部屋)〉妹島和世、DRIADE

Exhibition Report

展覧会レポート

ハイナー・シリング展「エントロピーの森」

会期:

2000年5月27日～6月25日

会場:

横浜美術館アートギャラリー+

ヨコハマポートサイドギャラリー

偶然と幾何学

ハイナー・シリングの日本における展開

秋山伸



横浜美術館アートギャラリー



ヨコハマポートサイドギャラリー



本誌の読者ならご存じのように「エントロピーの森」は昨年連載されたハイナー・シリングの写真と山形浩生のテキストによるコラボレーションのタイトルである。シリングはこの仕事をきっかけに日本滞在中に撮影した写真を同名のシリーズとして現在まで制作を続けているが、それらは母国ドイツを中心に海外でも高い評価を受け(最近、ベッヒャー・シュレー^{*}の先輩であるルフと共にボン美術館の大きな個展シリーズのラインナップに加わることが決定したようだ)今や彼の代表作の一つとなりつつある。

ロンドンのAAスクールにおけるグループ展「RECONSTRUCTING SPACE」、フランクフルトの画廊における個展に続く同シリーズの3回目の発表となる今回は、性格の異なる二つの会場を用いた比較的大きな規模の展示となった。さらに、この展覧会に合わせて本誌の連載がまとめられ、彼にとって初めての作品集といえるものがうまれた事からも、今回の発表がこの若い写真家の活動の大きな節目となることは間違いないだろう。

彼の写真のイメージから何を讀むか、あるいはその中にどのような想像力が存在するか等に関しては、今回に限り山形による鋭敏な都市洞察を含む(そして都市・建築関係の読者に向けられたものとしては多分にシニカルな)テキストが既に存在するので、ここでは努めて形式的な面から彼の作品と展示のレポートを試みたい。

ベッヒャー夫妻が給水塔や溶鉱炉などにモチーフを限定し、複数の物件を撮影・蒐集し、タイプへと分類を施した上で展示・出版するのはよく知られているが、このタイポロジーの手法は多かれ少なかれ門下生に引き継がれている。シリングがはじめて日本で紹介されたのも母国で制作された「通路 スーパーマーケット」というやはりタイポロジーのシリーズであった(ラーコーに思想的影響を受けたという彼が、この巨大量販店という消費社会の分類・管理の装置に目をつけたのはいかにも理解できることだ)。しかしながら、本誌の連載を含めて、日本に来てからはこのような制作態度が一時的に保留されたことは注目に値する。少なくとも「エントロピーの森」の連載においてシリングはタイポロジー的な作品は発表しなかったし、それどころかむしろ、タイポロジーの規範を逸脱すべく意図的に多様な手法を試みていたようにさえ見受けられるのだ。以下にその中で特に重要と思われる手法を二つ挙げ、実例として連載時の本誌号数と写真番号を示したい。

1: 多くのタイポロジー作家が排除してきた²⁾、空間自体の固有性に対して偶発的な要素(人物・車・飛行機・雲・影など)の取り込み; 9901-2、9901-3、9903-3、9910-3、9911-2、9912-2など。

2: 風景の空間性を極端な2次元の幾何学性へと還元してしまうこと。つまり、多焦点的な遠近法に対しベッヒャーを始め多くのベッヒャー・シュレーがこだわった中心遠近法さえも放棄するかのような作品; 9906-2、9906-3、9908-2など。

さて、上記のような試行を経て今回の展示ではいくつかの作品に彼の新たなタイポロジーへの取り組みが再度発現している。それは、ベッヒャー

ーやヘーファー、シュトゥルツ、ルフらの手法を空間的タイポロジーというならば、それに対して時間的タイポロジーというべきものである。例えば「Komazawa Ballgame Stadium, Tokyo 1998」と題されたトリプティックは、定点観測により三つの異なる競技の風景を捉えたものだが、そこにはそれぞれの競技ルールに従って分節されたフィールドとその中に配置された群衆がつくる「制度の幾何学」とでもいうべき「タイプ」が浮き彫りにされている。これは偶発的要素をむしろ積極的に取り込むことによりはじめて可能になった手法といえる。ついでにいうなら、今現在映画制作に興味があるというシリングが先達たちの排除してきた時間性に着目していると推測することも可能ではないだろうか。

最後に展示構成について触れておきたい。

「アーバン・ランドスケープ」と題されたポートサイドギャラリーでの展示では先述のトリプティックに加え、それぞれ巧みに画面に配された人物がユーモラスな印象さを与える新作3点が発表された。

「テクニカル・ランドスケープ」と題された横浜美術館での展示は大きく趣を異にしている。俯瞰や遠景によるヒューマンスケールを超越したモチーフが多く選択されているばかりか、二組の時間的タイポロジーの作品と、求心性または正面性の高い2作品が展示全体に対称軸を形成し、空間はいささか(サブライム)な雰囲気演出されている。ところがそれを裏切るかのように、床面には作家本人が集めてきた様々な鉢植えが、偶然生じたタイル状のカーペットの色の違いに合わせて配列されている(私の知る限りフォーマルな写真展示と床のインスタレーションがこのような同居している例はジャン・マルク・ビュスタマントの一部の展示くらいである)。ファウンド・オブジェクトの構造的配置(むしろレディメイドのアレンジメント?)といった、ドイツ美術のもう一つの流れであるボイス・シュレーの手法をもシリングが継承している、といってみても彼は喜びもしないだろう。私としてはとりあえず、それらの植物にたっぷり水を与えないという彼の冷酷さに拍手を送りたい。

(あきやま・しん / グラフィック・デザイナー)

* 1: ヨーゼフ・ボイスが教鞭を執りその研究室を拠点に数々のセンセーショナルなアクションを展開し、ボイス・シュレーと呼ばれる作家たち(アンセルム・キーファー、イムクネーベル、ギュンター・ラウ、ラインハルト・ムハ、ローズマリー・トッケル、カタリーナ・フリッツェ等)を世界に輩出したことで知られるデュッセルドルフ美術アカデミーで、ほぼ同時期に写真部門の教授を務めていたのがベルント・ベッヒャー(写真家としての活動は夫人のヒラとの共同名義のもとで行われる)であり、彼の一連の門下生がベッヒャー・シュレーである。カンディダ・ヘーファー、アクセル・セウテ、トーマス・シュトゥルツ、アンデレアス・グルスキー、トーマス・ルフなどが写真の領域にとどまらず世界の現代美術界で近年めざましい活躍を見せている。シリングは90年代に彼のもとで学んだ最も若い世代に属する。

* 2: 厳密に言えば、例外がいくつか存在する。シュトゥルツは初期の代表作である「美術館」のシリーズで動く鑑賞者を積極的に画面の中に取り入れている。しかし、それは鑑賞という行為を示す記号的なもので、シリーズの作品間での人物の位置の差異そのものが「タイプ」を示すものではない。また、それまで決して人影が現れなかった「街路」シリーズの中国編では、「美術館」のシリーズ同様、いささかブレた歩行者たちが画面に再登場している。ヘーファー、ビュッテ、ルフの作品では動く要素としての車や人物が現れることは稀である。ベッヒャーにいたっては搭状構築物の背景に必然的に現れる空の雲さえも長時間露光等で消し去った。ただ、グルスキーは初期から人物、車、飛行機を積極的に、というよりは空間と区別せずモチーフとしている。このグルスキーがベッヒャーのタイポロジーから最も近いところにいることはここから明らかである。

Exhibition Report

展覧会レポート

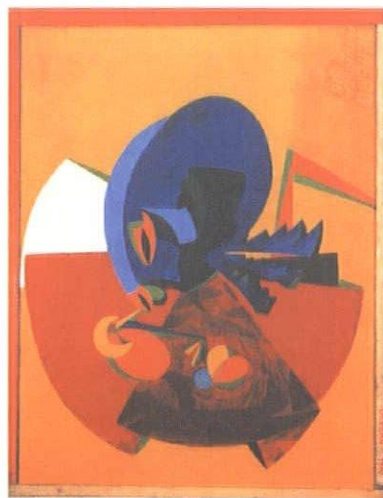
デペロの未来派芸術展
——20世紀のイタリア・デザインの源流
東京展
会場：
東京都庭園美術館
会期：
2000年4月4日(火)～5月23日(火)
大阪展
会場：
サントリー・ミュージアム〈天保山〉
会期：
2000年6月1日(木)～7月2日(日)
資料提供：アプトインターナショナル

未来派抽象主義に見る、 造形と色彩の挑戦

菊田樹子



(未来派デペロ) シンボル・マークのデザイン (1925～26)



(小鳥の運動) (1916)

未来派第2世代を代表するイタリアの芸術家、フォルトゥナート・デペロ (Fortunato Depero / 1892～1960年) の全貌を紹介する展覧会が、東京都庭園美術館で開催された。

デペロは、ブルーノ・ムナリーやエットレ・ソットサスも認めているように、現代のイタリア・デザインに多大な影響を与えた人物である。未来派抽象表現を、絵画や立体造形物から、舞台美術や衣装、家具などの日用品、インテリア、グラフィックなど、さまざまな分野で展開していったデペロの功績は、美術やデザインといった、いずれかひとつのカテゴリーでは括りにくい。一時期ファシズムと強いつながりを持った未来派のメンバーであったこともあり、正当な評価が遅れている芸術家と言える。本展覧会は、時を経てなお色褪せることがない、デペロの独創性溢れる造形表現と色彩感覚に触れる絶好の機会になったのではないと思う。

100cm×135cmの油彩、木製のマリオンネット、フェルトのタペストリー、食器棚や椅子、新聞広告などバラエティーに富んだ展示作品は、それらのユニークな造形や豊かな色彩を眺めているだけでも単純に楽しい。

初期の抽象絵画からは、動きのダイナミズムやスピード感を賛美し、同時性の視覚表現を追求した未来派理念が強く感じられる。中でも、1階の会場に展示された〈小鳥の運動〉に目を惹かれた。デペロは、鳥が飛ぶ様子を、直接目に見えない内部の動きや力を抽象化することで表現した。みなぎる緊張感を喚起する、連続する奇妙な形と鮮やかな色彩が視覚に強く訴えてくる。デペロの関心は、他の抽象主義者のように自然や感情をいかに抽象化していくかという問題ではなく、形と色彩の組み合わせで、どうやって動きのダイナミズムを表現できるかという点にあった。結果として生まれた、叙情性とは無関係のクールな感覚が、まさに今目的である点も興味深い。

未来派抽象主義者とは、デペロと、同じく未来派の芸術家ジャコモ・バッラ (Giacomo Balla / 1871～1958年) を意味する。このふたりの芸術家は、ひたすら純粋に抽象表現を探究したという点で、未来派の中でも特異な存在である。後の芸術家に与えた影響を考えると、彼らの功績は計り知れない。ダイナミズムを表現する抽象形態は、むしろ立体的な創造

に応用すべきとしたバッラに共鳴したデペロは、絵画の枠を超えて立体作品に挑戦する。残念ながら展示されていなかったが、抽象化されたさまざまな形の組み合わせが、モーターで動く遊び心溢れる立体は、後のキネティック・アート (動く芸術) へ向かう現代美術家たち、また、おそらくムナリーにも、強いインスピレーションを与えたに違いない。

バッラの後を継いで、未来派抽象表現を推し進めたデペロは、抽象形態と独自の色彩感覚を組み合わせることで、強い視覚効果を生み出すことに成功する。さらに、ファンタジー溢れる発想力に加え、人形劇や広告の世界まで活躍の場を広げていく。

形によって生かされる色彩、色彩によって生かされる形の追求は、デペロが運営していた「未来派の家」という工房でも続けられた。次々と製造されたフェルトのタペストリーやクッションは、未来派抽象主義と職人の技術とが結実した名作としても注目に値する。幾何学的な形に裁断された、鮮やかな色のフェルトの組み合わせが作り出す世界には、赤い悪魔やオレンジと黄色のピエロが登場し、まるでおとぎの国の一場面のように幻想的である。

デペロの色彩感覚は、現在のイタリア・デザインに脈々と息づいている。鮮やかでカラリとした色調、大胆とも思える組み合わせが生む調和と視覚に訴える力は、私たちが惹きつけて止まないイタリア・デザインの素晴らしいオリジナリティに他ならない。

年代順に作品を追っていくと、未来派という前衛芸術運動と私たちの生活の距離を縮めたのは、デペロであったことがよくわかる。芸術を、伝統に縛られたアカデミックな世界から解放し、より生活に近づけることが未来派の目標だったことを思い出せば、デペロほどその理想に近づいた未来派芸術家はいないのではないだろうか。

未来派は、絵画、彫刻、音楽、演劇、建築、映画など多様な分野を横断した、革新的な芸術運動だった。過激かつ大胆な手法で運動を推し進め、ヨーロッパのカフェインと言われた詩人マリネッティ。大都市に現代生活の理想を見た「未来主義建築宣言」のアントニオ・サンテリア。未来派には、デペロ同様、知られざる奇才がまだまだ他にいることも思い出された。(きくた・みきこ／美術ジャーナリスト)

Exhibition Report

展覧会レポート

三宅一生展 ISSEY MIYAKE Making Things

会期:

2000年4月29日～8月20日

会場:

東京都現代美術館

川上典子

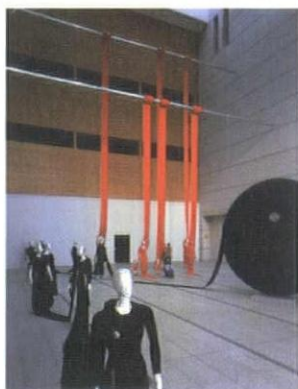
人々のための「Making Things」から
も の つ く り
拡がるデザインの可能性



ジャンピング



ラボラトリー



ジャスト・ビフォー／A-POC

東京展では新たに、パリ・コレの映像を紹介する「映像の部屋」や出版物を紹介する「ミニライブラリー」が設けられている。会場構成は空間デザイナーの吉岡徳仁。

(写真＝新 良太)

「光の建築家」の手になる空間と、色鮮やかな衣服のダンス……。

ジャン・ヌーヴェルの設計として知られるパリ、カルティエ現代美術財団で、1998年10月から翌年2月まで催されていた「ISSEY MIYAKE Making Things」展。三宅一生の90年代の活動を紹介するこの展示は、同財団始まって以来最多の、10万人の来場者を記録するものとなった。

辛口の批評をこよなく愛するパリの人々が口々に賛えたその展覧会は、1999年11月から3カ月、ニューヨークのエース・ギャラリーへと巡回する。ここでも来場者はひきもきらず、こうしたギャラリーでは桁外れの数字となる3万人もの来場者数を記録したのだ。

アート界からもファッション界からも注目されている展覧会「ISSEY MIYAKE Making Things」は、現在、東京で開催中だ。

自由な服をめざして

若い頃、パリでオートクチュールを修行していた三宅が衣服デザイナーの道を歩もうと考えたのは、1968年に目の当たりにした「五月革命」がきっかけだった。伝統的価値観から自由になることを願う人々の熱気に出逢い、デザイナーとなって多くの人々のための服をつくろう、と決心したのだという。さらにはニューヨークで、ヒッピーが着ていたTシャツやジーンズを目にし、そうした自由な服をデザインすることを願う。

70年代、西欧の思想が中心となっていたファッション界を大きく揺さぶった三宅の「一枚の布」という発想。サリーや着物のように身体と服との間に空間をもたせることによる布地の可能性、衣服の展開の可能性が追求されていった。

その発展形として80年代には、折ったり畳んだり、ひねったりすることで生じる布の表情が研究されていく。そして、こうした活動を経て辿りついた「折り紙ブリーツ」から、ここ東京における展示は幕を開けるのだ。

色とりどりのブリーツが跳ねる「ジャンピング」。かつてウィリアム・フォーサイスは「身体にも一枚の皮膚がついたよう」とブリーツを初めて着た際の感想を述べているが、ブリーツは、身体に呼応し、動作に合わせて自由に動く服だ。

ブリーツと同様に既存の服の概念から自由になった服が「ジャスト・ビフォー」。コンピュータ・プログラムで編みだされる布地に切り取り線が施されており、ハサミを入れることでドレスが誕生する。さらにこの発想は、チューブ状ニットの切り取り線をカットすることでシャツやスカート、バッグ等が生まれる「A-POC」へと進んでいく。

各所を自由にカットできる種類も含むA-POCは、着る人が関与することで完成する服であり、全ての人にとってのカスタム・メイドの服でもあ

る。また、金、銀、銅の箔を古着に施すことで古着を一新させる「スターバースト」も、現代の生活と衣服との関係に目を向け、21世紀を見据える三宅の提案のひとつだ。

異分野のクリエイターとのコラボレーションを早くから行ってきた三宅を象徴する「ブリーツ ブリーズ イッセイ ミヤケ ゲスト・アーティスト・シリーズ」のコーナーと共に、「ラボラトリー」のコーナーも実に三宅らしい展示といえる。テクノロジーを駆使した制作過程がCGアニメーションで披露されている。通常なら企業秘密となる舞台裏を公表してしまっているのは、自身の活動が「次世代に向けて、物づくりのステップになること」を願ってのことだという。

人々の反応を喚起する……

三宅は、服を、自身の創造性を表現する媒体に選んだ。ここでいう服とは単に色やフォルムを問う服とは一線を画すものであり、美意識も機能も社会の空気も、すべてを取り込みながらなお自由に進む服なのだ。さらには、現代のテクノロジーをとり入れながらも、A-POCに見られるように、人の手を介在させることを重視した服でもある。

つけ加えるべきことは、そうした活動が、展覧会では実に躍動的に紹介されていることだ。パリから始まる会場のデザインはすべて吉岡徳仁が手がけているが、東京展の会場は先の2カ所よりずっと広い。2843m²の空間をたっぷり使い、最大で19mの天井高を活かしたダイナミックなインスタレーションが考えられている。

そして、細かな説明を重ねるよりもシンプルにまとめることが重視されているのは、パリ展から一貫するところ。「服というものは、着る人のなかに情感や反応を喚起しなければ、面白くもなんともありません」と語り、「この展覧会で表したいことは、この時代にいかに生きるべきか、自ら問いを発している人たちに向けて、私なりの考えを示すこと」だと語る三宅は、来場者が会場で体感できるものを重視しているのだと思う。

それにしてもこれほど楽しい展示はなかなかないのではなかろうか。私は残念なことにNY展を見逃してしまったのだが、パリと東京の会場で目にできたのは、専門家はもちろん、カップルや親子連れの嬉しそうな姿だ。とりわけ「ジャンピング」の跳ねる服や、「ラボラトリー」のCGを前にはしゃぐ子供たちの姿には、はっとさせられる。

会場を包む高揚感と来場者の明るい表情。それらが何故もたらされるのかを考えることは、三宅の活動を理解するだけでなく、物づくりの本質を考えることにつながるだろう。

(かわかみ・のりこ／デザイン・ジャーナリスト)

第7回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展

www.venezia-2000.com

La Biennale di Venezia 2000

今回のヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展の会期は長い。4ヵ月強、従来の2倍ちかい。[project.co.jp]はその会期中、彼らが提案している新しい都市の成立「ネットポリス」のシミュレーションを行おうとしている。それが「ネットポリス・コントロールサイト」である。インターネット上で展開される、すべての人々にオープンなこのシミュレーションにより、都市の成立についての新しいパラダイムの発見、世界各国の人々から寄せられたデザインの集積による新しい都市像の提案などが、「ネットポリス」の具現化に向けて試されるのである。

現実の都市は動き続け、変わり続ける。問題はその変化を誰がリードするか。それを支配者、管理者の手から、都市を使用する、所有する一人ひとりの手に引き戻したい、というのが[project.co.jp]の一貫したスタンスだ。それが今回のシミュレーションへとつながっている。ユーザーネイティブな「新しい計画」の発見、それがヴェネチアの展示会場で、ネット上で、リアルタイムで視覚化されることになる。都市は一人ひとりに始まる。

それは下記のサイトに参加することから始まる。

Netpolis Control Site = <http://npcs.nex.co.jp/>

(まつの・べん/建築家、ライフアンドシェルター社)

「ネットポリス」はネットワーク回線で結ばれた世界に点在する小都市群であり、ひとつの時間を共有する。「ネットポリス」の住民は個人のユニット[cell]を併いながら、この世界規模のネットワーク内で活動することになる。中身の人間が交換可能な既存の都市に対し、中身の人間+セルという不可分な関係の集積による都市の成立が試されるわけである。以下にシミュレーションの概要を紹介する。

■住民登録

・最初に住民登録を行う。

ー住民権および住民情報シートが返送される。

ー下記に紹介するふたつのシミュレーションへの参加権利が与えられる。

■セル・カスタマイズ

・住民は個人ユニット[CELL: W15m/D4m/H4m]をひとつ所有する。

・住民は居住するポリスをひとつ選定し(当初は4ヵ所準備)、各ポリスの条件に合わせてセルをカスタマイズする。

ーセルは各ポリスで準備されるフレーム(構造・動線・搬送システム・ライフラインを含む)にはめ込まれる。フレームタイプは各ポリス毎に異なり、それぞれの成立環境に最適化されたものが用意される。

ーセルの基礎データをサイトよりダウンロードし、各自モデリングし、アップロード、という手順になる。

ーネットポリス時間と周辺地域との時差、環境、既存の文脈などに基きデザインが行われる。

・各ポリス内、ポリス間でのセルの移動は自由であり、その都度移動先の状況に合わせてセルがカスタマイズされる。

・セル・カスタマイズ・コンペ

ーアップロードされたセルデザインの中から魅力的な作品を定期的に選出し、プライズが与えられる(予定)。

■ネットポリス・クライアント・フォーラム

・新たな都市の成立について議論する場である。

・都市の新たな役割・質・期間・既存文脈との融合などのアイディア的な視点、地域環境・都市の規模・フレームの形状などのテクニカルな視点、を中心に検討がなされ、ネットポリス全体の指針が更新される。

・議論に基づき、随時新たな都市が提案され(または役割を終えた都市は解体・リサイクルされ)、それがセルの移動を生む。

・それぞれの都市における住民同志のコミュニティ・フォーラムも設定される(予定)。



NPCSの機能を視覚化したネットポリス・フォーラム

出展者グループ [project.co.jp] とは……

30代の若手建築家グループの有志が発端となり、今までにない新しい都市像を切り拓くため、異分野のデザイナー・評論家・科学者の参画を求めて発足したプロジェクトチーム。

メンバー：井坂幸恵(建築家)、佐々木龍郎(建築家)、西森陸雄(建築家)、山崎あかね(建築コーディネーター)、北野宏明(科学者)、津村耕祐(ファッションデザイナー)、福田和也(文芸評論家)、松井龍哉(デザイナー)、豊島浩次(メディアデザイナー)

カスタマイズした個人ユニット[CELL]をVRMLで閲覧できる

デザイン= [project.co.jp]

Book Review

書評

評者 本江正茂

建築学科を出ると何になれるか

評者は大学の建築学科の、いわゆる「意匠系」研究室で助手をしている。意匠系の卒業生の大半は、アトリエ事務所や大手組織事務所、ゼネコンの設計部などで、建築の設計に従事している。ところが、近ごろ、学生がなかなか就職できなくなってきた。不景気だからか、無能だからか、見る目がないからか、と採用してもらえない理由をあれこれ考えてみましたが、どうも学生の方が、なんと少しでも就職したいとは思っていないようにも見える。無気力だということではない。ためらっているように見えるのだ。これから社会で、ほくらは建築家になれるのだろうか？ たとえ、そうなれたとして、それは一体どういうことなのか？

評者はまた、「みんなの建築」というインターネット上のBBSの運営にたずさわっている。ドメインがac.jpということもあって、発言者は建築系の学生が多い。——どうしても建築の設計をやりたいんです。でも、アトリエは待遇がひどいし。建設需要は減るに決まりだから、組織もゼネコンも危ないし。いきなり独立するってコネも何もないし。オランダは景気いいらしいスね……。

甘えるな、覚悟が足らぬ、嫌ならやめちまえ……そういう批判も繰り返される。一面は真実だ。だが、そうした気合だけでは、萎えそうになる魂を奮い立たせることができなくなっているのも事実である。身を粉にする努力をしても永遠に報われないのではないかという不安を、ぬぐいさることができないでいるのだ。

その一方で、さまざまなきっかけから建築に目覚め、アタシも建築家になりたい！という人の書き込みもひっきりなしである。高校生もいるし、今は建築とは無縁の仕事をしている社会人も多い。トレンディドラマの主人公の建築家に憧れて……なんてバカはひとりもない。それなりに真剣に考えながら、建築の道へとアプローチしようとしている。

たくさんの方が建築に夢を見て、建築家をめざしてがんばっている。にもかかわらず、建築家とはどのようなものなのか、ほとんど正体がつかめないうまま、夢ばかりが膨れ上がり、それに応じて不安と躊躇も広がっている。ホントのところ、「建築家」って何なの？

本書はその困難な問いに、ひたすらリアルに真正面から答えようとする。書名はもちろん「裸の王様」のもじりである。

「神のごとき万能的造物主としての『建築家』」のイメージは極めて根強い。多芸多才で博覧強記の『建築家』像は今日でも『建築家』の理想なのである。しかし、理想は理想であって、実態はどうか。そんな『建築家』などますます複雑化する現代社会に望むべくもない。だから『裸の王様』ではないか、そんな『建築家』など最早幻ではないか」という認識から出発し、阪神淡路大震災がえぐり出した戦後の建築界のあいまいさ、さまざまな団体や人々がそれぞれの立場からバラバラに提示してきた建築家像など、日本における「建築家」の職能史を概観していく。論点は幅広く、また読み切れないほど詳細な注が添えられているから、すぐれた教科書としても利用できる。索引がないのは残念だが。

後半では、社会改良家としての建築家を取り組んだ近代都市計画から、まちづくりの事例、ありうべき建築家像の検討を経て、本書における布野の提案の中心である「タウンアーキテクト」という職能が論じられる。タウンアーキテクトとは、本来的には「まちづくりを推進する仕組みや場の提案者であり、その実践者」である。その意味では「建築家」でなくてもよいが、多様な条件をまとめあげて、具体的な「まちの姿」に表現していくスキルをもつ（はずの）「建築家」こそタウンアーキテクトとしての役割を果たすべきだ、というのである。

悩める学生諸君には一読をすすめたい。リアルで生臭い建築家像に直面すれば、建築家とは何か、ますますわからなくなること請け合いである。だが、その混迷のうちにこそ「その依って立つ場所を常に開いていこうとする」新しい建築家像が生まれ出る可能性がある。旧態然とした職能がこれからも温存されていくなどということはありえない。

また本書は、裸なのは私じゃない、と思った建築家たちにこそ、読まれるべきである。「重層する差別の体系」が存在している日本の建築界には、いかに厳しい批判であっても、つねに他人事として聞き流されてしまうようなところがある。裸なのはオレだ、と自覚する必要がある。建築家をめざす人たちの躊躇のわけを、その未熟のせいにしてばかりはいられないはずなのだ。

（もとえ・まさしげ／東京大学大学院工学系研究科建築学専攻助手）



「裸の建築家——タウンアーキテクト論序説」
布野修司＝著
A5判 240頁
建築資料研究社 2500円

Books

新刊紹介

『ル・コルビュジエとはだれか』

磯崎 新=著

B6判 208頁

王国社 1850円

体験と愛着に彩られた、イソザキのコル論を取録。著作、研究書ともに、あまりにも膨大なテキストの存在で、逆に真相があやしくなってきたコルを再考する。虚像を官能的に打ち砕いたエッセイ「海のエロス」や二川幸夫の写真はいまなお新鮮。



『インテリアと日本人』

内田 繁=著

B6判 240頁

晶文社 2000円

アルド・ロッシとの協同でもしられる、我が国の代表的インテリアデザイナーが、その創作活動を通して「日本的空間」の特質を解き明かしてゆく。気配までは遮断しない柔らかな仕切りとして襖や障子を論じ、インテリアの原点を茶室空間にみる。



『新版現代デザイン事典 2000年版』

勝井三雄・田中一光・向井周太郎=監修

伊東順二十・柏木 博=編集委員

B5変型 312頁

平凡社 3200円

「ベーシック」「コミュニケーション」「インダストリー」「スペース」の4領域のもと、環境からアニメまでの24項目に、各界からの執筆陣が経験と英知をつづった。図版、コラム、資料も充実。



『エントロピーの森』

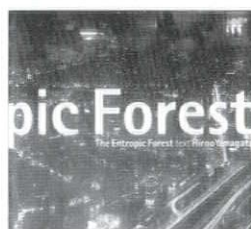
ハイナー・シリリング=写真

山形浩生=著

B5変型 112頁

ハイナー・シリリング展実行委員会 1800円

ベッヒャー・シュレーの気鋭写真家と、『新教養主義宣言』で注目される著者。都市のインフラを舞台にしたフォト・エッセイ集。昨年本誌で連載。(問い合わせ=tel+fax: 03-3943-9026、上記委員会)



『高断熱・高気密バイブル』

南 雄三=著

A5判 224頁

建築技術 2200円

「外断熱vs内断熱」として議論される断熱・気密の住宅問題を、この道の第一人者が自然との関連をふまえた大きな視野で解説。「自然を取り込むためにしっかりとしたシェルターをつくる」という矛盾の難路を、明解なテキストと図版ですすむ。



『ピカソ論』

ロザリンド・E.クラウス=著

松岡新一郎=訳

B6判 296頁

青土社 2600円

美術だけでなく現代思想の領域にも多大な影響を与えている著者が、ピカソの創造行為における謎、手法、様式的問題、各作品の構成などを、最先端の批評理論と多数の図版によって新解釈を示す。



『ドナルド・ジャッド 建築』

ドナルド・ジャッド=著

大島哲蔵=訳

A5判 150頁

ギャラリーヤマグチ 2500円

ミニマリズムの代表的アーティストとして知られたジャッド。日本初の論集となる本書は、1989年にドイツで開かれた展覧会カタログの邦訳版。(問い合わせ=tel: 06-6583-8150、上記ギャラリー)



『見る 測る 建築』

遠藤勝勲=著

A5判 176頁

TOTO出版 1429円

実測し、スケッチを描く。そんな設計活動の原点を建築家人生の支えとし、菊竹清訓の右腕を40年間つとめた著者。半生を語るインタビューと、美しく緻密な寸法入りのスケッチで構成されるこの一冊は、ものづくりの根源をCAD世界に問う。



『GLASS』

— Structure and Technology in Architecture —

ソフィア&ステファン・ペーリング=編

A4判 152頁

プレステル社 DM98.00

世界各国の最新の建築事例に即しながら、建築におけるガラスの諸側面を網羅した本書。ファサード、工業、構造的技法、素材、システムといった構成からなる。図版オールカラー、テキスト英独。



伊東豊雄展

「今日における都市居住の可能性」(仮)をテーマに、アーバン・プロジェクトを模型、図面、写真により紹介する。

会期：6月17日(土)～7月30日(日)

時間：12:00～18:30 月曜日休館

会場：GAギャラリー

東京都渋谷区千駄ヶ谷3-12-14

入場料：500円(10名以上の団体 400円)

問い合わせ：GAギャラリー(担当：山口)

Tel: 03-3403-1581 Fax: 03-3497-0649

ブルース・ギルデン写真展 ニューヨーク・東京・大阪

マグナム集団の写真家として有名なアメリカの写真家、ブルース・ギルデンの写真展。代表作のニューヨークとともに、初公開の東京、大阪の作品を加え、モノクローム50点を紹介する。

会期：6月22日(木)～7月31日(月)

時間：10:00～20:00 期間中無休

会場：写大ギャラリー

東京都中野区本町2-9-5 東京工芸大学中野キャンパス内 Tel: 03-3372-1321

オープン・スタジオ タンジブル・ビット展 情報の感触 情報の気配

作品を展示するだけでなく、その制作プロセスをも紹介することで、理解を深めようという試みのオープンスタジオ。今回は、石井裕率いるMITメディア・ラボのタンジブル・メディア・グループが登場する。

会期：6月23日(金)～7月9日(日)

時間：10:00～18:00(金曜日は21:00まで)

会場：NTTインターコミュニケーション・センター(ICC) ギャラリーA

東京都新宿区西新宿3-20-2 東京オペラシティ内
入場料：一般800円、大生600円、高中生400円(15名以上の団体割引あり)

関連イベント：

6月24日(土) 14:00～

アーティスト・トーク

石井裕+タンジブル・メディア・グループ

7月1日(土) 15:00～

シンポジウム「科学と芸術の間」

パネラー＝岩井俊雄、石井裕

7月2日(日) 15:00～

シンポジウム「仮想と現実の間」

パネラー＝スコット・フィッシャー、石井裕

問い合わせ：ICC(担当：嶋田、伊東)

Tel: 03-5353-0800 Fax: 03-5353-0900

ブラジル建築都市ワークショップ2000 参加者募集

ヴァナキュラーからの変換をテーマとし、ブラジルをフィールドに、大都市サンパウロ、周辺小都市エンブ、海岸リゾート都市マセイオを訪れてヴァナキュラーなるものを抽出し、それをベースに近代都市ブラジリアにてデザインプロポーザルを行うをいう、刺激的な建築ワークショップ。

期間：9月13日(水)～9月23日(土)

参加費用：338,000円

募集定員：18名(最小催行人員：10名)

同行講師：連健夫、中村陽子、田村元、渡辺

研司(現地講師もあり)

問い合わせ：

連健夫建築研究室(企画・内容に関するもの)

Tel: 03-5456-5134 Fax: 03-5456-5160

東京宅配旅行事業部(担当：雲路)

Tel: 03-5360-1264 Fax: 03-5360-1261

日韓合同ワークショップ参加者募集

8月14日(月)～8月24日(木)まで、ソウル大学アーバンデザイン学部主催による日韓建築系大学生、大学院生を対象とした合同ワークショップが開催される。日韓の建築家を講師にして、ソウル市内の5つの敷地に提案を行うもので、期間中、日本人建築家による講演会も予定されている。

指導講師：三宅理一、古市徹雄、岸和郎、坂茂、小嶋一浩、西沢立衛、及び韓国の都市計画家、建築家

応募資格：日本国内の建築、都市計画系の大学生、大学院生または設計事務所に勤務する20代の者
定員：10名

参加費：100,000円(航空券、宿泊費、市内交通費を含む)

申込締切：7月31日(月) 申し込みはTelにて申し込み・問い合わせ：古市徹雄・都市建築研究所(担当：原田)

Tel: 03-3403-5710 Fax: 03-3403-5730

ソ連時代の住宅・都市政策講演会

日時：7月19日(水) 18:00～20:00

会場：学芸会館(神田) 306号室

Tel: 03-3292-5931

講師：神品恭二(福岡大学名誉教授、建築学)

会費：500円

定員：30名(Faxにて要申し込み)

申込締切：7月10日(月)

申し込み・問い合わせ：ソビエト建築研究会(担当：川上)

Tel: 03-3352-8531 Fax: 03-3352-8532

秋吉台芸術アカデミー2000：建築 越境の空間：変容する都市 参加者募集

様々な分野の第一線で活躍するアーティストたちを講師に招き、全国から公募した参加者が講師とともに芸術村に滞在しながら制作・創造のプロセスを共有し、若手の育成と芸術文化に対する関心のすそ野を広げることを目的とした短期滞在型セミナーの参加者募集。

期間：9月4日(月)～9月10日(日)

期間中に関連企画あり。

会場：秋吉台国際芸術村、山口市内各所

講師：エルコ+ブリジット(ランドスケープ・アーキテクト)

募集人員：20名(応募者多数の場合、応募書類の内容を元に選抜を行う)

参加料：学生(高・大生) 27,000円、一般 37,000円(宿泊費、夕食費込み)

応募締切：8月11日(金) 必着

選考結果の発表：応募者多数の場合、選考結果は8月中旬頃に全応募者に郵送またはFaxにて通知。

応募方法：下記に問い合わせのこと。

問い合わせ：秋吉台国際芸術村(担当：辻、山本)
山口県美祿郡秋吉町秋吉中山田50

Tel: 0837-63-0020 Fax: 0837-63-0021

大地の芸術祭

越後妻有アートトリエンナーレ2000 開催

会期：7月20日(祝)～9月10日(日)

会場：新潟県越後妻有6市町村全域(約762km²)

関連イベント：地球環境シンポジウム、アーティストによるワークショップ、サマースクール、コンサート、他。

総合ディレクター：北川フラム

参加アーティスト：

招待アーティスト＝32カ国138名、公募アーティスト＝6名(1月15日現在)

問い合わせ：越後妻有大地の芸術祭実行委員会

妻有事務局 新潟県十日町市大字北新田1-10

Tel: 0257-57-2637 Fax: 0257-57-2285

東京事務局 東京都渋谷区猿樂町29-18-A8

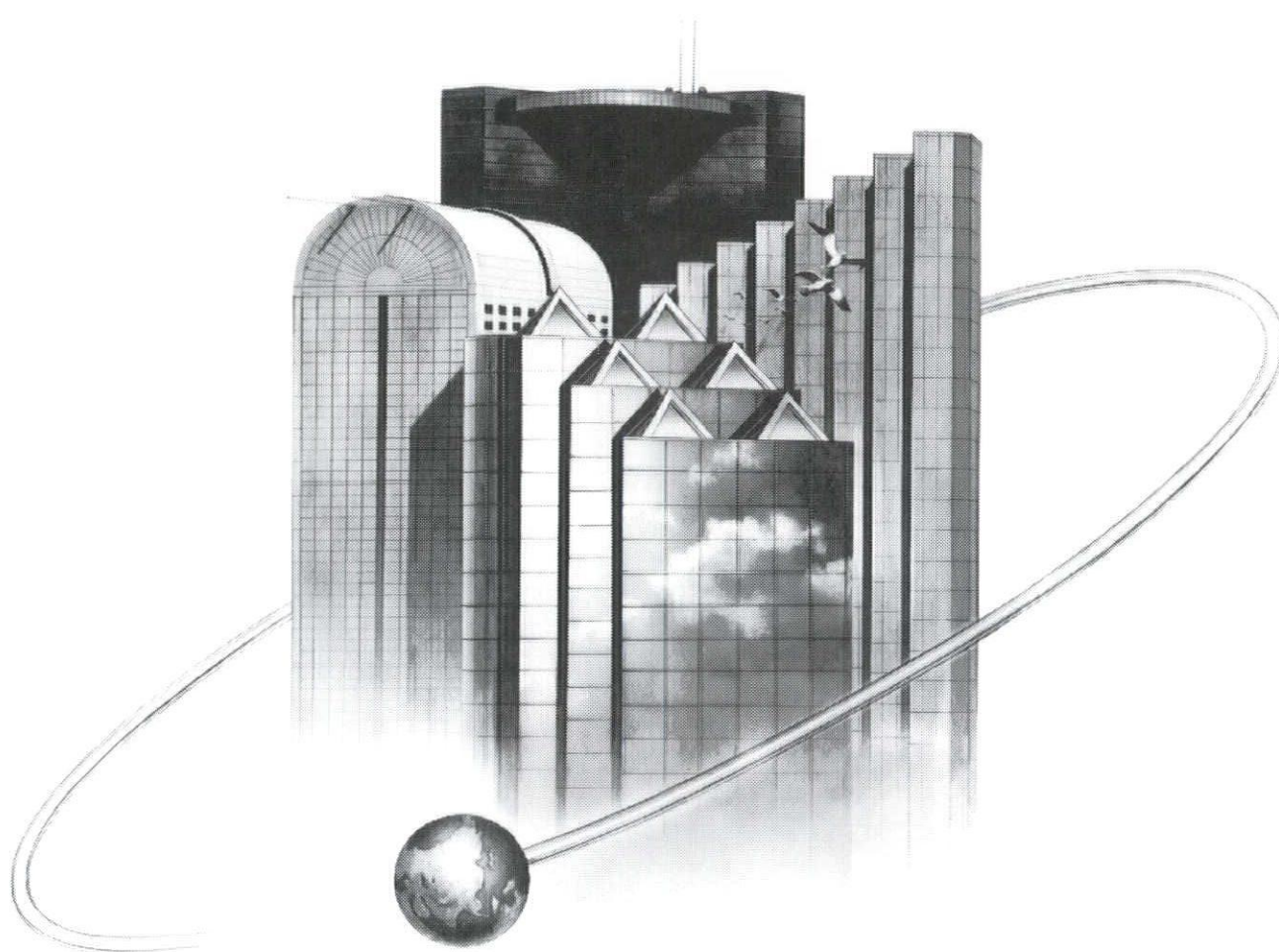
Tel: 03-3476-4868 Fax: 03-3476-4874

お詫びと訂正

SD0006号に誤りがありました。p.68の写真クレジットに「新 良太：p.60」を追加。p.6の「ポリカーボネイト」は「ポリカーボネイト」の誤りです。

訂正してお詫び申し上げます。

快適創造



人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。

それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。

都市、コミュニティ、産業施設…人を取りまくさまざまな環境について考え、

その理想を追いつづけている三機工業は、

いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。



三機工業株式会社

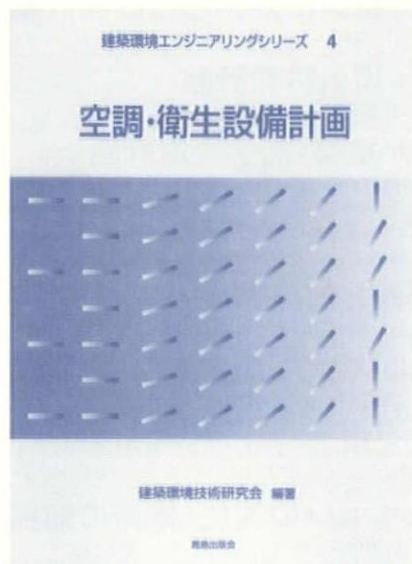
〒100-8484 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL.03(3502)6111

今月の新刊

建築図書の最新刊書と、それに関連した書籍を紹介しております。

当社の新刊すべてをご覧になりたい方は隔月で奇数月発行の「新刊案内」をご請求ください。

当社のホームページ上でも新刊書を紹介しておりますのでご覧ください。



建築設計の実務者に送る、環境・設備設計のシリーズ

「建築環境エンジニアリング」シリーズ

全4巻

建築環境技術研究会 編著 各巻A5判

地球的規模の環境保全の動きは、建築計画においても重要な課題である。省資源・省エネルギーを図ることはいうまでもなく、快適な建物内の環境をつくり出すために、自然換気や自然採光など、周辺の環境と共生できることがこれからの建築計画には必要なのである。

本シリーズは、新たな世紀の建築設計のために、建築設備・環境設計に関する基本的な実務知識を、建築設計者向けに解説するものである。

第4巻

空調・衛生設備計画

210頁 本体3,600円

空空調和設備計画に重点を置き、給排水設備計画、ガス・油設備計画、防災設備計画、ごみ処理設備計画について、建築設計者にもわかりやすく記述した。

●好評既刊

第1巻

環境からみた建築計画

本体3,400円+税

環境全般について、また建築が環境に及ぼす影響、逆に人間が建築の環境から受ける影響を概説。

第2巻

建築にかかわる設備計画

本体3,000円+税

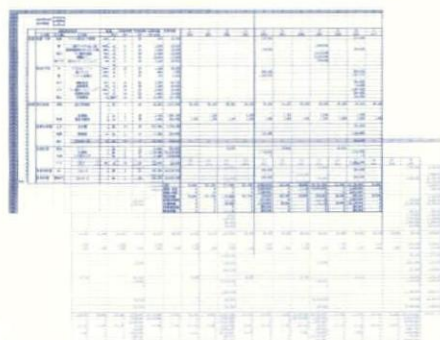
建築計画・設備計画を具体化する方法、また建築・構造・設備が相互に配慮すべき事項について。

第3巻

電気設備計画

本体3,800円+税

電源設備計画、照明設備計画、情報・通信設備計画、防災・防犯設備計画、輸送設備計画など。



建物情報管理と ファシリティマネジメント

EXCELで長期修繕計画とライフサイクルコストを考える

柳瀬正敏 著

A5判・96頁 本体2,200円

建物長寿命化に向けた資産価値評価はその要望が増大。長期修繕計画にとって建物カルテの作成には建物情報の記録・蓄積が肝要。EXCELで誰にでもできる簡便なデータ入力および計算結果事例を図版を多用して平易に解説。

主要目次 FMの目的とは／建物の長期利用計画とは／記録すべき建物情報／情報管理のしくみ／ライフサイクルシステム／評価・検討手順／インプットデータ／計算方法／プログラム作成のヒント／修繕・更新周期の計算／長期修繕計画の計算／EXCELでライフサイクルコストを考える

鹿島出版会

〒107-8345
東京都港区赤坂6-5-13

TEL. (03) 5561-2551
FAX. (03) 5561-2561

http://www.kajima-publishing.co.jp
E-mail: info@kajima-publishing.co.jp

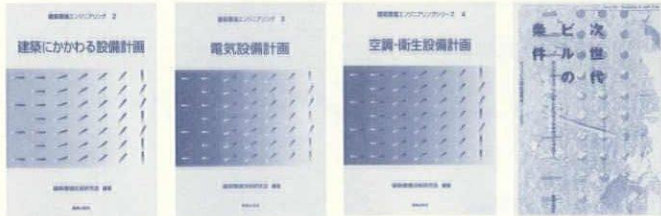
*ご注文は最寄りの書店へ。お急ぎの方は宅配便(着払い)がご利用できます。

2000年刊行図書一覧

[1月—6月]

2000年1月より6月までに刊行した建築関連図書の一覧です。

詳しい内容につきましては、当社のホームページ上で紹介しておりますのでご覧ください。



建築環境エンジニアリング② 建築にかかわる設備計画

建築環境技術研究会 編著/A5判・168頁 本体3,000円+税

建築環境エンジニアリング③ 電気設備計画

建築環境技術研究会 編著/A5判・224頁 本体3,800円+税

建築環境エンジニアリング④ 空調・衛生設備計画 [7月刊]

建築環境技術研究会 編著/A5判・224頁 本体3,800円+税

次世代ビルの条件 ロングライフ/フレキシビリティ&キャッツシュフロー
オフィスビル総合研究所 ベースビル研究会 編著/四六判・288頁 本体2,500円+税

高層ビル火災の排煙と制御

ジョージ.T.田村 著 吉田治典 訳/A5判・288頁 本体7,000円+税

高齢化・介護福祉のためのヘルスケア施設づくりの実際

野口哲英、中田利夫 著/A5判・208頁 本体4,200円+税

新しい高齢者住宅と環境 スウェーデンの歴史と事例に学ぶ
ヤン・ボールソン 著 今井一夫 監訳 石黒暢 訳/A5判・152頁 本体3,100円+税

これだけは知っておきたい マンションの劣化・修繕の知識

印藤文夫 著/B6判・154頁 本体2,100円+税

計画・設計実務のための病院形成の方法

小川健比子 著/B5判・408頁 本体16,000円+税

建築家の住宅論 鈴木恂

鈴木恂 著/菊判・128頁 本体2,500円+税

劇場の計画と運営 やわらかい建築へ

山崎泰孝 著/四六判・272頁 本体3,300円+税

建築プロデューサー

浜野安宏 著/四六判・240頁 本体2,000円+税

源氏物語空間読解

安原盛彦 著/四六判・232頁 本体2,500円+税

近代日本の郊外住宅地

片木篤、藤谷陽悦、角野幸博 共編/A5判・608頁 本体8,400円+税

Space Structure 木村俊彦の設計理念

渡辺邦夫 監修 佐々木睦朗 他著/A5判・244頁 本体3,800円+税

動く家 ポータブル・ビルディングの歴史

ロバート・クロネンバーグ 著 牧紀男 訳/B5変形判・184頁 本体4,300円+税

巨匠 エットレ・ソットサス

ミルコ・カルポーニ 編 横山正 訳/B5変形判・280頁 本体3,200円+税

SD選書236 都市デザイン 野望と誤算

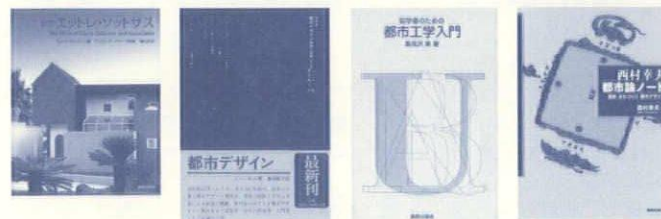
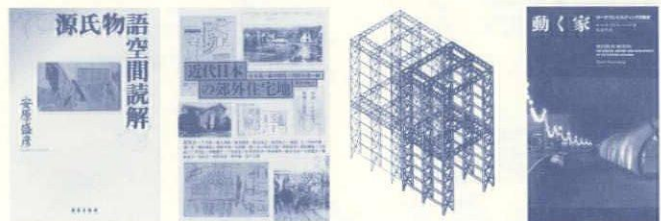
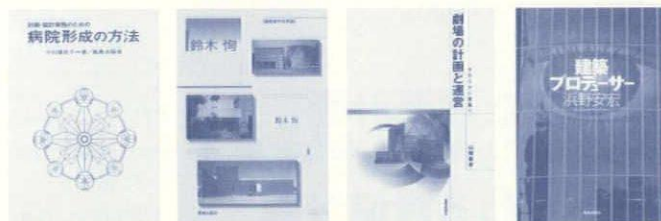
ジョナサン・バーネット 著 兼田敏之 訳/四六判・288頁 本体2,100円+税

初学者のための都市工学入門

高見沢実 著/四六判・212頁 本体2,300円+税

西村幸夫 都市論ノート 景観・まちづくり・都市デザイン

西村幸夫 著/A5判・208頁 本体2,900円+税



好評既刊書

建築図書の既刊書を中心に、話題の本を紹介しております。

既刊書すべてを収録した年度版の図書目録も用意しておりますので、ご請求ください。

当社のホームページ上でも既刊書を紹介しておりますのでご覧ください。



新しい高齢者住宅と環境 スウェーデンの歴史と事例に学ぶ

ヤン・ポールソン 著 今井一夫 監訳 石黒暢 訳
A5判・152頁 本体3,100円+税

21世紀の高齢社会で求められるのは、従来の老人ホームのような「施設型」ではなく、それまで住んでいた「まち」で、「すまい」により近い居住環境を実現することだ。そのために先進国スウェーデンに学ぶべきことは多い。



次世代ビルの条件

ロングライフ/フレキシビリティ&キャッシュフロー
オフィスビル総合研究所 ベースビル研究会 編著
四六判・288頁 本体2,500円+税

21世紀のオフィス建築は、社会資産として長持ちすること、フレキシブルで居住性に優れていること、地震に強く、省エネなど環境への配慮など、さまざまな視点が求められる。本書では次世代ビルについて50の提案をしている。



源氏物語空間読解

安原盛彦 著
四六判・232頁 本体2,500円+税

源氏物語に描かれる空間構成では、貴族社会の生活、生活方法の支え、意識感覚など複雑な心理描写がドラマチックに展開する。寝殿造を背景に、平安時代の建築様式および空間描写の情景を、新物語的な仮想現実で読解。文学を超えて建築空間を再現し再認識する。



巨匠 エットレ・ソットサス

ミルコ・カルポーニ 編 横山正 訳
B5変型判・280頁 本体3,200円+税

オリベッティのタイプライターのデザインで一躍有名を馳せたイタリアン・デザインの巨匠ソットサスの全貌をフルカラーで紹介。その活躍の場を都市計画、建築デザインにまで広げている。



建築プロデューサー

浜野安宏 著
四六判・240頁 本体2,000円+税

建築プロデュースという未踏の領域を切り開き、精力的に実践にいそむこと四半世紀。その豊富な経験をもとに、建築プロデューサーが心得るべきこと、建築家に求められるものを熱情をもって書き下ろした書。



近代日本の郊外住宅地

片木篤、藤谷陽悦、角野幸博 共編
A5判・608頁 本体8,400円+税

明治以降、近代化に伴って日本各地に造られた様々な郊外住宅地30事例を紹介。住宅地の様々なタイプの代表例が、600点に及ぶ写真、図面と共に紹介される。日本各地に造られた郊外住宅地研究の集大成。



高齢化・介護福祉のためのヘルスケア施設づくりの実例

野口哲英、中田利夫 著
A5判・208頁 本体4,200円+税

高齢化社会の到来を迎え、医療は予防治療からケア回復へと転換。介護法施行により、今後の施設づくりに不可欠な医療特性の模索、地域に密着した併設機能のあり方を、事業収支、補助金、計画設計例で解説。



建築家の住宅論 鈴木恂

鈴木恂 著
菊判・128頁 本体2,500円+税

ミニマルで透明度の高い空間をつくり続けてきた鈴木恂による住宅論。住み手が生活の変化の中で育んでいく空間の原型をつくる建築家は、建主とともに空間についての夢を共有し、さらにそれを現実のものとしていく職能であると論じる。



動く家

ポータブル・ビルディングの歴史

ロバート・クロネンバーグ 著 牧紀男 訳
B5変型判・184頁 本体4,300円+税

携帯テント、軽量船舶・飛行船・航空機、仮設劇場や博覧会建築、軍事施設である海上基地・移動橋梁、モービルハウス、海上油田基地、災害仮設住宅、宇宙建築……仮設で可動なあらゆる構造物を技術史的に解説する。



SD選書236

都市デザイン 野望と誤算

ジョナサン・バーネット 著 兼田敏之 訳
四六判・288頁 本体2,100円+税

16世紀以降こんにちに至る500年間の欧米の主要な都市デザイン事例を、豊富な図版と平易な文章による解説で概観。専門家のみならず都市デザインに興味をもつ実務者・学生の教養書・入門書として好適の1冊。

建築ガイドブック

鹿島の建築ガイドブックは持ち歩きに便利な四六判サイズで
近代建築から最新の現代建築まで、代表的建築物を各コース別に紹介します。



東京現代建築ガイドII 2000's

松葉一清 著

四六判・256頁 本体2,800円+税

90年代に首都圏に建てられた名建築204選

11の特色のある地域別にコースを作成。
首都圏の様々な地域とそこに分布する建物を見ることにより
東京の90年代を様々な旅することができる。
最新の現代建築に興味を持つ読者に必携の建築ガイド。

主要目次 A地区—新宿、B地区—渋谷周辺、青山、恵比寿、C地区—皇居周辺、D地区—臨海副都心、E地区—品川、太田、目黒、
F地区—隅田川沿岸、G地区—豊島、足立、板橋、H地区—杉並、世田谷、I地区—多摩、西郊、J地区—横浜、K地区—幕張、
建築家索引、建物索引

●関連図書



東京現代建築ガイド

松葉一清 著

四六・250頁 本体2,800円+税

東京を中心とした首都圏に1980年代以降建てられた現代建築の中から200点を選んで紹介する。地域別に分けられた13のコースの冒頭にはガイドマップがついており、戦後の名建築も所要所要で紹介。



ヨコハマ建築案内 1950-1994

吉田鋼市 著

四六・224頁 本体2,700円+税

横浜を中心に神奈川県に建てられた1950年以降の代表的建築を紹介する。神奈川県立近代美術館からランドマークタワーまで、気鋭の建築史家が語る詳細な解説と美しい写真で構成されたガイドブックで、巻末に地図も入る。



近代建築ガイドブック [関東編]

東京建築探偵団 著 村松貞次郎、山口廣 顧問
四六・276頁 本体2,300円+税

官庁街、オフィス街、看板建築群、別荘地、産業遺跡など特徴ある24コースに沿って作品を写真と共に紹介。建築様式、設計者の紹介も盛り込み、首都圏の近代100年の変貌が建物を通して読みとれる。学生、一般向けガイド。



ヨコハマ建築暮情

吉田鋼市 著

四六・232頁 本体2,800円+税

横浜を中心に神奈川県に現存する約90棟の建築に光を当て、エキゾチック・ヨコハマ、公共建築、銀行、教会、ミッションスクール、別荘建築、工場、ホテルなどテーマ別に紹介するもの。巻末にガイドブックを収録。



近代建築ガイドブック [関西編]

石田潤一郎、沢田清、柴田正己、中川理、福田晴俊 他共著
四六・312頁 本体2,800円+税

好評の関東編に続く第2弾。大阪の商業の中心、船場の商業建築にはじまりミナミの歓楽街、橋めぐり、堺の工場群、港町神戸の洋館、兵庫県の産業遺跡、あめりか村、文化の都京都の大学施設等々、24コース600余りの作品。



西洋館漫步 建築スケッチの旅

田中薫 著

四六・248頁 本体1,900円+税

筆者が数年に亘ってスケッチをして歩いた、北海道から台湾に至る西洋館を、印象記と共に紹介するもの。それぞれの土地に息づく建物が、長い年月を経てどのような形で生きつづけているかを生き生きとした文章で語る。

劇場関連図書の紹介

既刊書の中から、劇場に関連する図書を紹介しております。

既刊書すべてを収録した年度版の図書目録も用意しておりますので、ご請求ください。

当社のホームページ上でも既刊書を紹介しておりますのでご覧ください。



劇場の計画と運営

やわらかい建築へ

山崎泰孝 著

四六判・272頁 本体3,300円+税

21世紀の劇場のあり方を施設、運営の両面から探る

21世紀の劇場のあり方を施設、運営の両面から探るもの。現在、日本各地で行われている様々な劇場の活動を豊富な資料とともに紹介。実践的な劇場論である。自治体、劇場関係者、建築家など劇場の運営、計画に携わる人々にとって大いに示唆をあたえるものとなる。

●主要目次 1.昨今の劇場事情—多様化する劇場空間／2.企画運営の様々な試み／3.劇場づくりの思想と方法／4.「やわらかい劇場」の提案



ホールの計画と運営

伝統芸能劇場から新多目的ホールまで

山崎泰孝 著

四六・248頁 本体2,900円+税

ルナホールの計画から運営まで手がけてきた著者が専門家の立場からこれからのホールの計画と運用について述べる。前半では現在、様々な様相を見せる劇場の現状分析と問題点を指摘し、後半で新しいホールへの提案をする。



演劇のための空間

伊東正示、シアターワークショップ 共編

A4変・178頁 本体5,700円+税

近年の多くの実例の中から、高い評価を得ているものを中心に精選し、豊富な写真と図面に解説を添えて形態別に分類して紹介。仮設・野外／転用／スタジオ／可変／歴史／専用／最近の事例 対談=鈴木純士+奥平与人



21世紀の地域劇場

パブリックシアターの理念・空間・組織・運営への提案

清水裕之 著

A5判・248頁 本体3,700円+税

21世紀に求められる新たな地域と劇場との関係をパブリックシアターと位置づけ、そのあり方を探る。市民の手で創造する新たな舞台芸術への提案を地域、劇場との関係をふまえて述べるもの。劇場関係者必読の書。



《SD選書195》 劇場の構図

清水裕之 著

四六・268頁 本体1,800円+税

古代ギリシャから現代に至る劇場空間の変遷を通して、演じる側と観客の位置や関係性がどのように変化してきたかを分析する。そして芸能と建築の創造的交流のための共通言語を見出すことを意図している。



劇場

舞台芸術のための建築計画と設計

ロデリック・ハム 著 劇場技術研究会 訳

B5・232頁 本体6,200円+税

英国舞台技術協会との協力のもとに書かれた劇場の計画と設計のための入門書。劇場の一般技術解説にとどまらず、規模設定、空間形式、施設運営、製作現場の諸設備に至るまで劇場に関わるすべての事象を明快に説く。

磯崎新の本

1960年代以降、磯崎新は日本のリーディング・アーキテクトとして、世界のISOZAKIとして走り続けた。

21世紀のインザキの新たな戦略は、この7冊の本に練められている。

●著書



見立ての手法

日本的空間の読解

磯崎新 著

A5・338頁 本体3,400円+税

めざましい設計活動を展開する国際的建築家・磯崎新の最新建築論集。本巻は、日本人建築家の作家論、あるいは都市論・庭園論をととして、日本的空間または日本文化を論じたユニークな評論集である。



イメージゲーム

異文化との遭遇

磯崎新 著

A5・306頁 本体3,400円+税

今この世界が、イメージだけが浮遊する決定不能の場となり、私たちのすべてのデザイン行為が、イメージをもてあそぶゲームの様相を呈しているという状況認識をもつ著者の建築を中心とする、ポストモダンへの眼差。



始源のもどき

ジャパネスキゼーション

磯崎新 著

A5・320頁 本体3,800円+税

伊勢の式年遷宮に秘められた謎を解き明かすイセ論をはじめ、日本の建築文化の近代化の過程にくりかえし現われる和様化を論じる、グローヴァルな日本文化論。



造物主義論

デミウルゴモルフィスム

磯崎新 著

A5・336頁 本体3,800円+税

「建築」とは何か? という根源的な問いを自ずから投げかけ、ティマイオスからニーチェにいたるさまざまなテーマで織りなす「建築論」の一大ページェント。「建築」の現在を問い、未来を展望する磯崎新の話題作!!

●対談集



建築の一九三〇年代

系譜と脈絡

磯崎新 対談

A5・250頁 本体2,400円+税

磯崎新の対談第2集。吉田五十八、生田勉、土浦亀城、吉武泰水、稲垣栄三、高山栄華、河野鷹思の7氏と語り、日本現代建築の「系譜と脈絡」を明らかにした。



空間へ

根源へと遡行する思考

磯崎新 著

A5・522頁 本体4,600円+税

磯崎新の建築家としての出発点を決定づけた「プロセスプランニング論」また思想的自伝「見えない都市」など、1960-70年代の空間論・都市論32編を収録する処女論集。四半世紀を経たいまでも新鮮さを失っていない。



建築の解体

一九六八年の建築情況

磯崎新 著

A5・450頁 本体4,200円+税

1968年の時点で後のポストモダンの到来を予告した衝撃の書。ホライン、アーキグラム、ムーア、プライス、アレグザンダー、ヴェンチュリ、スーパースタジオ、アーキズームを論じる。改めて磯崎の慧眼ぶりに脱帽。



手法が

カウンター・アーキテクチャ

磯崎新 著

A5・336頁 本体3,800円+税

建築家・磯崎新の「近代建築との絶縁宣言」としてさまざまな手法の駆使によるメディアの生成を論じた「手法論」、情報装置構想からカタログ文明論までを含む「模型論」のほか、「反建築ノート」等1970年代の軌跡の集大成。



ポスト・モダンの時代と建築

磯崎新 対談

A5・280頁 本体2,600円+税

ポスト・モダニズムに関しても最大の話題の主である磯崎新の、最近10年間(1975-84)の対談集。内外の批評家17人と、日本も含めた世界の文化の具体的な状況、「ポスト・モダン」という時代の兆候について語っている。

SDライブラリー

21世紀を築くデザイン叢書

本シリーズは、建築史および建築文化全般に及ぶ内容を扱い、特に空間デザインにウェイトを置き、明日の生活文化の構築に寄与できる叢書づくりを目指しています。

A5判の特長を生かしたビジュアルで、洒落かつ斬新な内容を盛り込み、新世紀へのかけ橋として、読者に親しまれるよう編集されたものです。

1 アール・デコの摩天楼

小林克弘 著
272頁 本体3,400円+税

1920-30年代のニューヨークの摩天楼を分析し、アール・デコの摩天楼のデザインとはどんなものか、またアール・デコの時代とはどんな時代であったのかを、今日の問題に引き付けて詳しくかつ興味深く紹介。

2 屋外空間の生活とデザイン

J.ゲル 著 北原理雄 訳
248頁 本体3,300円+税

本書は、住宅地域や市街地の公共空間—広場や街路などの屋外空間—のデザインを、そこで住む人々の生活やそこで繰り広げられる行為や行動を、社会心理学および行動科学の立場から分析・考察し提案をするもの。

3 近代建築の系譜(上)(下)

W.J.R.カーティス 著 五島朋子、澤村明、末廣香織 共訳
各400頁 本体各4,600円+税

長い間待ち望まれていた本書は、近代建築史の全貌を通読に堪えるようにバランスの取れたタッチで書き出している。著者は、実用面、美的面、そして社会性の諸次元を重ね合わせたアプローチを採っている。感動的読書!

5 アーキテクト 建築家とは何か

R.ルイス 著 六鹿正治 訳
306頁 本体3,800円+税

本書は建築学科の学生および卒業したての人たちに向けて、建築家とはどういう職業か、何を期待すべきかを説き、指針を与えるとともに、すでに第一線で活躍している建築家が自己を見詰め直し再認識するテキストである。

6 デザインの思考過程

P.ロウ 著 奥山健二 訳
256頁 本体3,300円+税

本書はデザインの過程での思索や思考の普遍化を試みている。いわば、建築や都市を創造するために、デザイナーが「探し出す」という個人的な次元に直接関係する考察の構造や探求の焦点を明らかにすることが目的である。

7 ガウディの七つの主張

鳥居徳敏 著
224頁 本体2,900円+税

本書は、同著者による「アントニオ・ガウディ」「ガウディの建築」につづき3作目でありそれぞれ独立しているが3部作を構成する。今回は豊富な語録を頼りにガウディ建築の不可解さの解明を7章に分けて試みている。

8 イタリア・ルネッサンスの建築

P.マレー 著 長尾重武 訳
280頁 本体3,700円+税

本書は、15・16世紀を中心にルネッサンス建築を時代と都市、そして建築家という3つの視点から論じている。各章とも、建築家の主要作品が見やすい図版・写真により解説されており、イタリア主要都市を巡る良き案内書でもある。

9 光と風と構造 建築デザインと構造のミステリー

R.マーク 著 飯田喜一郎 訳
192頁 本体2,900円+税

本書は、複雑な構造物の応用解析などに用いる現代の工学的方法を平易に紹介し、それを古代から近世までの石造天井を架けた大建造物に応用した研究をまとめたもの。SD選書183「ゴシック建築の構造」の姉妹編。

10 パタンランゲージによる住宅の建設

C.アレグザンダー 他 著 中埜博 監訳
288頁 本体3,600円+税

著者は、現代の住宅生産システムの中でも、パタンランゲージの精神とその理論の枠の中で住宅建設が可能であることを証明した。また手作り住宅の設計・施工の方法を原理化し、住宅が格安にできることを説いている。

11 デ・アーキテクチュア 脱建築としての建築

J.ワインズ 著 大島哲蔵、三好庸隆 共訳
322頁 本体4,200円+税

本書は、ミケランジェロからピカソまでの美術の成果を踏まえ、建築への新しい視点を探るものである。著者は本書によって、現代人の心を捉える建築表現を展望する。現代芸術家のプロジェクト・ポートフォリオを収録。

12 コラージュ・シティ

C.ロウ、F.コッター 共著 渡辺真理 訳
288頁 本体3,800円+税

20世紀の都市デザインを支配してきた理想都市の2つの方向性—未来派的ファンタジーと伝統的な都市へのノスタルジアの概念が調和した都市が著者の追求する都市の理想である。C.ロウの注目の書。

13 ミース再考 その今日の意味

K.フランプトン 他著 澤村明、EAT 訳
224頁 本体3,300円+税

K.フランプトン、P.アイゼンマンら、現在第一線で活躍中の建築家・史家によるヴァラエティに富んだ評論集。従来のモダニズム賛否という二元論的視点から解き放ち、多角的にミースをとらえた読みやすい一書。

14 ルイス・カーン建築論集

L.カーン 著 前田忠直 編訳
258頁 本体3,600円+税

「沈黙と光」という言葉に象徴される近代建築の巨匠ルイス・カーンの美しいディテールと崇高な空間の織りなす建築。それを産み出すフィロソフィを伝える10編のステートメントをまとめたオリジナル・アンソロジー。

15 メガロポリスを超えて

J.ゴットマン、R.A.ハーバー 共編 宮川泰夫 訳
352頁 本体5,700円+税

今日、高度情報化社会・テレコミュニケーションの発達に伴う巨大都市の再編成について論述し、未来都市の軌道修正を提言。中でも新しいキーワードによる、都市の地球規模での相互作用を全面的に留意しながら分析する。

16 18世紀の建築 バロックと新古典主義

J.サマソン 著 堀内正昭 訳
208頁 本体3,400円+税

ヨーロッパの18世紀は、バロックとロココによって幕を開けた。諸都市では多くの教会堂や宮殿が建てられ、黄金期を迎える。後半になると新古典主義への転向がみられ、病院、刑務所、銀行などの世俗建築が建てられていった。

17 デザイン・ドリームス 映画に見る近代建築

D.アルブレヒト 著 秋正勝 訳
272頁 本体3,900円+税

美しい映画の演出は、20世紀初頭より近代建築の表現、セット・デザインの効果を重視。160余点のステールで、ミース、コルビュジエ、ライト他のモダニズムを検証。ヨーロッパからハリウッドにいたる映画界の躍進を「建築」で展望。

18 アダムの家 建築の原型とその展開

J.リクワート 著 黒石いずみ 訳
296頁 本体4,000円+税

本書は、建築の原型という理念が建築史の中でどのように変化し実現されていったかを、ギリシャ、ローマの時代から現代に至るまでの主要な建築理論と建築作品を対象に考察した建築論の古典的名著。磯崎新氏も絶賛。

19 圏外からの建築 映画・写真・鏡・身体

D.アグレスト 著 大島哲蔵 訳
240頁 本体3,600円+税

著者アグレストは、本書の9つの章を通して、映画・写真・鏡・身体を参照しながら、機能主義に代表される硬直化したモダニズム都市イデオロギーを批判する。現代の問題の根幹をなす論点が縦横に展開される。

20 建築と非建築のはざままで

R.ハービンソン 著 浜田邦裕 訳
208頁 本体3,100円+税

本書は、建築を分析していくための新しいシンタックスを「建築の意味性」「虚構性」に見いだそうという視点から建築を語る建築論である。庭園、モニュメント、要塞、廃墟、絵画空間、イマジナリーな建築に言及する。

21 空間を生きる

R.ポフィール 著 太田泰人 訳
192頁 本体2,900円+税

バルセロナの現代建築家R.ポフィールが語る建築論。全体は権力、創造、建設の三部構成となっておりバルセロナ、パリ、ニューヨーク、モスクワと駆け巡る建築家の活動スタイルとその過程での様々な条件についての思索を通して建築理念を語る。

22 古典主義建築 オーダーの詩学

A.ツォニス 他著 藤井博巳、丸山洋志、藤山哲朗 訳
224頁 本体3,400円+税

古典主義建築を概観することにより、形の構造から古典的建築物を捉え直す方法を探るもの。多彩な凡例とその構成規則に対する分析により、建築のみならず音楽、絵画、演劇が共有する古典主義の生成規則を明らかにする。

7月号 6月25日発売

SD

本体1905円+税

特集 ツール・ド・ロマネスク 中世の光と空間 II: フランス建築巡礼
フランス中南部のロマネスク建築を紹介した前回特集(9610号)につづき、今回はフランス西部の巡礼路にそって中世教会建築を取り上げる。
●写真=堀内広治 ●作品=サント・マリー・マドレーヌ聖堂(ヴェズレー)、サン・ラザール教会(オートン)、サン・フィエール教会(トゥルニユ)、サン・ピエール・エ・ポール教会(モンソー・レトワール)、サン・マルタン教会(シャペーズ)、サン・イレール教会(スミュール・アン・ブリオネ)、サント・クロワ・エ・サント・マリー教会(アンジー・ル・デュク)、他

http://www.kajima-publishing.co.jp 鹿島出版会 ☎03-5561-2551

7月号 6月18日発売

建築技術

本体1762円+税

特集 基本から学ぶ「風」のすべて 監修: 田村幸雄(東京工芸大学) この特集では「風」に関係する力学の基礎事項や耐風設計、建築計画時に考慮すべき事項など、さまざまな視点から風を解説します。 風を知る/風と快適な建築空間/風の力学/風の設計フロー/風のクライテリア/風と周辺環境/風とディテール/風と構造フォルム/風と施工
特別記事: 建築業界とISO④ 隔月連載: 建物と電磁環境④
連載: 構造設計とコンピュータ解析、建築技術のアクション

http://www.kenchiku-tosho.co.jp/gijutsu 建築技術 ☎03-3222-5951

隔月刊
No.28

7月17日発売

造景

本体2800円+税

〈特集〉都市計画法改正とまちづくり
法改正の概要/法改正の背景と課題/東京都特別区のまちづくり事例/これからのまちづくり/他
ブラハ―春を迎えた街並み
マルクト―市の立つ広場②
ポーランドとチェコのマルクト
〈記事〉グリニッジヴィレッジの歴史的まちづくり
スペイン・ビレナーの村おこし

http://www.ksknet.co.jp 建築資料研究社 ☎03-3986-3239

隔月刊
No.43

7月5日発売

confort

本体1905円+税

〈特集〉小住宅
都市の30坪以下の敷地を生かす/50年後の最小限住宅/細長敷地の段々家/地下室の設計ポイント/光を通す、素材・建材/他
〈新連載〉Back to the future 日本の住まい
〈連載〉生き続けるモダニズム建築 レーモンドの音楽堂
一脚の椅子・その背景 コノイド・チェア

http://www.ksknet.co.jp 建築資料研究社 ☎03-3986-3239

7月号 7月1日発売

住宅建築

本体2333円+税

〈特集〉山と繋がる木の家
紀州の山と匠の技をむすぶ/兵庫発・材木を通して山と設計者をむすぶ/岐阜の工場と東京の設計者の協同
〈連載〉●生き続ける道具と職人 畳 ●身近な歴史の再発見
●住まいの玩具箱 ●復元思想の社会史 観光都市「古都」の成立 ●レポート 資産として優れた家

http://www.ksknet.co.jp 建築資料研究社 ☎03-3986-3239

2000

6

7

ARCHITECTURAL MAGAZINES INFORMATION

■ご購入は最寄りの書店でお求め下さい。ここに掲載してある雑誌は、建築関係雑誌発行出版社の協力により最新号を告知していただきます。雑誌の一部は各出版価格の表示がされているものも含まれていますが、詳しくは各出版社にお問い合わせください。(BNF事務局)

7月号 6月28日発売

商店建築

本体1943円+税

New Shops 複合商業施設/メディアージュ&アクアシティー、港北モザイクモール&都築阪急、グランベリーモール、ブティック ヒカリ、ブティック プリーツプリーズ他
業種特集/ビアレストラン 嘉ッ波、蕎麦&バー 松玄2、和風ダイニングバー 御蔵、和風ダイニングバー ぽんぽり、チャイナダイニングバー 西安餃子、ダイニングバー 房s他
素材特集/擬石をインテリアに使う ワールドデザイン/ミラノソローネ ハイライト 商・環・況インタビュー

http://www.sk-club.co.jp

商店建築社 ☎03-3363-5770

商店建築増刊

創刊2号 7月上旬発売

I'm home.

本体1905円+税

〈主な内容〉デザイナーのつくる非日常のあるホームデザイン
上質なデザインと上質な暮らしをテーマにインテリアデザイナーや建築家による都市型ホームデザインを多数紹介します
特集/海の暮らし、山の暮らし
海と山のウイークエンド&リゾートハウスのデザインを紹介
特集/バルコニーガーデンのデザイン
広告企画/ナチュラルにこだわるインテリアパーツ 他

http://www.sk-club.co.jp

商店建築社 ☎03-3363-5770

別冊商店建築
好評発売中

SKブックス

本体1400円+税
他1800円+税

〈好評発売中〉シリーズ「SKブックス」は読む商店建築。設計のコツや施工現場で直面するトラブルを具体的に解説。成功するための商品づくり、売場づくり、繁盛店、消費動向やその背景を豊富な実例を基にレポートします。
①よくわかる現場学 ②アイラブレストラン ③困ってしまった設計の話 ④急成長するHMRの秘密 ⑤クレーム・トラブル・バスターズ ⑥飲食トレンド最前線 ⑦空の高さ ⑧U.S.A. ショップ・ウェーブ2000 ⑨(6月発売) ホテルクラシック

http://www.sk-club.co.jp

商店建築社 ☎03-3363-5770

My GARDEN 別冊
No.1 好評発売中

GARDEN&LANDSCAPE

本体1429円+税

特集 ロビン・ウィリアムスの世界
建築・景観設計の専門家のための新シリーズがスタート
第1号はグリーン博みやざき'99で日本で初めて公開されたロビン・ウィリアムスの英国式庭園を徹底解説。
ガーデンデザイン実践講座一庭を飾る/遊びの場所としての庭/ガーデンプランのいろいろ 植栽デザイン・造園施工とメンテナンス/ガーデンハウスのウェザリング/日本庭園との違い/オリジナル植栽図面/植物リスト/他

http://www1.newweb.ne.jp/wa/marumo-p/ マルモ出版 ☎03-3496-7046

季刊

No.20

好評発売中

LANDSCAPE

本体2505円+税

特集 集合住宅の中庭 都市を奏でる中庭空間
同調会アパートが残した中庭とコミュニティ/マンション・ランドスケープ30年の変貌と中庭/ワークショップでスタートした「みんなの庭づくり」/他
牧野植物園/バトルクリーフ市高崎公園●淡路花博「ジャパンフロラ2000」/商店街が生きるまちづくり「粋なまち神楽坂」/アメリカのコミュニティランドスケープ●連載一現場の知恵袋―建設システムの課題と解決に向けて/他

http://www1.newweb.ne.jp/wa/marumo-p/ マルモ出版 ☎03-3496-7046

新刊案内

★本年度日本都市計画学会石川奨励賞受賞

まちづくりがわかる本 浦安のまちを読む

浦安まちブックをつくる会編著

B5・¥1905

★日本図書館協会選定図書

再入門/ル・コルビュジエの 絵画と建築

林 美佐著

四六・¥2500

★日本図書館協会選定図書

大厦成る 重源一東大寺再建物語

広瀬謙二著

A5・¥4600

新しい建設管理手法と実務

コンストラクションマネジメント

D・S・バリー／B・C・ポールソン著 宮武保義訳

A5・¥7600

建築・土木365日「今日は何の日」

菊岡俱也編著

B6・¥3000

インテリア基本語辞典 第二版

インテリア基本語研究会編著

A5・¥2400

建築のかたち百科 多角形から超曲面まで

宮崎興二著

B5・¥3000

20世紀建築の空間 空間計画学入門

瀬尾文彰著

四六・¥2500

新シリーズ案内

エスキスシリーズ 第1期5冊

第一線で活躍する建築家であり、また同時に教育の場にも立つ著者らが、建築設計演習のために考えたユニークな教材・副読本のシリーズ。学生から設計実務者まで、広い読者層を対象とする建築設計演習シリーズ

“術”を超え“学”に及ぶ実践的なテキスト、ワークブックのシリーズ

ぜひ、書店でご一見のほど……

① アクティビティを設計せよ！

学校空間を軸にしたスタディ

小嶋一浩編著 A4変判 148p・¥3200 発売中

2 建築構成の手法

比例・幾何学・対称・分節・深層と表層・層構成

小林克弘編著 B5判 6月末刊行予定

3 建築のアイデアを

どうまとめていくか

集合住宅のプロセスを通して

大野秀敏編著 A12取判 7月末刊行予定

建築を見て設計を学ぶ

4 谷口吉生「丸亀市猪熊弦一郎

現代美術館・図書館」

古谷誠章編著 ポケット判 7月刊行予定

5 建築デザインの

デジタル表現手法

CD-ROMによる演習

渡辺仁史編著 A5判+CD-ROM 8月刊行予定

彰国社

〒160-0002 東京都新宿区坂町25 TEL 03-3359-3231 FAX 03-3357-3961 <http://www.shokokusha.co.jp>

(すべて税別価格)

N 日章工業株式会社

代表取締役社長 福田 三 丈

●本社 〒101-0047 東京都千代田区内神田3-11-7(日立神田別館) ☎03-3254-3000

●大阪支店 ●横浜支店 ●仙台支店 ●広島出張所 ●福岡出張所

日立製作所電機特約店

日立化成工業特約店

日立機材特約店

日立建機特約店

旭化成建材代理店

新明和工業特約店

大和ハウス工業特約店

大昭和製紙特約店

施設商品

エレベータ・エスカレータ

ホームエレベータ

機械駐車設備

ゴミ処理設備

バスユニット・流し台

洗面化粧台

集中浄化槽・パネルタンク

空調衛生電気設備工事

受変電・自家発電設備

空調機・ポンプ・送風機

監視防犯システム

節水バルブ・節水トイレ

建材商品

PHCパイプ・シテイガイ

イーゼット・現場造成杭

地盤改良

ヘーベル・グランデ

押出成形版・金属パネル

屋根・硝子工事

フリーアクセスフロア・OAフロア

クリーンルーム床工事

ハイベース・ハイスプリット

ユーボード・軽量鉄骨

プレハブ規格建築

大昭和ユニボード

九木ライトフォーム・シールド

クローラクレーン・耐火被覆

ビルの、工場の、街の、 すみずみに、つながろう。

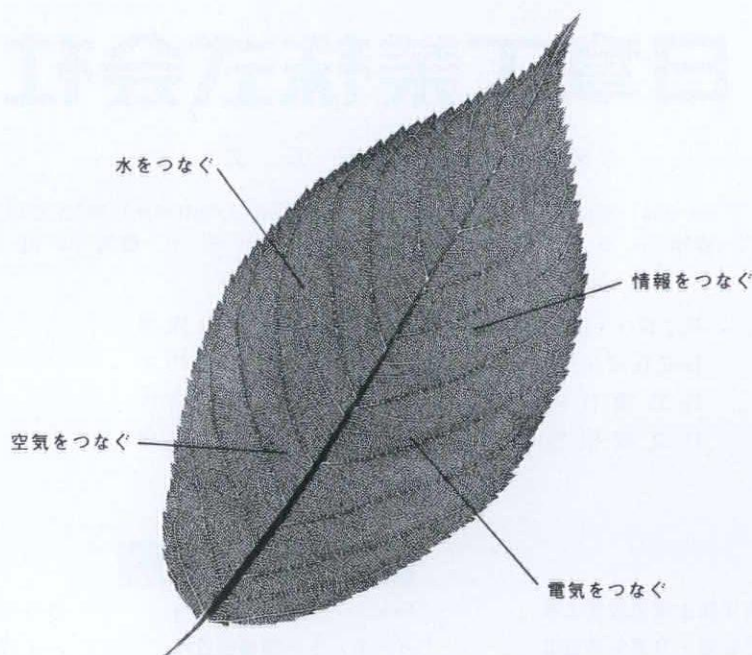
私たちの仕事は、ビルに、工場に、
街に、生命を与える葉脈として、
そのすみずみにつながっています。

もっと、人が快適になる環境へ。

総合設備業の

リーディング・カンパニーとして、
先端の技術で、高度な未来を
提案し続けます。

あなたと快適をむすびます。



住友電設株式会社

大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 Tel 06(6537)3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 Tel 03(3454)7311

営業種目：電気設備／空調・給排水・衛生設備／
プラント設備／情報通信設備／電力流通設備／その他

広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命下さい(五十音順)

●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1

新田ビル (3572) 3381

FAX (3572) 3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8

笹屋ビル06 (6362) 6515

FAX06 (6362) 6052

●建報社

東京——東京都文京区湯島2-30-8

(3818) 1961

FAX (3818) 1968

大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9

昭栄ビル 06 (6231) 4548

FAX06 (6227) 0268

●新建社

神奈川県三浦郡葉山町堀内533

0468-77-1207

FAX0468-77-1208

●中外

大阪——大阪市北区浪花町14-25

日本生命天六ビル06 (6379) 1791

東京——東京都千代田区神田須田町2-5-2

須田町佐志田ビル (3255) 8411

名古屋——名古屋市中区錦2-2-13

名古屋センタービル052 (221) 7641代

カ	株関電工	A 1
	鹿島	A 2・A 3
	軽井沢ホテル鹿島ノ森	A 4
	川崎電気(株)	A 9
サ	三建設備工業(株)	A 9
	三機工業(株)	100
シ	(株)彰国社	A 11
ス	住友電設(株)	A 12
タ	高砂熱学工業(株)	表 3
	大興物産(株)	A 6
	ダイダン(株)	A 8
ト	東光電気工事(株)	A 7
	(株)トーエネック	A 8
ニ	日新工業(株)	A 10
	日章工業(株)	A 11
ヒ	(株)日立製作所	表 4
ホ	ホテルイースト21	A 5
ミ	三菱電機(株)	81
	美和ロック(株)	88
ヤ	矢崎総業(株)	表 2
	山田照明(株)	A 14

LED Light-Emitting-Diodes

yamada

NEO GENESIS OF LIGHTING

新世代の光源 高輝度白色LED

高輝度LEDを採用した、次世代の照明器具。
光源に高輝度白色LEDを使用し省エネと
長寿命を実現した照明器具です。
LED半導体から発光する光は
自然光に近い色温度で発熱もほとんどなく、
従来のランプに比べると50~100倍の
超長寿命です。常夜灯やメンテナンスの
しづらい場所の照明に最適です。

LEDのメリット

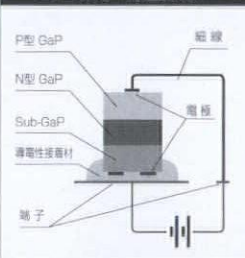
- * 超長寿命化 (40,000H以上)
- * 低消費電力 (省エネ)
- * 建築物へのビルドインが可能
- * 光の指向性があり、光を有効に利用できる (器具効率が高い)
- * 器具形状の展開が自在
- * 小型軽量化
- * 熱の損失が少ない (空調効率が高い)
- * 光源の色 (電球色) 色温度: 2700K
- * R.G.B.の展開が可能
- * 調光が可能
- * ビーム角 50°/70°の対応可能



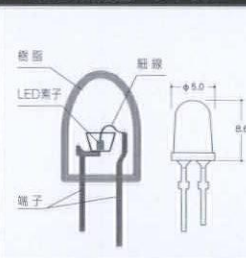
Super Long-life



LED素子 構造詳細



LEDの構造/サイズ



AD-4938



AD-4937

Footlight

AD-4937・4938 (各) ¥18,000

- 幅 105 出30 重0.45KG
- LED14 (電球色) 100V 2W
- アルミダイキャスト (黒色エポキシ塗装)
- アクリルカバー (クリア・リブ入り)

- LED ビーム角 20° ● 防雨型

※取付時 光軸調整可能

※専用壁込ボックス (TG-205) を別途お求め下さい。

TG-205 ¥4,500

- 幅 160 埋込深80
- 鋼 (亜鉛メッキ)
- コンクリート打設仕上使用可能型

山田照明株式会社

本社/ショールーム 〒101-0021 東京都千代田区外神田 3-8-11
横浜支社/ショールーム 〒220-0005 横浜市西区南幸 2-20-1

TEL03-3253-5161
TEL045-311-1731

<http://www.yamada-shomei.co.jp>

仙台支社 〒980-0824 仙台市青葉区支倉 4-34 TEL022-267-1630
札幌営業所 〒000-0807 札幌市白石区菊水七条 2-61 TEL011-811-2215
広島営業所 〒730-0816 広島市中区十日市町 2-2-34 TEL082-293-6119

大阪支社 〒577-0006 東大阪市桃根 2-2-6
北関東営業所 〒370-0018 高崎市新保町 10-1
鹿児島営業所 〒890-0055 鹿児島市上荒田町23-10 TEL099-258-0031

TEL06-6745-6811
TEL027-353-3008

福岡支社 〒812-0042 福岡市博多区豊町 1-9-61 TEL092-414-8531
名古屋営業所 〒461-0005 名古屋市中区東横 1-10-9 TEL052-963-8411